かざりのなきこと。

じゆんり 醇醨 淳漓 【名】醇は濃き酒、醨は薄き酒。風俗の淳朴なると澆薄なるとに比す。

しゆんえ 俊恵 【名】僧なり。京師の人。源俊頼の子。和歌を善くして、頗る父の風あり。

しゆやうざん 首陽山 【名】馬融曰く「首陽山在二河東蒲坂一、華山之北河曲中一」。

しゆやうざんに、わらびををりし、けんしん 首陽山に薇を折りし賢臣 【句】伯夷、叔齊兄弟をいふ。支那周の武王、殷の紂王を討ちしかば、主を滅す無道の世の粟を食はじとて、首陽山に隠れて薇を食さし、遂に饑死したりといふ。史記に傳あり。

しゆゆ 茱萸 【名】木の名。高さ大概二丈余、葉は對生なり。春、色黄なる花を開く。實はあをきの實の如くして、熟すれば赤し。此の種類に、吳茱萸といふものあり。喬木なり。

しゆら 修羅 【名】修羅は梵語の阿修羅の略。地獄、餓鬼、畜生、修羅の四惡道の一とす。猜忌の念を懐き、常に闘爭を好むといへり。されば、戰場を「修羅の巷」などいふ。

しゆり 侏離 【名】鴃舌（ゲキゼツ）といふに同じ。相通じ難き外國の語を卑めていふ語。後漢書の南蠻傳に「衣裳班闌、語言侏離」とあり。

じゆりん 儒林 【名】仁義道徳を説く學者の仲間をいふ。任昉の書「蔡公儒林之亞」。

しよべうの、いんうをあふぐがごとし 黍苗如レ仰二陰雨一 【句】國語に出づ。その恩のあつからんことを望むをいふ。

しようえん 松烟 【名】墨の異名。松を燻したる煤煙を以て墨に作る故なり。

じようきうのらん 承久の亂 【名】源實朝薨じて藤原頼經將軍となり、北條義時執權として專横甚し。承久三年四月、後鳥羽上皇、義時追討の院宣を下さる。義時即ち政子、大江廣元等と議し、其の子泰時、弟時房等を遣して戰はしむ。官軍遂に利あらず。茲に、本院後鳥羽上皇を隱岐に、中院土御門上皇を土佐に、新院順徳上皇を佐渡に遷し奉れり。之を承久の亂といふ。

しようくわうだう 承光堂 【名】ばっしやうゐんのじふにだうを見よ。

しようこうはつ 衝口發 【名】書名。一卷あり。わが古代史を論述したるもの。藤井貞幹の著。

しようしき 鍾子期 【名】人名。楚の人。列子に「伯牙善鼓レ琴、鍾子期善聽。伯牙鼓レ琴、志在二高山一、子期曰、善哉峩峩乎如二泰山一。志在二流水一、子期曰善哉洋洋兮若二江河一。伯牙所レ念、子期必得レ之」。又、呂氏春秋に「鍾春期死。伯牙破レ琴絶レ絃、終身不二復鼓一レ琴。以爲二無二足レ爲レ鼓者一」とあり。

しようじやう 丞相 【名】支那古代の官名。我國の左右大臣に同じ。されば、右丞相左丞相といへり。我國にても菅公を「菅丞相」などいへるは、彼れにならひて呼べるなり。丞も相も、補佐の義。史記秦本紀に「初置二丞相一」。

じようしやう 繩床 【名】床は牀の俗字、トコと訓ず。なはのしきものなり。晉書「澄至二故泉源上一、坐二繩牀一、燒二安息香一、祝願數萬言」とあり。

しようち 憃癡 【名】愚なること。慾に蔽はれて慧からぬこと。禮記「寡人憃愚冥頑」の注に「憃、蔽二於氣質一也」とあり。

しようちめしなし 勝地無主 【文】風景の勝地には持主なしとの意。四海の者皆樂しむことを得るをいふ。白氏文集「勝地本來無二定主一、大都山屬レ愛レ山人一」。

しようぢん 承塵 【名】家屋の天井板をいふ。或は、長押の上、欄間などをも、打ちまかせて云ふ。和訓栞には「延喜式に天井と承塵とを分けてあり。垂木は天井にて、其の板は承塵也といへり」と見ゆ。後漢書の雷義傳に「黠投二金於承塵上一」

じようなん 拯難 【名】難を救ふこと。拯は、助、又は救の義。

しようにうせき 鐘乳石 【名】俗につらら石といふ。多く、海邊の岩洞中に產す。鑛物の液の永柱の如くに垂るるもの。

しようはくのせつさう 松柏の節操 【句】常に心操を變へず、元氣の衰へぬことを賞するにいふ。松柏は、よく雪霜に堪へ凌ぎうるものなればなり。

しようめうのたき 勝妙瀧 【名】越中國中新川郡の立山にあり。直下百餘丈、幅十間餘、三層となり蒼崖の間に懸れり。

しようめいもん 承明門 【名】紫宸殿の正面にありて、建禮門の內の門なり。拾芥抄「承明門、五間戸三間、謂二之南面內門一」。

しようめいもんゐん 承明門院 【名】源在子をいふ。後鳥羽帝の妃にして、土御門帝の母なり。內大臣通親の女。

しようよう 慫慂 【名】勸說する意。楊子方言に「已不レ欲レ喜而旁人說レ之。不レ欲レ怒而旁人怒レ之。謂二之慫慂一」とあり。

しようようとして 從容として 【副】ゆったりと落ちつきて、迫らぬ狀にいふ語。

じよおじ すてぶんそん George Stephenson 【名】英國の人。鐵道瀛車の一大發明者。西曆一七八一年生れ、一八四九年歿す。氏の子ロバアト、亦有名なる機關師なり。

しよかつりやう 諸葛亮 【名】支那三國時代の名相。字は孔明。亂世をさけて野に在りしを、劉主劉備に知られて、其の軍師となり、天下三分の計を定む。備崩ずるに臨み、孔明にいひて曰く、「嗣子輔ぐべくば輔けよ。もし不可ならば、君取りて、みづから國家を安んぜよ」と。孔明涕泣し

て、忠貞の節を致さんことを盟ひ、後主禪を輔佐し、屢、兵を出して魏と戰ひしが、功未だ成らざるに、五丈原頭の陣中に歿せり。年五十三。武侯と諡せらる。

しよきやう　書經【名】書名。初學記にいはく「書者按二釋名一、言レ書二其時事一也。上世帝王之遺書。有二三墳五典訓誥誓命一。孔子刪而序レ之。斷自二唐虞一以下、迄二于周一、凡百篇。以其上古之書、故曰二尚書一。遭二秦滅レ學竝亡一」。漢興、濟南人伏勝、能口二誦二十九篇一。至二漢文帝時一、欲レ立二尚書學一、以二勝年且九十餘老不レ能レ行、乃詔二晁錯一就二其家一傳レ受之。其後、魯恭王、壞二孔子故宅一、於二壁中一得二古文尚書論語一。悉以レ書還二孔氏一。武帝乃詔二孔安國一、定二其書一、作二傳義一、爲二五十八篇一」とあり。

しよきやうむじやう　諸行無常【句】何事も常なくして轉みにならずといふ意。佛經の語なり。涅槃經に「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂」とある偈より出づ。

しよく　蜀【名】支那四川省の地をいふ。

しよく、あくをもとむることなく、きよ、やすきをもとむることなし　食無レ求レ飽、居無レ求レ安【文】論語に出でたり。これ君子の行をいふにて、其の、飽安を求めざるは、志他にありて、居食をおもふに暇あらざるなり。

しよくいう　職由【名】しきいうともよむ。職に專にて、一に其れをのみより所とすとなり。

しよくげん　食言【名】一旦口より吐きし言を食ふといふにて、言ひだしたることを變ずるをいふ。書經「睘不二食言一」。

しよくげんせう　職原抄【名】書名。二卷あり。北畠親房朝臣の著。百官の職掌、歷代の官位の沿革を記せるもの。

しよくげんひにほゆ　蜀犬吠レ日【文】蜀の地は山多くして、日を見ること少し。故に犬、日輪を見る時は、怪みて吠ゆとなり。見識の狹少なるものは、卓絕者の言行を見聞して驚き怪しむに譬ふ。韓愈の書「蜀中山高、霧重、見レ日少。每レ日出則群犬疑而吠之也」と。

しよくこん　蜀魂【名】ほととぎすの異名。

しよくにそむきて、ともにあはれむ、しんやのつき　背レ燭共憐深夜月【文】白氏文章の詩句。和漢朗詠集に出でたり。白樂天が、春夜に、友人盧回、周諒と花陽觀に同居しての吟にして、次句「踏花同惜少年春」とあり。共同の二字は、其の友人等と共にの意、憐は面白がるにて、月を賞する意。

しよくにほんぎ　續日本紀【名】書名。二十冊あり。文武帝元年より、桓武帝の延曆十三年十二月までの、九代九十五年間の事を記せる漢文の歷史。六國史の一。菅野眞道等の撰。

じよくねつ　溽熱【名】蒸しあつきこと。唐書西域傳に「天竺國土濕熱、稻歲四熟」とあり。

じよくわん　舒緩【名】ゆるやかなること。

しよけい　書契【名】文字なり。易の繫辭に「太古結繩而治。後世聖人易二之以一書契一」とあるごとく、支那の太古にありては、文字なかりし故に、人々信を表する爲に、繩を結んで約束したりしが、三皇の世に至り、庖犧氏出でてより、始めて八卦を畫し、書契を造りて、前代結繩の政に代へたりといふ。

しよけれう　所化寮【名】寺院にて、弟子の居る室をいふ。所化はナツシヨともいひて、僧家の弟子のこと。

しよし　書肆【名】本屋。肆は「所二以陳一貨鬻之物一也」と字書に見ゆ。

しよし　庶子【名】本妻の子を嫡子といひ、妾の子を庶子といふ。

しよし　處士【名】家に在りて朝に仕へざるもの。荀子「今之所謂處士者、無能而云レ能者也」。

じよじ　叙事【名】文章に、事がらを、ありのまゝに記しつくるもの。

しよしだい　所司代【名】德川幕府の時の官名。京都に置きて禁裏に關する一切の事、幷に關西の大名の動靜を監せしめしつかさ。

しよしひやくか　諸子百家【句】「諸子百家に渉る」などいふは、儒家、道家、兵法家、農家など、すべての古聖賢の書を、多く見るといふ意。荀子、孔叢子、孫子、吳子、管子、韓非子、墨子、老子、列子、莊子、呂氏春秋、韓詩外傳、淮南子、風俗通、白虎通、家語、近思錄などの類。

じよじやうし　叙情詩【名】事實よりは、むしろ、感情をのべたる韻文。英語の Lyric Poetry の譯なり。

しよじゆう　所從【名】附き從ふ處の者。家來などいふ意に用ふ。

しよじよ　沮洳【副、形】水の地をひたし濕せるさまの形容。

しよせい　諸生【名】書生に同じ。通俗篇に「諸生猶二諸侯一。雖二一人一亦得レ云二諸學生一」。史記「臣願徵二魯諸生等與二臣子弟一、共起二朝儀一」とあり。

しよせき　書尺【名】手簡に同じ。事物起原に「春秋春家吊二宣孟一以レ書。漢曰二尺牘一、今曰二書尺一」とあり。

じよせつ　如雪【名】人名。畫僧。亂芳軒、また、閑芳とも號す。明人にして、我が國に來りて、應安年間京都の相國寺に寓せり。本邦にて宋人の畫法を宗とするは、此に始まる。

しよぞんのほか　所存の外【句】考のほか、思のほか、案外、意外、など、皆同じ。

しよはかせ　書博士【名】大寶の職員令に「書博士一人、掌

「教書」とあり。職原抄の頃には、二人となしたり。書は文字をいふ。

しよんずねごらうたいふ　祥瑞五郎太夫【名】伊勢松坂の人。陶工の名人。足利義政頃の人にて、萬古焼の元祖。

しよもつぶぎやう　書物奉行【名】幕府の文庫を管理し、圖書、記錄を掌り、編輯、校刊の事を掌れり。若年寄の所管にして、職高二百石。

しよや　初夜【名】そやを見よ。

しよらう　初老【名】四十歳をいふ。

しより　處理【名】事を處置する、きまりをつくる、片付くる、始末をする事にいふ。

しよりり　黍離々【句】かのしよ、りりたりを見よ。

しよりん　書林【名】書物の、多く集まれる所をいふ。後漢書「鏖二書林一開二篇籍一」と。後世は、書物を商ふ店をいふことになれり。

じよりよく　助力【名】力を添へて人を援くること。また、金錢を以て他の困窮を救ふこと。

しよれう　庶僚【名】もろ〳〵の官吏。百官。百僚、などいふに同じ。

じよろ　如露【名】庭園草木などに水を注ぐ器。じようろ、みづふきなどいふ。

しよる　初位【名】そゐを見よ。

じよる　叙位【名】位を賜ふこと。位には叙、官には任、職には補といふ。

しよゐのぢん　諸衛の陣【句】近衛府、兵衛府などの居所ないふ。ぢん參照せよ。

しよをよみて、こごとくこれをしんぜば、よまぬにしかざらむ　書を讀みて盡く之を信ぜば、讀まぬに如かざらむ【文】ことごとく、しよをしんぜばしよなきにしかじを見よ。

しらいとのそまんことをかなしむ　素糸の染まむことを悲む【文】せんしにひたんすを見よ。

しらいのたみ　子來之民【句】君に心服せる民。子の父の事に趨くには、召されども至る。君に心服せる民は、君たる慕うて至ること子の如しとなり。詩經、「經始勿亟、庶民子來」。

しらがさね　白襲【名】いにしへの襲（カサネ）の色目の名。表も裏も白なるをいふ。

しらがし　白樫、剉樠【名】樫の木に、赤樫と白樫との二種あり。赤樫の材は色赤黒く、白樫は材の色やゝ白し。

しらかは　白河、白川【名】地名。磐城國西白河郡に白河町あり。彼の白河樂翁の城邑なりし地。また能因の「都をば、霞と共に、立ちしかど、秋風ぞふく、白河の關」とよめるも、此の地なり。山城國愛宕郡にも、また、白川といふ地あり。昔は、京都に對する鴨川以東の汎稱にして、今は、粟田口以北の稱。後拾遺集に「東路の、人に問はばや、白河の、關にも斯くや、花は匂ふと」とあるは、此の白河の花を見て、さて、陸奥の白河の關の花は如何にぞと、問へる意なり。

しらかはきたどの　白河北殿【名】白河太炊御門殿、棧敷殿、千體阿彌陀堂の御所、などともいへり。保元元年、崇徳上皇、此の殿に事を擧げ給ひ、義朝等來り攻めて火を放ちし所。その址は、京都市上京區東丸太町、熊野神社の邊なるべしといへど、詳ならず。

しらかはどの　白河殿【名】初めは藤原良房の別業なりしが、世々皇太后、此におはせしより、仙院と稱したり。白河帝のとき離宮としたまふ。後に法勝寺を此に起されたりき。今、京都上京岡崎町二條通の北に御所内の地名殘れり。しらかは參照せよ。

しらぐ　精【動カ下二】米を搗き、また、洗ひて白くするをいふ。

しらねさん　白根山【名】山の名。日光湯本温泉の後にあり。また、甲斐にも同名の山あり。

しらびやうし　白拍子【名】舞の名。男舞ともいふ。遊女などの、水干を着、刀をさして舞ふなり。鳥羽帝の頃より始まれりといへり。また、それを舞ふ女をもいへり。

しらぶのうま　白總の馬【名】白絲の總（フサ）つけたる鞦（シリガイ）をかけたる馬なり。

しらまゆみ　白眞弓【名】白木の眞弓。また、射る、張る、引く、などいふ語の枕詞ともす。

しらみね　白峰【名】讃岐國阿野郡松山村に白峰山あり。崇徳上皇の御陵地。

しらみの、こんにあめるさ、なんぞえらばむ　虱與レ住二于褌一何擇【句】晋書阮籍傳の語。卑賤に居て、それをも知らず、苟安せる徒を指していへるなり。

しらん　紫蘭、芝蘭【名】草の名。蘭に似て葉廣く、薄く、縦に皺多し。春の末より夏にかけて、白、または紫の花を開く。

しらんのしつにいる　芝蘭の室に入る【文】善人と交るをいふ。芝蘭は香草なり。家語「與二善人一居、如レ入二芝蘭之室一」。

しり　梓里【名】故郷のこと。梓梓は、子孫のためにとて、父母の植うる所なるを以て、桑梓の里の義にていふ。

しり　支離【名】きれ〴〵になること。分散。「支離滅裂」など。

しりあ　Syria【名】一地名。今は土耳其に屬し、アラビヤの北方にある地。羅馬繁盛以前に榮えし國なり。

しりがい 鞦、尻繋 【名】しりがきの音便。馬の尾より鞍にかくる組緒をいふ。

しりくめなは 注連繩 【名】しりくべなは。しめなは。しめ。神前、または、正月に門戸門松などに、引き渡す繩なり。

しりざや 尻鞘 【名】貞丈雑記に「しんざやともいふ。虎の皮、豹の皮、熊の皮、鹿の皮などにて袋を作りて、太刀の鞘にかくるをいふなり。太刀の鞘、雨露にあへば、濕氣にて太刀さびるゆゑ、毛皮をかけて雨露を防ぐためなり」といへり。

しりへしぞきにしぞく 後方へ退きに退く 【句】次第に後へさがる。後へのみ退く。土佐日記「ゆくりなく風ふき出でて、たげども〳〵、しりへしぞきにしぞきて」とあり。

しりんきだう 歯輪軌道 【名】鐵道軌條の一種。普通軌條の中央に、鋸齒狀のラックと稱するものを設け、機關車の内部にも、又別に齒輪車をつけ、ラックの齒をかみつゝ昇降する仕掛なり。これ、獨逸のアプトシステムを採用したるものなり。わが國にては、碓氷嶺の坂本より輕井澤まで、七哩間は、この仕掛なり。

しれごころ 痴心 【名】おろかなる心。たはけたる心。

しれわざ 痴業 【名】馬鹿らしき事。

しろ 代、料 【名】すべて、其の材料となるべきもの。また、其の場所、代價の意にいふ。「苗代」「身の代」「車の代」「其の日の代」。

しろいし 白石 【名】地名。磐城國刈田郡白石町。仙臺の伊達の家臣片倉小十郎の居城のありし所。

しろうすやう 白薄様 【名】舞の手をはやす詞。理齋隨筆に「五節の舞云々、さて右の舞人をはやすには、「白薄様、しゆぜんじの紙、まきあげの筆、巴かきたる筆の軸や」と、はやすなり。此の意は、仙女の衣の薄くすき通りて美くしき様は、薄様紙に似たり。舞の袖をひるがへすに、簪より上、片々まきあげたる顔は、糸を以て巻きたる如く、また、巴をかきたる筆の軸をさしあげたる如くなりといふ事なり云々』といへり。

しろがねうつたるいとげのぐそく 白金打たる糸毛の具足 【句】銀の金物を打たる糸縅の鎧をいふ。糸毛は、鎧は、革にても、綾にても威すものなれば、糸にて威したるを、糸毛といひて、他に別てり。

しろく 尸祿 【名】其の職を盡さず、其の功なくして祿を食むをいふ。尸官、尸位などいふに同じ。

しろぐ 退避、辟易 【動カ四】たじろぐといふに同じ。退く意。弱りてたしかならぬをいふ。「身じろく」「目じろぐ」などの語もあり。「足もしろぐ」など。

しろくぶん 四六文 【名】駢驪文とも、四六排偶文ともいふ。漢文にて、おもに四字六字の句を重ねて、對をとりて排叙せる綺麗浮華の文體をいふ。東漢の時より萠芽をなし、六朝に至りて盛を極めたりき。

しろねずみ 白鼠 【名】白き鼠。家に白き鼠の居るは緣起よしとて、珍重するより、役に立つ番頭手代を、白鼠といふ。

しろふくりんのくら 白覆輪の鞍 【句】銀にて覆輪をとりたる鞍をいふ。金にてせるを黄覆輪と稱するに同じ。ふくりん參照。

し、わかれてさんじつならば、まさに、めをすりてあひみべし 士別而三日則當刮目相看 【文】人の智德の進むをいふ。三國志「呂蒙初不ㇾ學、而後學。魯肅見大驚曰、復非ㇾ吳下之舊阿蒙。蒙曰士別而三日、則當ㇾ刮ㇾ目相待」と

じろ 字彙 【名】明の萬曆年中に、梅誕生の作れる字書に、字彙といふあり。十五卷あり。又一般に、字書をもいふ。

しろそさん 尸位素餐 【句】尸祿に同じ。職務を盡さずして、祿をうけをること。

しろんはくをう 紫鴛白鷗 【句】をしどりと、かもめとなり。紫、白の字は、ただ其の毛色によりて添へたるまでなり。みなみをのぞめば參照。

しをさうず 刺を投ず 【文】面會を求むること、刺は名札なり。そは姓名を竹木の上に刺す故に、しかいふ。刺を通ずともいふ。又、これと反對に、名刺を投げうつこと、面會を止むる意にも用ふることあり。

しをる 萎 【動ラ下ニ】枝などの撓むにも、花などの凋むにもいひ、また、人の氣を落して力なげになるをもいふ。

す

す 簀【名】竹、葦などにて、粗く編みたるもの。すだれの類を、すべていふ。

すあう 素襖【名】古くはスアチとも書けり。スハヲとあるも同じ。昔の庶人の服。武家時代には、士人の禮服となせり。布地にて直垂の如し。上も下も同じ色にて、胸紐、菊綴共に革にて作り、袴は長袴を用ふ。家の定紋を五所につく。

すいがい 透垣【名】垣塀の一種にて、竹にても板にても、間の少しづゝ透きたるものをいふ。家屋雑考「板と板との間を、聊づゝ透(スカ)したる塀なり。また、板と板との間へ、竹を交へて打ち附けたるもあり。古圖どもを見るに、其の造りさまざま也。すきがきといふべきを音便によぶなり」といへり。

すうえう 樞要【名】物事の要(カナメ)なるところ。

すうき 數奇【名】不遇なり。ブシアハセ。

すうき 樞機【名】げんきよは、くんしのすうきを見よ。彼れと同義にして、それより、樞要の機關の義にいふ。

すうくわん 芻豢【名】芻は草食獸にして、即ち牛羊なり。豢は穀食獸にして、犬豕をいふ。「人之情食欲レ有二芻豢一」。

すうしや 趨舍【名】出處進退、或は、向背をいふに同じ。史記「殿穴之士、趨舍有レ時」。

すうじゆう 騶從【名】供人をいふ。騶は廐御なり。されば、車駕に從行するものを騶從といふ。

すうぜう 芻蕘【名】芻は草にて蕘は薪なり。其の、草を刈り柴を採る、賤しきものをいふ。

すうぷ Soup【名】肉汁。肉湯。吸物。

すうみつゐん 樞密院【名】天皇親臨して、重要なる政治を諮詢し給ふ最高の顧問府なり。

すうろ 鄒魯【名】孟子と孔子とをいふ。孔孟といふに同じ。孟子は鄒の人、孔子は魯の人なればなり。鄒、本音シュ、

すえずうんが 蘇西運河【名】アラビア半島と、亞弗利加との間のスエズの地峽を開鑿して、紅海と地中海とを連通せる堀割。是によりて、東西二洋の航路を、大に短縮したり。長さ四十里餘、深さ三十四五尺ありと。

すがのねの 菅の根の【枕】菅の根は長きものなれば、長しの枕詞とす。「菅の根の長き春日」など。

すがはらみちざね 菅原道眞【名】參議是善の子。宇多帝に仕へて寵遇あり。醍醐帝の時右大臣となり、藤原時平と並びて朝政を執る。遂に時平に讒せられて太宰權帥に左遷せられ、延喜三年、其の地にて薨ず。年五十九。後に、正一位太政大臣を贈らる。北野神社、大宰府神社は、即ち公を祀

れるなり。

すかんびや Scandinavia【名】正しくはスカンヂナヴィアと呼ぶべし。歐洲西北隅なる大半島にして、瑞典、那威二國、この半島を占めたり。

すがめ 眇【名】片眼の異常あるをいふ。

すがる 縋【動ラ四】取り附く。

すがるをとめ 蜾蠃小女【句】腰の細き少女、細腰、腰蜂、なども(ス)いふ。蜾蠃は腰細き二種の蜂。

すき 數奇【名】何事によらず好く(ス)をいふ詞なれど、多くは、風流の道を好むをいふことになれり。また、直ちに、風流、雅致などの意にもいふ。「數寄をこらす」など。

すぎた 杉田【名】地名。武藏國久良岐郡にあり。梅の名所。

すぎたげんぱく 杉田玄白【名】名は翼、字は子鳳、鶴齋と號す。家、世々小濱藩の醫員なり。最も蘭學に長じ、前野良澤等と解體新書を譯す。玄白の醫術、頗る奇功ありと稱せられ、治を乞ふもの、其の門に滿ちたりと云ふ。文化十四年四月歿す。年八十五。

すぎたせいきやう 杉田成卿【名】名は信、梅里と號す。蘭醫にして、幕府の命を受けて、譯述に從事す。安政六年四月歿す。

すぎたるは、なほ、およばざるがごとし 過猶不レ及【文】論語の先進の篇に出でたり。孔子の語。程よきを貴しとする謂なり。

すぎはら 杉原【名】紙の名。奉書に似て薄し。播州揖保郡杉原より出だす。

すくうねる Schooner【名】船形の名。二本檣にして輕快なるもの。

すくごふ 宿業【名】宿世の因果、前世になしたる報、などの意。業とは、物みな原因あり、其の緣なりて果に至る。其の果を生ぜしむるやうにするをいふ。例へば、實を地上におけば、芽を生じ果を結ぶ。實は、根本にして因、地は、實の緣りて成るところにして緣、果は結果にして果なり。之を行ふは即ち業なり。前世に、惡因をまけば、今世に惡果を來すとの佛說なり。

すくなし 少、寡、鮮、尠【形】少は多の反對にて、數のすくなきにいふ。寡は衆の反對にて、人數のふくなきをいふ。「衆寡敵せず」など。鮮は、稀なること。極めて少きこと。尠は極めて少きこと。

すくふ 救、拯、濟【動ハ四】救は助け、また、防ぐ意あり。拯は助けて引き上ぐる意。濟は「わたる」とも訓じて、渡られざる場合に渡しやりて、助けられざるを助くること。

すぐる 勝、優【動ラ下二】勝はまさりたること。優は秀で

たること。また相通用して抜群の意にいふ。さて「勝れたり」「勝れり」とあるを、文法の心得なきものは誤讀することあり。「勝れたり」はすぐれたりとよみ、「勝れり」はまされりと讀むべし。「まさる」は四段活の動詞なれば、文法上、まさりてありを、「まされり」といふことを得れども、「すぐる」は下二段活の動詞なれば、文語としてはすぐれるといふ語なし。

すけどの　佐殿【名】源頼朝をいふ。左兵衛佐（スケ）なりしが故なり。

すこん　數獻【名】獻とは、酒宴に、盃を他に獻するをいふ。即ち、數杯の意。

すさのいりえ　須佐の入江【名】長門國阿武郡須佐港の前面なる海をいふ。

すさび　遊、慰【名】動詞より成れる語にして、心の進みて爲す業をいふ。遊戯、娯樂、などの意。又「口すさび」「手すさび」などもいへり。

すさまじ　凄、冷、荒涼、凌兢　淋慄【形】面白からず、不興、物すごし、おそろし、などの意に用ひらる。

すじやく　朱雀【名】スザク、スザカ、シユザカともいへり。平安城の朱雀大路は、大内裏南面の朱雀門より、京都の羅城門に通ずる大路なり。今の京都市千本通りなり。

すずかやま　鈴鹿山【名】伊勢と、近江との國界にある高山なり。有名なる鈴鹿の關ありしは、關町より一里半餘の地なり。

すずき　せきけう　鈴木石橋【名】下野國都賀郡鹿沼宿の人、名は文徳、字は澤民、蒲生君平の師なり。

すずき　ぼくし　鈴木牧之【名】北越鹽澤の老農。天保頃の人、北越雪譜、七巻の著あり。越後の雪の事を詳説圖示したるものにして、江戸の京山人百樹の序文を附せり。

すずき　まさなが　鈴木正長【名】下野の人。享保十七年の頃の饑饉の時に、黒羽の城主大關氏の執政となり、其の救濟を勤めしかば、封内一人の餓死者なかりきといふ。その救濟の法をかきたるものを農喩といふ。

すずし　生絹、生絲【名】練衣（ネリギヌ）に對せる稱にて、生糸（キイト）にて織れる絹をいふ。されば、強ばりて、しなやかならぬものなり。

すずしろ　蘿蔔【名】大根を、春の七種に用ふる時の稱。

すずな　菘【名】唐菜（タウナ）に同じ。專ら羹の七草に用ふる時の稱。

すずのやしふ　鈴屋集【名】書名。九巻あり。本居宣長の歌文を集めたるもの。

すずばな　洟【名】鼻じるなり。和名抄「洟、和名、須々波奈、鼻液也」とあり。

すすむ　侑、薦、羞【動マ下二】侑は食物を奉ること。周禮「膳夫以樂侑食」。薦は神に物を献ずること。左傳「可薦二鬼神一」。また、人を挙ぐる義にもいふ。「推薦」。羞も薦と略同義。食物を馳走するにいふ。左傳「可羞二于王公一」。

すすむ　進、前、晉【動マ四、下二】進は次第に進むこと、退の反對なり。「學漸進」。前は前に出づること。「前席曰」。晉は日のすすむこと。

すずむし　鈴虫、金鐘兒【名】虫の名。古は、今の松虫を鈴虫といひ、今の鈴虫を松虫といへり。即ちリンリンと鳴くは松虫にて、チンチロリンとなくは鈴虫なり。源氏物語鈴虫の巻「おほかたの、秋をばうしと、知りにしを、ふりすて難き、鈴虫の聲」。ふるといふは、鈴に緑ある詞なり。但し、この虫の名稱、今も、古のまゝにて、とり違はぬ國もあり。

すずむしのふりすてがたう　鈴虫の振り捨て難う【句】すずむしを見よ。

すずりのうみ　硯の海【名】硯の墨のたまる所。また、馬關と門司（モジ）との間の海の一名。もじ（文字）といふ縁によりて稱するなりとぞ。

すずろごと　漫事【名】すずろなること。目的もなく、心の進むままなること。

すずろなるしに　漫なる死【句】不覺の最後。つまらぬ死にかた。みだりなる死方。

すすろふ　咫【動ハ四】すするの延びたる詞。口に吸ひ込むをいふ。

すそがなもの　裾金物【名】鎧の袖、及び、草摺の下部の板に打ち附けたる金物。種々の摸様あり。

すそわのたゐ　裾廻の田居【句】山の麓の田。すそわは、麓のめぐりをいふ。

すたあた　Starter【名】起點、出發點など譯す。短艇競爭などの時に、其の船の、一齊に出發する所をいふ。

すだち　素立【名】眞直に立ちたるをいふ。すは接頭語し、だちの意。

すだなし　筋無し【形】道理なし、せんすべなし、仕方なし、などの意。

すてえつ　States【名】海事上の語にして、地位、座席、などの義。

すでに　既、已、業【副】既は盡也、訖也と注せり。過ぎ去りたることにいふ。已は未の反對にて、現になりつつあるなり。「月已望」といへば、十五夜、既望は十六夜なるが如し。業は已の輕き義なり。

すてびと　捨人【名】世捨人に同じ。出家、遁世者等をいふ。

すどう　ぎやうぶしみち　須藤刑部俊通【名】藤原秀郷の後也。父を義通といへり。刑部丞に任ぜらる。保元元年

源義朝に從ひて、內裏に屬して功あり。平治の亂に死せり。

すなはち　則、即、乃【接】則は「我國の助辭ばに當る。「入レバ則孝、出レバ則弟」。即はそれが、其まま、取りもなほさず、などの義。乃はそこで、そこになりての義。「仲春之月、雷乃發レ聲」。

すのこ　簀子【名】えんがは。板緣の一種。家屋雜考に「廂の外にあり。簀子椽ともいふ。小板數なれども、竹簀の如く、間を聊づゝ透して打ちつくる故に、この名あり。さて間を隙かし面をとるは、雨露などのたまらぬ爲めなりといふ」とあり。もやを參照せよ。また、竹にて編みたるものを總べて、簀子といふ。

すはう　蘇枋【名】染色の名、紅染に似て、少し黑色を帶ぶ。

すはこ　諏訪湖【名】一名を鵜湖と稱し、信濃國諏訪部にありて有名の湖水なり。周回四里二十二町、東に八ヶ嶽、南には守屋山あり。天龍川は、此の湖より流出す。

すびつ　隅櫃【名】圍爐裏、火達（ヒタツ）の類をすべていふ。

すぺいん　Spain　西班牙【名】歐洲の西南にある半島國にして、面積十九萬七千六百余方里、人口千七百万。葡萄、絹布、生糸の産多く、牧畜最も盛なり。

すべかんめり　爲可かんめり【句】爲べくあるめりの約轉。するやうに見ゆ。するやうす。

すべもなく　手段も無く、術もなく【副】爲すべき手段もなく。如何ともすべき手だてなく。

すまあかし　須磨、明石【名】地名。須磨は攝津國八部郡に屬し、明石は播磨國明石郡に屬し、須磨、舞子、明石と打ち續きたる海濱の勝地なり。

すまさら　Sumatra　蘇門答臘【名】亞細亞の極南なる馬來半島とマラッカ海峽とを挾みて、其の南にある島なり。

すみざ　炭坐【名】しちざを見よ。

すみだがは　隅田川【名】河の名。上流を荒川といひ、源を武藏國秩父郡の深山に發し、北豐島、南足立二郡の間を流れて東京灣に注ぐ。其の下流を淺草川、一に大川とも稱す。

すみのくら　よいち　角倉與一【名】名は光昌、素庵と號せり。了以の二男。寬永九年六月歿す。年六十三。

すみのころも　墨の衣【名】墨染の衣にて僧衣をいふ。鉢の木に「墨の衣のうすひ川」とあるは、衣の洗きを、川の名の碓氷にいひかけたるなり。

すみやま　炭山【名】山の名。山城國宇治郡にあり。三室月山の東北に位せり。

すみよし　けいおん　住吉慶恩【名】春日隆親の二子、光長の弟なり。詩仙にして、攝津國住吉の給所となる。住吉派の祖、建仁年中の人。光長、吉長、行光、行安と、和歌の五筆と稱せらる。

すみよしものがたり　住吉物語【名】書名。二卷あり。中納言藤左衛門督なる人の女の、繼母の虐待に遇ひて、住吉に落魄せしが、終には立身せし趣に作り成せる物語なり。作者詳ならず。ただし、今日に傳れるものは、後世の僞作ならむといへり。

すんいん　寸陰【名】わづかの時間ないふ。文選の魏文帝の典論に「古人惜二尺璧一而重二寸陰一」。晉書に「陶侃曰聖人惜二寸陰一、衆人當レ惜二分陰一」。千字文に「尺璧非レ寶、寸陰是競」。

すんしんせきたい　寸進尺退【句】得る所少くして、失ふ所の多きにたとへいふ。老子「用兵有レ言。吾不二敢爲一レ主而爲レ客。不二敢進一レ寸而退レ尺」。

すんだいざつわ　駿臺雜話【名】書名。五卷あり。室鳩巢、江戸駿河臺に居り、講學を事とせる暇に、客に對して談じたる經傳の道、古事逸聞などの要を書き集めたる隨筆なり。

すんてつ、ひとをころす　寸鐵人を殺す【文】簡單なる詞にて其の功の著きなどにいへり。寸鐵は短き刀。

すめらべ　天皇邊【名】天皇陛下の御側。

すゑやま　よしたか　陶山義高【名】通稱藤三。太平記に備中國の住人とあり。元弘元年、飛鳥路村の居民を案內者として、夜、笠置山の行宮を襲ひまつれる男。

すゑやみやうじん　洲屋明神【名】安藝國嚴島の西岸にあり。

すりやう　受領【名】國司をいふ。但し國司といへば、守、介、掾、目、すべてをいふなれど多くは守たる人を指す。受領も同じ。

するがだいなごん　駿河大納言【名】源忠長をいふ。德川秀忠の第二子にて、家光の弟なり。幼名國千代丸。長じて、駿河、遠江、甲斐、三國を領し、駿河に治す。寬永三年八月、權大納言從二位に進む。同十年十二月故ありて自殺す。年廿八。

するすみ　磨墨【名】馬の名。いけづきを見よ。

するりと【副】無遠慮に。又、滯りなく。

するのき　椰櫚、棕梠【名】樹の名。つねにシュロといふ。暖國の產なり。枕草紙に「すろのき、唐めきて、わろき家のものとは見えず」と評せり。

ずゐ　隋【名】六朝時代につぎて、支那を一統したる國なり。楊堅、國號を建てて即位してより、煬帝、恭帝の三世三十七年にして、唐これに代る。我が推古天皇の御代に當れり。

ずゐえん　推演【名】數術に同じ。其の理を推し延すこと。漢書「不レ知下推二演聖德一述中先帝之志上」。

ずゐか　誰何【名】姓名の分明ならざるものにいふ。「どなた」の義。莊子「不レ知二其誰何一」。「誰何す」は、誰ぞと人を咎むること。

ずゐがい　翠蓋【名】綠色なる傘の如き覆にて、立木の枝葉

の、横に廣がり繁りたるに似たるもの。

すゐかう 推敲 【名】字句を鍛錬するをいふ。湘素雜記に「劉公嘉話曰、賈島初赴二擧京師一、一日於二驢上一得レ句、曰、鳥宿池邊樹。僧敲月下門。始欲レ着二推字一、又欲レ着二敲字一、煉レ之未レ定、遂於二驢上一吟哦。時々引レ手作二推敲之勢一。時、韓愈吏部權京尹。島不レ覺衝至二第三節一。左右擁至二尹前一。島具對二所レ詩句一云々。韓愈立レ馬、良久、謂レ島曰、作レ敲字一佳矣。遂並レ轡得而歸」とあり。

すゐかん 水干 【名】水張りにして干したる絹。また、一種の狩衣をいふ。水干の狩衣の略稱。

すゐがんじ 瑞巖寺 【名】陸前國宮城郡松島にある寺なり。伊達家の廟所にして、政宗の甲冑こゝに安置せり。創建は、遠く、淳和天皇天長五年にありと傳ふ。

すゐぎうのかぶと 水牛の冑 【名】水牛の角二本を前立物に打ちたる冑。

すゐきよう 垂拱 【名】衣を垂れ、手を拱(コマヌ)くといふことにて、少しも勞せざるをいふ。尚書に「惇信明義崇レ德報レ功、垂拱而天下治」とあり。

すゐぎよのまじはり 水魚の交 【句】くんしんすゐぎよを見よ。

すゐくわせきくわい 水化石灰 【名】ふうくわせきくわいを見よ。

すゐこ 遂古 【名】遂は往なり。往古と同じ義。すぎし昔。楚辭「遂古之初、誰傳二道之一」。

すゐさうをおひてうつる 水草を逐ひて移る 【句】史記の匈奴傳に「逐二水草一遷徙、毋二城郭、常處、耕田之業一」とありて、牧畜時代の人民は、其の牛馬の飼養に必要なる水、また、草などのある處を求めて、居を轉ぜし意。

すゐし 出師 【名】軍を出すをいふ。

すゐしていとく 水師提督 【名】支那海軍の官名にして、我が艦隊司令長官といふが如し。

すゐしのへう 出師表 【名】師を出す(イクサ)とき君に奉る書。すべて、臣下より皇帝に奏上する文を表といふ。蜀の諸葛孔明が、北方關中を征めむとして、三軍を率ゐて進發するに當り、其の君劉禪に上れるを、前出師表といひ、後にまた、魏を討つときの上書を後出師表といひて、世に名高し。

すゐしん 遂深 【副、形】おくぶかき貌にいふ。

すゐじん 隨身 【名】上皇、攝政以下參議に、朝廷より附けらるる近衛の舍人をいふ。弓箭を持し帶劍して供奉し、人員に定めあり。上皇は十四人、攝關は十人、大臣、大將は八人、納言、參議は六人なり。また、中將に四人、少將に二人、衛門兵衛督に四人、佐に二人附せらるるを小隨身といふ。

すゐじよう 帥乘 【名】帥は軍帥、乘は車士なり。されば、帥乘は、將士の義。左傳「晉帥乘和、師必有二大功一」。

すゐすゐ 綏綏 【副、形】しづかに安んずる貌。

すゐずゐ 惴惴 【副、形】恨るる貌。詩經「臨二其穴一、惴惴其慄」。

すゐせいむし 醉生夢死 【句】(イタヅラ)徒に生れて、徒に死するをいふ。「醉生夢死して天下を知らず」など。

すゐぜん 睟然 【副、形】清和潤澤の貌。孟子「君子所レ性、仁義禮智根二於心一。其生レ色也睟然見二於面一、睟二於背一施二於四體一」。

すゐぜん 垂涎 【名】涎をながすこと、物をほしがることなり、實誼新書「垂涎相告」。

すゐたう 隋唐 【名】隋は、支那の六朝時代に起りて、南北朝を合一したりし國。唐は、隋に代りて起りて我が國と交通親しかりし國。

すゐたうのすゑ 錐刀末 【句】些少なる利益。左傳「錐刀之末將二盡爭一之」。

すゐたふ 出納 【名】金錢の出入をいふ。しゆつなふとは讀むべからず。

すゐつつる Switzerland 【名】國名。歐洲の最高所にあり。以太利、墺地利、日耳曼、佛蘭西の四大國と境を接せる小邦。

すゐてう 垂髫 【名】說文に「小兒垂髮也」とあり。小兒の垂れたる髮、轉じては、小兒をもいふ。

すゐてつ 衰絰 【名】正しくは、サイテツといふべし。絰は、喪の時に、首と腰とに着くる麻、衰は、さよみ(貲布)の喪服をいふ。禮記「君子衰絰則有二哀色一」。

すゐてんいつぺき 水天一碧 【句】海上など遠く望めば、空と水と一つ色にして、際涯の知られぬなどにいへり。

すゐはん 水飯 【名】古く、飯といへるは强飯にて、今日の如く水を多く入れて炊ぎたるを糒粮とも、水飯ともいへり。今日にては、專ら、または水漬の飯をいふべし。

すゐび 翠微 【名】山の色。山の中途の色。爾雅「未」及二上翠微一」の疏に「未及二頂上一、在レ旁陂陀之處、山氣青縹色、故曰二翠微一也」とあり。

すゐほ 推歩 【名】星學の語にして、數へて推測する義にいふ。もとは、天文學の義にも用ひたり。

すゐま 揣摩 【名】自己の意思を以て、彼所の狀を想像するをいふ。「揣摩憶測」と連用す。戰國策「得二太公陰符之謀一、伏而誦レ之、簡練以二揣摩一」。

すゐらいてい 水雷艇 【名】水雷火を以て、敵艦を轟沈する輕船。故に鋼鐵にて作り、遠力迅快、艇體堅固のものなり。

すゐり 水利【名】水の便よきこと、灌漑に便なること、船舶の往來に便なること、などをいふ。

ずゐりようざん 瑞龍山【名】常陸國久慈郡鰐村端龍にあり。太田町より一里ばかり北なり。水戸家累代の墳墓地。

すゐりりよく 推理力【名】理を推し究むる腦力をいふ。

すゐれん 水簾【名】瀧の異名。

すゐれん 垂簾【名】太后などの婦人の、幼子に代りて政を執るをいふ。漢書「太后垂レ簾聽レ政」。

すゐろうてい 醉翁亭【名】宋の歐陽叔が、仁宗の慶曆五年、滁州の守に貶せられし時、其の地の琅邪山醴泉の上に亭を設けて、醉翁亭と名づく。その醉翁亭記は、古文眞寶後集に、出でたり。

すゑ 陶【名】陶器をいふ古語。

すゑのまつやま 末松山【名】陸前國宮城郡多賀城村八幡に、末松山寶國寺といふ寺あり。其の寺の後なる青松の高阜をいへり。歌の名所なり。歌に「末の松」ともあれば、「末」といふが、所の名なりしを、後に「末の松山」と呼び習ひて地名とせるなるべし。又、所につきても說ありて、陸中の浪打峠なりともいへり。

すゑは、いづこぞ、とほたふみ 末は何處ぞ遠江【句】行く道の末は、何處かと問ふといふ意を、國名にいひかけたるなり。とふととほたふみと假字違へれど、是れは「誰れかあはれと夕ぐれの」の類にて、鎌倉時代以後には多きことなり。

すゑはるかた 陶晴賢【名】多々良氏。大內義隆に仕へたり。後、義隆の武を忘り、寵愛を用ふるに至りて、遂に異謀を抱き、大友宗麟に通じて、之を弑せり。されど、遂に毛利氏の爲に、嚴島に敗られて自刃せり。

すゑひろ 末廣【名】扇子の異名。末に至りて廣まるの義を以て、多く吉事の時用ふる名なり。

すゑひろ しげやす 末廣重恭【名】鐵腸と號す。伊豫宇和島の人。新聞記者として、政黨員として、一時、世に聞えしが、明治二十九年二月歿せり。嘗て、二十一年に歐米に漫遊し、其の見聞せる所を書き記せるものを鴻雪錄といふ。

せい 制【名】おきて。法律。命令。

せい 稅【名】租稅。公費を支辨せん爲に、國家の命令權を以て、一箇人より徵集するもの。

せいあのけん 井蛙の見【句】見識の狹きをいふ。俗に「井の中の蛙、大海を知らず」といふ意。莊子秋水篇「井蛙不レ可レ以語二於海一者、拘二於虛一也」。

せいいう 贅疣【名】むだなるもの。あまりもの。疣はイボなり。

せいいたいしやうぐん 征夷大將軍【名】奈良朝時代には、蝦夷征討の時、臨時に補せし職なりしが、源義仲、頼朝以來は、德川幕府の終まで、世々武家の棟梁たる人の職なりき。其の間に於ては、武家ならぬものにては、元弘一統の初めに、只護良親王の任ぜられしことあるのみ。

せいいてん 製衣店【名】仕立屋に同じ。

せいいうん 青雲【名】青き雲にて、此もの、空天の高きに在るより、立身出世するにいふ。「青雲の上に到る」は、仕官して高位高官となりしこと。「青雲の志あり」は、功名を望む心あるをいひ、「青雲の士」「青雲の器」などは、志の高遠にして聖賢たるべき人をいへり。

せいがいは 青海波【名】舞樂の曲名なり。舞ふ人の服に、波の摸樣を染めたれば名づく。龍宮の曲ともいふ。

せいかく 精覈【名】精しく明白なるをいふ。精確といふに同じ。

せいかん 精悍【名】鋭くして勇ましきをいふ。史記「爲人短小精悍」。

せいき 世紀【名】西洋にて百年を一期としての稱。「第二十世紀」などいふ如し。英語 Century の譯なり。

せいきよ 逝去【名】死ぬるをいふ。

せいぐわ 清華【名】三公となるを先途とする家柄。初めは久我、三條、西園寺、德大寺、花山院、大炊御門、今出川の七家なりしが、後には、廣幡、醍醐の二家も加れり。

せいくわう 棲遑【名】しじまふを見よ。

せいくわうし 盛廣之【名】人名。また、盛弘之に作る。荊州記の著者。

せいくわん、しんぶん 齊桓晉文【名】齊の桓公と晉の文公となり。五霸の中にても、最も勢力ありしかば、霸者の義にも用ふ。

せいくわん 稅關【名】開港場にありて、輸出入物など取り調べて、海關稅など課する役所。

せいけい 井陘【名】支那の地名。漢の韓信が、趙王成安君と對戰せし險要の地なり。

せいけつ、したたるごとし 腥血如滴【文】生々しき血の滴る如く、紅なりとの義。躑躅花などを形容するにいふ。

せいけんこう 清獻公【名】支那の宋の趙抃なり。字は閲道、衢州の人。

せいけんじ 清見寺【名】駿河庵原郡興津町大字清見寺町にあり。禪宗なり。寺傳詳ならざれども、足利尊氏の再建せしものといひ傳ふ。眼下に、清見潟の勝を望む。

せいこ 西湖【名】地名。支那浙江省孤山の麓にあり。江南の勝地にして、梅を以て著る。林和靖（名は逋）の隱れし處。

せいこう 正鵠【名】射の的なり。布に畫くを正といひ、皮につくるを鵠といふ、禮記「發而不レ失二正鵠一者、其唯賢者乎」とあり。正しき道に當るをも正鵠に當るといふ。

せいごおくだん 勢語臆斷【名】書名。五卷あり。伊勢物語の注釋にて、契沖の著。

せいさい 制裁【名】法律上の語にして、法また道に違ふ者を處分するをいふ。

せいさう 星霜【名】年月の意にいふ。璇璣抄に「霜は年毎に降るものにして、星は一年に天を巡る。故に、歳の積るを星霜を經るといふ」とあり。杜牧集「經二幾年一、曰二幾換一星霜一」。

せいさう 西廂【名】西のひさし。廂は廊也、廡也と注せり。

せいさうき 西廂記【名】支那の小説の名。

せいさく 正朔【名】正は、年の始。朔は、月の始。相連用して曆數の義とす。禮記「立二權度量一、考二文章一、改二正朔一」云々」。

せいさく、あひいれず 枘鑿相容れず【文】方なるものと、圓なるものと、相容れざるをいふ、宋玉九辨「圜枘而方鑿兮、吾固知二鉏鋙而難レ入」と。

せいさん 征驂【名】軍馬といふほどの意。王勃の桑泉別少府序に「高林靜而霜鳥飛、長路曉而征驂動」。劉秉忠の詩に「雨霽輕烟鎖二翠嵐一、五更殘月照二征驂一」。

せいざん 青山【名】青々としたる山。草木のある山をいふ。又「此處青山可レ埋レ骨」の句より、墳墓の義にもいふ。

せいざん 西山【名】人名。德川光圀の號。

せいし 正子【名】諸侯の嫡子なり。胄子に同じ。

せいし 青史【名】歷史をいふ。歐陽修の文「名姓已光二青史上一」。

せいじ 青磁【名】滋器の一。模樣なし。淡綠、又は、淡藍の釉藥を全體にかく。

ぜいし 筮仕【名】初めて仕官するをいふ。左傳に「畢萬筮二仕于晉一、遇二屯之レ比一」。支那にては、仕官するに、吉凶を占ひ、然る後に仕へたるなり。それよりいひ初めたり。

せいしん 星辰【名】星をいふに同じ。

せいせき 聲績【名】名聲と功績と。

せいせん 井泉【名】井戸のこと。

せいぜん 井然【副、形】正しく整ひたるさま。井さに同じ。

せいそ 淸楚【副、形】淸くあざやかなるをいふ語。

せいそ 凄楚【名】心に苦痛を感ずること。李子卿贈二秋虫一賦に「心觸者多二感激一、志苦者易二凄楚一」とあり。

せいそう 西陬【名】西方の田舍。「陬は隅なり」と字典にあり。

せいそく 棲息【名】棲宿に同じ。

せいちう 西疇【名】耕地の義なり。四庫全書提要に「西疇、正如二詩之南畝、偶擧二一方一言レ之耳」とあり。

せいちう 掣肘【名】肘の動がんとするに、之を掣く意にて、事をなさんとする時、邪魔すること。成語考には「人の牽制を受くるを掣肘といふ」とあり。

せいちよ 青女【名】霜の異名。また、霜の神をいふ。淮南子「青女乃出以降二霜雪一」。

せいてい 青帝【名】春の神なり。尚書緯「春爲二東帝一、又爲二青帝一」。

せいていのかはづ 井底の蛙【句】見解の小なるをいふ。井底に居る蛙が、天を仰ぎ見て、井口の天の甚だ小なるを見

ろが如き意。莊子「井蛙不可以語於海云々」。

せいでん 井田 【名】周の田制なり。孟子に「方里而井、井九百歩、其中爲公田、八家皆私百畝、同養公田」とあり。

せいと 生徒 【名】學生のこと。晉書「朝廷嘉其能、令教育生徒」。

せいぬ 【名】河の名。佛國巴里市を貫流せる河なり。

せいねん 青年 【名】年齢の若きもの。少年。少年は衿の青きを衣るよりいふとぞ。

せいねん、かさねてきたらず 盛年不重來 【文】陶淵明の詩に「盛年不重來、一日難再晨、及時當勉強、歳月不待人」とあり。

せいのせんわう 齊宣王 【名】田氏。名は辟彊。戰國時代の名王。

せいはい 成敗 【名】成功と失敗と。轉じては、敗を濁音に「せいばい」と呼びて、政治を執り行ふにいへり。即ち、裁判、仕置、刑罰、などの意に用ふ。

せいはく 西伯 【名】周の文王なり。殷の紂王、文王に命じ、西方諸侯の長となりて、征伐を專にすることを得しむ。よりて、西伯とよべり。

せいはん 世範 【名】書名。三卷あり。宋の袁業の著。立身處世の事項を細に說けり。袁業、字は君載、宋の信安の人。進士に登第して邑宰となる。

せいひつ 靜謐 【名】靜かにして穩かなること。晉唐の琴賦に「竦蕭蕭以靜謐、密微微其清閒」と。

せいひざつさん 西秦雜纂 【名】書名。西洋の逸話などを輯めて、修身の用に供せんとて著せるもの。中村正直の撰。

せいほうろう 栖鳳樓 【名】はつしやうゐんのしろうを見よ。

せいみん 齊民 【名】平民に同じ。漢書食貨志の注に「齊は等なり、賢愚なきを齊民といふ」とあり。

せいめう 精妙 【名】精しく巧みなること。勝れて巧妙なること。

せいめいのせつ 清明の節 【名】陰暦にて、三月の節、即ち、春分後十五日なり。

せいもう 青盲 【名】あきめくらをいふ。

せいやのさく 清野の策 【名】兵法の語。野を燒き拂ひて、敵をして兵粮宿舍を得ざらしむるをいふ。露西亞人が、ナポレオンを迎へしも、此の策なり。

せいよ 清豫 【名】清くして安らかなること。俗事に遠ざかりて樂しみ居ること。

せいら 星羅 【名】星の如くに羅ること。

せいらい 清籟 【名】立木の枝などが、風に吹かれてさやかなる音のするをいふ。唐の高宗の玉華宮山銘に「流花繞砌、清籟鳴レ風」とあり。

せいらきふ 星羅棋布 【句】星の如くに列り、碁石の如くに並べるをいふ。物の並列せる形容語。

せいりやうでん 清涼殿 【名】セイラウデンとも呼ぶ。古くは、天皇の常の御殿。紫宸殿の西北にありて、一に、中殿とも稱せり。

せいりやうは、たかきにちかづきてしやうじ、はんねつは、しづかなるにまかせてきゆ 清涼近レ高生、煩熱委レ靜銷 【文】白樂天の詩句。白氏文集に出づ。

せいれい 生靈 【名】生民といふに同じ。晉書「生靈仰其德、四海歸其仁」。

せいれき 西曆 【名】西洋の曆なり。西曆何年といふは、耶蘇降誕の日を紀元として數ふるものなり。

せいれんゐんのみや 青蓮院宮 【名】正しくはシヤウレンヰンノミヤ。京都粟田に青蓮院ありて、代々、法親王の住し給ひし門跡なり。されば、其の法親王を青蓮院の宮といふ。維新前の頃の宮は、久邇宮朝彦親王なり。

せいろう 井樓 【名】高櫓。櫓。

せいろい 精衛 【名】山海經に「發鳩之山有レ鳥、名曰精衛、是炎帝之女、往遊東海、溺而不レ還。常取西山之木石、以塡東海」。

せう 詔 【名】支那古代の聖主、舜の時の樂の名。尚書益稷篇の注に「簫韶、舜所レ製樂」とあり。

せう 抄 【名】鈔に同じ。謄寫、拔書、などの意に用ひ、又注釋の意に用ひ、また、條目の名にいふ。一勺の十分の一。

せう 簫 【名】小竹を列ねて作れる樂器。大なるは廿六管、小なるは十六管。管の長短種々ありて、鳳凰の羽翼に象りたるものなりと。

せう 少輔 【名】官名。いにしへの各省の次官の。俗にセウイウともいふ。

せうあんでん 小安殿 【名】大極殿の後にある御殿なり。

せういかんしよく 宵衣旰食 【句】天皇の政治に精勵し給ふをいふ。朝早く衣服を召し、日暮れて食事をし給ふといふ程の義。

せうえう 逍遙 【名】散步、遊步、漫步、ともに同義。「氣ばらしのそぞろあるき」なり。

せうかい 少艾 【名】少女をいふ。艾は美好なり。容色美好の少女。孟子「知二好色一則慕二少艾一」。

せうかい 紹介 【名】引き合はすこと。中だちすること。

せうがい 生涯 【名】生命のあるかぎり。一生涯。

せうかう 燒香 【名】佛葬の式の一にて、香をたくこと。

せうかう 少康 【名】世の中の少し穏なること。

せうがく 小學 【名】書名。宋の朱熹が、童蒙に教へんが爲に作れる書。

せうかん 宵旰 【名】「宵衣旰食」の略。其の條を見よ。

せうかんざつき 消閑雜記 【名】書名。一卷。岡西惟仲の隨筆にて、歷史、文學、雜誌などに關することを輯めたり。

せうくわざん 消火山 【名】噴煙の消滅したる火山なり。

せうけい 捷徑 【名】ちかみちをいふ。捷は疾なり。楚辭「其唯捷徑以窘步」。

せうけいもん 昭慶門 【名】朝堂院の北門にして、北は宮城門に對す。拾芥抄「昭慶門、謂之北面外門」、五間戸三間」。

せうさい 樵採 【名】木を伐り取るをいふ。

せうさう 悄愴 【副、形】悽愴に同じ。いたみかなしむ。さびしくおもふ。しをろ。漢書「不堪至寒之悄愴」。

せうきつ 蕭殺 【副、形】物凄き形容にいふ語。

せうし 笑止 【名】「かたはらいたし」などいふに同じく、人の物笑ひとなるを氣の毒に思ふなどの意。謠曲にては、當惑せることの意にいへり。

せうしん 蕭森 【名】木立のものすごくしてしづかなること。張九齡の詩「江城何寂歷、秋樹亦蕭森」。

せうじん 小人 【名】おろかなる人。つまらぬ人。君子ならぬ人。論語「小人閑居而爲不善」。

せうしんよくよく 小心翼翼 【句】恭み愼む貌。詩經「維此文王小心翼々」。

せうしやう 瀟湘 【名】瀟水、湘水、共に支那の川の名、洞庭湖の北。支那有名の勝地として、八景の稱あり。我が國の八景といふもの、近江をはじめ、皆、これに因れるなり。其の八景は、瀟湘夜雨、山市晴嵐、遠浦歸帆、煙寺晩鐘、漁村夕照、洞庭秋月、平沙落雁、江天暮雪。

せうしやうきよく 招商局 【名】清國政府の所轄たる汽船の事を統轄する局。清國の航海業は、總べて官業なり。

せうしやうのうち 蕭墻の內 【句】論語に「昔恐季孫之憂不在顓臾而在蕭墻之內也」とあり。註に「蕭墻屏也」とありて、垣の塀のことなり。「禍、蕭墻の內に起る」などいふは、一家、又は一國內にて、うちわ同志の爭あるをいふなり。

せうしやうまさとし 少將正俊 【名】堀田正俊なり。

せうじゆつ 紹述 【名】つきしたがふこと。前々の仕來りに由り從ひて行くこと。「於是、專以紹述爲國是」と、宋書に見ゆ。

せうしゆん 小春 【名】十月の異名。俗にコハル。荊楚歲時記に「十月天氣和暖似春、故曰小春」とあり。

せうすゐ 憔悴 【名】痩せ衰へたること。やつれたること。

せうそこ 消息 【名】訪問すること。音信。文通。手紙。

せうだんちえう 樵談治要 【名】書名。一條兼良が、將軍足利義尙の囑によりて撰せるもの。神佛の尊奉すべきこと、守護たる人は廉直を先とすべきこと、近習を擇ぶべきことなどの條々を記せり。

せうぢく 小艇 【名】小敗北、小挫折、などの意。綱目集覽に「敗北曰レ衂」とあり。衂は衄に同じ。

せうちゆうにやいばあり 笑中に刀あり 【文】外には溫和を裝ひて、內に害心を蓄ふるをいふ。事類全書「李義甫、容貌溫恭、與レ人語、必嬉怡微笑、而狡險忍克。故時人謂二義甫笑中有レ刀一」とあり。

せうちよく 詔勅 【名】詔も勅も共に天皇陛下のみことのり、即ち御命令なり。但し、其の御命令を文書に書きあらはしたるを詔書といひ、勅書といふ。其の詔と勅との區別は、大寶の公式令の義解に「謂、詔書勅書、同是綸言也。但臨時大事爲レ詔、尋常小事爲レ勅」とあり。

せうでう 蕭條 【副、形】物靜かに。物淋しく。しめやかに。

せうてん 燒點 【名】光線、又は、熱の、一點に集りたる所をいふ。それより、凡て、目標、若くは、中心となる所をいふ。「攻擊の燒點」など。

せうと 兄 【名】兄人(セヒト)の音便にて、兄(アニ)なり。

せうなごんにふだう 少納言入道 【名】少納言なる人の剃髮したるをいふ。平治の亂のときのは、藤原通憲なり。通憲、少納言にて入道して、信西といへり。

せうねつぢごく 焦熱地獄 【名】地獄の一。火の熱の烈しき所なりと。

せうねんき　少年期【名】男子は、十七歳より二十四歳まで、女子は十五歳より二十一歳までの年齢期。

せうび　焦眉【名】危急の場合。切迫したる場合。眉の焦げんとするほどの急なる場合。

せうぶ　韶武【名】韶は舜の樂、武は武王の樂なり。論語八佾篇「子謂ㇾ韶盡ㇾ美矣、又盡ㇾ善也。謂ㇾ武、盡ㇾ美矣、未ㇾ盡ㇾ善也」。

せうみやう　小名【名】武家時代に、其の所領の、大名よりは小さき城持衆などをいへり。

せうよう　邵雍【名】人の名。字は堯夫、自ら安樂先生と號す。宋の人。高明英邁にして、書をして讀まざることなし。程子稱して、振古の豪傑とせり。神宗の熙寧十年卒す。後に康節と賜諡す。

せうれう、しんりんにすくへども、いつしにすぎず　鷦鷯巢二於深林一不ㇾ過二一枝一【文】はやしにやどるささきを見よ。

せうろく　抄錄【名】抜き書きすること。抜萃に同じ。

せがい　梶　船棚【名】船の左右のはしにつけたる板の棚。小舟にはなし。

せがわ　清和井【名】地名。京都の正親町の南、京極の西をいへり。清和の母后藤原多子（マス）の御在所たりし地。

せきあへず　塞き敢へず【句】留め兼ぬるをいふ。

せきかう　石交【名】堅固なること石の如き交りをいふ。戰國策「此所謂棄二仇讎一得二石交一者也」。

せきかう　石膏【名】礦物の名。硫酸石灰にして、菱形の結晶をなせり。近時、之を以て、彫塑を作ること流行す。

せきがく　碩學【名】大學者。博學者。「碩學鴻儒」など。

せききやう　石經【名】石に刻したる經書。この石經に、漢、唐、清の別あり。漢石經は、殘字六百七十五字、唐石經は、開成二年西安府學石本にて、十三經の中、孟子なかりしを、明人補刻せり。清石經は、乾隆五十八年敕刊、嘉慶八年敕改定、國子監の石本にて十三經備れり。

せききよく　積極【名】つねにセツキヨクとよぶ。消極の對語。物ごとの、陽性にして、進取を主とする類を積極といひ、陰性にして退きて守る類を消極といふ。もとは、電氣にいふ語。

せきくわいせき　石灰石【名】イシバヒイシ。色に種々あり。炭酸と合すれば炭酸石灰となる。

せきくわく　尺蠖【名】しやくぐわくは、くつしてのぶを見よ。

せきくわん　席卷【名】つねにセツクワンと呼ぶ。席（ムシロ）を卷く如き勢にて、敵を征伏すること。戰國策「雖ㇾ無ㇾ出二兵甲一席巻

せきだう　赤道【名】地球の表面、南北の中央に、横に引き周らしたる想像の線をいふ。太陽光線の直下する處にして、周一萬〇百六十三里餘あり。

せきたう　赤地【名】漢書五行志の注に「赤地は空谷にて、物の無きをいふ」とあり。赤貧、赤手などの赤、皆同義。史記「晉國大旱、赤地三年」。

せきでうでう　赤條條【句】赤はだか。素（ス）はだか。

せきてん　釋典【名】しやくてんを見よ。

せきどく　尺牘【名】てがみ古の制、書簡の長さ一尺なりし故にいふ。

せきとくそうだん　積德叢談【名】書名。高田與清が、道德上の雜話を記せるもの。

せきのあさかぜ　關の秋風【名】書名。松平定信の著。

せきひん　赤貧【名】甚だ貧しきをいふ。「赤貧洗ふが如し」など。

せきへき　赤壁【名】支那の地名。險要の地にて、東漢の末に、吳の周瑜が、魏の曹操の大軍を破れる所。

せきまち　關町【名】伊勢國鈴鹿郡にあり。古の關のありし地。

せきやう　夕陽【名】ユフヒ。

せきやう　赤楊【名】樹の名。ハンノキと稱す。樺木科に屬

卷常山之險」。

せきさい　釋菜【名】しやくてんを見よ。

せきし　赤子【名】あかご、書經「如ㇾ保二赤子一」。

せきしふ　積習【名】長き間の習慣。昔よりのならはせ。

せきじん　籍甚【名】評判の甚しきこと、また、狼藉の甚しきをいふ。らうぜきを見よ。

せきしんすけ　關新助【名】名は孝和、孝齋、又、自由亭と號す。上野藤岡の人。幕府に仕へて勘定吟味役となり、三百石を領せり。數理の微妙を極め、前人未發の術理を發見す。時人、算聖と稱す。其の學派を關流といふ。算學の著書多し。寶永五年十月歿す。年六十六。

せきしゆ　隻手【名】片手なり。

せきじゆ　碩儒【名】大儒の義。勝れたる學者。

せきせき　寂寂【副、形】物しづかに、物さびし。

せきぜん　寂然【副、形】寂々に同じ。物さびしき形容にいふ語。

せきそん　石尊【名】相模の大山の雨降神社を大山石尊（オホヤマセキソン）といひき。今は、大山祇命とす。

せきたい　石帶【名】いにしへ、束帶の時、袍の腰にまとへる帶。其の位に因りて、玉、瑪瑙、犀角、蠟石などを、黑漆にて塗りたる革の帶に飾る。形に、方なると圓なるとあり。

し、材は、白色にして微赤を帶べり。

せきやま　關山【名】もとは、關ある山の意。但し、古歌などには、多くは、近江の逢坂山をよめり。後撰集に「關山の、みねの杉むら、すぎゆけど、あふみは猶ぞ、はるけかりける」。此外なほ多し。

せきり　戚里【名】母方の里。外戚ともいふ。

せきれき　淅瀝【副、形】雨雪の聲を形容する語。謝惠連の雪賦に「霰淅瀝而先集」とあり。

せこ　世故【名】世事に同じ。世の中の經驗。宋史「稍引遠二世事一」。

せじひやくだん　世事百談【名】書名。山崎美成の隨筆なり。

せぜ　膳所【名】地名。近江國滋賀郡大津馬場の東三町餘にあり。古昔より日吉神社の神饌を、此の地より供す。故に膳所の稱ありと。

せだ　瀨田【名】地名。近江國栗太郡にあり。

せちみ　節忌【名】定期に精進潔齋するをいふ。中古に、八日、十四日、十五日、廿三日、廿九日、廿日を六齋日と稱へて、魚鳥獸肉を食はず、精進する習慣ありき。

せつえつ　折閱【名】荀子「良賈不レ爲二折閱一不レ市」の注に、折は損なり。その故は、損して閱賣する所の物價なりとあり。減頽することにいふ。

せつかく　折角【名、副】骨を折るをいふ。「折角の合戰」などいふは名詞にして、大事の戰爭などの意。「折角いふ」「折角御自愛なさるべし」などのは副詞、骨を折つて、つとめて、などの意。

せつく　絕句【名】また、ゼクといへり。りつしを見よ。

せつくわん　攝關【名】攝政、關白をいふ。攝政は、政を攝する義にて、天子に代りて萬機の政を掌るをいふ。女帝、幼帝の時にばかり、之を置く。關白は、關り白す（アッカマウ）義にて、天子の勅を奉じて、天下の政務を執り行ふ職。

せつけうかうろく　說敎講錄【名】書名。堀秀成の說話を筆記せる書なり。

せつさ　切瑳【名】切りみがく意。「切瑳琢磨」など。多くは、有形のものより、學業、精神などにいへり。

せつざんのたきぎ　雪山の薪【句】釋迦が、雪山に入りて薪水の勞を採りて、仙人に仕へしをいふ。されば、また、僧の法を得る爲に燈をたくを「難行の法の薪（たきぎ）」などもいへり。

せつしう　雪舟【名】人名。備中の人にて畫仙たり。名は等楊。雪舟、備溪齋、米元山主人、楊智客、雲谷軒等の號あり。明に渡りて、山水の勝を師とし、居ること五年にして歸朝し、山口の雲谷寺に住せり。其の畫くところ、天性の妙に出でて更に古人の跡をふまず。永正三年歿す。年八十七。其の流を雲谷派と稱す。水墨の畫、これより大に行はる。

せつしやう　攝政【名】せつくわんを見よ。

せつしやくわん　切齒扼腕【句】切齒は、齒を摩切するなり。扼腕は、自らわが腕を握り持つなり。皆、奮怒の餘りに發する擧動。史記「天下之遊說之士、莫レ不日夜切レ齒瞋レ目扼レ腕以言二從之便一以說二人主一」。

せつしやう　絕唱【名】詩歌文章の超絕せるをいふ。宋書「絕唱高踪久無二嗣音一」。

せつしよう　折衝【名】敵人の進入を摧き止むるなり。晏子春秋「孔子曰不レ出二樽俎之間一而折二衝千里之外一、晏子之謂也」。

せつせい　節制【名】物事をひかへめにすること。節にすることなり。

せつせつ　屑屑【副、形】物に拘はりて、こせつく貌をいふ。左傳に「晉侯謂二女叔齊一曰、魯侯不レ亦善二于禮一乎、對曰魯侯屑屑、焉習レ儀、以亟言レ善二于禮一、不二亦遠一乎」とあり。

せつたいじやう　絕對上【副】絕對的といふに同じ。比較すべきものなきにいふ語。

せつた　刹那【名】佛語。極めて短き、即ち、一おもひの時間をいふ。永劫の對語なり。

せつにゑがく 梲に畫く【文】梁上の短柱、即ち、ウダツ(汲)に、水草の模様を畫くこと。論語「子曰、臧文仲、居レ蔡山レ節レ梲、何如其知也」。註に「居猶レ藏也。蔡大龜也。節柱頭斗拱也。藻水草名、梲梁上短柱也。蓋爲二藏龜之室一而刻二山於節一、繪二藻於梲一也。當時以二文仲一爲レ知。孔子言不レ務二民義一、而諂二瀆鬼神一如レ此。安得レ爲レ知云々」と說けり。

せつぴつ 絶筆【名】筆を止むるなり。杜預の左傳序に「絶筆於獲麟之一句」。又、死去前、最後に書ける文字をもいふ。

せつぶんせい 薛文清【名】名は瑄、字は德溫、明の山西河津の人、翰林學士となる。學、躬行を尊び、明の理學の宗たり。讀書錄などの著あり。天順六年歿す。文清と諡せらる。

せつやう 攝養【名】養生、營養などいふに同じ。

せつようしふ 節用集【名】書名。二卷あり。林宗二編す。日用文字を註釋せるもの。明應頃の著。宗二は南都の饅頭屋にして、林逸といへり。本書の外に、源氏林逸鈔五十四卷の著あり。後世、これに倣ひて種々の節用集出でたり。

せつりん 絕倫【名】等輩に超ゆる義。漢書「桓譚以爲二絕倫一」。

せつゐき 絕域【名】極めて遠く離れたる國。前漢の武帝紀に「詔二州郡一察二吏民有レ可レ爲二將相一使レ絕域一者一」。

せつをる 折節【文】主持する所の意見を枉ぐること。戰國策「以二秦之強一折レ節而下二與國一」。

ぜにん 是認【名】よしと認むること。

ぜにやこへゑ 錢屋五兵衛【名】加賀國の海商。其の祖は、兩替を業としたれば、通稱錢屋と呼べり。機智に富み、外人と貿易して巨萬の富を致し、終に河北潟を埋めて新田を開かんとして、圖らずも罪を得て獄に下り、嘉永五年十一月病死せり。年八十二。

ぜのぽん Xenofion【名】希臘の人。同國上古に於ける剛勇なる將軍にして、また、希臘三大史家の一人なり。

せのを かねやす 瀨尾兼康【名】平家の臣。維盛に從ひて義仲を討ち、後に、今井兼平と戰ひて敗死す。

せふしゆふしや 攝取不捨【名】佛語。收取して棄捨せぬをいふ。攝は、引持、收攬などの義。佛が人を攝取して、地獄へも落さぬといふ意より、佛の光を「攝取不捨の光明」などいへり。セッシユフシヤと訓む。

せふじゆん 浹旬【名】僅の日數間をいふ。或は三辰にて、子より亥に至る十二日をいひ、旬は十日をいふ。

せふせふ 霎霎【名】雨のショボ〳〵ふる狀をいふ。

せふぢよ 婕妤【名】支那にて、天子の侍女。後漢の成帝の時より始まる。

せふみ 瀨踏【名】海川を徒歩にて渡る時、瀨の深淺を踏みこころむるをいふ。

せふれふ 涉獵【名】一わたり眼を通すこと。又書籍を博く見ることに用ふ。漢書の注に「言レ若二涉レ水獵レ獸不二專精一也」と。

せまる 迫、逼、薄【動ラ四】迫は急に迫ること。「急迫」、「切迫」などの。逼は近くせまること。「逼レ門」「逼レ眞」などの。薄は迫に同じ。但し急なる意なく、漸々にせまるなり。「薄レ暮」などの如し。

せみまる 蟬丸【名】人の名。宇多帝第八の皇子たる敦實親王の雜色なりとも、或は、また、醍醐天皇第四の皇子なりともいふ。博雅の三位が、蟬丸より琵琶の秘曲を得たるよし、今昔物語にあり。「これやこの、行くも還るも、別れつゝ、知るも知らぬも、逢阪の關」の詠は、後撰集に出でたり。

ぜんあくのおう、わうけい、たちどころにいたる 善惡之應、殃慶立至【文】殃は凶咎、慶は幸福、立は速の義なり。善惡の報いは、直樣來るものなりとの義。易經「積善之家必有二餘慶一。積不善之家必有二餘殃一」とあるに本づく。

せんか 泉下【名】黃泉の下なり。黃泉は死して靈魂の行くべきところとす。

せんかい 纖介【名】少き塵芥。また、細微なるものをいふ。

せんかくしや 先覺者【名】學術智識を先に覺り知りたる人。先聖。

せんかくるゐしよ 潛確類書【名】書名。五十卷あり。明の陳仁錫(チンジンシヤク)の著。潛確は其の號なり。

せんかのひと 泉下の人【名】死したる人。くわうせんを見よ。

ぜんかんじよ 前漢書【名】後漢の班固の撰せる歷史の書。前漢十二代の事を記せるもの。十二帝紀、八表、十志、七十列傳あり。

ぜんかふ 禪閤【名】たいかふを見よ。

せんぎ 僉議【名】會議、評議などいふに同じ。僉は字書に「衆共言レ之也」、また「合二集衆口一詢謀之義」ともあり。「僉議して儀されければ」など。

ぜんきふす 漸及【動サ變】至り及ぶをいふ。漸は進む意。

ぜんきんのこ 千金之子【名】富家の子をいふ。漢書「千金之子、坐不レ垂レ堂」といへるは、垂は邊にて、堂の邊に近づきては、落つる憂ある故坐せずとなり。身を愛して危きに近よらぬにいふ。

ぜんくん 漸醺【名】少しばかり醉へる意。微醺ともいふ。

せんくわ 千顆【名】顆は、凡て、小き粒になりたるものをいふ。「千顆萬顆の珠」など。

せんくわん 潺湲【副、形】水の流るゝ貌。又、水の流るゝ

音。楚辭九歌「觀二流水兮潺湲一」。

せんげ　宣下【名】宣旨の下ること。臨時の場合にいふ。「親王宣下」、「將軍宣下」などの類。

せんけん　嬋妍【副、形】うつくしきこと。清らかなる貌。

せんげん　宣言【名】徧く一般に布き示す語なり。左傳「先宣言曰、司馬則然」。

せんげん　僉言【名】僉は、皆、咸の意にて、衆共にいふなり。書經「僉二言於鯀一哉」。せんき參照。

せんご　諂語【名】うはごと。精神錯亂し無意に發する語。

せんこく　宣告【名】宣言と同じ。左傳「宣二告後人一、無レ忘二於德一」と。裁判の申渡しも、宣告といふ。

せんごくさく　戰國策【名】書名。三十三卷あり。著者詳ならず。春秋以後戰國の終るまでの事を記せり。その編書脫落多し。漢の劉向校定して、今の卷數となせるなり。

せんごくのしちゆう　戰國の七雄【句】秦、楚、齊、燕、趙、魏、韓の七國をいふ。猶、しゅんじうのじふにしよこうを見よ。

せんざい　前栽【名】庭園に植ゑたる艸木をいひ、また、其の庭園をもいへり。うゑこみ。もとは、後園に對したる語。

せんざいいちぐう　千載一遇【句】載は歲にて、千年に一度相遇ふとの義。まれなることにいふ。三國名臣序贊に「夫

萬歲一期、有生之通塗。千載一遇、堯賢ノ嘉會云々」とあり。

せんざいしふ　千載集【名】二十一代集の一。藤原俊成が、後白河法皇の院宣によりて撰びし歌集。二十卷。千二百八十四首あり。

ぜんざう　蟬噪【名】蟬の鳴き騷ぐ意にて、かしがましきをいふ。あめいぜんせいを見よ。

せんじ　宣旨【名】天皇の仰言を宣達する義。頭辨、直に敕を受けて、上卿に傳ふるを口宣案といひ、上卿、その旨を外記に傳ふるを宣旨といふなり。これを文書としたるを「宣旨書」といふ。

せんしにひたんす　染絲に悲歎す【文】淮南子に「墨子見二練絲一而泣レ之。爲下其可二以黃一可中以黑上。また、同書「楊子見二達路一而哭レ之。爲下其可二以南一可中以北上」とあり。高誘の註に曰く「憫下其本同而末異上」とあるごとく、人の心の變遷し易きを歎く意にて、親交なりし人の、後に仲あしくなりて、相見ることもなき樣なる人情の浮薄を嘆けるなり。

せんしん　先進【名】先覺者、先輩などいふに同じ。論語「先進於二禮樂一、野人也」。

せんじん　先人【名】死したる父。亡父。史記（司馬遷の著）の自序にも、其の父司馬談を指して、先人といへり。

せんじもん　千字文【名】書名。晉の武帝の大傳鍾繇の

びしものにして、梁の周興嗣、韻を次でたり。

せんしやう　千章【名】大なる林のこと。木の多きこと。史記「千章之材」とあり。

せんじやう　氈城【名】陣營をいふ。氈は毛席なり。

せんじやう　禪讓【名】位を讓ることに。讓位に同じ。字典に「禪讓傳與也」とあり。

せんしやのてつ　前車の轍【句】前の者の失敗を見て、後の者も戒むべしとの意に喩へていふ。說苑に「前車覆後車戒（ナリ）。言二其危一」。貞觀政要に「豈容下目視二覆車一不レ改二前轍一」とあり。書言故事に「鑒二前代事一曰二覆車之戒一」とも見ゆ。

せんしゆう　禪宗【名】佛教の二派の名。臨濟宗、曹洞宗、黃檗（ワウバク）宗、三派を總稱していふ。此の法門は、奈良朝以前に傳來せしかども、さまで、世に歸向せられざりしに、鎌倉幕府の頃より、榮西、道元など、此の派の高僧出でてより、大に世に行はるゝに至れり。

せんしゆげん　先取權【名】先取の權利。他人よりも先に取るべき權利。法律の語なり。

せんじよう　千乘【名】周代に於ける大國の兵賦なり。方十里より、革車一乘、甲士三人、步卒七十二人、重車を將ゐるもの二十五人、總數百人を出すなり。千乘は、即ち方萬里、兵十萬人を出す國なり、詩經「公車千乘」。

せんじんのきみ　千乘の君【名】諸侯をいふ。せんじよう、及び、ばんじようのきみ參照。

せんせい　先生【名】年長じて學あるもの。孟子「先生將二何之一」。

せんせいこうせい、そのき、いつなり　先聖後聖其揆一也【文】孟子の中にある語。前の聖人も、後代の聖人も、其のはかりごとは、同一なりとの意。

せんせいりよく　潛勢力【名】物の發せんとして、根底深くかくれたる勢力をいふ。

せんせつす　洗雪【動サ變】すゝぎ清むるをいふ。「汪凰を洗雪す」など。

せんせんきようきよう　戰戰兢兢【句】恐怖して戒愼するをいふ。非常に氣をつくることに。詩經「戰々兢々、如レ臨二深淵一、如レ履二薄氷一」と。

せんせん　煽煽【副、形】火の盛なる狀にいふ。

ぜんぜん　漸漸【副、形】高峻の貌にいふ。又、次第々々に。又、涙流るゝ貌。

ぜんそう　禪僧【名】禪宗の僧侶。

ぜんだ　蝉蛇【名】大蛇なり。尾圓くして鱗なし。身に斑文ありと。

せんたう　錢塘【名】地名。浙江省杭州府に屬す。唐に錢塘

さいひ、唐以後改めて塘といふ。

ぜんだく 然諾 【名】うけひくこと。「然諾を重んず」は、一言なりとも人に約束すれば、必ずこれを信にすること。漢書「夫不ㇾ好ニ文學一、喜ニ任俠一、己ニ然諾一（カナラズヲ）」とあり。己は必なり。

ぜんだつ 先達 【名】山登りする修行者のうちにて、同行に先立ちて、案内するもの。また、藝術に長じて、他の師表となるべき人をいふこともあり。古くは、センダチといへり。

ぜんだんのいた 栴檀の板 【名】鎧の右の肩より、胸にかけて附くるものをいふ。その左の肩よりするを鳩尾の板といふ。共に胴の釣を射斷られぬ爲の具なり。

ぜんちや 煎茶 【名】煎じてのむ茶。普通に用ふるものなり。

ぜんぢやう 禪定 【名】佛語。明心、達理の義。坐禪組をみて佛道に入ること。

ぜんちやう 擅長 【名】其の人の技倆を十分に展ばすいふ。王捧珪の日賦に「在ニ七政一、雖ㇾ擅ニ其長一、照ニ萬物一、猶ㇾ燒ニ功一」とあり。

ぜんぢよ 芟除 【名】草を刈り除くこと。

ぜんてい 前提 【名】論理學にて、議論の基となるべき前置きをいふ。

ぜんてつそうたん 先哲叢談 【名】書名。入卷あり。江戸時代の有名なる儒者の性行事歷をかけるもの。原善の著。

ぜんてんてき 先天的 【名】生れぬ先より受け得たるをいふ。生れつき。的は、支那の屬語にして、語の末につけて、其の樣をいふ語、のの義なり。「理論的」「化學的」など。さて、先天は、哲學の語として、總べて形而上の義にいふ、拉丁語Apriori の譯なり。これに對して、形而下を、後天 Aposteriori といふ。經驗以上などいふ義なり。

ぜんと 蟾兎 【名】月の異名なり。劉孝綽「蟾兎屢盈虛」。

ぜんど 先途、專途 【名】行く先。進みゆくさき。成り行きの極み。「先途を見はつ」は人の最後を見さだめることと。又、「ここを先途と戰ふ」など。

ぜんどう 仙洞 【名】太上天皇の御所。院の御所、霞の洞、巖ヤ始射、丹壑、紫府などの異名あり。また、轉じて、太上天皇を直ちに、仙洞とも申す。

ぜんどう 扇動、煽動 【名】扇を以て風を起し、物を動す如く、人を敎唆して、事を起さしむるをいふ。俗におだてる、たきつけるなどいふ。魏志「更相扇動、往々棊峙」。

ぜんとく 宣德 【名】明の宣宗の年號。其の元年は、わが稱光天皇の應永三十三年に當る。

ぜんとへれな St. Helena. 【名】南大西洋中の一孤島。アフリカの西、千二百哩にあり。ナポレオン一世の臨終の地。

ぜんと、ほごとほし、おもひを、がんざんのぼうんにはす 前途程遠、馳思於雁山之暮雲。後會期遙露ニ纓於鴻臚之曉淚 【文】大江相公朝綱が、於ニ鴻臚館一餞ニ北客一序の中の文なり。和漢朗詠集にも出でたり。此の北客は、唐使たる渤海の周文德にして、當時、鴻臚館は、京都七條朱雀にありき。雁山は、支那の、西京より胡國に越ゆる地にある山にして、甚だ高ければ、雁の、北國に歸るに越え煩ふによりて、易く通さん爲に、雁門とて、峰を切りあけたる所を作れりとぞ。西京賦に「北接ニ雁門一」と見えたり。纓は冠の後に垂るるもの。一篇の意は、遠路を歸る途の困難を察し、また、何時遇はるるかと思へば、御名殘惜しとなり。此の句を、渤海人大に感じて、後に本朝人にあひて、「江相公、三公の位に陞れりや」と問ひければ、さらぬよし答へけるに、「實に、日本は賢才を用ふる國にはあらざりけり」といひて歎きけるよし、古今著聞集に見えたり。

ぜんなりふくべ 千生瓢 【名】秀吉の馬標（シルシ）なり。竿頭に、千の瓢をつけたればいふ。

ぜんぱう 瞻望 【名】見渡すこと。ながめやること。

ぜんぱいにくきよ 專賣特許 【名】品物を發明したる人の願によりて、官より、其の工夫に報ゆる爲に、其の人にのみ、專ら賣ることを許すをいふ。

ぜんぱく 阡陌 【名】阡は千錢、陌は百錢なり。漢書食貨志「阡陌之得」と。又、阡は、田間の南北の通路、陌は、東西の通路をいふ。即ち、普通には、田圃の徑（タハタコミチ）の義に用ふ。

ぜんぺんいちりつ 千篇一律 【句】詩を千篇作りても、同一の律なりとの義にて、多くの事物の、何れも異なる所なきをいふ。變化の乏しきこと。イッポンテウシ。

ぜんぺんばんくわ 千變萬化 【句】變化多端にして定まりなきこと。列子「千變萬化、不ㇾ可ニ窮極一」。

ぜんまい 薇 【名】草の名。食料とす。蕨に似て、幹も葉も稍大なり。錢忽の義とも、錢舞の義ともいひて、其の幼芽の時の形より名をつけたりと。

せんみやう 宣命 【名】國語を以て綴れる詔勅をいふ。漢文の詔勅ありて以來、それと區別して宣命と稱せしなり。維新の初め迄は、猶、神社、山陵などへの詔勅を宣命といひ、其勅使を宣命使といひしが、今は、天皇陛下の親祭し給ふには、告文と稱し、勅使の、神社山陵にて奏するをば、祭文と稱す。

せんみやうのへん 宣喜版 【名】禁中にて儀式ある時、宣命使の宣命を讀みあぐべき位置を示す札なり。

せんりにゆくものは、さんげつ、かてをあつむ 適ニ千里一者三月聚ㇾ糧 【文】莊子逍遙篇の語。支那の俗、旅舍にては、食を給せざれば、數月の食料を用意して出立する適な

り。大事業をなすには、其れだけの用意を要すとの意。

せんりやう 占領 【名】奪ひとること。他人の物を強ひて己の所有とすること。

せんれい 屑麗 【名】貧なくして、華にのみながれたるをいふ。屑は、史記の張耳傳の註に「謂二儒弱一爲レ屑」。

せんれつ 譫劣 【名】學問などの劣れること。才學の淺きこと。

ぜんをみれば、すなはちうつり、あやまちあれば、すなはちあらたむ 君子見レ善則遷、有レ過則改 【文】易經の語。

せめて 【副】強ひて。むりに。迫りて。甚だしく。何とそして。

せめんと Cement 【名】シックヒの類なり。

せりがは 芹川 【名】山城にある河の名。いにしへは、圭上の御遊幸つれにありしところ。後撰集「嵯峨の山、みゆき絶えにし、芹川の千代の古みち、跡はありけり」と。

ぜるまん German（日耳曼）【名】國名。二に獨逸と稱す。歐洲の中央に位し、面積二十一萬一千方哩、人口四千六百萬餘を有す。聯邦國にして、二十六の州より成れり。國人質素にして勤勉なり。故に、商業盛なると共に、近時著しく工業勃興せり。また、教育の普及せること歐洲第一にして、大學の數二十一、其の學生三萬に達せり。我が國よりも遊學するもの多し。

せわ 世話 【名】世間ばなし、うはさばなし、誹、などの意にいふ。また、世話物は、淨瑠璃などに、其の頃の風俗を寫したるものをいふ。「近松が世話物」など。又、周旋すること。とりもつこと。

そ 衣服 【名】古は衣をそといへり。今いふ袖も衣手の意。「御そ賜はせ」などいふは、音便にて濁れるなり。

そい 疎意 【名】うとむ心。隔心。心へだつ。うと〳〵しくする。

そい 素意 【名】豫れてよりのこころざし。宿志に同じ。

そう 僧 【名】梵語、僧伽の略。佛門に入りて修行したる者をいふ。比丘、出家、法師、緇徒、桑門、沙門、などの異名あり。

ぞう 族 【名】族の字音の音便。一族、うから、やから、に同じ。徒然草「皆、そうたえむことを願ひ給へり」。

そうか 走軻 【名】軻は小船。小舟のよく走るものにて、今のボートの如きもの。三國志「走軻出二樊口一」。

そうかく 綜核 【名】事物を統べかぬること。漢書宣帝紀に「綜二核名實一」とあり。

そうがひじり 增賀聖 【名】增の字、ソウと清みて唱ふべし。慈惠僧正の弟子にて、叡山の座主となる。冷泉、圓融二帝の頃の人。聖は、高德ある僧。秀でたる人をいふ稱なり。

そうぐわれん 葱花輦 【名】頂に擬寶珠（ギバウシュ）の附きたる輦車なり。擬寶珠は圓くして、上の、やや尖れるさま、葱の花に似たればいふ。

そうけいれん 宋景濂 【名】名は濂、字は景濂、潛溪と號す。明國初代の大儒、元史百十卷の著者。

そうけつ 奏闋 【名】音樂の終れることをいふ。增韻に「闋樂終也」とあり。

そうさう 淙噪 【名】落ちつかぬ意。字書に、淙は、水聲とも、水流の貌ともあり。噪は動、また、搔の義とせり。

ぞうじてんぱい 造次顚沛 【句】造次は、急遽、苟且に同じ。顚沛は、傾覆流離の際なり。少しの時間。ちよつとした間。論語「造次必於レ是、顚沛必於レ是」。

そうしやう 僧正 【名】そうゐそうくわんを見よ。

そうじやうのじん 宋襄之仁 【句】つまらぬなさけ。あはれみの過ぎたること。左傳に「宗の襄公、楚と戰ふや、公子目夷、敵の未だ陣せざるに之を擊たんといふ。公曰く、君子は、人を厄に困めずして、攻めず。遂に却て、楚に敗らる。世笑ひて、宋襄之仁といへり」。

そうづ 僧都 【名】そうゐそうくわんを見よ。

そうとくがもん 總督衙門 【名】支那の直隸省ならば、直隸總督衙門といふ。總督の政廳なり。總督は、其の省の軍務を統轄し、民治を監督することを掌る。

そうのしけん 宋の四賢 【名】韓琦、范仲淹、富弼、歐陽修

の四人なり。各その傳參照。

そうのだうがくごせんせい 宋道學五先生 【名】 周濂溪、程明道、程伊川、張橫渠、朱晦菴なり。

そおんき 蘇音機 【名】 蓄音機をいふ。

そうべう 宗廟 【名】 帝王の祖先の靈舍をいふ。

そうはつ 總髮 【名】 額上の月代を剃り去らず、全髮を蓄へたること。そうがみ。そうそう。

そうもん 總門 【名】 外構の正門なり。

そうらん 總攬 【名】 總べくくるをいふ。サ行變格に活用しては動詞となる。

そうれい 葱嶺 【名】 印度の山の名。大雪山の北、无熱地の南にありて、山上悉く葱を生ずといへり。また、單に高山をも葱嶺といへり。

そうれいのをしへ 葱嶺の敎 【名】 釋敎をいふ。釋迦は、葱嶺（雪山）に修行したるを以てなり。漢書西域傳に。「西域以二孝武時一始通、東則接レ漢、限以二玉門陽關一、西則限以二葱嶺一」。「顏師古云、葱嶺其山高大、上悉生レ葱。故以名焉」とあり。

そうろく 總錄 【名】 けんげうを見よ。

そうゐそうくわん 僧位僧官 【名】 僧位とは、法印、法眼、法橋をいひ。僧官とは僧正、僧都、律師をいふ。しかして、僧正は法印に相當し、僧都は法眼に、律師は法橋に相當するも

のとせり。

そえいひん 蘇顯濱 【名】 顯濱は、蘇軾の號なり。

そおんき 蘇音機 【名】 蓄音機をいふ。

そが うまこ 蘇我馬子 【名】 大臣蘇我稻目の子。性武略に長じ、且つ才辯あり、深く佛法を敬す。敏達、用明、崇峻、推古の四帝に歷仕せり。大に威福を專にし、遂に、人をして崇峻帝を弑せしむるに至れり。

そが えみし 蘇我蝦夷 【名】 蘇我馬子の長子。推古帝三十四年大臣となる。世に豐浦大臣と稱す。蝦夷、私に、紫冠を、子の入鹿に授け、以て大臣に擬し、僭逆甚し。入鹿敗るゝに及びて、また誅せらる。

そが じふらうすけなり 曾我十郎祐成 【名】 河津祐泰の子。伊東祐親の孫なり。父祐泰、工藤祐經に殺されたれば、弟五郎時致と共に復仇を謀り、建久四年五月、賴朝の富士の卷狩のとき、祐經の陣營を襲ひて、積年の望を遂げ、仁田四郎忠常に討たれて死す。年二十二。時致は五郎丸に捕へられ、遂に斬らる。年二十。

そかのこゑ 楚歌の聲 【句】 項羽、垓下に敗れ、圍まるゝこと數重。四面、みな楚歌の聲なりと、史記にあり。その意は、項羽を圍めるは、漢の兵のみならず、項羽に屬せし楚人も、亦漢に降きて、項羽を圍めるをいふなり。

そがのすくね 蘇我宿禰 山田石川麿 【名】 大臣馬子の孫。皇極帝の四年、鎌足と謀りて入鹿を誅す。孝德帝即位して、右大臣となる。後に異母弟日向に讒せられ、追兵に圍まれて自頸す。

そがひ 背面 【名】 うしろの方。

そがものがたり 曾我物語 【名】 書名。曾我兄弟が、復讐のことを記したるもの。著者詳ならず。正保三年の出版なりたゞし異本多し。

そぎまつ 削末 【名】 削り落したる其の先をいふ。髮の毛の先のそろひたるところなどにいへり。

そくいんのこころ 惻隱の心 【名】 傷はしく思ひて憐む心をいふ。羞惡の心、辭讓の心、是非の心、と合せて、孟子は、仁義禮智の四端といへり。

そくか 足下 【名、代】 足もとの義。または、手紙の脇付の敬稱に用ふ。又、對稱の代名詞。史記「圖樂前即二一世一、數日足下驕恣、誅殺無道云々」など。

そくか 俗歌 【名】 雅なる和歌に對して、通俗のはやり歌などをいふ。ゾッカとよ。

そくかん 俗漢 【名】 漢は、惡漢などの漢と同じく、男子をいひ、俗人の義に用ふ。俗物ともいふ。ゾッカンとよぶ。

ぞくくわい 賊魁 【名】 魁は頭領にて、盜賊の首領をいふ。ゾックワイとよぶ。

そくけつのくわん 則闕の官 【名】 太政大臣をいふ。大寶令「有德之撰、無二其人一則闕」とあるよりいふ。則闕はソッケツとよぶ。

ぞくごせんしふ 續後撰集 【名】 正しくは、シヨクゴセンシフと訓むべし。二十卷。後嵯峨の院宣によりて、藏部卿爲家の撰せる和歌集なり。

そくじ 仄字 【名】 仄韻の漢字をいふ。

そくしう 束脩 【名】 脩は脯なり。十挺を束ねいふ。古は、相見るに、必ず贄を取りて禮とせり。束脩は、其の至薄なるものをいふ。論語「自レ行二束脩一以上吾未二嘗無一レ誨焉」。

そくせい 即世 【名】 人の死することを。國語「闔閭即レ世」。

そくせき 足跡 【名】 足の跡。旅行にいふ。「足跡天下に普し」など。跡の字、迹を正しとす。

そくそく 簌簌 【副、形】 竹木等の相觸れて發する音。俗にザワザワ、サラサラなどいふ。

そくたい 束帶 【名】 公卿の禮服。其の樣は、冠をかぶり、袍をつけ、襠を引き、大口を穿ちて、其の上に、表の袴をつけ、石帶にて裝束を堅め、手に笏を取り、足に沓を穿つ。これ、文官の束帶にして、武官は平緒にて太刀を佩く。くはしくは、貞丈雜記裝束の部を見よ。

そくにへいをかし、たうにかてをあたふ 賊に兵を借し盗に糧を與ふ【句】之を助けて害をなさしむることを。史記「此所謂借二賊兵一、而齎二盜糧一者也」とあり。兵は武器。

そくはく 促迫 【名】切迫に同じ。せまること。

そくはつ 束髪 【名】髪を束ねること。結髪に同じ。始めて冠するをいふ。漢書「兒生亶々束髪修レ學」。いまは、もはら、婦人の西洋風の髪にのみいふ。

そくふ 足跗 【名】足の甲なり。玉篇に「跗足上也」とあり。

ぞくよつぎ 續世繼 【名】書名。今鏡をいふ。正しくはショクヨツギといふべし。

そくらてす Sokrates 【名】雅典の人。紀元前四百六十九年に生る。新教義、新哲學を創起せり。後、遂に毒殺せらる。後世、其の徳を賞して聖人とす。

ぞくれい 族隷 【名】一族郎等の義。

そげんめい 蘇源明 【名】京兆武功の人。文辭に巧みにて、天寶間は、そが最盛の期なりき。秘書少監をもて卒す。

そご 齟齬 【名】物事のくひちがふにいふ語。說文に「齒不二相値一曰二齟齬一」。また、楊子太玄經に「其志齟齬」とあり。

そこのこころや、いかがあらむ 底の心や如何あらむ 【文】心の底が、どうあらうかわからないとの意。

そこら 許多 【副】多く。あまた。たくさんに。ここらと。

そさん 素餐 【名】空しく食ふ義。無能にして職務を盡さざるをいふ。「尸位素餐」と連用す。詩經「彼君子兮不二素餐一」。

そじ 措辭 【名】用辭といふに同じ。文詞の用ひ方なり。中庸に「故時措レ之宜也」とある疏に「措猶レ用也」とあり。

そしよく 蘇軾 【名】人名。字は子瞻、東坡居士と號す。宋の人、洵の長子なり。翰林學士、兵部尚書となる。文忠と諡す。弱冠にして、博く經史に通じ、文をなすこと渾涵に、議論卓犖にして、百世に雄視す。當時群臣中、其の右に出づるものなかりきといふ。

そしん 蘇秦 【名】人名。字は季子、洛陽軒里の人。鬼谷先生に學び、後に戰國の諸侯王に遊說し、六國合從をなさしめ、六國の相となる。後世、張儀と相駢べて、雄辯のことを「蘇張の辯」などいふ。

そじゆつ 祖述 【名】其の道を宗として、之を紹述するをいふ。中庸「仲尼祖二述堯舜一、憲二章文武一」。

そじゆん 蘇洵 【名】人の名。字は允明、宋の人。年二十七にして、始めて、憤を發して學ぶ。嘉祐の間、二子、軾、轍と共に京師に至り、文名を天下に擅にす。二子また倶に名を知られたるを以て、世に稱して老蘇といふ。

そしようはふ 訴訟法 【名】刑事訴訟法も、民事訴訟法とこゝあり。刑事のは、刑罰の訴訟につきての規定にして、民事のは、私權の保護を目的としての訴訟を規定せる法なり。

そしる 誹、謗、譏 【動ラ四】誹は、人の非を斥してそしること。謗はば、かげにて人をそしるをいふ。誹謗とも連用す。譏は、先の失策を咎めそしるなり。この他、詆、訾、詆、刺、毀、譖等の文字、皆大同小異なり。

そぜつ 阻絶 【名】支障おこりて中の絶ゆるをいふ。

そそ 楚楚 【副、形】鮮明なる狀にいふ。さつぱりせること。詩經「衣裳楚楚」。

そそぐ 注、灌、濺 【動カ四】注は、川流のそそぐこと。すべて液をそそぐにいふ。灌は、草木などに水をそゝきかくること。「灌漑」など。濺は、そばしりのそそぎかかるをいふ。「濺二血頸一血」など。

そそのかす 唆、慫慂 【名】誘ひ動かす。勸め立つ。氣の、自然に其の方に向ふやうに說き立つる。

そそろなみだ 不覺涙、漫涙 【名】吾知らず出づる涙。そぞろは、何故ともなく、心の進むをいふ。「そそろこと」「そぞろありき」などの如し。

そだう 素堂 【名】山口素堂。名は信章、字は子晉、甲斐の人。江戸に出でて芭蕉と共に俳諧を事とす。享保元年八月歿す。年七十五。

そだう 祖道 【名】門出の祭をいふ。漢書の注に、祖は「送行之祭、因食飲也」とあり。また、其の疏廣の傳に「卿大夫、故人、邑子設レ祖供二張東都門外一」。「祖道の宴」は、送別の宴といふ意に用ふ。

そつじ 卒爾 【名、副】言語動作の輕卒なること。「卒爾の振舞」など。又、たゞ俄なる意にもいふ。「卒爾の見參」など。

そつぜんと 卒然 【副】急に、不意に、にはかに、だしぬけに、などの義。孟子「卒然問曰、天下惡乎定」。

そつて 蘇徹 【名】人の名。字は子由、潁、また、欒城と號す。宋の人、洵の次子。人と爲り沈靜簡潔、文は汪洋澹泊にして、秀傑の氣あり。兄軾と共に進士に登り、累官して翰林學士、門下侍郎となる。文定と諡す。

そどう 俎豆 【名】祭器。牲體を載するを俎といひ、醯醢を進むるを豆といふ。いづれも、木にて作る。

そとうば 蘇東坡 【名】蘇軾の號なり。

そとうば 卒塔婆 【名】梵語。唐にては方墳といひ、また、高顯ともいふ。また、七儀、樣杭ともいふよし。墓所に見ゆ。

そとも 背面、蔭 【名】かげともを見よ。

そのかみ 當時 【名】何か事のありし其の時をさす語。其の當時。其の時。轉じては、昔、以前、などいふ意にも用ふ。「そのかみを思へば」など。

そのだいなるものをたつれば、そのせうなるものは、うばふべからず 立二乎其大者一、其小者不レ能レ奪【文】孟子の語。心(大)たしかなれば、事として思慮せられざるなし。されば、耳目(小)の慾を利用して、それを誘はんとするも得べからずとなり。

そのちにはおよぶべく、そのぐにはおよぶべからず 其の智には及ぶべく、其の愚には及ぶべからず【文】論語に「邦有レ道則知、邦無レ道則愚。其知可レ及也。其愚不レ可レ及也」とあり。

そのとくをつねにす 恒二其徳一【文】易に「恒六五、恒二其徳一。貞。婦人吉、夫子凶。言乃婦人之道非二夫子之所レ宜也」。

そばざま 側様【名】傍の方。脇の方

そばそば 觚稜、圭角【形】角立つ。かどかどし。よそよそし。そばそばには副詞。

そふ 添、副、沿【動ハ四、下二】添は、分量の添ふこと。加添と熟す。副は、かけがへにそふなり。副将軍、副使、副長、副馬など。沿は、よりそふこと。川に沿ひてゆく」など。

そぶんけい 曾文渓【名】臺灣の地名。嘉義と臺南との中ほどにあり。

そほう 素封【名】官位秩祿のなき人、祖先よりの田園に収入ありて、其の富の、王侯にもひとしきもの。史記「今有二無

そほづ 添水【名】案山子。

そほつ 濡【動々四】びしよびしよにぬるること。「いな葉の露にそほちつつ」など。

そほん 粗笨【名】精細の反對にして、あらきをいふ。笨は、字書に「麤率也」とあり。

そまびと 柚人【名】材木を採る山をそま山といひ、其の木を伐る人をそまびとといふ。

そまやまじやう 柚山城【名】越前國南條郡柚山村にあり。延元元年、瓜生重、その兄保と、この地に起り、新田義貞に應ず。已にして義貞戰死し、柚山城おのづから潰ゆ。

そむく 叛、倍、反、負、背【動カ四】叛は、そむきはなるろなり。倍は、反對になること。「倍畔」。反は、ひつくりかへることと。「反目」。負は、恩にそむき、徳にそむくをいふ。

そんご 孫呉【名】人名にいふ時は、孫武と、呉起とをいひ、書名にいふ時は、其の著、孫子、呉子をいふ。

そんし 孫支【名】。子孫といふに同じ。詩經大雅「文王卒支百世」の注に、本は宗子、支は庶子なりとあり

そんし 孫子【名】人名。名は武、呉王闔閭に仕ふ。兵家にして、其の著を孫子といひ、十三巻あり。

そんしかん 孫之翰【名】人名。宋の人、名は甫、字は之翰。少くして學を好み、日に數千言を誦す。進士に登り、侍制に進めり。唐史七十五巻の著あり。

そんしん 孫晨【名】人名。字は元公、家貧にして席を織りて業となせり。詩書に明にして京兆の功曹たり。冬月、衣無し。藁一束あるのみ。暮るれば、これに被れ、明くれば、收めたるよし、蒙求に見ゆ。

そんじや 尊者【名】大饗の時に上席する人をいふ。だいきやうを見よ。

そんしゆくがう 孫叔敖【名】人名。戰國時代の楚の名相。初め海濱に居りしが、楚の相王、擧げて令尹とせり。

そんせつ 樽節【名】禮節に同じ。樽は遵、節は法度なり。恒に法度におもむく意にて、禮節を重んずるにいふ。禮記の曲禮に「君子、恭敬、樽節、退讓、以明レ禮」とあり。

そんそ 尊俎【名】尊は酒をうくる器、俎は牲を載する器。後漢書「起二謀於尊俎之間一」。轉じては、國家の調理、即ち、政治をいふ。

そんたく 忖度【名】おもひばかること、おしはかること、推測、推察、などの意。

そんぱう 存亡【名】存すると亡ぶると。「存亡興廢」。又、存の意輕く、亡の後重く、亡に同じ。出師表「危急存亡之秋也」。

そんぷうし 村夫子【名】鄙先生に同じ。田舍の先生、或は學者といふほどの意。

そんぶんけいわう 尊圓法親王【名】青蓮院十七世の門主にして、伏見院第六の皇子。書を世尊寺行房に學び、一家の法を書き出せり。之を御家流といへり。

そめいろざん 蘇迷盧山【名】須彌山に同じ。佛説にいふ山なり。四方の國の中心の山にて、大海の中にあり。その高さ八萬四千由旬にて、日月横にめぐるといふ。

そめどの 染殿【名】むかし、禁中にて染物せし所。

そめばのや 染羽の矢【名】鷲の雪白の矢とて、眞白の羽を、赤くも青くも、色々に染めたる羽を以て、はぎたる矢。

そもじ 其文字【代】對稱の代名詞にして、そなた、其の方、などいふほどの意。婦人間に行はれし語なり。

そもそも 抑【接】事の來由を示して、句を呼び起す語。そもを重ねたるなり。また、これは抑揚の抑にて、おさふともよむ字なり。故に、漢文にては、助辭にも用ふ、また、字典に、發語の辭とも註せり。孟子「抑王興二甲兵一、危二士臣一云々」。但し、發語となる場合にも、接續の意は失はず。

そや 征矢【名】いしうちのそやを見よ。

そや 粗野【名】品格に乏しきをいふ。無骨、卑賤などいふほどの意。

そや 初夜 【名】初夜は、夜の十一時二十分より、十二時四十分に至るまでをいふ。雲圖抄に「初夜自亥二刻至子子二刻、後夜自子三刻至丑刻」とあり。然れども、今普通にいふところは、夕より夜半までの部にして、夜半より朝までを、後夜といへり。

そやう 素養 【名】平素、其の德を養ひ善ふること。漢書の李尊傳に「馬不レ伏レ櫪、不レ可レ以レ趨レ道。士不二素養一、不レ可レ以重レ國」とあり。

そらうそん 蘇老泉 【名】そにゆんを見よ。

そらごと 虛言 【名】いつはりごと。そらばなし。

そらたきもの 空薰物 【名】空燒(ソラタキ)の香をいふ。空燒とは、衣服に附くる爲ならで、香を薰(クユ)らするをいふ。

そらにこゑせぬなみ 空に聲せぬ浪 【句】雲の形の、浪の如きを、形容していへるなり。

そらにしられぬゆき 空に知られぬ雪 【句】古今集「櫻ちる、このしたかげは、寒からで、空にしられぬ、雪ぞふりける」とあるよりとれる詞。

それもさるものにて 其も然るものにて 【句】「其れも尤なることで」といふほどの意。

それさしもあらず 其れ然しも有らず 【句】「それは、さうばかりもなし」との意。

そをうしなふ 措を失ふ 【句】措直(ソヂ)を矢ふなり。爲す所を知らざる狀にいふ。

たあく 太沽 【名】支那の地名。天津の東南、白河の、海にそゝぐ口の南岸にあり。堅固なる砲臺ありしが、明治三十四年、聯合軍に破壞せらる。

たあくう 打狗 【名】臺灣の臺南府の南、十二里の所にある港なり。

だあにい 太泥 【名】今のボルネヲ島なり。北は支那に面し、南はサンダ諸島に、西は馬來半島、及び海峽殖民地に、東はセレベス島に對す。

だい 朶頤 【名】周易頤卦の語。頤は噐、朶は無にて、貪婪にして食を求むる義なり。

だいいうゐん 大猷院 【名】德川三代將軍家光の諡號。

だいいちりう 第一流 【名】第一等に同じ。世說に「劉曰、極進、然故是第二流中人耳。桓曰、第一流復是誰。劉曰、正是我輩耳」とあり。劉は劉眞長、桓は桓溫なり。

だいいんれき 太陰曆 【名】維新の初めまで用ひし曆法。月の盈虧によりて標準を取れり。明治五年太陽曆に改む。

だいえい 題詠 【名】歌など、其の時々につけて、情の動くがまゝに詠み出づるにはあらで、殊更に題を設けて詠むをいふ。

だいおうてい 對鷗亭 【名】東京市淺草區橋場にありし、三條實美の別墅なり。

たいか 大家 【名】富み榮えたる家。禮記「不レ願二千大家一」。また、學藝等にて、名の、世に聞えたる人。

たいか 大廈 【名】大きなる家。

だいかいのいちぞく 大海の一粟 【句】廣大なるものに對する微少なるものをいふ。

たいかう 大行 【名】大いなる行事(シワザ)。又、大行天皇など申すは、天皇の崩御まし〳〵て、未だ、諡號を奉らぬ間の尊稱。

たいかううんどう 對抗運動 【名】敵味方共に、ほゞ對當の兵力にて行ふ演習をいふ。

たいかうは、さいきんをかへりみず 大行不顧細謹 【文】大事を行はむと欲するものは、少しの謹みなどは顧みずして、其の事の成功を計るをいふ。史記「大行不レ顧二細謹一。大禮不レ辭二小讓一」。

たいか、かうろう 大廈、高樓 【名】大きなる家、高き樓をいふ。莊大なる建築物をいふに用ふる語。

だいかく 臺閣 【名】高殿。又、天下の政治をとり行ふ府をいふ。

だいがくれう 大學寮 【名】大寶令の制に、式部省に屬し、

學生を簡試し、釋典の事を掌れり。明經道、紀傳道、明法道、算道の四科あり。別に、また、書學を置けり。明經道は、支那の經書を授け、紀傳道は歴史科、明法道は法律科なり。

たいがだう　大雅堂【名】いけむめい（池無名）を見よ。

たいかのたふれんとするは、いちぼくの、よくささふるところにあらず　大厦の倒れんとするは、一木のよく支ふる所に非ず【文】國家の顚覆せんとする危機に際しては、一人、二人の忠臣の力にては支へ難しとのたとへ。宋書「素粲與二劉秉一謀レ伐二蕭道成一。猪淵知レ之以告二道成一。遂使二載僧靜攻一レ粲。粲謂二其子一曰、本知二一木不一レ能レ支二大厦之崩一。但以二名義一至レ此」。

たいかふ　太閤【名】其の子に、關白の職を讓れる時、その父を指していふ稱。而して其の剃髪したるを禪閤といふ。然るに、其の普通名詞の、殆ど特有のものとなりて、太閤といへば、豊臣秀吉にのみかぎれるが如き稱となれり。

たいき　台記【名】書名。近衛帝の康治元年正月より、久壽二年四月に至る、宇治左大臣賴長が日記なり。いま闕失せる所多し。

たいきばんせい　大器晩成【句】大なる器に容易に出來難きがごとく、大なる人物は、年長じて後、その眞價を顯はすとの意なり。老子「大方無レ偶、大器晩成。大音希レ聲、大象無レ形」と。

たいぎめいぶん　大義名分【句】人の行ふべき大なる義理、および分限をいふ。

たいきやう　大饗【名】大きなる饗宴といふ義。これに、二宮の大饗、大臣の大饗あり。二宮の大饗とは、東宮、中宮、二宮の饗宴にして、正月二日に行はる。大臣の大饗とは、大臣に任ぜられたる人、その翌年正月に、官人を招きて饗應するをいふ。委しくは、各その條を見よ。

たいきよく　太極【名】天地いまだ開けず、混沌として分れざる時をいふ。易經に「有二太極一。是生二兩儀一」とあり。

たいぐうせいりつのぶん　對偶聲律之文【名】對句を取り、韻脚を調へたる文。四六文の如き、此の例なり。

たいくれん　大紅蓮【名】くれんを見よ。

たいくわざん　太華山【名】山の名。支那陝西省にあり。

たいくわい　臺槐【名】三公をいふ。三公は、天の三台星に比し、又、三槐を植うるによりていふ。晉書「史臣曰、晉氏中興、衣冠斯盛英、彦如レ林。或以二雅望一處二三槐一、或以二高名一居二保傅一。自レ非二一時之秀一、亦曷能至二於斯一」。

たいくわん　代官【名】武家時代の役名。地方に在りて、郡代につぐものにて、勘定奉行に屬し、其の支配地内の年貢、公事、人別等を掌る。また、名代といふ意にも用ふることあり。足利時代には、地頭代といへり。

だいけうくわん　大叫喚【名】けうくわんを見よ。

だいげん　太原【名】地名。支那山西太原府太原縣にあり。古の晉陽といひし所なり。

だいけんもん　待賢門【名】平安城の東面の御門にして、陽明門と郁芳門との間にあり。中御門とも稱せり。

たいご　對晤【名】晤は遇なり、對なり。即ち出遭ふことをいふ。詩經「可二與晤語一」。

たいこう　太后【名】天皇の御母后。又、皇太后とも稱す。

たいこう　太公【名】いにしへは、父を太公といへり。

たいこう　帶鉤【名】帶を締むる金物のこと。

だいこう　乃公【名】自らが、みづからを尊びていふ語。

たいこうは、よよたえず　大功は世々絶えず【文】大功田を賜はりしものは、世々世襲せしをいふ。田令に「大功世々不レ絶。上功傳二三世一、中功傳二二世一、下功傳レ子」とあり。こうでんを參照せよ。

だいこく　大黑【名】天竺の神にて、飲食の神として厨に祀る。されば、厨に居る意より、僧の妻をもいへり。

だいごくでん　大極殿【名】朝堂院の正殿にして、即位などの大典を行はせらるる所。朝堂院は、八省院ともいひて、政事を執る中堂なり。拾芥抄「大極殿、朝堂院の正殿の名、八省院是也。又謂二之宗大殿一」。此の殿、古く數度の火災に遇ひ、遂に治承の大火後は、全く亡びたり。其の跡は、今の京都市上京區の西北、朱雀野村楽樂廻、字瓢箪にあり。

たいこもち　太鼓持、幇間【名】（ホウカン）男藝者。男にて宴席に侍し、客の機嫌を取る人。音にて幇間ともいふ。

だいざ　臺座【名】佛像器物など載する臺。

だいさうけい　大早計【名】（ハヤガテン）速了に過ぐる意。莊子「女亦大早計。見レ卵而求二時夜一、見レ彈而求二鴞炙一」。

たいざんにのぼりて、てんかをせうなりとす　泰山に登りて、天下を小なりとす【文】孟子に「孟子曰、孔子登二東山一而小レ魯、登二太山一而小二天下一云云」とあり。其の居る所の高ければ、其の下を見るに、ます〳〵小に、見る所大なれば、すなはち其の小なるものは、觀るに足らざるなりとの意。

たいざんのりうは、ひさしきをつんで、いしをうがつ　泰山溜積レ久穿レ石【文】蘇東坡の詩句「吾聞太山石、積レ久穿二綫溜一」と。溜は、したたり下る水。小さいへども、之をつまば大となるにいへり。

だいじきそう　大食調【名】音樂の調の名。調といふは、歌舞品目に『此の邦にてしらべといふもの、即ち樂調の謂なり。春のしらべ、秋のしらべの調の如し。又、調子ともいふ。

同名異用にして、律呂の名と同じからず。陳氏樂書に「樂有レ歌、歌有レ曲、曲有レ調」といふもの、即ちこのしらべなり。所謂、清調、平調、琴調、側調、宮調、商調の類、皆漢土にも、古くより稱する處なり。唐のときには、俗樂に二十八調ありて、此の邦に傳へしも、皆此の二十八調のうちと見えたり云々』。

だいじん　大人【名】父母にいふ。漢書「王遇二大人益解一」は父を指し、後漢書范滂傳「滂將レ就レ誅、與レ母訣曰、大人割二不レ忍之愛一」とあるは母なり。また、大德の人をいふ。

だいじんのたいきやう　大臣の大饗【名】古實拾要に「大臣の大饗といふは、およそ大臣に任ぜらるる時は、節會を行はれて、大臣に任ぜらるることなり。是を任大臣の節會といふなり。件の新任の大臣の館へ、翌年の正月に、其の節會の時の上首を尊者として、月卿、雲客を招請ありて、饗應を設く。是を大臣の大饗といふなり。左大臣は正月四日、右大臣は五日、これ式日なり。節會の時の上首とは、內辨、外辨を勤めらるる大臣のことなるべし。是を上客として饗應ある義なり」。貞丈雜記に「大臣の大饗といふは、大臣に任ぜられたる人、その祝に、數多の客人を招きて、饗應ぜらるることをいふなり。大饗の二字を、近世、地下の俗語にていへば、大ばんふるまひなり」。なほ、たいきやうを見よ。

だいしんゐん　大審院【名】最高の裁判所にして、その長は、敕任の判事中より、天皇これを補し給ふ。

だいしや　大赦【名】朝廷にて大なる慶弔の事ある時、罪人の罪をゆるさるゝをいふ。

だいしや　臺榭【名】字書に「土高曰レ臺、有レ木曰レ榭」とあり。

だいしやうごく　大相國【名】太政大臣の唐名。

だいじやうゑ　大嘗會【名】おほなめまつりともいふ。天皇即位の初めに新穀を捧げて、天神地祇を祭らせ給ふ大典なり。古くは、大嘗また新嘗ともいひて其の別なかりしが、天武帝以來は、代毎に行はるゝを大嘗とし、年毎に行はるゝを新嘗とせり。其の祭儀は、悠紀、主基の國を卜定し、また、悠紀、主基の祭殿を作り設けて、其の卜定の國より獻れる米穀をもて祭祀を行はせらるるなり。公事根源にも「新嘗祭は云々、今年の初稻を神に奉らせ給ふの義なり。代の初めには大嘗祭といひ、年毎のをば新嘗會とは申すなり」と。

だいしゆ　大守【名】むかし、上野、上總、常陸の三國は、親王を以て國守となす例にして、之を大守と稱したりき。だゞし、其の場合は遙任とて、親王は、任地に赴かせ給はねば、次官たる介が代りて任務を行ひたりき。また、武家時代には、太國の大名をいへり。

だいしゆ　大樹【名】將軍をいふ。後漢書の憲異傳「憲異字公孫、爲二人謙退不一レ伐、諸將論二功異常一、獨屏二樹下一軍中號爲二大樹將軍一」とあるより出づ。

だいしゆ　大衆【名】多くの人。衆多の僧。

だいしゆくりん　戴叔倫【名】人名。字は幼公。晩唐の詩人なり。

だいじよう、せうじよう　大乘小乘【句】佛語にて、教說を、上下の二等に區分して、名づけたるもの。即ち、釋迦が說教するに、凡夫には佛理の悟り難からむことを計りて、かく等級を立てたるに過ぎず。乘とは、人を乘載して涅槃の彼岸に達せしむる道なるよりいふとぞ。

だいしよく　退食【名】朝廷より家に歸りて食ふことにて、休息の義なり。詩經に「退食自レ公」とあり。

だいしよくくわん　大織冠【名】孝德天皇の時より、位につきて授けられし冠の名。織物にて作れり。最上なるは、後の正一位に當れり。中臣鎌足、此の冠を賜りしかば、單に、大織冠といひて、鎌足を指してもいへり。

だいしわせう　代始和鈔【名】書名。一卷あり。又、御代始抄ともいふ。後成恩寺關白一條兼良の著。御讓位、御即位、御禊、行幸、および、大嘗會の儀式典例を記したるもの。

だいせい　胎生【名】人、および獸類の如く、胎內にて、其の父母と同に形となりて生るるものをいふ。卵生に對す。

だいせいぜん　大成殿【名】孔子の廟をいふ。孔子は群聖人の道を集めて、大成せしを以てなり。

だいせいのがく　泰西の學【句】歐羅巴の學問をいふこと。

だいぜん　大漸【名】大に進むこと。事經に「疾大漸惟幾」とあるより、病の劇しく危篤なるにいふ。帝王に用ふ。

だいぜんせかい　大千世界【名】佛說に、須彌世界の一世界を二十世界といひ、一千世界を千合せて中千世界、中千世界を千合せて大千世界といふ。

だいぜん　退然【副、形】和柔なるさまをいふ。禮記檀弓に「其中退然如レ不レ勝レ衣」。

だいそう　大宗【名】主要、主眼といふに同じ。

だいたい　大憨【名】憨は惡なり。大に惡むべき者の義。尙書「元惡大憨、矧惟不孝不友」とあり。

だいだいりづかうしよう　大內裏圖考證【名】書名。四十八卷あり。裏松固禪の著。京都の各町の道幅などより、大內裏各部の位置、構造、沿革、制規等を、圖をも揭げて、詳細に列記したるものなり。著者は明和頃の人。今は、古實叢書中に收められたり。

だいたう　大纛【名】羽毛にて作れる旗なり。また、軍中の大旗。前漢高帝記に「黃屋左纛、注曰、纛毛羽幢也。在二乘輿車衡左方一。蔡邕曰、以二犛牛尾一爲レ之、如レ斗。應邵曰、雉尾爲

レ之」とあり。轉じて、天子の軍營をもいへり。

だいたう 大唐 【名】唐をいふ。たゞ、支那といふ意にもいふ。

たいたう 駘蕩 【副、形】廣大なる貌、また、春ののどやかなるをもいふ。謝朓の詩句「春物正駘蕩」。

だいたふのみや 大塔宮 【名】護良親王を申す。

だいたのはな 大地の鼻 【名】地名、紀伊國東牟婁郡大地村の東端、また、室の崎ともいふ。

だいぢやうぶ 大丈夫 【名】男子のこと。ぢやうぶを見よ。

たいてい 台鼎 【名】太政大臣、左右大臣の三公をいふ。前漢書に、三公を三台星に比して三台といへり。また、鼎の足の三本なるにもたとふ。故に、合せて台鼎といふなり。

たいてん 退轉 【名】佛語。佛道を修むることを疎にして、心の、他の物に奪はるるをいふ。然らざるを不退轉といふ。

たいと 泰斗 【名】泰山、北斗なり。泰は山の名、斗は北斗星の義。何れも、世の人の仰ぐ所なれば、「文學の泰斗」などいひて、斯道の首領の義に用ふ。宋の景文公の韓愈の贊に「愈以二六經之文一爲二諸儒倡一學者仰レ之、如二泰山北斗一」とあり。

だいとう 大統 【名】天子の繼嗣のこと。後漢書「皇后之子宜レ承二大統一」。

だいどう 大同 【名】地名。秦に雲中を掛し、漢に平城といひて、高祖の匈奴に圍まれし所。今の山西省大同府なり。

だいどうこう 大同江 【名】朝鮮平安道の東端を發し、平壤府を過ぎて、大同灣に落つる河なり。

だいとこ 大德 【名】だいとくともいふ。僧の德の高きものをさす。又單に、僧といふ意にも用ひらる。

たいなん 臺南 【名】臺灣の地名。臺灣島の西南隅にあり。臺南縣廳のありし地。臺灣島中、臺北につぎて、最繁華の都會なり。

だいにほんし 大日本史 【名】書名。水戸光圀の編纂にして、神武帝より、後小松帝に至るまでの漢文の歷史なり。本紀、および、公武諸臣の列傳あり。

たいにんす 體認す 【動サ變】のみこむ、其の心を心さす、其の意味をよくのみこむ、などの意。

たいのや 對の屋 【名】中古の家造りにある家にて、寢殿と相對して、別に造りたる離座敷をいふ。其の寢殿より東にあるをば、東の對（ダイ）といひ、西にあるをば西の對といふ。さて、寢殿との交通は、廊を架け渡したり。

たいはく 太白 【名】星の名。金星の異名。太陽より、水星を隔てて第二位にあり。太陽を一周する日數は、二百二十五日なり。明の明星（アケノミヤウジヤウ）、宵の明星といふもこれなり。日の出入の前後に、他の星よりも、鮮に光る故にいふ。

だいばんどころ 臺盤所、大盤所 【名】食物を調理する所をいふ。臺所といふに同じ。轉じては、公卿だち一家の妻をもいふ。

だいばんぷ 大藩府 【名】唐の時の官衙の名。諸道の節度使、觀察使、團練使、防禦使等を掌る。

だいはんにや 大般若 【名】經文の名。六百卷あり。唐の玄奘三藏の飜譯せるものなり。

たいび 大尾 【名】終結なり。文章、小說などの最終をいふ。

たいふ 大府 【名】幕府のこと。また、尊稱語に用ひて、一官衙の長官などをいひ、大名などにもいへり。

たいふ 太傅 【名】支那の官名。三公の一。三公とは太師、太傅、太保をいふ。傅は輔佐なり。又、少傅といふもあり。これは三孤の一にて、三孤とは、少師、少傅、少保なり。

たいふ 大夫 【名】廣く五位をいふ稱。されば、無官の大夫といへば、官はなくして五位なる人をいふ。貞丈雜記「大夫を清（スガ）みていふと、濁りていふとに差別あり。左京大夫、修理大夫、大膳大夫、皇太后宮大夫などのときは、だいぶと濁りてよむなり。たいふと清みていふ時は、五位のことなり。云々。義經は、左衛門尉にて、掃部違使の判官を兼れて五位に叙せられたる故、大夫判官といひしなり云々。

たいふ 大父 【名】祖父をいふ。

だいふうおこりて、くも、ひやうす 大風起りて雲飛揚す 【文】漢の高祖の詩に「大風起兮雲飛揚。威加二四海一兮歸二故鄉一。安得二猛士一兮守二四方一」とあり。

たいへいき 大幣旗 【名】おほぬさのはたともよむ。昔は、天皇即位の時、紫宸殿前に銅烏幢をたてたりしを、明治の時は、大榊に絹を垂れ、鏡、劍、璽をつけたるを立てられたり。即ち、大幣旗なり。これ古制なり。

たいへいき 太平記 【名】書名。四十一卷あり。花園天皇の文保二年より、凡五十年間、後村上天皇の正平二十二年までの戰亂の狀を記したる軍記なり。著者詳ならず。或はいふ、小島法師の作なりと。

たいへいのくわ 太平の化 【句】泰平の政治といふ意。化は、王化の義。

たいへいやうのなみをわけしこじん 太平洋の濤をわけし古人 【句】四曆一五二〇年、西班牙人マゼラン、世界一周を企つ。太平洋とは、このとき、この人の命じたる名なり。されば、古人とはマゼランを指す。

たいへき 大辟 【名】大罪なり。書經「大辟之罰、其屬二百」。

たいほ 太保 【名】支那の官名。だいふ（太傅）を見よ。

たいほ 逮捕 【名】罪人を召し捕ること。

たいま 大麻 【名】おほぬさ。幣（ヌサ）をほめていふ語。幣とは、神

に奉るもの、および、神社より出す祓の物をもいふ。「太神宮の大麻」など。

たいまつ 纏松、焚松、松明【名】燒松（タキマツ）の音便。松の脂の多き部分を束ねて、火を點するやうにしたるもの。かがりともいふ。

だいみん 大明【名】みんを見よ。

だいみんせいそぶんくわうてい 大明世祖文皇帝【名】明の太宗をいふ。

だいみやう 大名【名】鎌倉時代に至りて、名田を多く所有せる者を大名、少し領せるものを小名といへり。徳川時代には、一万石以上を大名と稱して、小名の稱なし。されども、領地の多少によりて、猶、諸侯をさして、大名小名ともいへり。

だいもん 第門【名】屋敷の門をいふ。第は屋敷なり。漢書の注に「有二甲乙次第一故曰レ第也」とあり。

だいもん 大紋【名】布製の直垂。家紋を大きく染め出だし、五つ紋にて、下には長袴を着す。武家時代の正服。

だいゆうじ 大融寺【名】大阪市天満にあり。桂木山と號す。眞言宗にして、源融の創建といふ。

だいらう 大牢【名】支那の天子が、社稷を祭る時に用ふる牛をいふ。諸侯は、小牢といひて羊を用ふ。轉じては、美味の意にも云ふ。文選、王褒の聖主得賢臣頌に「羹（アカザブンギ）藜含レ糗（ヒルギノ）、藿（アヲバ）煮二葵（アフヒ）羹一、蔬（ナ）食菜羹（ナノアツモノ）、以當二肥牛之大牢一」。

だいりせき 大理石【名】石灰質の礦物にして、磨けば光澤あり。色は、白きも、斑文あるもあり。

だいりよ 大呂【名】十二月の異名。又、大呂は、九鼎と共に周室の寶器にて、重量甚だ重し。よりて、世間に於ける地位の重きに例へいふ。史「毛先生一至レ楚使二趙重一九鼎大呂一」。

だいをそらす 凝レ黛【句】黛は代、ヲエズミと訓じ、眉毛を剃りて、別に、墨にて眉毛の形に畫き代ふるもの。其の色濃厚にして光あり。之を山の色などに見立てたるもの。凝は、其の色の濃きなり。

たう 唐【名】隋を亡して建ちし支那の國號なり。高祖李淵より哀帝に至るまで二十世、二百九十年にして梁に亡さる。また、支那を單に唐ともいへり。

たう 黨【名】組合、仲間、などの意。武家時代に、渡邊黨、松浦黨など、武士の團體をいふ稱なりき。

たう 淖【名】水泥なり。泥深き處、沼の類。

たう 塘雨【名】人名。姓は五井、また、百井ともいふ。京都の俳人にして、諸國を遍歴して其の見聞を記し、笈埃隨筆十二卷を著す。文化年間の人。

たうえう 蕩搖【名】うごきゆれること。波などの動搖するにいふ。

たうおん 唐音【名】がんおんを見よ。

たうか 踏歌【名】古、禁中にて行はれし正月の公事。十五日に男の踏歌、十六日に女の踏歌ありて歌舞をしたり。

たうかうかくん 桃岡家訓【名】書名。八田知紀の書きたる家訓にて、桃岡は、知紀の號なり。

たうき 陶器【名】我が國の陶器の工は、上古に土部（ハニシベ）の民ありて、埴を取りて、人馬、および、種々の形を造ることを業とし、出雲國、最も著名なりき。雄畧帝の朝に新漢（イマキノアヤ）來りて、多く之を造る。旋盤を用ふること、蓋し此の頃よりならむかといへり。

たうきうらく 打毬樂【名】舞樂の名。龍鳴抄に「たうきうらくといふべし。拍子十、七反すべし。舞人四人、左の競馬（クラベウマ）の裝束に似たり。太刀を持ちたり、玉あり云々」と見え、其の服裝は、歌舞品目に「打毬樂、冠巻纓、袍紅、襴襠、袴、腰帯、毬打、玉」とあり。而して舞樂に用ふる袍は闕腋なり。玉は毬子にして木にて造り、五彩を施す。毬打は毬杖ともいひて、玉を打つ木なり。

たうきよ 刀鋸【名】刑の名。漢書刑法志「中刑用二刀鋸一」の注に、刀は割刑、鋸は剕刑なりとあり。剕は耳を切るなり。

たうぐのくわ 唐虞化【句】唐は堯、虞は舜にて、その世の中のやうに、政治の滿足なるをいふ。

たうくわ 陶化【名】陶冶と同じ。敎化なり。

たうくわい 韜晦【名】自ら愚なる風をなして、世にかくれ、あとをくらますこと。

たうくわくのつみ 湯鑊罪【句】鼎鑊の中にて煮らるるほどの罪。史記「須賈頓首言二首罪一曰、賈有二湯鑊之罪一。請屏二於胡貉之地一」。また、湯鑊之誅ともいふ。

たうけい 刀圭【名】醫術。または醫家をいふ。刀圭とは、もと藥を盛る匙をいふ稱。

たうげ 峠【名】手向の音便。阪路の頂上。又、俗に、果、極の義に用ふ。

だうけ 道化【名】戯を行ひ、人をして笑はしむること。おどけ。滑稽。

たうげん 讜言【名】正言なり。文選「讜言弘説」。

たうげん 桃源【名】支那の武陵の桃源とて、隱逸の仙境を以て名高し。陶潜の桃花源記に「晋の太元中、武陵人捕レ魚爲レ業、緣レ溪行。忽逢二桃花林一。林盡水源得二一山一。有二小口一、從レ口入行數十歩、豁然開朗。其間男女怡然自樂。見二漁夫一大驚自云、先世避二秦亂一來絶レ境。問二今何世一。乃不レ知レ有レ漢。無

レ論二魏晉一。漁人辭去詣二大守一說。即遣レ人隨往、竟迷不レ得レ路。とあり。

たうげん 道元 【名】禪僧なり。公家久我氏に生れ、幼にして神童の稱あり。八歲にして母を失ひて厭世の志あり。遂に叡山に入る。貞應二年、宋に行きて曹洞宗を究め、安貞元年歸朝して、京の建仁寺に住す。寛元二年、波多野義重、越前に永平寺を建て、聘して開祖となす。後深草帝の建長五年八月寂す。年五十四。

たうご 套語 【名】通り言葉。古くさい語、などの意にいふ。

たうざ 當座 【名】其の座にさし當りてのこと。席上、座上などいふほどの意。また、歌の雜題に對して、歌會の席上にて、題を出して詠み出づるを當座といへり。また、當分の間などもいふほどの意にもいへり。

たうさん 唐山 【名】支那をおほよそにいふ語。

たうし 島司 【名】島嶼の長官をいふ。郡長に相當す。

たうしふ 踏襲 【名】あとを其の通りにうけつぐをいふ。金史「不二踏二襲前人一」。

たうじやう 堂上 【名】殿上人をいふ。即ち四位五位の人。堂上家ともいふ。後世は、廣く公家の義にもいへり。

たうじやく 瞳若 【副、形】目を見張つてあきれたる狀にいふ語。莊子に「夫子奔軼絕塵而回、瞠二若乎後一」とあり。瞠は直視也と字書に見ゆ。

たうしやべうたふ 堂舍、廟塔 【名】堂舍は佛堂寺院をいひ、廟は祖先のたまや。塔は佛を安置して崇敬する所。

たうしゆのさみ 陶朱の富 【句】陶朱は范蠡なり。范蠡、越を去りて陶に行きて、朱公と呼び、富巨萬を致せり。されば、漢の猗頓と並べて、貿遷の過秦論にも「陶朱猗頓之富」といへり。史記に傳あり。

たうぜん 陶然 【副、形】樂しき體の形容にいふ。「陶然として醉ふ」などは副詞なり。

だうそじん 道祖神 【名】我が國にては、さへのかみ、また久那斗神ともいふ。路傍に祠ありて、ダウロクジン（道陸神）と稱するもの、即ちダウソジンの訛なり。旅の無事安全を祈る、道の神なり。

たうた 陶汰 【名】適良なるものを存して、否らざるものを排除するをいふ。なほ、沙汰、淘濯などいふが如し。後漢書「陶二汰學者之累惑一」。

たうたう 丁丁 【副、形】木を伐る聲。木を伐る音の反響。詩經「伐レ木丁丁」。

だうだう 堂堂 【名、副、形】盛なるをいふ。史記「以二楚國堂堂之大一、何求不レ得」。「正正堂堂」。

だうだう 踔踔 【副、形】かまびすしく、無用の言を並ぶるをいふ。韓退之の文「踔踔以害其生」。

たうたう 滔滔 【副、形】水の滿ちたたひて、盛に流るる狀にいふ。「河水滔々として流る」など。また、辯舌の流暢なる形容にいふ。「滔々と辯ず」など。また、一般に廣きを形容していふ。「滔々たる天下」など。

だうだうのちん 堂堂の陣 【句】盛にして、よく整ひたる陣。孫子「無二邀正々之旗一、勿二擊堂々之陣一、此治レ變也」。

だうたふ 韜藉 【名】鐘鼓の聲。また、怒濤の聲を形容するにいふ。

たうちう 陶鑄 【名】德を以て化すること。陶器を作り、金屬を鑄るが如きをいふ。北史「陶鑄蒼生」。

だうつ 攤打つ 【文】攤は錢を賭けてする遊び。其の遊びをするを打つといふ。

たうとつ 突唐 【名】抵觸に同じ。李白の詩「鯨鯢唐突留餘迹」。また、不意、突然の義。

だうはす 道破 【動サ變】言ひやぶるをいふ。

たうひう 唐彪 【名】人名。清の金華の人。字は翼修。讀書作文譜の著あり。

たうひつ 刀筆 【名】官吏をいふ。いにしへ、簡牘を用ひ、刀を以て刻せり。故に、吏は皆刀錐を携へて出勤せしによりての稱。戰國策「臣少爲二刀筆一」。

たうぶ 給 【動ハ四】たぶの音便。「出てたうぶ」一條せたうぶ」など。

だうぶく 道服 【名】衣に塵のかかるを避けんが爲に著るもの。今日の羽織は、即ち、その遺制なり。

たうぶのばつ 湯武の放伐 【句】湯武とは、支那の、殷の成湯と、周の武王とをいふ。放伐とは、成湯は、夏の桀王の暴虐を見て、諸侯より起りて仁政を施し、民心を收め、遂に夏に入りて、その兵を破り、桀を南巢に放ちて、帝位に就き、武王は、文王の子なるが、殷の紂王の暴虐を悉み、討ち滅ぼしてこれに代れり。これを湯武の放伐といふ。いんたうかだいにとらはる參照。

たうま、ちくる 稻麻竹葦 【句】麻も稻も竹も葦も密生する者なれば、物の繁く入り亂れたる形容にいふ。

だうん 朶雲 【名】他人の書簡をいふ語。事類全書に「唐韋陟常以二五采牋一爲二書記一、使二侍妾主一之。其牋答受意而已。皆有二楷法一、陟唯署レ名。自謂所レ書陟字若二五朶雲一、時人慕之。號二郗公五雲體一」とあり。

たうめ 專、專女 【名】たくめともんふ。老女。老婦。老いたる狐の、わが妻を「たうめ」などいへることもあれど、これも、なほ老婦の意にて、狐の稱にはあらず。

たうもろこし 玉蜀黍 【名】唐土黍に同じ。黍の一種。

たうらう 蟷螂 【名】かまきりともいふ虫なり。六足ありて、上の二足は長大にして鎌の如く、之を以て、蝿、蟲、蜻蛉などを取り食ふ。「蟷螂の斧」などいへり。說苑に「吳王欲レ伐レ荊。有二諫者一死。舍人少孺子、懷レ丸操二彈於後園一露沾レ衣。王怪レ之。對曰、園有レ榆、上有レ蟬。蟬高居悲鳴飲レ露、不レ知二蟷蜋在一レ其後一、蟷螂之捕レ蟬、而不レ知二黃雀在一レ其後一、臣執二彈丸一欲レ取二黃雀一、不レ覺二露沾一レ衣。如レ此、皆務欲レ得二於前一、不レ顧二於後患一、吳乃罷」とあり。

たうりものいはざれども、しも、おのづからこみちをなす 桃李不レ言、下自成レ蹊 【文】桃李は、其の華實の故を以て、人を呼ばざれども、人爭ひてこれに赴き、來往して絶えず。遂に、其の下、一の徑路をなすに至るとの意にて、人の德あるものは、敢て辯舌を弄せざれども、人の、おのづから歸服するに喩へたるなり。史記の李廣傳に出でたり。

たうりものいはず 桃李物言はず 【文】人死して、物の空しく殘れるを悲む意。徒然草に「かはらぬすみかは、又改りぬ。桃李もの言はねば、誰と共にか昔を語らむ」。又菅原文時が詩の句「桃李不言幾暮。烟霞無跡昔誰栖」。なほ、前條參照。

たうりやく 韜略 【名】六韜、三略の略なり。兵書の名。よりて、兵法のことにいふ。

たうるんめい 陶淵月 【名】名は潛、晉の潯陽の人。嘗て五柳世生の傳を作りて自ら准ふ。劉宋の元嘉中卒す。世に清節先生と稱せらる。

たが 箍 【名】音コ。竹をそぎて、丸く束ねて、桶などを、しめ固むるため、その外側にはむるもの。

たかきやにのぼりてみれば、高き屋に登りて見れば煙たつ民の竈は賑はひにけり 【歌】和漢朗詠集にも、新古今集にも、仁德天皇の御製として出せり。然るに、日本紀竟宴和歌集に、藤原時平が、大鷦鷯尊(仁德天皇といふ)を題にてよめる歌に、「高殿に、登りて見れば、天の下、四方に煙りて今ぞ富みぬる」とあり。御製とあるは、恐くは誤なるべし。

たかきやも、ふもとのちりひぢよりなりて 高き山も、麓の塵ひぢよりなりて 【句】とほきところも、いでたつあしもとよりはじまりてを見よ。

たかくらのみや 高倉宮 【名】以仁王をいふ。また、三條宮とも稱せり。

たかさき 高崎 【名】地名。上野國前橋の西南三里にあり。中仙道の要路に當り、人口二萬五千。歩兵第十五聯隊この地に屯す。東京より汽車三時三十五分程にして達す。

たかさき まさかぜ 高崎正風 【名】薩鹿兒島藩士。維新の功を以て男爵を授けらる。現に樞密顧問官、御歌所長官たり。

たかさご 高砂 【名】播州印南郡の海岸にある地名にして、松の名所なり。加古川の河口にあり。

たかさごじま 高砂島 【句】今の臺灣島にて、古くより、この名あり。

たかさごのをのへ 高砂尾上 【句】ただ山の峯の上といふ意。高砂は播磨に限るべからず。いづこにても山をいふなり。古歌に多くよめるは、皆只、山の意。古今集の序なる「高砂」は、「住吉」と對したれば、特稱の名詞にて、播磨なるべし。されど、播磨なるは、山といふほどの處にあらず。然るに、今、同處に高砂町、尾上村などの名稱あるは、古歌を誤解してつけたるものなるべし。

たかしこ 竹尻籠 【名】竹にて、作りたる尻籠なり。尻籠は簏と同じく、矢を入れて荷ふものなり。

たかじやう 多賀城 【名】聖武帝の時、大野東人、按察使兼鎭守將軍となり、蝦夷鎭撫として多賀城に駐れり。これ陸前宮城郡多賀城村なり。今も、宇市川に城趾を存せり。其の城門に碑を題て、四境の遠近を示したるものあり。之を多賀城の碑といふ。今より千百餘年の昔にして、見雲眞人の筆と傳へたり。

たかせぶね 高瀨舟 【名】川船の一種にして、淺瀨といへども、よく上下するもの。

たかたともきよ 高田與清 【名】字は文儒、通稱將曹、また、外記、松屋と號す。武藏多摩郡小山田村の人。よりて又、小山田與清ともいふ。村田春海の門人にして、有名なる考證家なり。弘化四年歿す、年六十五。其の著五十餘種の中、八州文藻、十六夜日記幾月抄、鹿島日記、但馬日記、松屋叢考、積德叢談等、有名なるものなり。

たかたや かへゑ 高田屋嘉兵衞 【名】氏を以て屋號とせり。其の先孫八郎といふは、尾張の人にして、永祿中淡路に遷り住めり。嘉兵衞は、其の數世の孫、彌吉の男なり。嘉兵衞兵庫に行き、拮据產を治めて、巨船を造り、松前より擇捉に通商貿易し、遂に露領に至る。文政十年歿す、年五十九。容貌小なれども、眼光人を射、學識なしといへども、大義には通じたりきといへり。

たかちほのたけ 高千穗嶽 【名】九州の南部なる薩摩、大隅、日向に境を交へたる山岳の汎稱なり。神代の時、天孫此の峯に降臨し給ふと傳へたり。然れども、其の地點は今知るべからず。

たかつき 高坏 【名】坏とは、土器にて食物を盛る具なり。其の腰の高きを高坏といふ。今は、木にてつくり漆をぬれる

なども あり。

たかの　鷹野【名】鷹狩に同じ。鷹をよく馴らし、野に出でて之を放ちて、鳥を捕らするをいふ。

たかの　ちやうえい　高野長英【名】瑞皐と號す。蘭醫なり。陸奥膽澤郡の人。後藤實仁の三子にして、叔父高野玄齋に養はる。江戸に出で、また長崎に遊びてシイボルトに學べり。戸塚靜海、伊藤圭介等と同門たり。天保元年江戸に門戸を張る。時に年二十七。九年、英船來航の說あるに及びて、鄙舌小言、愼機論を著し、また、夢物語を著して攘夷を非とし、幕議にふれて獄に下さる。のち脫獄し容貌を變へて、人目をさけしかども、嘉永三年十月、遂に捕卒に襲はれ、青山の私第に自頸して死せり。年四十七。

たかのてんわう　高野天皇【名】孝謙天皇を申す。御陵を高野陵といふが故なり。

たかはし　すきを　高橋鋤郎【名】米國文學士たり。現今の人。實業秘訣、商人百話等の著あり。

たかはし　とうかう　高橋東岡【名】名は至時、通稱佐左衛門。また梅軒と號す。曆學に長じ、嘗て古今を參酌して、新に曆を作れり。寛政曆これなり。文化元年正月歿す。年四十一。

たかはしのむらじ　むしまろ　高橋連蟲麻呂【名】萬葉集の歌人なり。傳、詳ならず。其の詠歌「千萬の、いくさなりとも、言擧せず、取りて來ぬべき、をのことぞ思ふ」といへるは、身は、百萬の軍勢にても、手取にすべき男と、我は思ふとの意。言擧は、詞にあらはして論ずるなり。日重くして、行の疾き意なり。

たかひも　高紐【名】鎧に附きたる緒の名。鎧の左右の肩にあたる所を綰上といひ、其の綰上のうへに高紐あり。胸板の相引の緒と結びて、前後の鎧をつなげて肩にたもたす。即ち、胴釣りの紐なり。

たかまつじやう　高松城【名】讃岐高松市の高松城は、豐臣氏の時、生駒親王この地に封ぜられて、今の地に築き、德川氏のとき、寛永十一年、賴重封ぜられて以來、松平氏世襲して、十二萬石を領せり。また、備中國吉備郡高松村高松の高松城は、天正十年五月、豐臣秀吉、毛利輝元の將清水宗治をここに圍み、足守川の水を灌ぎて陷れたる城にして、「高松城の水ぜめ」とて世に名高きは、この城なり。

たかまつでん　高松殿【名】後白河天皇の御座所なり。拾芥抄に「西洞院東、姉小路北」とあり。近衞帝の久安四年、內裏燒亡せるによりて、高松殿を假皇居にあてさせらる。保元の亂の開戰せらるる頃には、後白河帝は、東三條院に移り給ひしなり。

たかまつどの　高松殿【名】前に同じ。

たがみがは　田上川【名】たなかみがはと古くいへり。近江栗田郡にあり。宇治川の上流。

たかみくら　高御座【名】天皇御即位の時、着座し給ふ御座なり。臺は角なれども、おはしやす所は八角にして、屋蓋に大鳳の形あり。破風の八角にも、又小鳳形を安す。三方に階ありて南方にはなし。周圍に紫帳を懸く。全體黑塗にして欄干は朱なり。安永御即位調度圖にその圖いでたり。又、この詞は、つれにただ天子の御位の意にもいへり。

たかをでら　高雄寺【名】山城國高雄山の神護寺なり。和氣清麿の創建。

たかをやま　高雄山【名】山城國葛野郡梅が畑村にあり。和氣清麿を祀れる護王神社（別格官幣社）あり。和氣清麿の草創なりといふ神護寺あり。また、楓葉を以て名高く、栂尾、槇尾と並びて、三尾山の稱あり。

たきぐち　瀧口【名】禁中警備の職にして、事に堪へたる武士を以て補す。寬平年中より始まる。清涼殿の東北なる御溝（ミカハ）水の落つる處に役所ありて、此に伺候するを以てこの稱あり。

たきざはばきん　瀧澤馬琴【名】名は解、翁髮して篤民といへり。また、著作堂、曲亭、蓑笠隱士などの號あり。江戸の小說家なり。其の著多きなかにも、八犬傳、弓張月、最も名高し。嘉永元年十一月歿す。年八十二。

たきつ　瀧、滾【動タ四】水の沸き上がる、逆巻くなどにいふ。心の苛立つにもいふは、譬へたるなり。

たきどの　瀧殿【名】瀧のもとに造り設けたる家。今昔物語なる、百濟の河成が石を建てたりといふ瀧殿は、京都嵯峨の大覺寺の瀧殿なり。後拾遺集に赤染衞門「大覺寺の瀧殿を見て詠じ侍りける、あせにけり、今だにかかる、瀧つ瀨を、早くぞ、人は見ろべかりける」。

たきのしらいと　瀧の白糸【句】瀧を形容したる語。落つる水の白糸の如く見ゆればなり。古今集「清瀧の、瀨々の白糸、繰りためて、山分ごろも、織りて着ましを」。

たきく　倬詭【名】倬は著なり。大なり。詭は怪なり。譎也。勝れて異なる意。タッキとよぶ。

たきくよ　謫居【名】謫は罪なり。罰なり。罪に罰せられて、島流などにせられて居るをいふ。タッキヨとよぶ。

たぐち　うきち　田口卯吉【名】東京の人。經濟雜誌社を起し、史學、經濟等に關する編著、甚だ多し。現に東京に住し、法學博士たり。

たくはつ　托鉢【名】僧の、鉢を手にして、人家に米錢を乞ふをいふ。

たくばつし 拓跋氏 【名】支那の北俗、「謂レ土爲レ拓、謂レ跋爲レ跋。故以爲レ氏」といへり。五胡十六國の時の北朝の魏の姓なり。

たくま ためうぢ 宅磨爲氏 【名】畫家宅磨氏の祖なり。姓は藤原、巨勢弘高と名を齊うす。永延年中の人。

たくま ためなり 宅磨爲成 【名】藤原氏にして、爲氏の子。長曆年中の人、繪所の長となる。巨勢弘高と共に、世に其の名高し。

たくみ 工匠 【名】大工をいふ。延喜式に、内匠寮ありて、工匠のことを掌れり。

たくらく 卓犖 【名】超絶せるをいふ。物に拘らぬ意。

たくゑつ 卓越 【名】他にぬけ出でて勝れたるをいふ。

たけかは ほふげん 武川法眼 【名】名は幸順、字は建德、南山と號す。京都の醫者にして、小兒科の名家と稱せられ、法眼に叙せられ。安永九年歿す。年五十六。

たけぞへ せいせい 竹添井井 【名】名は進一郎、熊本の人。曾て朝鮮辨理公使、文科大學教授などに任ぜられたりしが、今は閑地に在り。

たけだ いづも 竹田出雲 【名】名は清定、初代竹田出雲の子、千前軒と號す。淨瑠璃作者なり。寶曆六年十月歿す。年六十六。

たけだ たつより 武田勝頼 【名】甲斐の武田晴信入道信玄の子なり。便佞を愛して宿將に離れ、天正十年、織田德川の兵に攻められて、天目山に自殺す。年三十七。

たけだのはら 竹田の原 【名】地名。いまも、山城國紀伊郡に竹田村の地名殘れり。

たけつのみのみこと 建津之身命 【名】天太玉命（アメノフトダマノ）の御子にして、產靈神（ムスビノ）の御孫なり。神武天皇東征の時八咫烏となりて、皇師の嚮導をせられし神。

たけどもたけども 【句】手繰れども〳〵。しきりに、繰るやうに力を入れて、舟を漕げども〳〵。

たけとりものがたり 竹取物語 【名】書名。二卷あり。竹取の翁といふもの、竹の中より一美女を得てこれを養ひ、家甚だ繁榮したりしが、その美女、つひに上天せしことを記したる小說なり。作者詳ならず。醍醐帝の延喜より、四五十年前の作ならむといへり。

たけなか しげはる 竹中重治 【名】通稱半兵衛、美濃の人。深沈にして智略に富み、世人、楠正成に比す。天正七年六月沒す。年三十六。

たけこし よさぶらう 竹越與三郎 【名】新潟縣の人。同人社、慶應義塾に學び、又米人モルフオルト氏に就きて、英語佛語を學べり。曾て大阪公論社の編輯に從事し、後、民友社の記者となり、轉いで時事新報社に入る。卅一年文部大臣秘書官にて、勅任參事官を兼ね、幾何もなく、これを辭したり。今、開拓社々長にて、なほ、操觚に從事す。その著書中二千五百年史、新日本等、最も聞えたり。

たけのさをに、ねがひのいとをかく 竹竿懸願絲 【文】白樂天詩に云く、「憶得少年長乞巧。竿頭上懸願絲多」と。荊楚歲時記に「七夕女人結二綵縷一、穿二七孔一、針或以二金銀鍮一、不レ爲レ針、陳二瓜果於庭中一以乞レ巧。有二蟢子一羅二於瓜果上一則以爲レ得レ巧」とあり。七夕祭に行ふことなり。たなばた參照。

たけのそのふ 竹の園生 【名】支那の梁の孝王といふ王子の、竹園に居りし故事によりて、帝の御子を竹園といふ。月濟集「くれたけの、園よりうつる、春の宮、かれても千代の、色は見えにき」。

たけのした 竹下 【名】地名。駿河國駿東郡にあり。足柄山の西麓。

たけのみなと 竹の水門 【名】地名。陸奥國にあり。陸奥郡考を見るに、竹の濱、竹の浦ありて、竹の水門は、即ち其の竹の濱、竹の浦をいへるなるべく、其の地は、金華山の邊なりといへり。

たけのみをはごとり 竹の實を食ひ鳥 【句】鳳凰をいふ。鳳凰は梧桐に非れば棲まず、竹實にあらざれば食はずといふ。夫木集「百數や、桐の梢に、すむ鳥の、千年は竹の、色もかはらじ」。

たけばかり 長ばかり 【句】居長（キタケ）ほど。身の丈ほど。

たけばし 竹橋 【名】江戸城、即ち、今の皇城の東にありて、文部省の前に出づる橋をいふ。

たけぶるひ 竹篩 【名】竹の篩。篩とは振りて、米穀、粉などの、細きと粗きとを漉し分くる具なり。曲物の底に、金網、布などを張りて造れるもの。

たけべ せいあん 建部清庵 【名】名は由正、字は元策、奥州一の關侯田村氏の侍醫。寶曆（德川十代家治）頃の人。建部。タテベとよむものあれどいかが。今もタケベとよべり。

たけみかづちのかみ 武甕槌神、健御雷神 【名】又の名を健布都神、豊布都神と申す。常陸國鹿島神社に祀れる神これなり。今、官幣大社なり。

たけみなかたとみのかみ 健御名方刀美神 【名】健御名方神ともいふ。大國主神の御子。信州諏訪神社に祀れる神これなり。いま、國幣中社。

たけもと 竹本 【名】義太夫節の一家なり。ぎだいふぶしを見よ。

たけやのわたし 竹屋の渡 【名】東京市淺草區聖天町待乳山の下にある渡船場。向島の堤、牛の御前の前岸に至る間を

往復す。

たこ 檜桶 【名】俗にタンゴといふ。木にて桶の如く造り、縄をつけて天秤にて擔ふもの。水や肥料などを入るゝ具。

たこ 田子 【名】田におり立ちて耕作する人。農夫。

たこし 田輿、腰輿 【名】手にて舁く輿。

たこのうら 田子の浦 【名】駿河國富士郡田子浦村の海濱。北、富士山を仰ぎ、西、三保の松原を望、山海の景趣、甚佳なり。

だざい しゆんたい 太宰春臺 【名】名は純、字は德夫。紫芝園と號せり。信州の人、物徂徠の門人なり。延享四年五月歿せり。年六十八。父は言辰といひ、柏樹園と號せり。本姓平出氏にして、太宰諫爺の嗣となる。

だざいのごんのそつ 太宰の權帥 【名】太宰府の次官なり。帥、中古ソチ(ナゴン)といへり。大中納言以上の人、これに任ぜらる。大臣左遷の時、この官に任ぜらる。菅公など、此例なり。

だざいふ 太宰府 【名】筑前國筑紫郡水城村、大字觀世音寺に其の址あり。九州は外國に近ければ、其の來寇に備へむがために置かれたるものにて、其の創置詳ならざれども、欽明帝のとき筑紫に之を置き、天平十五年鎭西府となし、十七年、又太宰府を置きて、爾來隆替あり。大寶令の制に、帥、貳(大小)、典(大小)の四部官あり。然して權帥は、令外の官なり。

だじやう 太政官 【名】また、ダイジヤウクワンともいへり。全國の政治を總轄する役所。職原抄に「當官、統八省及諸國。天下事、悉決二此官一」とあり。即ち、今の內閣なり。

だじやうだいじんは いちじんにしはんとして 太政大臣は、一人に師範として、四海に儀形たり 【文】太政大臣ダイジヤウダイジンとよむを正しとす。そくけつのくわんを見よ。

だじやうてんわう 太上天皇 【名】太上皇といひ、また略して、上皇ともいふ。讓位の後に奉る尊號なり。おりゐの帝(ミカド)ともいふ。出家し給へるを院といふ。

だしゆ 舵手 【名】舵を運轉して、艇の方向を左右するものなり。

たじろく 【動カ四】たぢろぐを見よ。

たしろのぶつな 田代信綱 【名】爲綱の子、田代冠者と稱す。年十一より朝に侍し、厚く待遇せらる。字治川、一の谷、屋島等の戰に、みな戰功あり。

たそがれ 黃昏、誰彼 【名】誰れか彼か、人の面の判然せぬ頃。夕ぐれ。夕まぐれ。日ぐれ。

たそがれどり 黃昏鳥 【名】ほとゝぎすの異名。

たそく 蛇足 【名】無益の事にたとふるなり。戰國策に「楚有二祠者一。賜二其舍人一巵酒一。舍人相謂曰、數人飮レ之不レ足。一人飮レ之有レ餘。請畫二地作一レ蛇。先成者飮レ酒。一人蛇先成。引レ酒且飮、乃左手持レ巵、右手畫レ蛇、曰、吾能爲二之足一。未レ成、一人之蛇成。奪二其巵一曰、蛇固無レ足。子安能爲二之足一。遂飮二其酒一。爲二蛇足一者、終亡二其酒一」とあり。

たそやあんどう 誰哉行燈 【名】ボンボリに類せるもの。稚には、手燭の代りとせり。

たたう 妥當 【名】妥は安なり。穩當などに同じ。おだやか、適當、などの意。

たたうがみ 疊紙 【名】疊みて懷中に入れおく紙。ふところがみ。はながみ。

たたいしへきに、ちうせいのしよくしよくたるをきく但、聞二四壁蟲聲唧唧一 【文】宋の歐陽修が、秋聲賦に出でたる句。賦の全文は、古文眞寶後集にあり。

たたずまひ 佇 【名】物のある樣子をいふ。源氏物語胡蝶卷に「はかなき石のたゝずまひも、たゞ繪にかいたらむやうなり」。又、「山のたゝずまひ」などもいへり。

たたたのめ 只賴 【句】たゞ一向に我れを力にたのめとの意。新古今集「たゞたのめ、しめぢが原の、さしも艸、われ世の中に、あらむかぎりは」。

たたなづく 疊附 【枕】たたなはり附く意にて、山は遠くより見れば、疊み重りて列び附ける如くなれば、「青垣山」などにかけていふ。

たたなはる 疊有 【動ラ四】【枕】疊み重なるを云語。たたまるに從ひて、益々よくこれを用ふるをいふ。史記淮陰侯傳「上曰於レ君何如。曰、臣多多而益善耳」と。漢書韓信傳には、善を辨に作れり。

たたなづく 多多益善 【文】兵數の、多きを加ふるほど、さなる。濱松中納言物語「ふし給へる傍に、髮ぞいとたたなづきたくたなばりたる」。又、前條の語と通じ、枕詞とも。

たたびと 徒人 【名】又、タタウドともいへり。なはびと、よのつねの人、普通の人間、といふ意。又、攝關の家などに對しては、その外の諸家をいふことあり。

たたまますよし 多多益善 【文】兵數の、多きを加ふるに從ひて、益々よくこれを用ふるをいふ。史記淮陰侯傳「上曰於レ君何如。曰、臣多多而益善耳」と。漢書韓信傳には、善を辨に作れり。

たちあふ 立會 【動ハ四】敵す、抗す、などの意。又、ことを檢閱せんが爲に、二人以上會するをいふ。

たちえ 立枝 【名】高く延びて生ひたる枝。「梅の立枝」

たちご 立處 【名】立つところ。あるところ。

たちばな 橘 【名】木の名。柑子。田道間守の、垂仁帝の爲に、外國より持ち來れるものといへり。非時(トキジク)の果(カグノコノミ)物といふ、是れなり。香氣の高きものゆゑに、其の香によりて、昔を偲ぶことに云ひならはしたり。古今集「五月まつ、花橘の、香

たかげば、昔の人の、袖の香ぞする」。

たちばなしゅんき 橘春暉【名】字は惠風、南谿と號す。宮川氏。春暉は其の名、別に梅花仙史の號あり。伊勢の人。京に出で、醫を業として名聲あり。壯年の時より歴遊を好み、足跡ほとんど天下に遍し。文化二年四月歿す。博識能文にして、北窓瑣談、東西遊記などの著あり。

たちばなちかげ 橘千蔭【名】加藤氏。號を芳宜園、耳梨山人、逸樂窩、江齋などいへり。枝直（エダナホ）の子。江戸の國學者。加茂眞淵の門人、歌をよくし、又、書に巧なり。文化五年九月歿す。年七十二。その著萬葉集畧解、最も世にもてはやさる。

たちばなつねき 橘常樹【名】加茂眞淵の門人。古今集仰古解二十四卷、文集若干あり。寶暦十二年十一月歿す。年五十九。

たちばななほもと 橘直幹【名】長門守長盛の子。大學頭より、天暦二年、文章博士となり、天德の初め、みづから民部大輔たらんことを「瓢簞屢空草繁二顔淵之巷一。黎藿深閨雨濕二原憲之樞一」と上書し、帝の叡感を得、式部大輔に上る。のち、冷泉帝の侍讀となる。後撰集にも詠あり「おもひやる、心ばかりは、障らじを、何隔つらん、峯の白雲」。

たちばななりすゑ 橘成季【名】傳詳ならねど、其の著なる古今著聞集の自序に、建長六年とあれば、後深草帝の御字、北條時賴時代の人なり。

たちばなのこじまがさき 橘小島崎【名】山城國久世郡宇治町の平等院より、一町余、宇治川の中心にありし島なり。洪水の爲に、今その所在を失ひたり。

たちばなはやなり 橘逸勢【名】右大辨清友の子、延暦中入唐して彼の地にありし時、倜儻素の書風を慕ひ、就きて學びきといふ。勅を奉じて認めし安嘉門の額は、精妙、神に通じて活氣あり。のち罪を得て東國に流されて歿す。三筆の一人。

たちばなむねもち 立花宗茂【名】初めの名は統虎、高橋鎭種の子。少にして顯悟。天正十四年島津氏を伐つて功あり。秀吉大に悦びて柳川の城主とす。尋いで從四位下侍從となる。文祿の役、明の大軍を碧蹄館に破り、再征の役、清正、蔚山に圍まれたる時、宗茂之を援ひて大に明軍を破れり。關が原の役、西軍に屬し、軍敗れて、遂に降を家康に請ふ。家康其の遲きを責めて封を奪ひぬ。後、奥州棚倉の地を賜ふ。大阪の役に、功ありて、即ち舊封を復して飛彈守に任ぜらる。慶長十九年歿す。

たちばなもりべ 橘守部【名】池菴と號す。伊勢の人。後に江戸に住せり。歌をよくし、學また一家をなせり。當時、神道を學ぶもの、多く本居宣長を宗とせしかども、守部は、多

く翁に反對の説を立てたり。嘉永二年五月歿す。年六十九。

たちまち 立待【名】立ちて待つ意。新六帖「我が門を、さしわづらひて、寢るをのこ、まだ立ちまちの、月を見るらむ」。十七夜の月をいふ。

たちみくにながたちん 多治見國長【名】ごきよりかれを見よ。

だつ 闥【名】小門さいふに同じ。「闥を排して入る」などいふは、門をおしあけて入るなり。

たつがしらのかぶと 龍頭の兜【名】兜の眞正面に、龍の頭の形の飾を立てたる兜をいふ。

たつき 方便、便宜【名】さるたづきを見よ。

たつことかたき、はなのかげ 立つこと難き花の蔭【句】古今集に、躬恒の歌に「今日のみと、春を思はぬ時だにも、たつことやすき、花の陰かは」とあり。この歌の句をとれるにて、花の木のもとの立ち去り難き意。

だつさいぎよ 獺祭魚【句】書册の机邊に雜陳せるをいふ。禮記月令に「孟春之月、獺祭魚」とあり。談苑に「李商隱爲レ文、多檃二閱書册一、左右鱗次。號二獺祭魚一」などあるよりいふ。又、うなかみを以て名高し。

だつと 脱兎【名】逃げ行く兎にて、勢の鋭きにいふ。東坡の文「驚鴻脱兎争二先後一」で

たつなみを、ゆきかはなかとふくかぜの 立波を雪か花かと吹く風の【句】土佐日記「立つ波を、雪か花と、吹く風の、寄せつゝ人を、はかるべらなる」とあり。大意は、立つ白波を碎きちらしたる、雪ならむか、花ならむかと、人の疑ふやうに見せて吹き來る風が、寄せつ寄せつして、人を欺くに似たりとなり。

たつにのるらむやまびと 龍に乘るらむ山人【句】亞子逍遥遊に「藐姑射之山有二神人一云云。乘二雲氣一御二飛龍一、而遊二乎四海之外一」と見えたり。

たつのうま 龍馬【名】駿馬をほめて云語。すぐれたる馬。

たつのみかほ 龍の御顔【名】龍顔（リュウガン）を譯せる語。古實拾要に、『天子の御面貌をいふ。前漢書に、「高祖爲レ人隆準、而龍顔美髯云云」と。此の故事によりて、天子の御顔を龍顔と申し奉る』とあり。長秋詠藻「はじめて君が、御代にこそ、雲のかけはし、ふみかよひ、たつのみかほに、近づきて、云々」とあるは、龍顔、即ち 天皇に親しく仕へ奉れる意なり。

たつみ 辰巳、巽【名】方角の稱にして、東南の間をいふ。

たてがみ 鬣【名】馬の首すぢの髪。たちがみ。又、うなかみともいへり。

たてじとみ 立蔀【名】衝き立てて用ふる蔀。家屋雜考に

『立蔀は、見隠し塀の類にて、蔀の如く作る。所によりては取り設きにもすることなり。源氏野分の巻に「所々の立蔀透垣（スイガイ）などやうのもの倒りがはしく」などみえたるこれなり』、と見えたりもしくみ参照。

たてかぜ　かぢのすけ　谷風梶之助【名】奥州宮城野霞目村に生れ、明和四年十九歳にて相撲となり、秀の山、伊達ノ関等と名乗り、安永五年二月、谷風梶之助守胤と號す。寛政元年十一月廿九日、日の下開山となり、横綱免許を得たり。身の丈六尺三寸、重さ四十八貫目ありきと。

たてかぜ　しせい　谷川士清【名】士清は、コトキヨとよめるよしなり。名は昇、淡齋と號す。伊勢の人。世々醫を業とせり。山崎の神道を學び、また和歌をよくす。安永五年十月歿す。年七十。和訓栞、日本紀通證等の著あり。

たにぐち　ぶそん　谷口蕪村【名】俳人與謝蕪村なり。また謝をよくせり。名は信章、字は春星、夜半亭と號す。初め、蕪菁といひしが、後に蕪村と改めたるなり。天明三年十二月廿九日歿す。年六十七とも七十ともいへり。

たにじちゆう　谷時中【名】土佐藩の儒者。宗慶の長男なり。名は素有、時中は、その字なり。大學と稱し、後に三郎右衛門と改めたり。家、世々農を業とせり。時中、初め僧となり慈沖と號し、親鸞の教を奉じ、高知の眞常寺に住す。閑暇あれば、好みて儒書を誦めり。天文中、南村梅軒、程朱の學を唱道す。時中、其徒天室に從ひて學べり。遂に髪を蓄へ儒を業とするに至れるなり。野中兼山、山崎闇齋も來り業を受く。土佐の士人、書を讀むとを知れるは、時中の力なりとぞ。慶安二年十二月晦日歿す。年五十二。語錄、文集等の著書あり。

たにたてき　谷干城【名】薩土佐藩士。天保八年二月生る。若年の時に江戸に出で、安井息軒の門に遊ぶ。維新の際、藩兵を率ゐて各地に戰ひ、後、官に仕へて陸軍中將に至る。西南の役熊本城を守りて大功あり。現に貴族院議員子爵たり。

たにぶんてう　谷文晁【名】有名の畫家なり。谷麓谷の男。寫山樓、畫學齋などの號あり。天保十二年十二月歿す。年七十八。

たにをいでて、たかきにうつるうぐひす　谷を出でて高きに移る鶯【句】長秋詠藻「いつしかと、たかきにうつれ、春日山、たにのふるすを、いづる鶯」。この歌をもとゐしていへるなり。詩に「出自幽谷遷于喬木」。

ためまもとつぐ　田沼意次【名】紀州藩の小吏なりしが、吉宗將軍に從ひて幕府に入り、家重、家治の時、殊寵あり、遂に老中となり、子意知と權を專らにす。天明六年、食邑二萬石を割られ、其の第を收められる。八年卒す。年六十。

たねがしま　種子島【名】大隅國熊毛郡の海島なり。天文十二年、葡萄牙人、始めて此の地に來りて互市を乞ひ、鳥銃を傳ふ。仍りて、銃を呼びて、種子島ともいへり。

たねがしま　ときたか　種子島時堯【名】種子島の人。後奈良帝の天文十二年、外船に就きて銃砲を得て、其の技を習ふ。其意にいふ。即ち、「御船に奉る」には、船に乘ちせ申すなり。「御衣奉り直す」は衣服を着せ直し申すなり。また、自身の動作をいふ動詞に添へて、敬語とす。「供奉し奉りて」など。

たてやま　立山【名】越中國中新川郡にあり。國中にて、大蓮華山に次ぐ高山にして、有名なる休火山なり。山上に縣社雄山神社あり。また、稱名瀧と稱する瀑布あり。奇岩怪石の名あるもの、頗る多し。

たどたどし　迚々【形】たづたづしともいふ。覺束なし。不安心。確とせず。慥ならず。

たなごころをかへすよりもやすし　易二於反ㇾ掌【句】漢書に出でたり。極めて容易なるをいふ。

たなすゑのみつぎ　手末の調【名】手の先の調の意にて、女子の手先にて作り出したる麻布などを、調として上るをいふ。崇神天皇の朝に始まる。男子には弓矢の調と云あり。

たなばた　棚機、七夕【名】陰暦七月七日の夕に、牽牛（彦星）織女（棚機）の二星を祭るをいふ。これは、奈良朝の頃、支那より傳はりたることなるが、我が國の神代に、棚機千幡姫などいふ神ありしより、織女の文字を、其の神に附會して、兒女等の、紙糸を獻りて、裁縫の上達を祈りしものなり。乞巧奠ともいふ。

たなひち　手肱【名】手の肱なり。たゞ、肱といふに同じ。

傳し、また、之を製造するに至れり。我が國の鐵砲は、この時より始まる。

たのむ 頼、恃、憑、囑【動マ四、動マ下二】四段のは、依頼する、力にする、たよる、などの意。下二段のは、頼みに思はするをいふ。「人をたのめて」など。

たのむこかげにあめもる 頼む木蔭に雨漏る【文】頼めたここのかひなくなりしを喩へていふ語。

たのむら ちくでん 田能村竹田【名】名は孝憲。豊後、岡の人。世々藩醫たり。學を好みて特に儒臣となる。江戸に出でて經學を修め、また、書法を谷文晁に學ぶ。のち仕を退き、專ら詩文書畫を事とす。書は、特に一家をなし、近代の名家と稱せる。天保六年大阪に歿す。年五十九。

たはう 多方【名】萬方に同じ。左傳「多方以誤レ之」と。

たばがは 太婆川、丹波川【名】武藏國多摩郡の多摩川の上流を丹波川といふ。甲斐國都留郡丹波村の丹波山より發すれば名づく。また、和名抄に多摩郡の多摩を太婆と訓ませるを以て見れば、多摩川は、古くタバガハとよべるものの如し。多摩川參照。

たはらざか 田原坂【名】地名。肥後國山本郡にあり。西南戰爭にて有名の處なり。同地方の人はタバルザカと呼ぶ。

たはれぐさ 多波禮具左【名】書名。雨森芳洲が、日本、支那の事どもにつきて、何やかやと書き集めたる隨筆なり。三卷あり。

たはわざ 戯事【名】たはむれたる所業（ワザ）。萬葉集「いざ子ども、たはわざなせそ、天地の、堅めし國ぞ、大和島根は」。

たび 單皮、足袋【名】古のものは、皮にて製し、靴の下にはきたるもの。今は、織物にて製して用ふ。今の靴下も、タビの一種なり。

だび 茶毘【名】梵語、闍鼻多の略。火葬をいふ。「茶毘一片の煙」など。

たひら いへさだ 平家貞【名】平貞盛の裔、家房の子。平家の世臣なり。筑後守に任ぜらる。子貞能、清盛の腹臣たりき。平氏滅亡後、剃髪して、肥後入道と稱せり。

たびらこ 黄花菜【名】草の名。高さ五六寸ばかり、葉の形ダンボボに似て、夏の頃、黄色の花咲きて、小さき實を結ぶ。佛座に同じ。また、魚にたびらこといふものあり。鰈の字を宛つ。

たひら これもり 平維盛【名】重盛の子、右近衛權少將となり、中宮權亮を兼ぬ。容儀美なるを以て、呼んで櫻梅少將といへり。源頼朝兵を起すに及び、維盛追討使となりて富士川に至る。一夜、水鳥の驚噪するを聞き、敵兵大に至るとなし、戰はずして歸る。壽永二年、また源義仲を討ち、遂に大敗して京に走る。既にして、平氏皆西海に歿す。維盛、獨り高野に至り、伴つて海に死すとなし、匿れて牟漏郡藤繩に居り、子孫遂に土人となるといふ。

たひら さだよし 平貞能【名】たひら いへさだを見よ。

たひら つねもり 平經盛【名】忠盛の男、清盛の弟。和歌に巧に、笛をよくす。保元、嘉應の間に累進して從三位に進み、治承の初め正三位太皇太后宮大夫となり、尋いで修理太夫を兼ぬ。養和元年參議に任ぜらる。壽永二年安徳帝に西海に從ひ、壇の浦の敗に、潜に山に入りて剃髪し、既にして、また海に赴きて死す。年六十一。敦盛は其の子なり。

たひらのみや 平の宮、平安京【名】今の京都の都。平安をタヒラと訓ぜしが、後には、また音讀してヘイアンキャウともいへり。桓武天皇延暦十三年遷都ありてより、明治元年までの帝都。

たひら のりつね 平教經【名】初めの名は、國盛。敦盛の子。能登守に任ぜらる。驍名あり。文治元年、壇浦に戰死す。年二十六。

たひら のりもり 平敎盛【名】門脇殿と稱す。忠盛の子。清盛の弟なり。養和三年正二位大納言を拜す。壇浦に自到す。年五十七。

たひら まさかど 平將門【名】桓武帝の曾孫、高望王の孫にして、鎮守府將軍良將の子、相馬小次郎と稱す。攝政藤原忠平に仕へ、撿非違使たらんとして得ず、遂に下總に據りて、天慶の亂をなす。同三年、平貞盛に射らる。

たひら まさもり 平正盛【名】平忠盛の父、清盛の祖父なり。

たひら もりくに 平盛國【名】平家の臣。壇浦の戰に、源氏の虜となり、鎌倉に送られ、食はずして死す。子盛俊、はやく一ノ谷の戰に斃死す。

たひら よりもり 平頼盛【名】忠盛の五子、清盛の異母弟。母は池禪尼。壽永元年權大納言。池殿、又、池大納言といふ。文治二年薨ず。年五十五。

たふ 祢【名】僧衣なり。のふを見よ。

だふ 懦夫【名】氣の弱くして臆病なる人。孟子に「頑夫廉、懦夫有レ所レ立レ志」とあり。

たぶさ 腕【名】手の先、即ち手首をいふ。

たぶさ 髻【名】髪を頂に束ね結ひたる處をいふ。「たぶさを取りて」など。

たふさぎ 犢鼻褌【名】下帶をいふ。股蔽（マタオホヒ）の略かといへり。

たふしや 答射【名】いにしへの戰の手始めに、敵より射たる矢に、返し矢すること。

たぶせのさき 田伏崎【名】常陸國新治郡佐賀村、大字田

伏の東端なり。

たふときは、いやしきがそねみ　貴きをば賤しきが妬み、智者をば愚人が憎む【文】曾我物語に出でたる語。左傳の「隱公の條にも「且夫賤妨レ貴、少凌レ長、遠間レ親、新間レ舊、小加レ大」とあるなどより出でたるか。

たふのみね　多武峰【名】大和國磯城郡にあり。談山（ダンサン）ともいふ。半腹に、別格官幣談山神社あり。祭神は、贈太政大臣正一位藤原鎌足公なり。山、櫻楓の二樹多く、春秋の二季、最も眺望に富めり。

たほうたふ　多寶塔【名】多寶佛を安置せる塔なり。多寶佛は、常に法華所説の道場に通現すといへり。

たまあへるとも　魂合へる友【句】心の合ひたる友。魂、すなはち精神の合ひたる友。

たまえ　玉江【名】江の名。長門國阿武郡王江浦町にあり。はっこう参照。

たまがきのみや　玉垣の宮【名】師木玉垣宮（シキノタマガキノミヤ）。垂仁天皇の宮にして、又、纒向珠城宮（マキムクノタマキノミヤ）ともいへり。大和國磯城郡纒向村穴師に、其の址あり。

たまがつま　玉勝間【名】書名。十五巻あり。本居宣長の隨筆なり。

たまがは　多摩川【名】甲斐國丹波川の下流。武藏國多摩郡に入り、荏原郡羽田（ハネダ）村に至りて、東京灣に注ぐ。一名六郷川。たばがは參照。

たまがはすゐだう　玉川水道【名】東京市内に引ける、神田、千川、玉川さて三上水ある、その一なり。この玉川上水は、遠く西の方、甲州丹波山の幽谷に發し、四ツ谷、大木戸を經て、虎の門に至り、日本橋以南の各町に分布す。

たまがはせいえもん　玉川清右衛門【名】武藏國多摩郡の人。德川四代將軍家綱のとき、同姓庄右衛門と、玉川上水工事に力を盡し、成功の後、幕府より御普請役を命ぜられ玉川の姓を賜はる。その後、兩人とも、罪を蒙りて家絶ゆ。

たまぐし　玉串【名】榊の枝に、木綿を附けて神に供ふるもの。

たまくしげ　玉櫛笥、玉匣、玉篋【名】【枕】くしげは、櫛を入るゝ箱。それを美めて玉くしげといふ。又、只、箱のことゝしても用ひたり。また、箱の縁より、あく、覆ふ、身、蓋、奥などの枕詞として用ふ。

たまくしげ　玉匣【名】書名。二巻。本居宣長の著。本書の初めに「この書は、ある御方に、道のおほむね、今の世の心得を書きて奉れるなり」とあるにて、内容を知るべし。別に、玉匣別記二巻あり。これまた、紀州侯の國政の諮詢に應へたる意見書なり。

たまぐすり　彈藥【名】彈藥（ダンヤク）なり。彈丸藥の直譯訓なるべし。

たまだすき　玉襷【枕】美しき襷にて、襷は、項（ウナジ）に懸くるものなるより、うれ、かくにいひかく。萬葉集「玉だすきうねびの山」また「玉だすき、かけねときなく」など。

たまつしま　玉津島【名】地名。紀伊國の和歌浦にあり。古今集「わだの原、よせくる波の、しばしばも、見まくのほしき玉津島かも」で、又、俗説に、此の玉津島明神を衣通姫（ソトホシヒメ）命とし、住吉の神、及、人麿と併稱して、和歌の三神と傳へたり。

たまのやのみこと　玉祖命、玉屋命【名】天櫛明玉命（アメノクシアカルタマノミコト）とも申す。伊奘諾尊の御子。三種の神器の一なる八坂瓊の曲玉は、此神の作り給へるなり。天孫に從ひて中國に降れり。玉祖（タマノヤノムラジ）連の祖なり。

たまのを　玉緒【名】玉を貫ける緒をいひ、また、魂の緒の義にて、命をもいへり。

たまのをぐし　玉小櫛【名】九巻あり。本居宣長が、源氏物語につきて詳細なる評論を加へ、及び、所々を摘出して、注解したるもの。

たまふ　給【動ハ四】【接ハ四】【接ハ下二】四段の活用は、人に物を與ふるをいふ。また、動詞の後に添へて、他人の動作を敬ひて云接尾の詞ともす。これも、四段の活なせり。

「見給ひて」「行き給ふ人」など。また、他人に對するとき、敬意を現すために、己の動作に添へてもいふ。これは、下二段の活なり。俗に、「申す」「候ふ」などの意に用ふ。「聞き給へて」「思ひ給ふる」など。聞き申して、思ひまつりての意。

たまぼこひやくしゆ　玉鉾百首【名】書名。一巻あり。本居宣長が、古道の大意を詠じたる百首の歌なり。玉鉾百首解二册は、大平が、これを注釋せるもの。

たみのかまど　民の竈【名】たかきやにのぼりてみればを見よ。

たん　段【名】田畠の段別の名目。町（チャウ）の十分の一にして、畝の十倍。即ち三百歩にして、坪にていへば三百坪なり。また、距離をいふことあり。而して、古くは、六十間をいひしが、軍記などに見えたるは、其れと異なるか。或は一段の地のさしわたしならむといひ、また、六十間の十分一ならむかともいひ、また、布の長さ三丈を一反といふより、五間ほどの長さならむともいへり。いづれとも定め難し。

たん　反【名】啖に同じ。くらふこと。又薄き餅を以て、肉を巻きたるもの。

たんかんぼく　段干木【名】晋の人。高節、自ら全うす。父侯、嘗て見んとして行きしに、その門に至れば、干木、墻を踰えて之を避けたりと。

だんきんのまじはり　斷金の交【句】心を同うして相乖かざる意。易經「二人同レ心、其利斷レ金」。漢書王莽傳「必同レ憂斷レ金相翼」。

だんぐわんこくしのち　彈丸黑子の地【句】狹少の地をいふ。黑子はほくろなり。文選に「地惟黑子、城猶二彈丸一」とあり。

だんげいす　端倪【動サ變】窺ひ知る意。推測して窺ふこと。韓文「旭之書、變動猶二鬼神一、不レ可二端倪一」。

たむけやま　手向山【名】奈良市の若草山の北に隣り、東大寺境内に連れり。手向山八幡宮あり。古今集「この度は、ぬさも取りあへず、手向山、紅葉の錦、神のまに〳〵」とあるは、こゝにてよめるなり。

たんご　端午【名】陰曆五月五日の節句。重午ともいひ、また端立ともかく。男子の節句にして、五歳の男兒は祝儀を行ふ。荊楚歲時記に「京師人、以二五月一日一爲二端一、二日端二、三日端三、四日端四、五日端五」とあり。端は始の義。

たんざす　端坐【動サ變】端は正なり。正しく坐するをいふ。

だんし　檀紙【名】陸奥紙（ミチノクガミ）ともいふ。厚く柔にして皺あり。檀（マユミ）の木にて漉（ス）きたるものなりと。

たんしこしやう　簞食壺漿【句】簞は竹器にて、辨當を盛るもの。漿を壺に容れて之に添ふるは、旅行に携ふるものなり。旅行の準備をいふ。孟子「簞食壺漿、以迎二王師一」。

たんしん　丹心【名】赤心と同じ。偽りのなき誠心なり。文文山零丁洋の詩句「留取丹心照二汗青一」。

たんじやう　丹青【名】たんせいともよむ。繪の具。轉じて、繪畫のことにいふ。漢書蘇武傳「雖二古竹帛所レ載丹青所レ畫、何以過二子卿一」。

だんじやうだい　彈正臺【名】役所の名。長官を尹といふ。百官の罪惡、內外の非違を糺す。其の彈奏は、太政官を經ずして、直ちに陛下に奏聞することを得るを以て、最も勢力ある官なり。仁明帝の承和六年、檢非違使獨立して糺彈の事に預かることゝなりてより、彈正臺の權は、遂に悉く使廳に移るに至れり。

たんしよ　端緒【名】いとぐち、物ごとのはじめをいふ。

だんす　Dance【名】英語。舞踏をいふ。

たんすゐ　淡水【名】鹽氣ある水を鹹水といふに對して、普通の水を淡水といふ。

たんすゐ　淡水【名】地名。臺灣臺北縣なる淡水河口の港。

たんせい　丹誠【名】赤心といふに同じ。まごころ。信實に事をすること。心を盡して面倒を見ること。

たんせいくわ　單性花【名】いしゅくわを見よ。

たんせきのたくはへ　儋石の儲【名】いささかの貯へ。儋も石も量の名なり。漢書楊雄傳「雄家不レ過二十金一。無二儋石之儲一晏如也」。

たんだい　探題【名】鎌倉幕府の時の官名。地方重要の職たり。六波羅探題、長門探題、九州探題など。其の地方を奉行糺判するもの。この語は、僧家より出でたるにて、僧徒相集まりて討論する時、其の可否を裁斷するものを、探題といふに取れるなりと。

だんだいふ　段大尉【名】名は秀實、字は成公、唐の姑藏の人。涇原の節度使より司農卿となる。朱泚の亂に捕はれしが、賊將源休衆が笏を取りて、朱泚をうち、遂に殺さる。

たんちや　磚茶【名】玉になれる茶なり。けづりて飲むもの。支那より輸入する品なり。

たんちやう　丹頂【名】鶴の、形大にして白く、頂の深紅なるもの。仙鶴ともいふ。その他、鶴には、眞名鶴、白鶴、黑鶴、鍋鶴など、種々あり。

だんちやう　斷腸【名】悲哀の切なるをいふ。魏文帝の詩に「念二君客遊一思レ斯斷レ腸」と。

たんと　坦途【名】平坦なるみちをいふ。

だんな　檀那【名】僧より、其の道に惠みを與ふる信者をさしていふ語。轉じては、婢僕より主人に對していひ、また、商人より顧客に對していふ語となれり。書言故事「僧道稱二施主一曰二檀那一。梵語陀那馱底、唐曰二施主一」と見えたり。

だんのうら　壇の浦【名】長門國豐浦郡と、別島との間の海面。文治元年、源平の合戰ありし地なるを以て名高し。

たんぱく　蛋白【名】卵のしろみをいふ。また、これと同じ成分のものを蛋白質といふ。肉類には、多く含有せり。

たんは、だいならんことをほつす　膽欲レ大【文】唐の孫思邈の言。「膽大は、敢爲をいふ」とあり。敢爲は、ものを推し切つてするをいふ。

たんぺいきふ　短兵急に【句】兵士の肉迫して來れるが如く、極めて急なること。迅速なること。至急なること。短兵は、短き武器、乃ち刀劍の屬。

たんぺき　湛碧【名】青色をみたしむる義。即ち水の深く湛へたるなり。吳邈「湛碧寒無レ波」。

たんぺき　丹碧【名】赤色と青色となり。陳秦「晶熒丹碧飛二甍閣一」。

たんぽ　擔保【名】商法にて、債務者の、すべての財產をいふ稱。轉じては、抵當の品物をいふ。

たんまつま　斷末魔【名】一命の終る時をいふ。俱舍論「臨二命終時一、多爲二斷末魔苦受一所レ逼」と。

たむらしやうぐん　田村將軍【名】坂上田村麿をいふ。

ちまき 【名】 粽に似たる菓を出だす。夏の頃、綿の如き花をつくる。これをとりてほぐすなり。

ちまた 【名】 天下のよく治まれるをいふ。治平に同じ。文物を調ふるにもいふ。「繁治」などなり。

ちみどろ 【名】 蛸に同じ。みどろ訓す。蛇の類にて黄色なる。

ちもの 【名】 史記非難云々。

ちゃうせき 【名】 支那渤海湾内にある港。天津條約により開港場となれり。

ちゃうなん 【名】 最も親しき友なり。支那の俗語。

ちゃうはつ 【名】 手初めの仮事に起るしるしなどを見よ。

ちゅうかうのし 【句】 中庸、即ち過不及なく道にかなへる行ある士をいふ。

ちゅうかわ 【名】 鎧の下に着る鎖帷子。

ちゅうきゅう 【名】 孔子の弟子冉耕の字。伯牛の宗族に「差人妻甲」は鎧にて「うつる迄。

ちゅうしょ 【名】 策」などの略。

ちゅうちょ 【名】 躊躇。

ちょうあい 【名】 寵愛。

ちょうかう 【名】 檀那の施寺により、衆僧の棲居する所なり。

ちょうこく 【名】 彫刻。

ちょうしゅん 【名】 春の頃。

ちょうせき 【名】 朝夕。

ちょうてい 【名】 朝廷。

ちょうてん 【名】 朝天。

ちょうなん 【名】 長男。

ちょうば 【名】 朝馬。

ちょうへい 【名】 朝餅。

ちょうもく 【名】 朝目。

ちょうやく 【名】 朝役。

ちょうりょう 【名】 朝料。

ちょうろう 【名】 朝労。

ちょうわ 【名】 朝話。

ちょくし 【名】 勅使。

ちょくしゃ 【名】 勅写。

ちょくしゅ 【名】 勅手。

ちょくしょ 【名】 勅書。

ちょくしょう 【名】 勅証。

ちょくしん 【名】 勅進。

ちょくせん 【名】 勅撰。

ちょくそ 【名】 勅訴。

ちょくたい 【名】 勅諚。

ちょくだい 【名】 勅題。

ちょくだん 【名】 勅断。

ちょくちょく 【名】 勅勅。

ちょくつう 【名】 勅通。

ちょくてい 【名】 勅定。

ちょくてん 【名】 勅点。

ちょくとう 【名】 勅答。

ちょくとく 【名】 勅読。

ちょくにん 【名】 勅任。

ちょくねん 【名】 勅念。

ちょくばん 【名】 勅判。

ちょくふ 【名】 勅符。

ちょくふう 【名】 勅封。

ちょくふく 【名】 勅服。

ちょくぶん 【名】 勅文。

ちょくへん 【名】 勅編。

ちょくめい 【名】 勅命。

ちょくもん 【名】 勅問。

ちょくやく 【名】 勅約。

ちょくゆ 【名】 勅諭。

ちょくらい 【名】 勅来。

ちょくらん 【名】 勅覧。

ちょくりょう 【名】 勅料。

ちょくれい 【名】 勅令。

ちょくれん 【名】 勅連。

ちょくろく 【名】 勅禄。

ちょくわ 【名】 勅和。

ちょこ 【名】 猪口。

ちょこう 【名】 猪口。

ちょこく 【名】 猪口。

ちょこん 【名】 猪口。

ちょこんと 【副】 猪口。

ちょこんぼ 【名】 猪口。

ちょこんぼう 【名】 猪口。

ちょこんぼん 【名】 猪口。

ちょこんぼんと 【副】 猪口。

ちょこんぼんぼん 【名】 猪口。

ちょこんぼんぼんと 【副】 猪口。

ちょこんぼんぼんぼん 【名】 猪口。

ちょこんぼんぼんぼんと 【副】 猪口。

ちょこんぼんぼんぼんぼん 【名】 猪口。

ちょこんぼんぼんぼんぼんと 【副】 猪口。

ちょこんぼんぼんぼんぼんぼん 【名】 猪口。

ちょこんぼんぼんぼんぼんぼんと 【副】 猪口。

ちょこんぼんぼんぼんぼんぼんぼん 【名】 猪口。

ちょこんぼんぼんぼんぼんぼんぼんと 【副】 猪口。

ちょこんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼん 【名】 猪口。

ちょこんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんと 【副】 猪口。

ちょこんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼん 【名】 猪口。

ちょこんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんと 【副】 猪口。

ちょこんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼん 【名】 猪口。

ちょこんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんと 【副】 猪口。

ちょこんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼん 【名】 猪口。

ちょこんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんと 【副】 猪口。

ちょこんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼん 【名】 猪口。

ちょこんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんと 【副】 猪口。

ちょこんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼん 【名】 猪口。

ちょこんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんと 【副】 猪口。

ちょこんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼん 【名】 猪口。

ちょこんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんと 【副】 猪口。

ちょこんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼん 【名】 猪口。

ちょこんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんと 【副】 猪口。

ちょこんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼん 【名】 猪口。

ちょこんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんと 【副】 猪口。

ちょこんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼん 【名】 猪口。

ちょこんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんと 【副】 猪口。

ちょこんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼん 【名】 猪口。

ちょこんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんと 【副】 猪口。

ちょこんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼんぼん 【名】 猪口。

**ちょこんぼ

弗ㇾ器、殷生二於無ㇾ所ㇾ用。中河失ㇾ舟、一壺千金。貴賤無ㇾ常、時使二物然一也」とあり。注に「壺、瓠也。佩ㇾ之可二以濟渉一。南人謂二之腰舟一」とあり。中流にて舟を失ふ時は、唯まさに溺れんのみ。然るに、もし、腰に一瓠を携ふれば、沈むことなくして、まづ難を逃るることを得べきか。さすれば、一瓠といへども、時と場合とによりては、一命を保全するほどの價値ありとの意。

ちうをさいす 衷を裁す【文】善政を施すをいふ。衷は善也とも誠也とも、字典に註せり。

ちえき 致役【名】使はるること。易經「致二役乎坤一」。

ちおんゐん 智恩院【名】華頂山大谷寺ともいふ。京都市下京區にあり。東山第一の巨刹。淨土宗鎮西派の總本山なり。八坂神社の東北にありて、また、櫻花を以て名あり。

ちか 治下【名】城下、又、領分、などいふに同じ。漢書に「治所謂郡ㇾ之也」とあり。

ちか 値嘉【名】王朝時代に、肥前國に値嘉郡、又は値嘉島の名ありき。今の松浦郡平戸島（上近島）、および、五島（下近島）のことなり。

ちかい 持戒【名】佛法にて、五戒、十誡などいふ佛のいましめを守るをいふ。「持戒の高德」など。

ちがく 地學【名】地理、地質、地文等の學問をいふ。

ちかづみ 盟文【名】（キシャウモン）起請文に同じ。

ちかまつもんざゑもん 近松門左衛門【名】有名なる淨瑠璃作者。姓は杉森、巢林子、また平安堂と號す。肥前唐津の近松寺に入りて出家せりと。後に大坂に出て、竹本座の淨瑠璃作者となれり。享保九年十一月歿す。年七十二。

ちかん 痴漢【名】ばかもの。狂人。

ちから 稅【名】むかし、稅をちからといへり。民の力を盡したるものの義に取れるなり。

ちかられう 主稅寮【名】しゅぜいれうともいふ。上古、民部省内にあり。租稅、米穀などの事をつかさどれり。

ちき 知巳【名】人の知を受けて相交るをいふ。今日は、此の語廣く用ひられて、しるべ、しりびと、しりあひ、などの意となれり。史記の蕃政傳に、「政將ㇾ爲二知ㇾ己者一用ㇾ之」。また、韓退之が張僕射に上る書に「受二千金之賜一、二歲九遷二其官一、感ㇾ恩則有ㇾ之矣。將以稱二於天下一曰二知巳一則未也」とあり。

ちぎ 千木【名】上古の建築に、家の棟の端の材を、峯にて組み合せて、空中に高く出だしたるをいふ。

ちぎす 遲疑【動サ變】猶豫する、躊躇する、などの意。

ぢきそ 直訴【名】相當の手續を經ずして、直接に、上に訴狀を上るをいふ。

ちぎやう 知行【名】武家時代に、武士の賜りて領せる土地。

采地。轉じては、直ちに俸祿をもいへり。「知行何千石」など。

ちぎよのわざはひ 池魚災【句】俗にそはづるをくふといふに同じ。近所の災難の爲に、己れも不幸を受くるをいふ。風俗通に「城門失ㇾ火、殃及二池魚一」とあり。この文意は、城門の火の爲に、池の水汲み出だされて、其の中の魚、涸死せりとなり。また、火災にもいふ。

ちぐ 値遇【名】思ひもかけず、よき人に出合うて、未來を賴むをいふ。

ちぐう 知遇【名】厚き待遇をいふ。人の己れをよく知りて用ふる意。「其の知遇を受く」など。

ちくえふ 竹葉【名】支那にて酒の異名。

ちくさし 乳臭【形】乳臭のぬけざる意。轉じて、道に、未熟の者をいふに用ふ。

ちくじ 逐次【名】次第を逐うての意。順順に。

ちくしやう 畜生【名】人に畜はるる動物の義。隨書「帝恚抵ㇾ牀曰、畜生何足ㇾ付二大事一哉」。

ちくしやうだう 畜生道【名】佛典にて、冥土六界の一をいふ。此の界に墮つれば、其の身、畜生となりて苦患をうくと。

ちくぜん 恧然【副、形】恧は慙に同じ。中心にはづること。

ちくぢ 恥恧【副、形】心の中にてはつがしく思ふこと。國語「君恥恧」。

ちくちく 逐逐【副、形】速に走るをいふ。易經「欲二其逐逐一」。

ちくてん 逐電【名】電を逐ふ義にて、速に走りて、跡に影をとどめざる意。馬の走るを形容して「逸ㇾ風逐ㇾ電」などいへるも同じ。跡を晦まして逃亡するをいふ。

ちくでんぶんがく 竹田文學【名】文學は學者をいふ敬稱。竹田は田能村行藏の號なり。備後國岡野藩醫にして、また、畫を以て名高し。

ちくとくろく 畜德錄【名】書名。二十卷あり。清の席文輿著。嘉言善行等を類輯して、二十一門とせり。

ちくはい 竹牌【名】牌はふだなり。いにしへは、紙なかりしゆゑ、竹牌、牙牌、銅牌などを作りて用ひたり。

ちくはく 竹帛【名】いにしへ、書册には、竹簡、或は縑帛といふものを以てせり。故に、其の材料よりして、書册を竹帛といふ。

ちくばのさも 竹馬之友【名】子供の時の遊びづれ。晉書「鄉故復憶二竹馬之好一」ともあるよりいふ。

ちくぶしま 竹生嶋【名】琵琶湖中の北方に在り。島中に辨才天女の祠あり。

ちくまがは 千隈川【名】信濃國にあり。千曲川、また、筑

摩州などもかく。信濃川の上流。

ちくりんのしちけん　竹林七賢【句】支那の昔しにて、竹林に遊べる七人の賢者。君臣故事に「嵇康所二與交一者、惟陳留阮籍、河内山濤、河東向秀、沛國劉伶、籍兄子咸、鄒邪王戎、遂爲二竹林之遊一。世所謂竹林之七賢」とあり。

ちくりんゐん　竹林院【名】大和國吉野郡吉野町にあり。吉野山中絶景の勝地。

ちくろ　舳艫【名】舳は船の頭、艫は船尾なり。

ちくわ　治化【名】政治といふに同じ。化に王化なり。

ちげ　地下【名】いにしへ、五位以下の者は昇殿を聽されざる制にて、其の昇殿のかなはぬ者を地下といへり。

ちけい　笞刑【名】五刑の一。笞にて打つ刑。

ちげき　締綌【名】最上の細き布を締といひ、あらきぬのを綌といふ。淮南子「締綌綺繡」。

ちげん　知言【名】物の、是非得失を明め知るをいふ。左「泰伯以爲二知言一。爲之請二於晉一而復之」。

ちごく　地獄【名】佛典にて、地下にあ〻といふ苦しき世界。罪障深き亡者の墮つる所とす。

ちごくのごふふう　地獄の業風【句】佛者の說にて、地獄に三大災とて、天地の滅却すること三あり。一を水災、二を火災、三を毘風といへり。その中の毘風のことなり。

ちざん　尼山【名】支那の地名。尼岳のこと。兗州にあり。

ちし　致贊【名】贄を出だして臣下となること。人に面會するに、禮儀として贈る物を贄といふ。呂覽に「今日致レ贄爲レ臣」とあり。

ちし　致仕【名】祿位を君に奉還して、退隱するをいふ。公羊傳「退而致仕」。

ちしう　馳驟【名】はせ走ること。疾走に同じ。

ちじう　呢絨【名】毛織物をいふ。

ちじつ　遲日【名】春の日などの長きこと。日足の遲き故、容易にくれぬ意。

ちしつがく　地質學【名】英語 Geology。理學の一派にして、地質を研究する學問なり。

ちしほ　千入、千染【名】幾度も染汁に入れて染むるなり。おさいふ。されば、特に色の勝れたるを、總べて千入の色などいへり。ひとしほ、八しほなどの語もあり。今、一層などの意にいへども、古は色にのみいへり。

ちじんのゆめ　痴人の夢【句】愚なる人に、夢を語るは害ありて益なし。故に無益の事にいへり。冷齋夜話「此正所謂對二痴人一說レ夢耳」と。

ちしやうぎ　地象儀【名】地球儀に同じ。

ちしゆ　置酒【名】酒宴を催すこと。また、饗宴なり。漢書「高祖置二酒前殿一」。

ちじよく　恥辱【名】はぢをいふ。說苑に「恥辱、勇之決也」とあり。

ちせい　弛政【名】政のゆるめること。禮記「庶民弛政」。

ちたう　池塘【名】池の塘をいふ。朱子の詩句に「池塘春草夢」。

ちち　遲遲【副、形】ゆつくりとしたること。又、のどかなること。詩經「春日遲遲」。

ちちう　踟躕【名】ためらふこと。さまよふこと。たちもとほることと。躊躇に暑同じ。荀子「踟躕焉踟躕焉」と。

ちちうかい　地中海【名】亞弗利加、歐羅巴、亞細亞の三大陸に圍まれたる海なり。

ちぢく　地軸【名】坤軸ともいふ。大地に軸のあるものと假定しての語。「天柱碎、地軸折」など。

ちちじま　父嶋【名】小笠原の一島にして、最大なるもの。小笠原島麗、此にあり。

ちち、ちちたらずといへども　父雖レ不レ父子不レ可二以不一子【文】きみきみたらずといへどもを見よ。

ちちのみの　乳の實の【枕】其の音の同じきより、父の枕詞とす。乳の實は、乳の木の實、乳の木は鴨脚樹（イチフ）をいふ。いてふ參照。萬葉集「ちちのみの、父の尊、柞葉（ハハソバ）の、母のみこと、おほろかに、心つくして、思ふらむ、其の子なれやも、云々」。

ちちのわうをうしなふためし　父の王を失ふ例【句】父を殺す前例なり。觀無量壽經に「劫初以來、有二諸惡王一。貪二國位一故、殺二其父一。一萬八千人云々」と見えたり。

ちちは、このためにかくす　父は子の爲に隱す【文】父子、互に其の惡を忌みかくす自然の人情をいふ。論語子路篇に「葉公語二孔子一曰、吾黨有二直躬者一。其父攘レ羊而子證レ之。子曰、吾黨之直者異二於是一。父爲レ子隱、子爲レ父隱。直在二其中一矣」とあり。

ちちぶがは　秩父川【名】武藏の秩父山より發する川にして、荒川の上流。下流は、即ち隅田川なり。

ちちぶのじらう、しげただ　秩父二郎重忠【名】畠山重忠なり。

ぢぢよう　持重【名】大事を取ること。落ち付き居ること。正しくは、ヂヂユウといふべし。

ちつおよ　秩序【名】次第、順序、などいふに同じ。

ちつちつ　秩秩【副、形】秩序の調ひたるをいふ。荀子「貴賤長少秩々焉」。

ちつちよく　蹝躅【名】蹝は、しりぞくること、躅は、のぼる

ことにて、なほ、進退といはんが如し。尚書に「大明二黜陟一」とあり。

ちと 雉兎【名】きじとうさぎと。また、其の雄兎などを捕る獵人をもいへり。

ちとう 地頭【名】頼朝の時に、公許を得て、諸國の莊園に配置し、領内を支配せしめし職なり。守護の配下に屬せりといへども、世襲なるを以て、遂には、土地の勢力、守護にも勝るに至れり。應仁以後は、所領を失ひて、守護の家人となるもの多く、遂には、ただ、一鄉一村の主に、其の名の殘れるに過ぎざりき。

ちにおつ 墜レ地【句】すたれること。消滅すること。なくなること。論語「文武之道、未レ墜二於地一」。

ちにおて、らんをわすれず 治に居て亂を忘れず【文】やすくして、あやふきをわすれずを見よ。

ちめのうみ 茅渟海【名】大阪灣をいふ。また、和泉灘ともいへり。

ちのりは、ひとのくわにしかず 地利不レ如二人和一【文】てんのときはちのりにしかずを見よ。

ちばのすげさだたね 千葉介貞胤【名】下總介胤綱の玄孫。修理大夫、初めは大佛貞直に屬し、後に義貞に屬せり。正平六年京師に死す。年六十一。

ちはやぶる 千早振【枕】稜威速ぶるにて、強き勢のあらはるるをいふ。故に、神にかけていふ。又、强暴なる人などにつづけてもいへり。

ちびきのいは 千引岩【句】大きなる石。千人もかかりて、漸く引くほどの岩の意。

ちひさきはあへなむ 小きは敢へなむ【文】大鏡、菅公左遷の條に出でたる句。幼少なる者は、共に行くことを赦さむとの意なり。あへは堪ふるにて、俗にコラヘテヤル意。

ちひろ 千尋【名】ひろとは、兩手を左右に延ばしたるだけの長さにして、およそ、六尺ちかきをいふ。千尋の底など、深き形容にいへり。支那の字書には、八尺を尋といふと見えたり。

ちひろのはま 千尋の濱【句】遠く廣き濱といふ意。後撰集「伊勢の海の、千尋の濱に、拾ふとも、今は何てふ、かひかあるべき」。千尋の海といふは、底深き海なり。

ちぶつだう 持佛堂【名】持佛、または、祖先の位牌を置く堂をいふ。

ちぶりのかみ 道觸の神【名】往來する道を守り給ふ神。土佐日記「わだつみの、ちぶりの神に、手向する、ぬさのおひ風、やますふかなむ」。

ちへい 馳騁【名】かけまはること。馳驅、または、奔走に同じ。呂覽「驅騁而困耳矣」。

ちまき 粽、糉、角黍【名】五月の節句に、糯粉をこれて餅のごとし、蒸、または、笹の葉にて巻きて蒸したるもの。

ちまちだ 千町田【名】廣々として多くある田をいふ。

ちみまうりやう 螭魅罔兩【名】螭魅は山林の神、罔兩は魍魎ともかきて、川澤の神なり。何れも怪物なり。左傳に「螭魅罔兩、莫二能逢一之」。

ぢみやうゐん 持明院【名】京都にありて、藤原基家の家宅なりき。高倉天皇の皇子守貞親王、此の邸に居給ひて持明院宮と申されたり、また、後深草天皇、位を龜山天皇に讓りて、此を仙洞とし給ひき。故に、其の皇裔を、伏見、後伏見、後光嚴帝以下を、すべて持明院派といふ。されば、持明院といひて、伏見帝を指し申すこともあり。また、光嚴帝を申すこともあるなり。さて、龜山天皇の皇裔をば大覺寺派といふ。

ちん 朕【代】我と訓す。陛下の、御みづから稱したまふ語。此の字、もと支那にては、上下共に稱したりしを、秦の時に至りて、天子、獨これを稱することとなし、漢、なほ之を改めず、以て例となれるなり。史記の始皇本紀に「臣等昧死上二尊號一、王爲二秦王一、命爲レ制、令爲レ詔。天子自稱曰レ朕」と見えたり。

ちん 鴆【名】鳥の名。其の羽を浸したる酒を飲めば、忽ちに死す。其の雄を運日、其の雌を陰諧といふ。

ぢん 陣【名】陣の座ともいふ。諸衛の役所なり。貞丈雜記に「陣の座、また、左衛門の陣などいふは、軍陣のことにてはなし。禁裡にて、役人出仕して、役所に列座することを陣といふなり。陣は、役所といふ心なり。陣は列なると訓む字にて、人々多く立ちつらなるをいふ。軍陣の陣も此の心なり」と見えたり。ただし、諸衛の陣、各、所を異にせり。

ちんかん 趁趕【名】おひかけること。おひまはること。

ちんきい 陳希夷【名】人名。名は摶、字は圖南、宋の人。太宗に召されて重ぜられ、號を希夷先生と賜はる。

ちんけいしう 陳桂州【名】字は碩卿。宋の寧都の人なり。

ちんこはいしつ 沈痼癈疾【名】ねづよき病、及び、かたはをいふ。

ちんこん 砧根【名】砧をうつ臺木をいふ。また、石にても作れり。

ちんしう 珍羞【名】珍味といふに同じ。結構なる食物なり。羞は、すすむる滋味をいふ。

ちんじゆふ 鎮守府【名】古のは蝦夷に備ふる爲に置かれたるものにて、奥州膽澤郡に府ありき。將軍以下の職官ここにありて、足利氏の時まで存したり。今のは、各軍港に置かるるものにて、出師の準備、防禦の計畫、警備などを掌れり。

横須賀、吳、佐世保、舞鶴の四鎭守府これなり。

ちんすがう 陳子昂 【名】字は伯玉、梓州時丘の人なり。文詞雄麗にして、其の集を陳伯玉集といふ。

ちんぜん 闖然 【副、形】頭を出す狀。公羊傳「開之則闖然」

ちんちん 沈沈 【副、形】かすかにして深き貌。文選「沈々隱々」。また、茂れる貌にいふ。文選「衰柳尙沈々」。また、夜の、更けたるにいふ。「夜色沈々」で。

ぢんぢん 陣陣 【副、形】風のしきりに吹く狀にいふ。風の連りに吹くこと。

ちんぢゆう 沈重 【名】おちつきたる態度。

ちんてんあいなうせう 塵添壒嚢鈔 【名】書名。刊本二十卷あり。天文元年に、僧某が、勸修寺行譽、壒嚢鈔七卷を、塵袋といふ書を以て增補したるものにして、言辭の故事、本說等なのせたるものなり。

ちんでんぶつ 沈澱物 【名】水の底に沈みてよどみたる物をいふ。

ちんどく 鴆毒 【名】毒藥なり。鴆は、說文に「毒鳥也」とあり。また玉篇に「毒鳥食蛇、其羽噉酒飮之即死」とあり。酖毒ともかく。えんあん參照。

ちんなんぽ 鎭南浦 【名】朝鮮の地名。大同江の河口に在る港にして、本邦領事館のある處。

ちんにふ 闖入 【名】闖、或は硯にも作る。窺ひて俄に推し入る意なり。

ちんぱん 陳蕃 【名】支那の人。字仲擧、汝南平輿人也。祖、河東太守。蕃年十五、嘗閑二處一室一而庭宇蕪穢。父友同郡薛勤來候レ之。謂二陳蕃一曰、孺子何不二洒掃以待一賓客一。蕃曰、大丈夫處レ世、當レ掃二除天下一。安事二一室一乎。云々」と、後漢書に載せたり。

ちんぷ 陳腐 【名】ふるくさきこと。「陳腐の說」など。

ちんぺい 陳平 【名】支那の人の名。漢の高祖の臣なり。巧智ありて宰相となる。孝文帝の二年に卒す。諡を獻侯といふ。

ちんめん 沈湎 【名】飮酒にふけること。また、情に溺るるにもいふ。

ちんりやう 陳亮 【名】支那の人名。宋の婺州永康の人。才氣絕群、好んで兵を談じ、常に天下を經綸する志あり。孝宗帝の時上書し、將に擢用せられんとして、果さずして歿す。年五十五。文毅と諡す。

ちむる 帖木兒 【名】人の名。また訛りてタメルラン Tamerlane とも呼びなせり。元の太祖成吉思汗の裔孫にして器量あり。中央亞細亞を一統し、大蒙古王國を建てて、其の威、全世界を震恐せしめたりき。西曆千三百三十年に生れ、千四百五年に歿す。年七十六。

ちんえん 鎭遠 【名】軍艦の名。二十七八年の戰役に、支那より得たる軍艦にして、明治十五年獨逸にての製造に係り、支那にては、定遠號の姉妹艦として、東洋無二の大艦たりしもの、今、我が二等戰鬪艦たり。

ちめい 治命 【名】人の生前に、心の慥なる中に遺言するをいふ。精神亂れてより遺言するを亂命といふ。

ちめい 知命 【名】五十歲をいふ。論語「五十而知二天命一」とあるよりいふ。

ちもく 除目 【名】除とは、舊官を除して新官に就く義。目は、任官を、帳簿に記す意なりとぞ。春秋二季に行ふ。春は縣召（アカタメシ）とて地方官を、秋は司召（ツカサメシ）とて在京官を任ぜられしなり。

ちやうあん 長安 【名】支那峽西省の西安府の古名。周より隋、唐時代までの帝都たりし地。

ちやううんのぢん 鳥雲陣 【名】太平記三十一卷、笛吹峠の軍の條に「それ小勢を以て、大敵に戰ふには、鳥雲の陣に若くはなし。鳥雲の陣と申すは、まづ、後に山をあて、左右に水を境うて、敵を平野に見下し、我が勢の程を敵に見せずして、虎眞、狼卒、かはるがはる、射手を進めて戰ふものなり」とあり。

ちやうえいしきもく 貞永式目 【名】後堀河天皇の貞永元年、北條泰時、時房等、主として評定衆と共に、頼朝以來の幕府の判決例、其の他の律令などをもとゝして、制定したる法律なり。五十一條あり。

ちやうきうれい 張九齡 【名】支那の人名。唐初の人、玄宗帝の相たり。後に事を以て斥けられ、文詩を以て、みづから樂めり。文獻と諡す。

ちやうぎん 丁銀 【名】挺銀ともかく。慶長中鑄造したる銀貨にて、一枚四十二匁あり。板、または、棒の形したるを折りて用ひたり。

ちやうくわう 張皇 【名】皇大、棒大などに同じ。物を大げさにいふこと。

ちやうけいしふ 長慶集 【名】書名。七十一卷あり。白樂天の詩文集なり。その友元稹の序あり。長慶は、唐の穆宗の朝の年號。

ちやうけう、かへらんか 長鉸歸來乎 【文】自ら鬪り去らんとする意。鉸は劍の把なり。それを誘ふやうにいへるなり。また、ちやうけうかへんなんやいざとも訓めり。

ちやうけん 長絹 【名】もと、絹の名なりしを、其の絹にて製したる直垂を、單に長絹といひ、また、重ねて長絹の直垂などもいへり。

ちやうこうはん 張弘範 【名】支那の人名。字は仲疇、元の

都元帥にて、宋の軍を追窮し、遂に、其社稷を覆せし人なり。

ちやうさい　張載【名】支那の人名。字は子原、宋の人。人と爲り、志氣尋常ならず。崇文殿校書、同知太常禮院となる。神宗の熙寧十年に卒せり。世に橫渠先生と稱す。

ちやうさく　長策【名】長計に同じ。將來の計畫をいふ。「万世の長策」など。

ちやうしうのひと　長袖の人【句】公家をいふ。武士に對して、袖の長き服を着る故にいふ。「長袖の人、何ぞ兵事を知らんや」など。またナガソデとも訓む。

ちやうしどう　張之洞【名】支那の人名。清朝の柱石の臣。直隸南皮縣の人。字は香濤、夙に文名あり。現今、南清の重鎭として、兩廣總督の任にあり。

ちやうじん　丈人【名】杖人と通じ、老を尊みいふ語。また、舅の義にも用ふ。史記匈奴傳「自謂、我兒子、安敢望漢天子。漢天子我丈人行也」。

ちやうしや　長者【名】年の長けたる人。すべて、人の長たるもの。また、富貴なる人をいふ時は、チヤカジヤと濁りてよぶ。

ちやうじやう　長上【名】長者（チヤウシヤ）に同じ。

ちやうしやうそう　張昌宗【名】支那の人名。唐の則天武后の寵臣。

ちやうじゆん　張巡【名】支那の人名。唐の忠臣たり。鄧州南陽の人。群書に博通し、戰陣の方に委し。安祿山の亂に、睢陽を孤守し、遂に力盡きて捕へらる。賊將問ひて曰く、「君戰ふ毎に、皆裂け齒碎くとは何ぞや」、巡曰く、「わが志、逆賊を呑むに在り。但、力能はざるのみ」と。其の徒三十六人と共に殺さる。

ちやうすやま　茶臼山【名】大阪東成郡天王寺の西南に當れる小岡なり。第五回博覽會ぱ、其の麓に開かれたり。慶長十九年、大阪冬の陣の時、家康の陣營を設けし所にして、翌年夏の陣に、眞田幸村の戰死せし所なり。

ちやうせいけつ　張世傑【名】支那の人名。南宋の忠臣。范陽の人。宋の社稷傾かんとするや、力を盡して勤王し、臨安の沒落後、益王、廣王を奉じ、海に浮びて元兵に抗せしが、遂に力盡きて敗れ、水に溺れて崖山に死せり。

ちやうせう　張昭【名】支那の人名。字は子布、東漢の彭城の人。少うして學を好み、漢の天下亂るるや、孫策に屬し、長史撫軍中郎將と爲る。策死せんとする時、その弟權を託せられたり。

ちやうせうし　長嘯子【名】木下勝俊の號なり。

ちやうたう　張湯【名】支那の人名。漢の人。父、長安の丞となる。湯、幼にして從ひて行き、父出つれば、獨、舍を守る。

一日、鼠、肉を盜めり。父歸りて、怒りて湯を笞つ。湯、すなはち鼠の穴を堀りて、鼠と餘肉とを得て、鼠を堂下に磔し、其の罪狀を論ぜる判決文を添へたり。父、其の文辭を見るに、老獄吏の文の如し。父大に驚き、爾後獄文を書せしめたりとぞ。後に仕官して御史大夫となりしが、其の心、陰酷なるにより、遂に衆人に責められて自殺せり。されば、史記には、酷吏傳に收めたり。

ちやうぢやう　穰穰【副、形】禾實の豐なるにいふ。詩經「農年穰々」。また、すべて物の豐盛なるにもいふ。

ちやうちやうこ　悵悵乎【副】肯者の手引を失ひたる貌。途方に暮るること。如何ともせんやうなきこと。宋玉の文「帳々乎自失」。

ちやうてい　長程【名】長き里程、道程をいふ。また、遠き距離の地。

ちやうていきよくほ　長汀曲浦【句】遙に遠き海濱をいふ。曲は極ともかく。極は遠の義なり。

ちやうてう　定朝【名】僧の名。僧康尙の子。康尙、能く佛像を造り、佛師流の祖なるが、子の定朝、遙に父に勝れり。治安二年、法成寺金堂の佛を造り、其の賞として法橋に叙せられ、永承三年、山階寺の像を作りて法眼に叙せらる。天喜五年八月一日歿す。

ちやうろ　張魯【名】支那の人、沛國豐の人。益州の劉焉に仕ふ。督義司馬たり。焉死し、子璋立つに及び、魯の不順なるを以て、悉く、魯の母、及び家室を殺したり。魯遂に漢中に據り、鬼道を以て、民に敎へ、みつから師君と稱せり。

ちやくさう　着想【名】おもひつき、工夫などの意。

おやうぶ　丈夫【名】男子といふに同じ。孟子「富貴不能淫。貧賤不能移。威武不能屈。此之謂大丈夫」。もと、周の制に、八寸を尺とし、十尺を丈とす。人の長は八尺、故に丈夫といふ。即ち、周の丈に當る義なりと。

おやうふこう　長府侯【名】長府は、長門國の府中にして、今の豐浦の長府村、これなり。此の地は萩の支藩にして、毛利輝元の義子秀元以來、五萬石を領せり。

おやうほん　張本【名】事の起りをいふ。轉じて事を起したる人をいふ。發頭人。

おやうもん　定紋【名】其の家々に定まりたる紋所なり。

おやうりやう　張良【名】支那の人の名。漢の高祖に仕ふ。元、戰國の韓の臣にて、五世の間、相たりしを以て、韓亡びて後、その仇を報いんとして、秦始皇を博浪沙中に擊ちて、中らざりしを以て、逃れて隱れ居りしが、沛公起るに及び、之を輔けて、蕭何、韓信と共に、三傑の一人と稱せらる。高祖に後るゝこと八年にして歿せり。

ちやくたう 着到 【名】馳せ附くること。また、武家の名簿（ミヤウブ）に着到といふことあり。貞丈雜記に「着到をつくるといふは、出陣の前に、諸方より來り集まる軍勢の、到着したる人々の名を書くゆゑ、着到といふなり云々」とあるにて知るべし。

ちやせんけい 茶筅髻 【名】髻の結び方の名。茶筅は、茶の湯にて茶を立つるささらなり。髮の髻（モトドリ）を長く結び、其の端を茶筅の如くにしたるをいふ。

ちやのゆ 茶の湯 【名】茶を碾きたる粉を點（タ）てて呑む法式。足利時代に、珠光といふ僧の始めたることにて、豊臣氏の頃に、千利休といふものありて、其の作法定まれり。之を千家流といふ。其の他に、石州、遠州などの流派ありて、それ〴〵、式、作法を立てたり。

ちやんば Champa 占城、占婆 【名】地名。暹羅の東、安南の隣地に在り。

ちゆう 註、注 【名】本文の疑はしきを説明する文なり。又たゞシルフ意にも用ふ。「其先陣と注せらる」など。

ちゆういん 中陰 【名】佛家にて、人の死後、七七四十九日間をいふ。

ちゆうう 中有 【名】佛典にて、現世と冥途との中間の暗きところ。また、死生の中間をいふ。

ちゆうぐう 中宮 【名】中古皇后の御所。中世に皇后を申し、また、皇后の外に、同位の妃を立てさせられ、中宮と申すこともありき。これは、光仁以來の名稱。

ちゆうけい 仲兄 【名】兄弟を伯仲叔季と區別する時、長は伯、次は仲、三以下は末子を除きて、みな叔といひ、末は季なり。されば、仲兄は二男なり。

ちゆうけん 中堅 【名】大將軍の陣をいふ。大將は中軍にありて、精兵を集めたればいふなり。後漢「衛二其中堅一」。

ちゆうげん 中原 【名】野原の中の義。轉じて、廣き場所の意となり、更に中國の意に用ひたり。北史「光宅中原」。

ちゆうげん 忠言 【名】誠實なる詞。いはゆる人の、身の爲めとなる詞。

ちゆうげん 仲間 【名】仲間男の畧。武士の家に仕はれて、侍と召使との間の者。武家のしもべの頭、なり。

ちゆうげんのしか 中原の鹿 【名】天下を爭ふを、中原の鹿を逐ふなどいへるは、王位を鹿にたとへたるなり。史記准陰侯の傳に出でたり。

ちゆうこう 中興 【名】閏中といふに同じ。詩經に出づ。

ちゆうごく 中國 【名】山陽、山陰兩道の稱。又、支那にて、自國を中國ともいへり。

ちゆうさつ 駐劄 【名】外國などにとどまり居るをいふ。

「某國駐劄公使」など。

ちゆうじんこう 忠仁公 【名】藤原良房の諡號。

ちゆうしんをしゆとす 忠信を主とす 【文】忠誠にして眞實なることを主要とすといふ意。論語學而篇に「子曰、君子不レ重則不レ威。不レ學則不レ固。主二忠信一、無レ友二不レ如レ己者一」とあり。

ちゆうしやう 中瘴 【名】瘴癘の氣に當ること。瘴は、熱病、マラリヤ熱の類。癘は疫病なり。

ちゆうじやう 衷情 【名】心中。胸のそこ。至誠。

ちゆうじよ 忠恕 【名】心を盡して、他をいたはること。己の欲せざる所を人に施さざること。論語「忠恕而已矣」。

ちゆうせき 柱石 【名】國家の名臣。礎とも柱とも賴める臣。漢書「將軍、國之柱石也」。

ちゆうぞんじ 中尊寺 【名】寺の名。陸中國西磐井郡平泉村にあり。仁明帝の嘉祥三年、慈覺大師開基の由にて、其の後、藤原清衡の造立せるものぞ。建武四年燒けて、今は、經堂と、金色堂とを存せるのみ。金色堂は、金碧を以て飾りて光彩耀如たり。

ちゆうねん 中年 【名】兒童と、老人との間の年輩のもの。即ち壯丁の年ごろのものをいふ。

ちゆうぶこう 忠武侯 【名】諸葛亮の諡號。

ちゆうよう 中庸 【名】何れにもかたよらず、中を得たるをいふ。また、四書中の經書の名。孔子の孫、子思の述作せるもの。

ちゆうようのせちゑ 重陽の節會 【名】重陽の節會なり。九月九日、菊花の宴を開かれて、群臣に菊酒を賜はる儀式。

ちようし 冢子 【名】嫡子、長子などいふに同じ。禮記「冢子則大牢」。

ちようそ 重祚 【名】重ねて踐祚し賜ふことをいふ。二度、天子の御位に即かせらるるをいふ。

ちようはう 重寶 【名】便利の意。「ちようはうをする」など。また、大切なる寶といふ意の時は、ちゆうはうとよむべし。

ちようへい 徵兵 【名】六寶令の制定には、支那に摸して軍團の制を立てられ、徵兵の法は、男子の二十歲より六十歲までを正丁とし、一國の正丁を通算して、其の三分一を徵する制なりき。然るに、其の方法次第に亂れ、其の鍛練も行き屆かず、また、兵士も田租を免るるが爲に、役目の如くに出づ

るやうになりたれば、遂には筑紫に存せしのみにて、諸國の領國は停止するに至れり。これ、武家の勢力をなす原因となれるなり。

ちようやう　重陽【名】九月九日を重陽の節といふ。類書纂要に「九爲二陽數一。九日與二九月一並應。故曰二重陽一」とあり。きくのえん參照。

ちようやく　重譯【名】兩國の言語を通ぜしむるを譯といふ。重譯は、それを再び譯することなり。史記三王世家「遠方殊俗重レ譯而朝」。

ちよくかくりよく　直覺力【名】見聞して、直に其の是非を覺り得る力をいふ。

ちよくかん　敕勘【名】勅命によりて、勘當せらるるをいふ。陛下の御心に觸れて、御叱りを蒙ること。チヨツカンとよぶ。

ちよくせつ　直接【名】さしつけ、うちつけなどいふに同じ。間接の對語。「直接に談判す」などは、にの添はりて副詞となれるもの。間に人を交へず、其の人をさしむかひて談ずるなり。間接は、其の反對にて、間に物を隔ててあるをいふ。遠まはし、人傳にてなどの意。「間接に損害を被る」など。

ちよくせつこくぜい　直接國稅【名】國家に、直接に納むる稅をいふ。例へば、地租、所得稅の如きものなり。また、間接國稅とは、酒、菓子などの如く、製造人より、直接に國家に納稅すれど、其の實は之を飮食する人が納むるにて、製造人は、一時、立てかへをするが如きなり。

ちよくちよく　矗矗【副、形】高く聳え立つ狀にいふ。上林賦に「崇山矗々、巃嵸崔嵬」で、また、吳都賦に「矗々森竦、蓊茸蓼蔥」とあるは、注に「竹深長貌」とあり。

ちよくばつ　陟罰【名】黜陟といふに同じ。功あるを陟し、罪あるを罰するなり。

ちよくん　儲君【名】よつぎのきみ。皇太子をいふ。

ちよじ　儲貳【名】儲君に同じ。

ちよじゆう　女從【名】禮記の註に「女從は姪娣なり」とあり。

ちよたく　瀦澤【名】澤、沼などいふに同じ。瀦は、水の滯留せる所。

ちよちく　瀦瀇【名】たまり水をいふなり。

ちよちく　儲蓄【名】たくはへ。金錢を備へおきて、後日の用に充つるをいふ。後漢書、章帝記に「節用儲蓄、以備二凶災一」とあり。

ぢよちゆうのげうしゆん　女中の堯舜【句】支那宋の宣仁太后の異名。其の德の高きを歎美していへるなり。

ちよのふるみち　千代の古道【名】地名。山城國葛野郡に在り。詞の縁にて、古き意にいひかけて用ひられたり。後撰集「仁和の帝、嵯峨の御時の例にて、芹川に行幸し玉ひける日、在原業平。さがの山、御幸たえにし、芹川の、千代のふるみち、跡はありけり」。

ちよれき　樗櫪【名】物のやくにも立たぬ木をいふ。それよりして、役に立たぬ人にたとへいふ。

ちりかかるをやくもるといふらむ　散りかかるをや、曇るといふらむ【句】古今集、伊勢「年をへて、花の鏡となる水は、ちりかかるをや、曇るといふらむ」。

ちりぼふ　散亂【動ハ四】散りみだる。散々になる。離散する。好忠集「庭の面に、なづなの花の、散りぼへば、春まで消ねぬ、雪かとぞ見る」。

つ

つ津【名】船の泊る所。船つき。湊。轉じて、渡し場をもいふ。

ついがき 築垣【名】つきがきの音便。ついぢに同じ。

ついがさね 衝重【名】三方（サンバウ）の一種にて、檜の白木にて作りたる、足のなき膳の如きものにて、それを重ねたるをいふ。

ついく 對句【名】文章を飾る法に、同じ樣なる句を排列したるをいふ。例へば「いふは易く、行ふは難し」「花笑ひ鳥うたふ」などの類なり。

ついたち 朔、月立【名】つきたちの音便にて、月の初めの日、即ち一日をいふ。また、ついたちがたいひて、一日より十日までをもいふことあり。

ついたて 衝立【名】ついたてさうじの略。襖、障子などに似て臺あり。席上に立てて、物を遮るに用ふ。

ついぢ 築地【名】昔ついひぢといへり。柱を立て板を添へ、泥土にて、其の間を塡めて築きたる垣なり。上を瓦にて葺ける墻塀なり。

ついづ 序【動タ下二】次第を立つ。順序を定む。

ついひぢ 築墻【名】ついぢを見よ。

ついゐる 衝居【動ワ上一】つくばふ。其のまゝに、そこに膝つき居る。

ついやう 痛痒【名】いたきとかゆきと。轉じて自己に關する利害得失をいふ。痛痒、正しくは、ツウシヤウと訓むべし。シヤウはカユキ意にて、イヤウは臘物（デキモノ）のことなればなり。

つうえつ 通謁【名】史記の注に、「謂下以二札書一姓名一若今之通刺上」とあり。即ち名刺を通じて、面會を求むること。

つうくわい 痛快【名】非常に快きこと。法書苑に「吳皇象善行二草書一、世稱二沈着痛快一」。

つうくわん 通款【名】親みの心を他に通はすこと。北史「擧二三荊之地一遂二款梁國一」。

つうげう 通曉【名】夜を徹して曉に至ること。徹夜、通宵などに同じ。また、事物を、よくのみこみをることにもいふ。

つうげん 痛言【名】聞くに堪へかぬる程烈しき言。身に徹する言。諫言することなど。

つうこ 通乎【副】塞り滯る所なく、よく行き屆くことをいふ。呂氏春秋「通乎用レ非二其有一」。

つうし 通視【名】俗にやぶにらみといふもの。爾雅釋疾病「眸子明而不レ正謂二通視一」。

つうせつ 痛切【名】深切なること。適切なること。其の事に

よく適すること。漢書「其言多痛切發二于至誠一」。また、非常に身心を痛むること。吳質の書「可レ爲二痛切一」。李白の賦「痛切レ骨而傷レ心」。

つうそ 痛楚【名】楚も、辛痛の義にて、痛み苦しむこと。

つうろん Toulon【名】地名。地中海に於ける、佛蘭西海軍の根據地。

つか 柄【名】刀の、手にて握るべき處。又、筆の管をもいふ。

つか 束【名】長を計るにいふ語。一束は、一握りだけの長さにて、即ち親指を除きたる丈の廣さなり。親指と小指とを除きて、指三本伏せたるだけの長さを三つ伏（ブセ）といふ。矢の長さをいふに、十二束三伏などいふは、これなり。

つかさめし 官召【名】京官の除目（デモク）なり。京都の官人を任ずる式。地方官を任ずるを縣召（アガタノメシ）といふ。公事根源に「これは、三月三日より先に行はるべき事なれど、今は秋の除目とぞいふめる。冬にも及ぶなり云々。つかさめしとは、此の、秋の除目を申すなり。あがためしは、春のなるべし」とあり。ちもく參照。

つかふるひのもの 上日の者【句】當番の者をいふ。官職難儀に、「上日、つかふるひとよも。闕白を始め、大臣、公卿以下、堂上、堂下、公人の如きまで、日々、奉公の日を上といひ、云々、晝つかふるを上日といふ。夜を上夜といふ」とあり。

つがんらんえう 通鑑覽要【名】書名。三十七卷あり。清人姚培謙、張景星二人の編。別ちて、前編、正編、續篇、明史の四とす。

つきあきらかにほしまれに、うじやくみなみにさぶ 月明星稀烏鵲南飛、繞レ樹三匝何枝可レ依【文】魏の武帝（曹操）が短歌行に出でたる句なり。全文は、文選の六の卷にあり。眼前の夜景なり。烏鵲はカサヽギにて、その鳥の、いづれの枝にとゞまるべきかとなり。

つきかげばかりぞ、やへむぐらにもさはらず、さしいりたる 月影許ぞ八重葎にも障らず差入りたる【文】源氏物語桐壺の卷の文なり。紀貫之の「とふ人も、なき宿なれど、來る春は、八重葎にも、さはらざりけり」とある歌によりて、月影ばかりさはいへるなり。

つきかず 月數【名】鎧の名。源氏八甲の一。

つきがみしも 繼上下【名】かたぎぬを見よ。

つきげ 桃花毛 月毛【名】馬の毛色の名。白き色に薄赤ばみたる色を帶びて、灰色なるをいふ。桃花は、桃花鳥にして、ツキともトキとも稱し、鷺に似て、其の羽毛、灰色なる鳥なり。

つきしろ 月白【名】月の昇らんとする時、空のしらむこと。雲にかくれたる月のほのぐと見ゆること。

つきしろ 月代 【名】維新前に、男子の髪の、額に近き部を剃りしをいふ。北條氏の頃より始まれりと。始めは、いきぬきに、月の形に、少し剃りしが故に、此の稱あり。

つき、たいしやうせいをおかす 月大將星を犯す 【文】昔、天文家のいひしことにて、月が、大將星の光を奪ふとなり。さやうの天象ある時は、大將たる人に災ありとして、諸社寺に祈りて愼しむ習慣なりき。

つきづきし 付付 【形】似合し、似はつかはし、ふさはし、相應したり、などの意。徒然草「家居のつきづきしくあらまほしきこそ、假の宿とは思へど」

つきのみやこ 月の都 【名】月宮をいふ。轉じて帝都をいふ。月宮の故事は、太平廣記に、『羅公遠傳曰、中秋の夜、玄宗、宮中にて月を弄ぶ。公遠奏して曰く、「陛下、臣に從ひ月中に遊ばんや否や」、乃ち杜杖を取りて空に向ひて抛てば、化して大橋となる、其の色銀の如し。帝に請ひて同じく登る。約行くこと數十里、精光目を奪ひ、寒氣人を侵す。遂に大城闕に到る。公遠曰、「此れ月宮なり」と。仙女數百、皆、素練寬裳にして、廣庭に舞ふ。帝問ひて曰く、「これ何の曲ぞ」。曰く、「霓裳羽衣なり」と。玄宗、密に其の聲調を記して回る。顧れば、其の橋歩に隨て滅す』。

つきのわくわんぱく 月輪關白 【名】藤原兼實なり。家を九條と稱せり。文治建久の頃、眞相の稱ありき。

つきのわのみささぎ 月輪陵 【名】山城國愛宕郡今熊野村泉涌寺に在り。四條、後水尾、明正、後光明、後西院、靈元、東山、中御門、櫻町、桃園、後櫻町、後桃園、十二帝の御陵を申す。次に光格、仁孝、兩帝の陵を後月輪陵と申し、孝明帝のを、後月輪東山陵と申す。

つきはなのなげきのほまれ 月花の歎の譽 【句】歌道の名譽。歌は月花に對して、嘆賞することの限りなき情より眺み出でらるるものなれば、かくいふ。

つきひは、ひやくだいのくわかく 月日は百代の過客 【文】月日の過ぎ易きをいふ。唐の李太白が、春夜桃李園序に、「夫天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客」とあり。

つきひはひとをまたず 月日は人を待たず 【文】せいれんかされてきたらずを見よ。

つく 釶 【名】折釘なり。また、弓に釶打つといふことあり。そは、弓の握の上に釘を打ちて、拳より、矢の脱れぬやうにするなり。

つくし 筑紫 【名】ふるく、今の筑前筑後をいひ。又九州の總稱にも用ひき。

つくしごと 筑紫琴 【名】箏の琴。即ち、今の十三絃の箏なり。宇多帝のとき、筑紫の石川色子といふもの、異朝の人より習ひ傳へたるより、筑紫箏とはいふとぞ

つくす 勦 【動サ四】殺しつくすこと。すつかり絕えしむることに。「勦賊」など

つくばね 筑波嶺 【名】常陸の筑波山をいふ。ふるくは、ろを添へてもいへり。萬葉集「さごろもの、小筑波嶺ろの、山のさき云々」また「筑波れの、れろに霞みゐ、過ぎがてに云々」などもあり。

つくばやま 筑波山 【名】常陸國筑波郡の北境に位し、眞壁、新治二郡に跨る、即ちいにしへの筑波嶺なり。

つくばやまにかけてきみをねがひ 筑波山にかけて君を願ひ 【句】古今集の序中の文なり筑波山にいひかけて、君の御惠を願ふとなり。集中に「筑波山、このもかのもに、蔭はあれど、君が御かげに、ますかげはなし」

つごもり 月隱、月盡、晦 【名】月の終りの日、すなはち晦をいふ。又、月の終りにならんとする頃をつごもりがたといふ。

つざん 杜撰 【名】詩文著述等に、證據なきことを有りげに述ぶるをいふ。

つし 逗子 【名】地名。相模國三浦郡田越村大字逗子。海水浴場として、今は有名なり。

つし 厨子 【名】いにしへ、衣類調度などを入れおきしもの。又、佛像を安置するものもあり。

つしむら 都志村 【名】淡路の都志村は、高田嘉兵衛の生れし地なり。和名抄に、津名郡に都志郷(豆志)あり。

づだ 頭陀 【名】梵語なり。行脚。行く行く食を乞ひて修行する僧。又、乞ひたる食物を入るるものをもいふ。頭陀袋の略。同覺要鏡に「梵云杜多、漢云抖數今訛爲頭陀」とあり。

つだせん 津田仙 【名】紀州和歌山の人、東京麻布に學農社を興し、現に之が社長たり。

つちうら 土浦 【名】地名。常陸國新治郡土浦町。

つちぐも 土蜘蛛 【名】上古に、岩窟、土室などに住せる猛烈なる夷族の名。

つちみかどどの 土御門殿 【名】藤原道長の邸なり。後にまた、後鳥羽上皇、此に宮造りし給ひて、大内に擬せられぬ。其の舊址は、今の京都市上京區烏丸通上長者町の邊なりと。

つちや ほうしう 土屋鳳洲 【名】泉州岸和田の人。名は正明、漢學者にて、師範學校長等の職を經て、現に華族女學校教官たり。

つづしろふ 囁 【動ハ四】少しづつ食ふをいふ。もとは、つづしみを延べたる詞にて、つづしるは、少しづつ歌ふをいふ。

つつましげに 愼ましげに 【副】恥かしさうに。さしひか

へめに。慎むやうにて。うちとけ雖きやうにて。

つづまやかに 約に 【副】手輕に、簡略に、などの意。

つつみ 堤朝風 【名】三五郎と稱し、不占と號せり。幕府旗組頭を勤む。博覽の人なり。天保五年四月七日歿せり。年七十。

つづら 葛籠、衣箱 【名】葛草にて織りたる籠。また、竹、あろひは、木皮にて編みたる籠を、紙にて貼りたるものにて、衣服などいるるもの。

つづらをり 葛折、九折坂 【名】葛蔓の折れ曲れるが如く、曲折したる坂路をいふ。「羊腸」といふに同じ。また、馬術の法に、幾度も馬をのり廻すをもいふとぞ。

つづりさせてふむし 襤褸させてふ蟲 【句】蟋蟀の鳴く音が、襤褸を綴り刺せといふ如く聞ゆるを以ていへり。古今集「秋風に、綻びぬらし、藤袴、つづりさせてふ、きりぎりす鳴く」とあり。つづれは衣の破れ綻びたるをいふ。又このキリギリスは、今のコホロギなり。

つづりのそで 褸襤の袖 【名】破れたる衣の袖なり。

つづれのにしき 綴の錦 【名】織物の名。織地に透間ありて、襤褸を繼ぎあはせたるやうに見ゆるもの。

つとむ 勗、勉、力、勤、務 【動マ下二】勗は、勉に同じく勵ます意。「自勗」は、みづから怠惰心に打ち克ちて、志氣を勵ますなり。勉は、強ひてつとむる意。「勉強」。「勉勵」。力は、力を入れて精出すこと。「力學」。「力行」など。勤は、骨折り精出すこと。力の意あり。「勤學」。「勤勉」。「勤儉」。務は、專力也と註し、其の事を精一ぱいにつとむること。「勤務」。「服務」。「常務」など。

つながぬふね 不繫舟 【名】書名。滋野貞融の和歌文章をあつめたるもの。三卷あり。上中二卷は、その文章五十三篇をあつめ、下卷は、和歌二百七十七首を輯む。江戸隅田川邊に庵を作りて、不繫舟と名づけたる、其庵號をとれるなり。

つねのおましどころ 常の御座所 【名】天皇の平生の御座所をいふ。

つねのさん 恒の產 【名】定まれる財產なり。定まれる職業ありて、動かぬ財產を有するをいふ。孟子に「無恒產、而有恒心者、惟士爲能。若民則無恒產、因無恒心、云々」とあり。

つねよしんわう 恒世親王 【名】淳和天皇の御子。三品中務卿となり、天長三年五月薨じ給へり。親王はシンナウとよぶ。

つねよりけに 常より殊に 【名】けには、清みてよむべし。殊にまさりて、常よりもまさりて、などの意。

つのぎ 角木 【名】鍬の名。角にて作れる故にいふ。

つのくにのこやのひまなきまつりごと 津國の昆陽の暇なき政 【句】和泉式部の歌に「津の國の、こやとも、人をいふべきに、ひまこそなけれ、葦の八重葺」とある歌によりて、あやなせる句にて、葦の幾重にも葺ける屋の隙なきを、政の間斷なきによせていへるなり。昆陽は、攝津國河邊郡の地名にて、いま、稻野村といふ。

つのな 茅花 【名】今、チバナともいふ。茅といふ草の花。轉じて、直ちに茅をいふ。

つのめさはのひ 燕澤碑 【名】もうこのひを見よ

つはもの 兵器、武具、武人 【名】戰に用ふる道具。また、其の武器を用ふる武人をもいふ。

つはやへことしろぬしのかみ 都波八重事代主神 【名】唯に事代主神とも申し、また、葛城一言主神ともいふ。大國主神の長子。

つばらに 委曲 【副】つまびらかに、つばらかになどの意。

つひのわかれ 終の別 【名】最後のわかれ。此の世の訣別なり。

つぼ 壺 壺 坪 【名】器物の、體圓くして、口の窄みたるものをいふ。壺の字を宛つ。音コ。又庭園の、一區畫をなしたる處をもいふ。壺の字を宛つ、音コン。內裏の梨壺、梅壺、桐壺、藤壺などは、其の庭に植ゑたる木によりての名なり。

つぼうち ゆうざう 坪內雄藏 【名】現在の人。尾張の產にして文學博士たり。逍遙と號し、又、春のや主人といふ。早稻田大學文科の主任なり。

つぼきりのたち 壺切太刀 【名】東宮の御護りの太刀なり。醍醐天皇、東宮におはしましし時、藤原長良公奉れり。それより、代々皇太子の御護の太刀となれり。

つぼさうぞく 壺裝束 【名】市女笠といふ笠を冠り、薄き衣を着て、中ゆひたる婦人の裝束をいふ。

つぼね 局 【名】宮中殿中の部屋、曹子、また、局を有する官女のこと、また、武家時代に、諸侯の奥向に仕ふる婦人の長をいふ。

つぼばば 壺馬場、坪馬場 【名】廐內の馬場なり。つぼとは廐のこと。

つまぎ 爪木 【名】薪のこと。

つまど 妻戶 【名】昔の家作りに、正殿の四方に、開き戶あり。これをツマドといへり。貞丈雜記に、「妻戶の事、これも、主殿にある戶なり、兩方へ開く舞戶なり」とあり。また、家屋雜考に、「端戶の義なり。つまとは、總べて物のはしをいふ名なればなり」とも見ゐたり。

つみなふ 罪 【動ハ四】罪するなり。罪に行ふをいふ。

つむぎ 紬 【名】織物の名、眞綿を紡ぎ取りて織れる絹布を

いふ。

つもぢ 津綟子 【名】 綟子は、麻絲を捩ぢりて、目を荒く織りたるもの。伊勢の津の名産なれば、津もぢといふ。

つやま 津山 【名】 美作國西北條郡津山町。德川氏のとき、元祿十年、松平宣富、この地を治めて十萬石を領し、子孫世襲せり。侯の江戸の邸は、鍛冶橋内の堀端にありき。

つややかに 艶やかに 【副】 つやありて麗はしき狀にいふ。

つゆらはひ 露拂 【名】 行列の先導をいふ。道俤の露を拂ひて路を開く意なり。

つらがまち 面輔 【名】 上下の顎(アゴ)をいふ。また、顔付さいふほどの意にもいふ。

つらつき 面貌 【名】 顔のさま。顔つき。顔色。

つらだましひ 面魂 【名】 心の勇猛なるさまの、面に表れたるをいふ。「不敵の面魂」など。

つらつらつばき 列列椿 【名】 椿の木の繁く植ゑられたるをいふ。萬葉集「巨勢山の、列列椿つらつらに、見つゝおもふな、巨勢の春野を」。

つらら 氷柱 【名】 軒などに、棒の如くなりてさがれる氷をいふ。タルヒ。

つるが 敦賀 【名】 越前敦賀郡敦賀町。崇神天皇の朝に、任那の國より額に角ある人來る。俗に、之を呼んで角鹿の人といひしが、やがて、地名は、これより起れりさそ。海外より來航の要地にして、仲哀天皇の笥飯宮、こゝにあり。南北朝の時の金崎城も、この地にあり。

つるぎたち 劍太刀 【枕】 劍も太刀も研くべきものなれば、とぐの枕詞とす。

つるぶくろ 弦袋 【名】 弦巻ともいふ。弓弦を巻きて收めおくもの。

つれづれぐさ 徒然草 【名】 書名。吉田兼好の隨筆なり。文章雅健にして、或は空理を說き、或は世事を談じ、議論風發、頗る誦するに足る。廣く世に行はれたるが故に解釋書類甚だ多し。

つれなし 強顏 【形】 つれもなしなどもいふ。なさけなし。心強し。

つゐねん 追念 【名】 其の人の死後に、其の人を思ひ起すこと。追懷、追思、に同じ。

つゐな 追儺 【名】 おにやらひを見よ。

つゐび 追尾 【名】 あとを追ふこと。

て

てい 帝 【名】 天皇。支那の天子。白虎通に「德合二天地一者、稱レ帝」とあり。

てい 羝 【名】 生れて三歳になる羊。易經「羝羊觸藩」。

てい 悌 【名】 兄、又、長上によく仕ふるをいふ。論語「孝悌者爲レ仁之本歟」。

ていかん 程顥 【名】 支那の人の名。字は正叔、頤の弟なり。宋の人。少くして高識あり。兄と共に道學を修め、其の門下に出づるもの多し。世に伊川先生と稱せり。徽宗の大觀元年卒す。正公と諡し、伊陽伯に封ぜられ、兄弟共に孔子の廟庭に從祀せらる。

ていいう 丁憂 【名】 父母の喪を行ふ間。即ち三年間の喪中をいふ。

ていかう 程頤 【名】 支那の人名。字は伯淳、宋の人、伊川の兄なり。道學を以て世に鳴る。明道先生と稱せられ、神宗の元豐八年に卒せり。純公と諡せられ、河南伯に封ぜらる。

ていがく 定額 【名】 定まりたるたか。西島元曰く、「舊額、原額等、額字謂二定例一也。然探二索字書一、斷無二定義一。按、詩召南、麟之定註、定額也。以レ額爲レ定、恐出レ此」とあり。

ていぎ 廷議 【名】 朝廷の議をいふ。

ていきせん 定期船 【名】 毎月幾度と期を定めて、航海する船をいふ。

ていきん 庭訓 【名】 家庭の教訓をいふ。晉書の孫盛傳に「盛性方嚴有二軌憲一。雖二子孫班白一而庭訓愈竣」とあり。訓はキンとよむべし。

ていぎん 艇銀 【名】 ちやうさんともいふ。銀を棒となして、貨幣に用ひしものなり。ちやうさんを見よ。

ていきんわうらい 庭訓往來 【名】 書名。一卷あり。玄慧法師の著。一年十二月間の手紙の文をのせたり。むかし、習字手本などとして、專ら行はれたりき。

ていきやう 氐羌 【名】 支那の古代に、四方に棲みし戎狄なり。詩經「自彼氐羌」。

ていくわい 低佪 【名】 うろつきてさまよふこと。華嚴經音義に「低佪、謂二姍遊一也」とあり。姍は行く狀をいふ。

ていくわく 鼎鑊 【名】 足の有る鍋を鼎といひ、足無きを鑊といふ。蘇東坡の文「以二刀鋸鼎鑊一、待二天下之士一」とあり。

ていけ 天氣 【名】 てけを見よ。

ていけい 提携 【名】 人と共に事をなすこと。携へ伴ふこと。史記「況以二兩賢王一、在提右携而責二殺レ王之罪一、滅二燕易矣一」と。もと耳を提げ、手を携へて、相語る義なり。禮記「與

レ之提携則兩手奉二長者之手一貧」鄙辟レ耳詔レ之」とあり。

ていけい 提刑 【名】支那の官名。武臣を以て之に任ず。奸盗を始め、冤枉を申理することを掌る。

ていご 抵梧 【名】抵は觸なり。捂は差迕なり。俗にくひちがひ、ゆきちがひのこと。漢書「甚多二疏略一、或有二抵梧一」。

ていご 亭午 【名】正午。孫綽の遊天台山賦に、「義和亭午」とある註、「義和、日也。亭至也。日中也」と。正午に至る義。また一説に、亭は直(アタル)也。亭午は直午也ともいへり。

ていこく 帝國 【名】王國の對にして、皇帝の統治し給ふ國家をいふ。

ていこくぎくわい 帝國議會 【名】天皇の、統治權を行ひ給ふ上の機關にして、立法の府なり。陛下は、法律の制定に際して、憲法の定むる處に據りて、まづ議會に諮り給ひ、其の同意を得て發布したまふ。されば、立法權は、陛下と議會とにありといふべし。我が國現時の制は、貴衆兩院に分かれ、衆議院は、人民の選擧になり、貴族院は、皇族、公侯爵、其他の華族、勅選議員等より成る。

ていし 涕泗 【名】涙なり。目より出づるを涕といひ、鼻より出づるを泗といふ。詩經「涕泗滂沱」。

でいし 泥滓 【名】滓は澱なり。泥はドロなり。俗に、ちりかすなどの意。

ていしよく 弟子職 【名】書名。管子の篇名なり。管子は管仲の著、のちに漢の劉向八十六篇としたり。

ていし 蹄視 【動サ變】熟視する、みつむる、などに同じ。審に見ること。

ていしゆ 低首 【名】首を低くたるること。史記「封若皆低首仰給」。

ていしゆのがく 程朱の學 【名】支那宋代の學派なり。即ち、程明道、程伊川、及び其の流を汲める朱熹の學なり。わが國の藤原惺窩、林羅山等、皆この學派に屬せり。其の說く所、理性、心性を研究して、聖人に至るに在り。

ていしよく 抵觸 【名】相互につき當ること。ふれあふこと。さしさはりになること。

ていじよしやう 丁汝昌 【名】支那北洋艦隊水師提督たりしが、明治廿七八年の役に、威海衛の陷るに及び、兵器、軍艦を、我が國に納れて降伏を乞ひ、自身は毒藥を飲みて節に殉せり。これ二十八年二月十二日のことなり。

ていじんし 亭子院 【名】宇多天皇を申す。

ていせいこう 鄭成功 【名】人名。父は支那泉州南安縣の人にして芝龍といひき。芝龍、屢々、わが國の平戸港に往來し、松浦侯より宅地を千里濱に賜はり、田川氏を娶りて、寛永元年七月、成功を生みぬ。後に、父子供に本國に歸りて明朝に仕へ、明の傾くに及び、成功は節を持して屈せず、臺灣に據りて清朝に抗せり。寛文二年五月歿せり。年三十九。其の長子經、經の次子克塽まで、およそ三世三十八年間、なほ、明の正朔を奉じ、恢復を以て任とせり。松浦侯、其の義勇を感じ、千里濱に其の碑を立つ。其の碑文は、載せて、善庵隨筆にあり。

ていせいをんせい 定省溫凊 【句】禮記に「凡爲レ子之禮、冬溫而夏凊、昏定而晨省」とありて、父母の身體を安らかにし、父母の意志を樂しましむるをいふ。

ていぜん 挺然 【副、形】拔け出でたる貌にいふ。晉書劉毅傳に、「方正亮直、挺然不群」とあり。

ていたう 鼎鐺 【名】かなへ。三つ足にて鍋の類なり。

ていだうわうだう 帝道王道 【名】帝王の道。國家人民を治め給ふ道をいふ。

ていたらく 爲體 【名】有樣、體裁などいふ意。

ていてい 亭々 【副、形】高く聳え立つ貌にいふ。

ていねい 丁寧 【名】俗に叮嚀に作る。懇に。心切に。後漢書耶顗傳に「丁寧再三、留神於此」とあり。また國語に「戰以二鐸于丁寧一、儆二其民一也」とある丁寧(ドラ)は鉦なり。之を鳴して兵民を戒しめしより、轉じて、懇に諭す義に用ひしなり。

ていねん 丁年 【名】一人前に成長したること。古は二十歳、今は滿二十年をいふ。

ていはう 綈袍 【名】厚き絹の上衣。史記「取二綈袍一賜」。

ていほう 提封 【名】擧國といふに同じ。提は擧なり。封は封土にて、諸侯の領地。漢書の刑法志「提封萬井」。(井は、地、方一里をいふ)。

ていむずがは Thames 【名】英の國都、倫敦府を貫流して、英吉利水道に入る河なり。

ていゐ 庭闈 【名】王宮の小門。また、王宮内。張九齡の文「從レ兄拜二庭闈一」。

ていゐ 廷尉 【名】獄非違使尉の唐名。それより直ちに獄非違使をもいへり。支那にては、秦の頃設けし官にて、刑事一切のことを掌る。後漢書「聽獄必質二於朝廷一、與レ衆共レ之。尉平也。故稱二廷尉一」とあり。

ていおうぼく 趙甌北 【名】清の江南陽湖の人。名は翼、字は雲松。乾隆三年、第三を以て進士第に就く。詩に巧にして、文を屬し、二十二史劄記など、著書多し。

ていがい 超涯 【名】過分といふに同じ。分涯に越ゆるをいふ。

ていきん 朝覲 【名】支那にて、諸侯の天子に朝するをいふ。又、我が國にて「朝覲の行幸」といふは、天子の、上皇、又國母等の宮に行幸し給ふをいふなり。

でうくわくしふ 調鶴集【名】書名。井上文雄の家集なり。

でうくわん 條款【名】箇條。事のかどかど。

てうけん 朝憲【名】朝廷の憲法なり。

でうけん 條件【名】ことがらくだり。かど。

てうさんだいぶ 朝散大夫【名】從五位下の唐名。

てうさんぼし 朝三暮四【名】詐術を用ひて、人を愚弄するをいふ。狙公が、狙に芧を與ふるに、朝三つ暮四つ宛といひしに、衆狙怒りしかば、更に朝四つ暮三つ宛といひしに、衆狙喜びしよしの列子中の寓話に本づく。

でうし 調子【名】樂器の音の高低長短の程、即ち、しらべ。又、事の工合。又俗に、運(ウン)といふほどの義にも用ふ。

でうしん 調進【名】とゝのへ進らすること。調達(チヤウタツ)すること。

てうしふだう 朝集堂【名】八省院の中の應天門と、會昌門との間に、東西に分かれて立ちたる殿。

でうしん 髫齔【名】髫は小兒の垂髪なり。齔は毀齒(ミツバ)なり。七八歳、即ち齒のかはる頃抜くる齒をいふ。髫や齔の年輩といふ意にて、小兒をいふ。

てうじやく 朝夕【名】奉行衆の下使。おもに、足利時代にいへり。

てうす 朝【動サ變】雅樂寮名の註に、「臣見(ユルサ)君曰(ニフト)朝」とあり。入朝するといふに同じ。また、此の意を取りて、河水の海に入るを、てうせいと云へり。てうそう參照。

てうせい 超世【名】世間の外にぬけ出でたるをいふ。世にすぐれたること。

てうそう 朝宗【名】小部分の物が、悉皆、大部分の所に、一所に集り來るをいふ。書經に「江漢朝二宗于海一」とあり。

てうたう 蜩螗【名】せみのこと。

てうだうゐん 朝堂院【名】だいごくでんを見よ。

てうだうこく 趙充國【名】支那漢時代の人。屯田の制を改めし人なり。

てうてう 刁刁【副、形】動く狀。ゆらめく貌。莊子の釋文に「刁刁、動搖貌」とあり。

でうでう 嫋嫋【副、形】風の動く貌。長く弱々しき貌。又、ゆつたりと揚る貌、などにいふ。又歇文の、言外に餘情を含めるを、「餘韻嫋々」などいへり。

てうどがけ 調度懸【名】弓矢を立て懸けておく器具。轉じては、主君の弓を手にもち、矢を背に負ひて、主の御供するものをいへり。

てうもく 鳥目【名】ぜにをいふ。錢の圓くして、方なる孔のあきたるさま、鵞鳥の目に似たる故にいふとぞ。鵞眼(ガカン)。

てうやうのほうめい 朝陽の鳳鳴【句】朝日に、鳳凰の鳴くをいふ。至極芽出度き意に用ふ。

てうやへいそく 朝野敝塞【句】朝は朝廷をいひ、野は民間をいふ。朝廷に對して、民心離れて相通ぜざるをいふ。

てうりやう 跳梁【名】我が儘をして、跳れまはること。莊子に「狸性東西跳梁、不レ避二高下一」とあり。

でうりをわる 條里をわる【文】都城市區の割附をなすなり。拾芥抄に「條は、北より起りて南に行き、里は、西より起りて東に行く。三十六町を一里とし、六里を條とす」とあり。

てうろう 嘲弄【名】あざけること。からかふこと。愚弄に同じ。

てえる 【Ter】答兒、爹兒【名】コオルタアともいふ。一種の油なり。

てがらみ 手搦【名】俗に、腕組(ウデグミ)といふに同じ。手を組むをいふ。

てきがいしん 敵愾心【名】敵に對する心の强固なるをいふ。左傳文公四年に、「諸侯敵二王所一レ愾而獻二其功一」とありて、註に「愾、恨怒也」と見えたり。

てきこくぐわいぐわんなきものは、くに、つねにほろぶ 敵國外患なき者は國恒に亡ぶ【文】孟子告子篇の下にあり。その意は、敵對する國と、外來の憂患となければ、守備警戒を怠る故に、その國は亡ぶとの意。

てきし 的證【名】確かなる證據。適切なる證明。

てきせつ 適切【名】よく適當したること。てうど、それに適すること。

てきたう 倜儻【名】人の性質の豁達なるをいふ。他人の爲につながれずして、ほしいまゝなること。司馬遷の文「富貴而名磨滅、不レ可二勝記一。只倜儻非常之人稱焉」とあり。

てけ 天氣【名】そらあひ。天色。天象。また、轉じては、天氣のよろしきをもいふ。てんき。ていけ。

てぜい 手勢【名】手下の軍勢なり。部下の兵といふに同じ。

てだれ 手練【名】上手に同じ。其のわざのすぐれたるをいふ。

てつ 垤【名】蟻の塚なり。泥土をつみて作りたるもの。淮南子「蝦知レ爲レ垤」。

てつき 鐵騎【名】精英なる騎兵をいふ。

でつざう 捏造【名】捻(ヒネ)り造る。つくりなす。無き事を作り設けて有りと云ひなすをいふ。

てつしん 鐵鍼【名】鐵の針なり。鍼物に用ひ、又、醫療にも用ふ。前漢の廣川王傳「以二鐵鍼一鍼レ之」。

てつしんせきちやう 鐵心石腸【句】性質の剛堅なるをいふ。蘇軾の與二李公擇一書に「僕本以二鐵心石腸一待レ公」とあ

り。

てつたう 跌宕 【名】物事の、普通以上に走り過ぎたるにいふ。「性跌宕」などいふは、性質の、人より超越せることなり。

てつたう 跌蕩 【名】しまりのなきをいふ。また、緩にして放埒なるをいふ。

てつちゆうのさうさう 鐵中錚錚 【句】錚は金の聲、勝れたる人をいふ。後漢書「光武謂二徐萇一曰、卿所謂鐵中錚々、庸中佼々者也」。

てつつばもくしつ 鐵檛木室 【名】刀の柄は鐵、鞘は木にて作れるをいふ。

てつぴつ 鐵筆 【名】ペン。英語 pen にあてたる語。また、筆力の優れたるにもいへり。「鐵筆をふるふ」など。

てつぷ 轍鮒 【名】車のわだちに入りたる鮒。轉じて、危急の場合、「轍鮒の急」。又、危急の場合にある人を許する語。莊子の故事より出づ。

てつめんぴ 鉄面皮 【名】厚顔にして恥を知らぬ者を稱す。虞堂錄に「劫火曾燒鐵面皮、從來不レ放二僧頭低一」とあり。

てつり 鐵驪 【名】黒き馬をいふ。禮記月令「駕二鐵驪一」。

てにしたがひてほろぶ 從レ手亡 【句】即時に亡ぶる義。史記「吾今日死、公亦隨レ手亡矣」。

てふ 牒 【名】通牒。しらせの手紙。

でふく 蝶句 【名】同樣の句を重ねて、その意を強むる法をいふ。例へば「空復々、風靜かに、鳥鳴き、花匂ひて」の類。

てふし 碟子 【名】皿のことなり。子の字に意味なし。

てふてふ 喋々 【名】しやべりて喧しきこと。塡韻に「多言也」とあり。史記の匈奴傳の注に、「喋音利口也」と見ゆ。

てぶり 手風、風俗 【名】ふうぞく。ありさま、などの意。

てへん 天返、天邊 【名】兜の頂の處をいふ。また、すべて、物の最高部を、てへん、てつぺんともいへり。

てみすとくれす Themistocles 【名】アゼンの有名なる政治家なり。

てんいん 天胤 【名】天皇の御血統をいふ。

てんが 典雅 【名】正しくして、みやびたること。

てんかい 天海 【名】東叡山寛永寺の開祖なり。南光坊と號す。俗姓三浦氏、大に武田信玄に重ぜらる。後、家康命じて天台の南光院に主たらしめたるに、僧正となれり。秀忠、東叡山を開き、開山の第一世とす。寛永二十年寂せり。諡號を慈眼大師といふ。

でんがく 田樂 【名】もと、農人の耕作の勞を慰むる爲に、笛鼓など用ひて、なかしき藝を演ぜしに始まり、後には法師の業となりて、腰鼓を打ち、縄木をすりて舞ひ踊り、遂には、座を設けて、新曲を作るに至れり。鎌倉、室町の頃、盛に行はれしが、後樂の能起りてより、次第に衰へたり。

てんかのうれへにさきだちてうれひ 天下の憂に先ちて憂ひ 【句】宋の范文正公の岳陽樓記の文に、「士當下先二天下之憂一而憂、後二天下之樂一而樂上」とあり。

てんかのくるしみをすくふ 天下の塗炭を救ふ 【文】「塗炭の苦を見よ。

てんかをえんいうす 奄二有天下一 【句】詩經に「奄二有四方一」とあり。天下を有つなり。奄は覆にて、大有の餘義といへり。

てんかをたもちてあづからず 有二天下一而不レ與 【文】興らずとは、只、人民の安寧を欲するのみにて、敢て其の天下を有ちて、位にあるを樂むには非ずとの意。論語に「巍々乎舜禹之有二天下一也而不レ與」とあり。

てんぎ 典儀 【名】天皇御即位の時、儀式を司る少納言をいふ。

てんぐ 天狗 【名】支那に、奔星の類、聲あるものといふ。また、俗に怪物の名。形、人の如くして鼻高く、翼ありて飛行するといふ。又、自負する人を天狗といふに、鼻を高くするの意。

でんくわうてうろ 電光朝露 【句】電光は瞬間の意、朝露は消え易き意なり。「人の身命は、電光朝露のごとし」など。

てんけい 典型 【名】繪畫彫刻等の手本たるべきもの。又、轉じて人物にもいふ。

てんこ 典故 【名】典例と故實となり。陸倕の石闕銘に「歷代規謨、前王典故、莫レ不二斟二夷剪截一、允執二其中一」。

てんこく 篆刻 【名】印に文字をほりつくること。

てんごぐん 典護軍 【名】軍陣の取りしまりをするものにて、監軍の如きもの。

てんし 廛肆 【名】商店なり。禮記王制の注に、「廛市レ物邸舍」とあり。また、周禮天官司市の注に、「肆謂二陳レ物處一」。

てんしん 天津 【名】支那の地名。テンツインと呼ぶ。支那直隸省白河の岸にありて、北京に入る咽喉なり。明治十八年の天津條約によりて、貿易港となり、本邦の領事館、居留地あり。

てんしん 天眞 【名】生れたるまゝの性質。かざりなき意なり。晉書阮籍傳「發レ和履レ純、以保二天眞一」。

てんしん 點心 【名】三食の間の小食なり。唐書「鄭傪爲二江淮留後一。夫人曰、吾未不レ及レ餐、爾且點心」とあり。また、菜菓子の意にも用ふ。

てんじんちぎ 天神地祇 【句】天の神、地の神なり。

てんじやう 天壤 【名】天と地となり。史記魯仲連傳に「業與二三王一爭レ流。而名與二天壤一相敝也」。

てんじやうのごとなる 天上の五衰 【句】天人の死なむと

する時、五衰として五種の變を現はすをいふ。大論に曰く「諸天命欲ㇾ終時、五死相現。一、華冠萎。二、腋下汗出。三、蝿來着ㇾ身。四、見更有ㇾ天生己坐處。五、自不ㇾ樂ㇾ本座」とあり。

てんじやうのま　殿上の間【名】清涼殿の南の方にあり。殿上人の詰所。

てんじやうびと　殿上人【名】四位五位の人。ひろく、清涼殿（デンニン）に昇ることを許されたる人。昇殿を許されざる地下人といふ。

てんしやく　天爵【名】德望有りて、自然に貴き人を云ふ。孟子に「有ㇾ天爵者、有ㇾ人爵者。仁義忠信、樂ㇾ善不ㇾ倦、此天爵也。公卿、大夫此人爵也」とあり。

てんしゆけうのきん　天主教の禁【句】天主教を信ずることを、法律を以て禁じたるなり。德川幕府、慶長十六年、初めて天主教を禁ぜりといへども、外交は、なほ禁ぜざりしが、寛永十二年に至りては、朱印船を廢して、商船の外國に行商するをも禁じ、遂に寛永十四年、島原の亂後は、殊に耶蘇教を殿禁し、遠航を禁するを同時に、五百石積以上の大船を造ることをも禁じたりき。

てんしゆだい　天守臺【名】城の本丸にして、殊に高く設けたる物見櫓をいふ。

てんじゆねん　天樹院【名】毛利輝元の院號なり。

てんしよく　天職【名】天賦の職。自然に天より授かりたるの職分。

てんせい　天性【名】自然の性。天よりうけたるままの性。禮記「人生而靜、天之性也」。

てんぜん　靦然【副、形】面目の貌と註せり。又恥づる貌。詩經「有ㇾ靦面目」。國語「余雖ㇾ靦然面人面ㇾ吾猶ㇾ禽獸ㇾ哉」。

てんぜん　恬然【副、形】安く閑かなる貌。また驚き動かざる貌にいふ。荀子に「恬然如ㇾ無ㇾ治者ㇾ」とあり。

でんそ　傳疏【名】註疏をいふ。疏とは、注の更に詳細なるものをいふ。

でんそう　傳奏【名】朝廷に居て、武家よりの奏聞を傳達する職。また、單に奏上の詞を傳ふる人をさしても云へり。

でんそく　天則【名】天理といふが如し。易經「易乃見ㇾ天則ㇾ」。

てんだいしゆう　天台宗【名】佛教八宗の一にして、延暦の頃、僧最澄、即ち傳教大師の、支那天台山の智者大師より傳へたる宗なり。法華經を以て本經とす。

てんたん　恬淡【名】恬は安靜の義にて、水などの靜なるをいふ。おだやかにゆつくりしたる事にいへり。「恬淡たる老人」など。

でんたんがく　田單が火牛の計【句】支那春秋戰國の代に、燕の國の昭王、大軍を以て齊を攻む。齊の諸城多く陷りて、たゞ、莒と即墨とのみを殘せり。時に、齊の將田單、即墨の人に推されて、將軍となり、殘餘の兵を集めて、終に一計を案じ、各所より牛千餘頭を集め、赤色の衣を被らしめ、五彩の龍文を畫きて、兵刃を其の角に束ね、脂を灌ぎたる葦を尾に束ね、それに火をつけて、夜に乘じて燕軍に向つて放ち、城中よりは、決士、の勇士、皷譟突出したりしかば、燕軍敵すること能はずして大に敗走し、齊の七十餘城も、また、復するを得たり。是れを田單が火牛の計といひて、支那史上に有名なり。

でんち　田疇【名】穀を植うるを田、麻を植うるを疇といふ。禮「可ㇾ以糞ㇾ田疇ㇾ」とあり。また、田のあぜをいふことあり。淮南子「正ㇾ封彊ㇾ修ㇾ田疇ㇾ」。

てんちはばんぶつのふぼ　天地は萬物の父母【文】ひとはばんぶつのれいなりを見よ。

てんちゆうぐみ　天誅組【名】文久三年三條實美等七卿の、長門落の事ありしに續きて、藤本鐵石、松本奎堂、吉村寅太郎等、君側の姦を除かむとして、侍從中山忠光を奉じて大和に兵を擧げ、自稱して天誅組といへり。然れども吉野郡に戰つて、或は戰死し、或は捕へられき。

てんてんはんそくす　輾轉反側す【句】あちらこちらと、頻に寐返りして安臥せぬ意。また、一定の方針なくして、終始意志の反覆するなどにもいへり。詩經「悠哉悠哉輾轉反側」。

てんと　Tent【名】天幕（テンマク）なり。其の條を見よ。

てんとう　纏頭【名】かづけものに同じ。かづけものを見よ。

てんとくじれうはく　天德寺丁伯【名】さのれうはくを見よ。

てんとざん　天都山【名】支那の山の名。江西府にあり。鄱陽湖に近し。

てんとしてあやしまず　恬不ㇾ怪【句】恬は安なり。唯安閑として、事物の理を究むることもせざるをいふ。漢書「至ㇾ於俗流失ㇾ世壞敗、因恬而不ㇾ怪」。

てんにせぐくまり、ちにぬさあしす　天に跼り地に蹐す【文】心に畏怖して、天地の間に身を置く處なきをいふ。陸士衡の謝平原內史表に「跼ㇾ天蹐ㇾ地、若ㇾ無ㇾ所ㇾ容」。

てんにむかつてつばをはく　天に向つて唾を吐く【文】己を計りて、却つて己れの身を害することの譬。四十二章經に「惡人欲ㇾ害ㇾ賢者ㇾ、仰ㇾ天而唾、不ㇾ汚ㇾ天、還汚ㇾ己面」

てんのあたふるところをとらざれば、かへりてそのとがめをうく　天の與ふる處を取らざれば反りて其の咎を受く【文】何事にも、遠慮して機會を失ふは、身の

害となるこなり。史記の淮陰侯傳に「天與弗レ取、反受二其殃一。時至不レ行、反受二其殃一」。

てんのかは　天川　【名】大和國吉野郡の地名。高野へ出づる道に當れり。

てんのつかさに、ひと、それかはる　天の職に人其代る　【文】書經「一日二日、萬機無レ曠、庶官天工、人其代レ之」。「國家を治むるは、天工にして、人君、天に代りて物を理し、庶官の治むる所も、又天事に非るなしとの意なり。

てんのときは、ちのりにしかず　天時不レ如二地利一、地利不レ如二人和一　【文】孟子の語。時日干支、其の他、天運の宜しきを得たりとも、險阻なる城地の固めには如かず。金城湯池のかためも、民心の一致には如かずとの意。

てんのびろく　天の美祿　【名】びろくを見よ。

てんは、たかきにゐて、ひくきをきく　天は高きに居て卑きを聽く　【文】天道の殿にして、何事をも聞き捨てにせぬ意。史記宋世家に子韋曰く「天高聽レ卑」とあり。

てんは、ひとのうへにひとをつくらず　天は人の上に人を作らず　【文】ミルトンの言なり。人は平等にして上下なしとの意。

てんぴじん　天妃神　【名】龍王ともいふ。水神なり。閩書「天妃林姓也。閩王時統軍兵馬使願之女也。能乘レ席渡二海雲游一島嶼。人呼曰二龍王一云々」とありて、支那にていふことなり。

てんぴんのさい　天稟の才　【句】天性の才。天よりうけ得たる心のはたらき。

てんぷ　天府　【名】府は庫にて、天の庫の義、產物の蓄聚せること、人力にては得られざる程なればなり。戰國策「沃野千里、天府之土也」。

てんぷ　顚仆　【名】顚び倒るること。

てんぷ　天賦　【名】天より賦與せる義なり。「天賦の才」などいひて、生れつきの才氣の意なり。

てんぽ　沾補　【名】增し、ふやすこと。沾は添に同じ。

てんまうくわいくわい、そにんてもらさず　天網恢々疎不レ漏　【文】天道は恢々として、網の目の如く疎なれど、漏らし失ふことなしの意にて、善惡、吉凶、一も天の定めにあらざることなきをいふ。老子「天網恢恢疎而不レ漏」。

てんまく　天幕　【名】其の製法を異にすれども、何れも、屋蓋布、前面布、後面布などいふがありて、厚き羅織の布を以て造る。英語にて tent といふ。

てんまんだいじざいてんじん　天滿大自在天神　【名】天滿宮をいふ。京都の北野神社、筑前の太宰府神社、共に天滿宮と稱し、菅原道眞公の靈を祀れり。いま、いづれも官幣社たり。

てんめいぼしんのわざはひ　天明戊申の災　【名】天明八年春の京都の火災なり。皇居、および二條城、また災に罹り、市街ことごとく焦土となり、死者二千六百餘人あり。幕府すなはち皇居を經營し、諸侯に役を課し、松平定信をして、之を督せしむ。紫宸清涼二殿を造り、承明、乾輝、朔平の三門を起し、悉く古制に遵ひ舊に復す、三年にして成りぬ。光格帝大に悅び給ひ、御製の詩を將軍家齊に賜ひき。

てんめん　纏綿　【名】情實などにからまるをいふ。

てんもくざん　天目山　【名】甲斐國東八代郡木賊村の東にあり。笹子嶺連山の一にして、其の北方に位せり。武田勝頼の戰死せる地。

てんもんがく　天文學　【名】日月星辰、風雲雨雪の變化など、總べて、天體に就きて研究する學問。

てんやく　典藥　【名】いにしへ、宮內省に典藥寮あり。醫藥のことを掌れり。長官を頭といふ。されば、典藥は今の侍醫の如し。

てんりんざう　轉輪藏　【名】畧して、輪藏ともいふ。經藏の中に書棚を設け、軸を立てて廻轉するやうに造れり。信者一回すれば、看讀するに同じ功德ありといふ。

てんりゆうがは　天龍河　【名】東海道における有名なる大河。源を信濃に發し、遠江國に入りて、氣田川、阿多古川を合せ、磐田郡掛塚村に至りて海に注ぐ。

てんれいのぶん　典麗の文　【句】潤美なる文。文章の修飾うるはしきをいふ。

てんえつ　闐噎　【名】滿ち塞がる意にて、雜踏の甚しきをいふ。

てらしえたり　照得　【句】清國時文に用ふる語。調査云々の義なり。

てらじま　寺島　【名】山成島に同じ。

てらだやさうざう　寺田屋騷動　【名】幕末に至り、尊王、攘夷の說盛に、國論紛々として、天下騷然たるとき、薩摩の島津久光、輿望を負うて上洛し、四方の志士は、天下の事ここに決すとなし、相踵いで入京して大阪にやどる。而して、久光は、浪士鎭撫に勤め、徐に時の至るをまてるに、志士等は、島津公其の初志を變じたりとなし、遂に柴山愛二郎、橋口莊助、伊集院兼寬、西鄕從道、大山巖、三島通庸等の薩士、久坂玄瑞、品川彌二郎等の長士と謀を合せ、眞木和泉等の浪士も加はりて、大阪より淀川を遡り、入京して事をなさんとす。然るに、此の事、久光に聞えければ、人を遣して鎭撫せしむれども肯かず。既にして、一行は伏見の旅店寺田屋にあり。久光重ねて、小松帶刀、奈良原繁、大山綱良等の八士を遣

す。八士、寺田屋に就きて、柴山愛二郎、有馬新七、橋口壯助、田中謙介の四士と懇下に會し、大に慰諭すといへども、なほ聞き入るる氣色なかりしより、鎭撫使は、遂に君命なりと叫びて、まづ謙介を斬り、尋いで他の三士、および橋口傳藏、弟子丸龍助、西田直五郎、森山新五左衛門を斬る。山本四郎亦自殺せり。是れすなはち、壬戌伏見の殉難九烈士にして、時は文久二年四月二十三日なりき。これを寺田屋騷動といふ。

てらどまり 寺泊【名】越後國三島郡寺泊町なり。海岸の一小市にして、斜に佐渡島を望む。

てらべのりみつ 寺部宣光【名】寺部阿波守と稱せり。三河國八幡の人。

てをつかぬ 束手【文】手のだしやうなき貌にいふ。

てをひたひにくはふ 加手額【文】喜ぶ時のさまにいふ。「信長、謙信の死をきき、手を額に加へて曰く、天下之より大に定まる」などあり。又、歎く時にも、此のさまあるは、人の常に知る所なり。

と 蠹【名】木の中に居る蟲なり。ときよを見よ。

と 途【名】みち、おと。

とありかかり 左有り右有り【句】彼れ是れすること。物の行き違ふこと。

とう 籐【名】熱帶地の植物。葉は竹に似て強く、枝なく、皮黃にて光り、其の皮肉共に強靱なるより、器物を編むに用ふ。

とういうき 東遊記【名】書名。橘南谿の作にて、五卷あり。京都より東方の旅行記なり。四方のに西遊記あり。合して東西遊記といふ。

とううん 東雲【名】しののめと訓す。夜のあけがたをいふ。

とういえいざん 東叡山【名】くわんえいじを見よ。

どうえう 動搖【名】動くこと。ゆらぐこと。亂れさわぐこと。

どうえう 童謠【名】一種の流行歌をいふ。いにしへは、大事件の前兆は、必ず童謠にあらはれたりといふ。

どうか 登遐【名】遠き所に登り行く意にて、天子の崩御を申す。

どうがい 童孩【名】こども。童子。孩子。孩は、生れて少し日を經たる子をいふ。

とうかいだうめいしよき 東海道名所記【名】書名。六卷なり。淺井了意の作にして、寬文中の刊行にかかる。

とうかくをあらはす 頭角を現す【文】すぐれて世にあらはれたる人をいふ。韓文公の文に「嶄然見二頭角一」とあり。

とうがね 東金【名】上總國山武郡（サンブ）にある小都會なり。

どうがね 胴金【名】刀の鞘のなか程にある環。

とうかん 等閑【名】なげやりにすること。なほざり。

どうき 動悸【名】心臟の鼓動烈しきこと。むなさわぎのすること。

とうきやうてんもんだい 東京天文臺【名】麻布區飯倉三丁目にあり。天象の觀測、および編曆の事を掌り、且、六學院、理科大學學生の、實地授業の用に供する處とす。

とうきよく 登極【名】天皇の位に即かせ給ふこと。即位。

とうぐう 東宮 春宮【名】皇太子の宮をいひ、また、直に皇太子殿下をも指しまつれり。而して、直接に御身を申し奉るときは、東宮の字をあて、トウグウバカなどいふ時には、春宮坊と書けり。又この春宮を訓讀して、春の宮とも申しまつれり。たけのそのふ參照。

どうくわ 同化 【名】感化して同じものとなすをいふ。彼のものを、此の方と同じに化せしむるをいふ。

とうくわく 東郭 【名】東の廓。また、城外。東方の晴れたるところ。東方の原などの意にもいふ。

どうくわん 童丱 【名】小兒なり。丱は、總角（アゲマキ）の象形文字なり。總角は、小兒の髪の結びやうの名にて、髪を左右にわけ、角の如く巻きあげたるもの。

とうくわんのおくりもの 形管の貽 【句】詩經に「靜女其孌。貽二我彤管一。彤管有レ煒。說二懌女美一。」とあり。形管は、詳ならねど、一說に、彤は赤にて、管は筆なりといへり。けだし、男女の親しみを結ぶときに贈るものにて、其の赤きは、赤心をあらはせるなりといふ。

どうくわりよく 同化力 【名】もと、食物の、消化機中に入る物質を變化して、身體の養分となす力といふより轉じて、自己の智識に由りて、新來の智識を化することにも用ふ。

とうけいがく 統計學 【名】諸事諸物の各部類を分ち、逐一其の數を調査研究する學なり。

とうさんでうのたいしやう 東三條の大將 【名】藤原兼家をいふ。師輔の子、兼通の弟。冷泉帝の朝に從三位中納言となり、元祿元年右近衛大將を兼ね、大納言に轉ず。一條帝の朝に攝政となり、從一位に叙せられ、三宮に准ぜらる。永祿元年太政大臣となる。剃髪して如實といひき。年六十二にして薨せり。世に法興院大臣、また、東三條と稱せり。

どうし 骰子 【名】雙六の采をいふ。

とうじ 東寺 【名】はちまんざん（ハチマンザン）を見よ。

とうじゆし 東壓子 【名】あづまわらはを見よ。

どうせいてきくわつどう 動勢的活動 【句】活動することの活潑なるをいふ。はたらきのつよきこと。

とうせうぐう 東照宮 【名】贈正一位太政大臣徳川家康を祀れる神社なり。日光、および久能山にまつれり。また、東照大神、東照大權現、などともいひき。

どうぜん 童然 【副、形】山に草木なき貌。童子の未だ冠せざる者の如しとよりて譬ふ。

どうぜんまんぴつ 燈前漫筆 【名】書名。一卷。松平樂翁の著。人君の學問躬行の事より、下情を知る必要等、二十餘節に分けて詳述せるものなり。

とうそうはちだいか 唐宋八大家 【名】唐、及び宋、兩朝の文章の大家八人をいふ。すなはち。韓退之、柳々州、歐廬陵、王臨川、曾南豐、蘇老川、蘇東坡、蘇子由なり。此の八人の文を輯めたる書を、唐宋八大家文といふ。

とうだいじ 東大寺 【名】大和國奈良市にあり。聖武帝の神龜五年勅願によりて創建す。有名なる奈良の大佛はこの寺にあり。

とうだう 東道 【名】一行の主たる人をいふ。左傳の僖公三十年に、「舍二鄭以爲一東道主一」とあり。これ、鄭は東にある故に云へるにて、後漢書には、北道主人の語あり。北史には南道主人あり。共に、一方の旗頭といふほどの意なり。

とうだう たかとら 藤堂高虎 【名】はじめ、豊臣秀吉に屬し、其の薨後、家康に歸し、伊賀、伊勢を領して二十七萬石を食む。寛永七年十月卒せり。年七十五。

とうぢゐん 等持院 【名】山城國葛野郡衣笠山の南麓にある臨濟宗の寺なり。延文年中足利義詮創建して、父尊氏の廟塔としてより、足利氏累代の靈廟となれり。

どうてい 洞庭 【名】史記正義に、「洞庭、湖名。在二岳州巴陵西南一里一」と見ゆ。また、水經の注に、「洞庭湖、廣五百里、日月出二沒其中一」とあり。支那第一の湖水にして、其の秋月は、瀟湘八景の一たり。

とうにん 頭人 【名】謙倉、室町幕府の制には、評定衆、頭人、引付衆、引付頭人、其の他禁裏守護の大番衆などにも、頭人の稱あり。また廣く、頭立つ人の意にもいふ。

とうのちゆうじやう 頭中將 【名】近衛中將にして、藏人頭を兼ねたる人をいふ。

どうはう 同胞 【名】兄弟姉妹をいふ。

寺にあり。

とうだう 東道 【名】一行の主たる人をいふ。左傳の僖公三十年に、「舍二鄭以爲一東道主一」とあり。これ、鄭は東にある故に云へるにて、後漢書には、北道主人の語あり。北史には南道主人あり。共に、一方の旗頭といふほどの意なり。

とうだう たかとら 藤堂高虎 【名】はじめ、豊臣秀吉に屬し、其の薨後、家康に歸し、伊賀、伊勢を領して二十七萬石を食む。寛永七年十月卒せり。年七十五。

とうぢゐん 等持院 【名】山城國葛野郡衣笠山の南麓にある臨濟宗の寺なり。延文年中足利義詮創建して、父尊氏の廟塔としてより、足利氏累代の靈廟となれり。

どうてい 洞庭 【名】史記正義に、「洞庭、湖名。在二岳州巴陵西南一里一」と見ゆ。また、水經の注に、「洞庭湖、廣五百里、日月出二沒其中一」とあり。支那第一の湖水にして、其の秋月は、瀟湘八景の一たり。

とうにん 頭人 【名】謙倉、室町幕府の制には、評定衆、頭人、引付衆、引付頭人、其の他禁裏守護の大番衆などにも、頭人の稱あり。また廣く、頭立つ人の意にもいふ。

とうのちゆうじやう 頭中將 【名】近衛中將にして、藏人頭を兼ねたる人をいふ。

どうはう 同胞 【名】兄弟姉妹をいふ。

とうばうさく 東方朔 【名】支那の人。字は曼倩、號は書聖。漢の武帝に仕へ、滑稽を巧にするを以て寵せられたり。

とうはつかどく 東八箇國 【名】くわんとうを見よ。

どうへいしやうじ 同平章字 【名】支那の官名。唐の高宗、侍郎郭待を擧げて相となさんとせしが、其の資望の及ばざるによりて中止し、「令與二中書門下一同平章事一」といへるより、同平章事の名は起れるなり。

どうびやうし 銅拍子 【名】銅鈸子（チウハツチ）の鈸を誤りて、拍の字をあてしなりと。樂器の名。形鐃鈸（チウハツ）の如くにて小く、眞鍮にて作る。韻會に、「樂書、銅鈸、南齊穆士素所レ造」と。

どうほ 同保 【名】保は、村の組合をいふ。宋「籍二十人一爲レ保」と見ゆ。

とうみやうぢ 燈明寺 【名】東京府下南葛飾郡平井村中川の東岸に在り。梅櫻ありて風景よし。前岸に平井渡あり。

どうめいひこう 同盟罷工 【名】勞働者が、其の主に對する不平より、相同盟して、其の從事する事業を休止するをいふ。英語にてストライキ（strike）といふ。

どうもうをしへあり 童蒙有レ訓 【文】童蒙は事物の理にくらき義にて、小童をいふ。訓ありは、之に授くる書物のあるをいふなり。呂氏の童蒙訓、朱子の童蒙須知、益軒の童子訓の如きをいふ。

とうよう 登庸 【名】官職に上せ用ふること。書經「帝曰、疇若時、予登庸」の註に、「疇は誰なり、予は訪問なり、若は順なり、庸は用なり」とあり。

とうりう 逗留 【名】進まずして、とどこほること。また、暫時旅先に宿り居るをいふ。滞在といふに同じ。

とうりやう 棟梁 【名】棟と梁とにて、家作に重要の材をいふより轉じて、國家の重職にありて、大政にあづかる人物をいふ。されば、棟梁の材、棟梁の器、棟梁の用、などの語あり。書言故事「稱二人才幹一云レ有二棟梁之材一」。

とうりやうのふ 棟梁の府 【名】幕府をいふ。棟梁は諸侯の上に立つものの意にて、將軍をいふ。とうりやう參照。

とうりようもん 登龍門 【名】後漢の李膺、聲名あり。士人の、膺に接近することを得る者あれば、名けて登龍門と爲す。龍門に登る意にて、名譽とせるなり。

とうれう 透了 【名】透きとほること。明に了解する意にもいふ。

とうれんはふし 登蓮法師 【名】香法房ともいふ。詞花集、千載集、新古今集などに、其の詠歌みえたり。

とうわちやうへん 童話長篇 【名】書名。黒澤翁滿が、舌切雀、桃太郎、勝々山、猿蟹合戰、花咲爺、乙姫の童話六編を、長歌に詠み出だしたるものなり。

とえい 兎影 【名】月の異稱。韋琮の文に、「兎影高輝」とあり。

とが 栂 【名】樅の屬にして、樹葉、相似たり。材良く、木理密なり。又、つが。

とが 鵞下 【名】不肖といふに同じ。自ら卑下していふ詞なり。

とかう 杜康 【名】杜康は古の酒を造りし人。よりて、酒の異稱とす。魏武帝の樂府短歌行に、「慨當以慷、憂思難忘。何以解憂。唯有二杜康一」とあり。

とかげ 蜥蜴 【名】蛇に似て小にして四足あり。長五六寸。石垣などの間隙に棲みて、小虫を食とす。

とかへりのはな 十返の花 【名】松は、百年に一度、千年に十度花さくといひ傳へて、其の花をいふ。新拾遺集に、「久に經む、友とや君に、ちざるらむ、十かへりの松の、花のさくまで」。

とがま 敏鎌 【名】切味（キレアヂ）の鋭利なる鎌といふ意。

とき 秋 【名】時期、折り、などの意なり。

どき 土甕 【名】瓦器。肉圓くして外方なり。黍穀を盛るに用ふるもの。

どぎ 土宜 【名】風土に適當せる義にて、土地の名物をいふ又、その地の物産。

ときあらひぎぬ 解洗衣 【名】ときておらひ張りしたる衣なり。

ときき 菟裘 【名】隱退すること。左傳隱公十一年の條に「令レ營二于菟裘一、我將レ老焉」とあり。菟裘は魯の地名なり。隱公、此所に別邸を營作せしめて隱退せんとせしに起れり。

ときつつりこさざり、たのしみかなしみゆきかふ 時移り事去り、樂み悲みゆきかふ 【文】陳鴻の長恨歌傳に、「時移レ事去樂盡悲來」とあり。

ときえがほ 時得顔 【名】己れの時節の到來せるときのほこりがほ。得意然たる顔つき。

ときじく 非時 【副】時ならず。何時にても。始終。萬葉集「時じくぞ雪はふりける」。

ときつかぜ 時津風 【名】潮の滿つる時に吹く風をいふ。時節到來して、威勢の盛になるを、「吹き起る時つ風」などともいへり。

ときにあへば、ねずみもとらとなる 時にあへば鼠も虎となる 【文】漢書東方朔傳「用レ之則爲レ虎、不レ用則爲レ鼠」より出でし諺なり。また、宗尊親王の御歌「虎とのみ、用ひられしは、昔にて、今はねずみの、あなう世の中」。

ときのこゑ 關の聲、鯨波、鯢波、凱歌 【名】ときの。戰爭などのとき、一齊にあぐる聲をいふ。

ときはぎ 常緑木 【名】常に葉の色の變ぜぬ植物を、總べていへり。松、椿など。

ときはるしやうごくだいじやうだいじん 常盤井相國太政大臣 【名】藤原實氏をいふ。土御門天皇以下六朝に歴仕せる人。

ときふつり 斗牛 【名】斗、牛、共に廿八宿の一。和漢三才圖會によれば、北々東の方角に當れり。

ときみつあき 土岐光秋 【名】土岐孫次郎、圭秘と稱し、紀州和歌山の殿人なり。

ときん 兜巾、頭巾 【名】山伏のかぶる冠帽なり。額上に纏き、紐ありて腮の下に結ぶ。それを、額より眉の半までも下げて冠れるを「頭巾眉半にせむ」などといへり。

どきやう 讀經 【名】僧の經文をよむをいふ。

どきよ 蠹魚 【名】書籍の中に居る蟲。しみ。故に書を多く讀みても、活用せざるものを、「蠹魚の如し」などいふ。

ときよしんわう 齊世親王 【名】宇多天皇の御子。母は廣相の女橘義子。三品兵部卿。かつて上總の太守たりしが、延喜元年、菅原道眞の事に坐して出家し、圓城寺宮と號す。延長五年九月薨じ給へり。

ときよりかね 土岐賴兼 【名】十郎と稱す。賴貞の子。源賴光の裔。同族多治見國長と驍勇を以て著る。二人共に京師

に番直し、藤原資朝等に引かれて、後醍醐帝の北條氏を滅さむとし給ふ謀に與る。正中元年、事洩れて、賴兼、國長、共に攻められて自殺せり。

とくい 屠狗 【名】犬殺しなり。史記刺客傳「荊軻至レ燕、愛二燕之屠狗者高漸離一。數日嗜レ酒、日與二屠狗一飲二于燕市一」。

どくあくのよ 濁惡の世 【句】濁りたるきたなき世といふ意。澆季。末世などいふに同じ。皆、佛語なり。

とくがはいへなり 德川家齊 【名】德川十一代の將軍。一橋治濟の子。白河樂翁を用ひて治績あり。天保十二年薨せり。年六十九。文恭院と諡す。

とくがはいへはる 德川家治 【名】德川十代の將軍。家重の子。天明六年九月薨ぜり。年五十。浚明院と諡す。

とくがはけいざん 德川景山 【名】とくがはなりあきを見よ。

とくがはじつき 德川實記 【名】書名。成島司直の著なり。德川氏の勃興せる時代より、十代將軍までの事蹟を、諸家の記錄に據りて書きたるものなり。また附錄には、逸事異聞などを記せり。

とくがはただなが 德川忠長 【名】するがだいなごんを見よ。

とくがはつなよし 德川綱吉 【名】家光の第三子。母は本莊氏。寛文元年、館林に封ぜられ、延寶八年、四代將軍家綱薨ずるに臨みて、嗣となりて代り立つ。寶永六年薨ぜり。年六十四。

とくがはなりあき 德川齊昭 【名】水戸烈公なり。景山、又潛龍閣と號せり。萬延元年八月十五日薨ぜり。年六十壹。

とくがはばくふ 德川幕府 【名】家康將軍となりしより、慶應三年、慶喜政權を朝廷に奉還せるまで、二百六十五年間の政治を執れる役所なり。

とくがはみつくに 德川光圀 【名】德川賴房の第三子、家康の孫、兄賴重を超えて、水戸の家督を繼ぎ、後に史記の伯夷傳を見て、大に感ずる處あり、兄の子綱方、綱條（ツナエダ）、二人を養ひて子とし、綱方、早世ぜるにより、元祿二年、領國を綱條に讓りて、西山に隱る。十三年十二月薨ぜり。年七十三。義公と諡す。

とくがはむねたけ 德川宗武 【名】德川三卿の一なる田安家なり。八代將軍吉宗の二子。國學を好み著書も多し。明和六年薨ぜり。年五十七。加茂眞淵を、その師としたりし人なり。

とくがはよしむね 德川吉宗 【名】紀州の光貞の三子。正德六年、家繼の後に入りて、宗家を繼ぐ。寶曆元年薨ぜり。年

六十八。世に德川中興の英主と稱せり。

とくぎせいしん、こうへい、かくごのしぜんをさる 德義、清愼、公平、恪勤の四善を採る 【文】大寶の考課令に、「德義有レ聞者爲二一善一、清愼顯著者爲二一善一、公平可レ稱者爲二一善一、恪勤匪レ懈者爲二一善一」とあり。これ、官人を考陞する法なり。恪勤とは、職務に出精するをいふ。また、始めて官人を選叙するには、選叙令に「凡應レ選者皆審二狀迹一。詮擬之日、先盡二德行一。德行同取二才用高者一。才用同取二勞効多者一」とあるによる。

とくぎきつきようあり 德吉凶あり 【文】左傳文公十八年の條に「季敬忠臣爲二吉德一。盜賊隱姦爲二凶德一」とあり。これらによりていふなるべし。

とくごこう 都督侯 【名】支那古代の武官の職名。唐の制、親軍に左右神策府を置き、大將軍、都頭、都指揮使、都督侯等の者、これが將帥たり。

とくさ 木賊 【名】草の名。水邊に生ず。冬も凋まず。莖は節ありて、乾して物を磨り磨くに用ふ。

とくしつ 得失 【名】利害。よしあし。

とくしよしやういう 讀書尚友 【句】孟子萬章篇に、「以レ友二天下之善士一爲レ未レ是。又尚二論二古之人一。頌二其詩一、讀二其書一。不レ知二其人一可乎。是以論二其世一也。是尚レ友也」とあり。

注に、尚は上に同じとあり。讀書によりて古人を友とし、之を尚ぶをいふ。

とくしよろく 讀史餘錄 【名】書名。明の薛瑄の著。修身上に關することを輯めたるものなり。

とくしよろん 讀史餘論 【名】書名。新井白石の史論なり。十二卷、上古より豐臣氏までの事實につきて評論せり。

とくだいじさねさだ 德大寺實定 【名】藤原公能の子、頗る才學あり。治承元年大納言に任ぜられ、左近衛大將を兼れ、壽永二年內大臣となり、尋いで右大臣より左大臣に至る。建久二年、剃髮して名を如圓といひ、其の年、薨ぜり。年五十三。

とくだいじさねのり 德大寺實則 【名】現に、侍從長內大臣侯爵なり。

どくだん 獨斷 【名】證據にも依らず、人にも謀らずして、唯、自身の憶測によりて判斷すること。

とくちやうじゆぬん 得長壽院 【名】長承元年、鳥羽上皇の備前守忠盛に命じて造らしめられし寺なれど、其の舊址、今詳ならず。

とくづく 德附、得附 【動カ四】利益を得ること。まうかる。

とくのうみちをき 得能通言 【名】蜘三郎と稱す。伊勢の

人。後醍醐帝、船上山に幸し給ふに當り、土居通治と共に義兵を擧げて、屢々賊と戰ふ。新田義貞、皇太子を奉じて、北國に赴かんとするに從ひ、道に大雪の爲めに前軍を失し、敵兵は迫り、馬は凍餒して戰ふこと能はず、刀を抜きて地に立て、其の上に伏して死にき。

さくは、もとなり。さいは、すゑなり 德者本也財者末也【文】さい、さんすれば、たみあつまるを見よ。

さくろ 擉髏【名】されかうべ。博雅に「頂顱謂之擉髏」とあり。風雨に曝されたる頭骨なり。莊子「莊子之楚見空髑髏」。

さげつけう 渡月橋【名】山城國大堰川の上方なる、嵐山の三軒茶屋より、法輪寺の山下に達するものにして、一に御幸橋の名あり。長虹一帶碧流に架し、山水の韵致を添ふ。

さこ 獨鈷【名】どつこ。眞言宗の僧の持つものにて、金にて作れる杵の如きもの。法を說くとき、疑の心を絕つ爲にもつなりとぞ。

さころえがほに 所得顏【副】所を得たるさまに。其の地を我が住所と占めて、得意なる狀にいふ語。

さころえたるさむらひ 所得たる侍【句】重だちたる侍。はばのきく侍。威勢ある武士。

さころさりきこえむ 所去り聞えむ【文】其の場所を避け申さん。己が居處をさけて、其の場所をゆづり申さん、の意なり。

さころせう 所狹【副】所狹くの音便。

さころせく 處狹【副】場所狹く、あたり狹いほどに、窮屈に、などの意。さころせく誘らひ居るは、處を狹ましと感張り居るをいふ。

さころてん 心太【名】ところてん草を煮て、ところかして、冷し固めたるものにて、醬油、また酢などをかけて食ふ。コロブトの轉訛なりといふ。

さこよのたちばな 常世の橘【句】垂仁天皇の十九年、田道間守が、帝の命を奉じ、常世の國に渡り、非時の香の木の實を求めて、景行天皇の元年に歸朝せしが、帝崩御の後なりければ、いたく働哭して、木の實を山陵に捧けて、こゝに絕命せりとぞ。常世の國は外國をいひ、非時のかくのこのみは、橘をいふ。

さささ 土佐家【名】足利時代に起りたる諡家なり。開祖を土佐光信といふ。

さささつねたか 土佐經隆【名】初は、春日有房と稱す、光長の男といふ。繪所預となり、從五位下土佐權守たるが故に、土佐と稱せり。諡家土佐派の宗なり。建仁年中、賢聖障子を畫く。

さささにつき 土佐日記【名】書名。一卷。紀貫之が土佐守の任期滿ちて、承平四年の冬、都に歸る時の海路の日記なり。

さささのろん 土佐院【名】土御門天皇を申す。承久の亂に、土佐に遷され給ひしかばかく申せり。

さささま 外樣【名】ふだいを見よ。

さささみつおき 土佐光起【名】畫人。光則の子。光長、光信と共に土佐三筆と稱せられし人なり。繪所預となり。從五位下左近將監に任ぜらる。剃髮して法眼に叙せられ、常昭と號す。東山帝の元祿四年九月歿せり。年七十五。世に寫生をいふもの、まづ應擧を稱すれども、光起の寫生、遙に彼れが上にありきといふ。

さささみつのぶ 土佐光信【名】畫人。廣周の男。妙手にして有名なり。而して土佐三筆の一人なりき。足利義政に仕ふ。繪所預となり、左近將監より、刑部大輔に進み、大永五年五月歿せり。年九十二。

さじ 刀自【名】戶主の義か。婦人の敬稱に用ふ。「母とじ」「家とじ」など。

さしぎ 年木【名】春の用意の薪。夫木集に、「高島の、山川の、筏師は、いそぐ年木を、積みや添ふらむ」。

さしさしに、はなは、あひにたれど 年年に花は相似たれど、年々に人は同じからず【文】詩人劉希夷の句。はなあひにたりを見よ。

さしま、にひしま 利島、新島【名】共に伊豆七島のうちなり。相距ること二里餘。

さしび 杜子美【名】人名。名は甫、支那の詩人なり。唐の玄宗肅宗の朝に仕ふ。大曆五年、大水の爲に卒す。年五十九。

さしひさしやうぐん 利仁將軍【名】藤原利仁をいふ。

さしんげん 杜審言【名】人名。初唐の人。詩才高きが爲に人に疾まる。神龍年中、修文館の直學士となりぬ。

さじやうびよく 土壤肥沃【句】土地の肥えたるをいふ。

さしよのひつじ 屠所の羊【句】屠殺場の羊にて、今將に殺されむとするものなり。されば死地に迫りて、物哀れなる例にいふ。もと、摩耶經の偈に、「譬如三旃陀羅駈レ羊至二屠處一步々近二死地一。人命亦如レ是」とあるより出でたる語なり。

さそう 抖擻【名】梵語の、杜多の譯にして、手にて物を振ふこと。佛家の所謂、貪、嗔、癡の三慾を拂ひ去る義なり。僧侶また、行脚の、義に用ふ。

させうせんゆのさい 斗筲穿窬の才【句】斗は竹器なり。斗筲は桝にて量るほどの義。穿窬は壁を穿ち墻を越ゆるにて、小盜なり。つまらぬやくにたたぬ才智。蘇老泉「王莽以二斗筲穿窬之才一。恣取二神器一如レ反レ掌」。

とせつだかう 斗折蛇行【句】斗は北斗星なり。北斗七星の如く曲折し、蛇の如く曲り行くこと。山路などを登るにいふ。

とせん 徒跣【名】かちはだし。履物をはかぬをいふ。素足（スアシ）。

とぜん 徒然【名】つれづれ。爲すこともなく日を暮すをいふ。

とそ 屠蘇【名】藥名なり。延喜典藥式に、「屠蘇酒、治二惡氣溫疫、辟二邪風毒氣一」とあり。白散と共に、年の始の祝に酒に加へて飲む。

とたんのくるしみ 塗炭の苦【句】必死のくるしみ。甚しき困苦をいふ。書經に、「有夏昏德、民墜二塗炭一」とある註に、塗は泥、炭は火なりと見えたり。史記「周武討二殷紂一、救二民墮二塗炭一」。

とつかん 吶喊【名】わめき叫ぶこと。通俗篇に、「戚繼光紀效新書有二各兵吶喊語一。元人兩世姻緣劇、搖旗納喊。作レ納。翟灝曰、按二玉篇一、吶下聲也。言不レ出レ口也、與二喊叫一、適相反矣。不レ若レ用二納字一。納致也、尙爲レ有レ說」。

どつく Dock 船渠【名】灣港内にて、船舶を造り、或は修繕する爲に作りたる處。

とつとつ 吶吶【副、形】どもること。禮記「其言、吶吶然如レ不レ出二諸其口一」とあり。

とつとつ 咄咄【副、形】驚き怪しむ時に發する聲なり。

とつとつくわいじ 咄咄怪事【句】ア、フシギの意。晉書殷浩傳「但終日書レ空、作二咄咄怪事一而已」。

どどん 土豚【名】土をつめたる俵やうのもの。土を高く積み上げたるもの。「土手」などいふほどの意にも用ふ。

とどりべのよろづ 鳥捕部萬【名】萬は物部守屋の資人なり。守屋、蘇我馬子に殺さるるとき、萬、また敵に圍まれ、敵三十人を射殺して自殺す。萬に飼狗あり、其の狗、萬の頭を咋みて古塚に收め、傍に臥し、食せずして死す。

となかひ 馴鹿【名】獸の名。北方の寒地に產す。鹿に似て大に、角もまた大なり。

となんのさい 斗南の才【句】天下第一流のオといふこと。北斗は極北なり。其の南なれば、地球全體なり。依りて大才の意に用ふ。唐書「狄公之賢、北斗以南一人而已」とあり。

とにつきかくにつき 兎につき角につき【句】彼の事も此の事も、何につけても、總べての事に、などの意に用ふ。

とにふ 斗入【名】史記「成山斗入二海一」の注に「斗絕して海に曲入するなり」とあり。斗は斗樞（トマス）なり。斗樞の隅（スミ）の如くに廉立（カドダ）ちて曲れるをいふ。

とねがは 利根川 刀根川【名】上野國利根郡文珠山に發し、武總より更に常總の境を過ぎて、銚子港に注ぐ川。一名坂東太郎。

とねり 舍人【名】天皇、皇族、および大臣、大將などに、朝廷より近侍せしめし官人をいふ。轉じて供人の意にも用ふ。

とのもりのともののみやつこ 殿守の伴の造【句】主殿寮の下部にて、禁中の掃除などするもの。御垣守なり。拾遺集「とのもりの、伴のみやつこ、心あらば、この春ばかり、朝きよめすな」。

とのゐもの 宿直物【名】宿直に用ふるもの。衣具、寢卷などの類なり。宿直（トノヰ）とは、大殿の夜の守護に侍候するをいふ。今の宿直（シュクチョク）といふに同じ。

とば 鳥羽【名】山城國紀伊郡の地名。また志摩國志摩郡の地名。

とばかくいう 鳥羽覺猷【名】源隆國の子。天台の座主、法務、および、三非長吏、大僧正となる。鳥羽に居るを以て鳥羽僧正といひき。繪を好み、專ら寫意により、形似を求めず、遂に一家を爲す。所謂、鳥羽繪と稱する戲畫、これなり。崇德帝の保延六年寂せり。

とばどの 鳥羽殿【名】今河天皇應德三年の經營にして、鳥羽天皇また增修し給へり。其の址は、今、山城國紀伊郡竹田村と、下鳥羽とに跨れり。

とばふ 徒法【名】徒は、なほ、空の如し。其の表面の政のみありて、其の心の誠なきことなり。いたづらなるおきてに「徒法不レ能二以自行一」。孟子

とばり 帳【名】戸の代りに張りたる布。戸帳。垂布、蚊帳などをもいふ。

とばを 鳥羽繪【名】とばかくいうを見よ。

どび 茶蘼【名】山吹なり。市薬下學集「酴醾、日本所レ謂山吹是也。暮春有レ花。日本俗呼二款冬一謂二山吹一誤也」と。或はいふ、こやをきて、いばらに似たる灌木なりと。

どび 酴醾【名】濁酒をいふ。

どびかしう 土肥霞州【名】名は元成、幕府の儒官。晉て水戸義公、召見して神童と稱す。新井白石に寓して修學既に久し。寶曆七年八月歿せり。年六十五。

とびたかをうむ 鳶鷹を生む【文】愚人の子に、賢者の生れしをいふ。詩經小雅傳「古語曰、鵪鶉生レ鸇」などに本づけるなるべし。

とびのうを 飛の魚【名】魚の名。東南海に多く產す。春夏の候、海上を飛ぶ。其のかたち鯔に似て、胸下にある鰭長くして翼の如し。故に此の名あり。

とぶかりのかずさへみゆる 飛ぶ雁の數さへ見ゆる【句】古今集「しら雲に、羽うちかはし、飛ぶ雁の、數さへ見ゆる、秋の夜の月」。羽うちかはしは、空高く、互に羽を打ちありて、其の心の誠なきことなり。いたづらなるおきてに「徒法不レ能二以自行一」。孟子

かはして飛ぶ狀をいふ。

とふろうわづかに、ぐわしよくをみ　都府樓纔看二瓦色一。觀音寺只聽二鐘聲一　【文】菅原道眞の詩の句なり。菅家後草に、不出門「一從二謫落在一榮荊一、萬死兢々蹋踏情、都府樓纔看瓦色、觀音寺只聽鐘聲、中懷好逐二孤雲一去、外物相逢滿月迎、此地雖二身無一掾縻一、何爲寸步出レ門行」とあり。都府樓は、都督府の樓といふ義にて、太宰府の官舍をいふ。觀音寺は、太宰府にある寺の名。

とほ　痞痛　【名】やみつかるるをいふ。詩經「陟二彼砠一矣、我馬痛矣、我僕痛矣」とあるに本づきていふ。

どほうぐわかい　土崩瓦解　【句】土の崩れて墜るが如く、瓦の解けて離るゝが如く、潰亂するをいふ。淮南子に「瓦解而走、遂土崩而下」とあり。

とほさおもんばかりなければ、わかきうれひあり　無二遠慮一有二近憂一　【文】論語に出づ。目前のことにのみ心を用ひて、將來を考へざれば、近く憂ふべきことありとなり。

とほきところも、いでたつあしもとより、はじまりて　遠き所も出で立つ足もとより始まりて　【句】古今集の序文の語なり。白樂天の座右銘に「千里始二足下一、高山起二微塵一、吾道亦如レ此。行レ之貴二日新一」とあるよりとれるなり。

とぼくし　杜牧之　【名】唐の詩人。名は牧、京兆万年の人なり。太和二年進士となり、また。賢良方正にあげらる。豪放の性にて、狂杜牧の名を以て聞ゆ。世人、これを、杜甫に對し、小杜と稱せり。

とほざむらひ　遠侍　【名】昔、武家の屋敷にて、中門の側に廊の如く造りたる所をいひき。番の武士の詰所なるが故にかくいふ。又、寢殿の側近く候ふ處を、單にサムラヒといひき。

とほじろし　遠白　【形】もの〳〵あざやかに見ゆるをいふ。

とみ　疾、急　【名】急なること。俄なること。「とみのことにて御文あり」など。とみにといへば副詞にて、急に、早速になどの意。

とみ、てんかをいうす　富有二天下一　【文】中庸に「子曰、舜大孝也。德爲二聖人一。尊爲二天子一。富有二四海之内一。宗廟饗レ之、子孫保レ之」とあり。富裕なると、天下を保つとの意なり。

とん　Ton　噸　【名】英國の秤目にして、一ポンドの二千四百倍をいふ。また、船の重をいふにも用ふ。わが二百八十貫目ほどなり。

とんご　頓悟　【名】佛道の眞理を悟ることを。「頓悟徹底」など。

とんこう　敦厚　【名】志、又風俗などの、あつきをいふ。

とんさ　頓挫　【名】よき勢のものが、遽にくじけたるをいふ。頓は頓止、挫は挫折なり。また、文章の勢の急に弱くなりしにもいふ。

とんじ　豚兒　【名】他に對する時、わが子を指していふ稱。又、不肖の子の意にもいふ。五代史「生」子當レ如二李亞子一、克用爲不レ亡矣、吾兒豚犬耳」。

とんじ　遁辭　【名】にげことば。にげ口上。孟子「遁辭所レ窮」とあり。

どんじき　屯食　【名】今の、ちりづめの類。辨當といふほどの意なり。トジキとも訓む。

とんしゆ　頓首　【名】周禮の注に、「拜頭叩レ地也」とあり。頭をさげて、地に至るをいふ。もと、支那の一種の拜禮なれど、今は、專ら書狀の文の末に、敬語として用ふる事となれり。

どんす　緞子　【名】繻物の名。地厚くして美しき絹なり。

とんぢやく　頓着　【名】氣にかけること。其の事をのみ思ふこと。

どんぼく　頓踣　【名】たふるること。爾雅に「頓は僵なり。踣は仆に同じ」とあり。

とめばり　留針、蟹眼針　【名】びんに同じ。物を假に留めおくための針。

ともがき　友垣　【名】友人。友達。朋友。友は、相扶け相救ふことゝ。垣の木の、相互に助けあふ如くなればいふとぞ。

ともなふ　伴　【動ハ四】此の語、自動も他動も四段の活用なり。相連れ立つ意。又、つれらるゝ意。人のみに限らず、すべて物事の遲速の甲乙なきにもいふ。

ともにたのしむといふその　偕に樂むといふ園　【名】かいらくゑんを見よ。

ともばやし　みつひら　伴林光平　【名】通稱は六郎、蔣齋、斑鳩隱士などの號あり。攝津の人。初め僧なりしが、後に悔いて還俗す。國學、和歌に長じ、大和の斑鳩に住して子弟を敎ふ。慷慨にして國を憂へ、遂に天誅組に投じて、奈良奉行の手に捕へられ、元治元年三月斬らる。

ともひらしんわう　具平親王　【名】村上帝の九子、六條の宮と稱す。二品中務卿に進む。一條帝の寛弘六年七月薨じ給へり。年四十七。實に當時の文宗たりき。世に兼明親王(前中書王)と並稱して、後中書王といふ。中書は中務の唐名なり。

ともゑのはた　巴の旗　【名】巴の紋をしるしにつけたる旗なり。巴の紋は、見聞諸家紋によれば、右巴は宇都宮氏、左巴は小山、結城、土肥、山下、沼田氏等なり。

とやま　富山　【名】地名。越中富山市、神通川の東岸にあり。國中第一の都會にて、人口六萬許。

とやまのしか　外山の鹿　【句】山の鹿といふほどの意。外山は端山といふに同じく、麓の山なり。續拾遺集「秋風に、外山の鹿は、聲立てて、露吹き結ぶ、小野の淺茅生」で

とやま、まさかず 外山正一【名】靜岡藩士。慶應元年十六歳の時、中村敬宇、菊池大麓等と、藩選により、英國に留學し、明治元年歸朝す。後また米國に留學し。歸りて開成學校、東京大學、帝國大學の教授となり、文學博士となり、大學總長を經て、三十一年文部大臣となり。三十三年三月歿せり。年五十三。

とよあきづしま 豐秋津洲【名】日本の別稱なり。豐は美稱、秋は稻の豐熟せるより取れる稱なり。

とよあしはらのみづほのくに 豐葦原瑞穗國【名】日本國の別稱。わが國は四方海岸にて、もと蘆葦發生したるより、やがて葦原といひ、五穀の豐穰なるより瑞穗國といへり。葦原と瑞穗と二つ合せて、一つの名となせるなり。豐は國にかゝる美稱。

とよきいりひこのみこと 豐城入彥命【名】崇神帝の皇子、垂仁天皇の御兄。初めて詔を受けて東國に下り地方の民情を視察し給へる皇子なり。

とよさかのぼる 豐榮昇る【句】旭日の勢盛に輝きのぼるをいふ。

とよのあかり 豐明【名】宮中の節會の時などの酒宴を稱する詞。あかりとは、群臣の大御酒を賜はりて、顏の赤らむ故にいふといへり。また、後には十一月の中の辰の日に、特に豐明節會とて行はれたりき。そは、公事根源に、「これは、今年の稻を神に奉らせ給ひて、今日、君もきこしめし、臣下にも給ふ故に、節會行はる。新嘗に參りたる上卿、宰相云々」とあり。

とよはら ときもと 豐原時元【名】豐原家は、世々雅樂を以て朝に仕ふ。時元、また、堀河院の御師範たりき。官は右近衛將監に至る。子時秋、また雅樂大夫、樂所勾當となる。系圖、群書類從に出でたり。

とよむ 響動【動マ四下二】響く。騷ぐ。動く。搖る。

とよらのみや 豐浦の宮【名】推古天皇の宮をいふ。其の舊址は、大和國高市郡飛鳥村豐浦にあり。また、仲哀天皇の熊襲御親征のときの行宮をいふ。其の舊址は、今の長門國豐浦郡長府村豐浦町の地。

とらの、ぐうをおふがごとし 虎の嶋を負ふが如し【句】勢強きもの、便利の地に在るをいふ。嶋は山曲なり。

とらのをかるきつね 虎の威を借る狐【句】他人の勢をかりて、惡事をなすものをいふ。文選「風憲ノ社貴、狐藉ノ虎猛」。又、戰國策に曰く、「江乙曰、虎求二百獸一而食之一。得ノ狐。狐曰、子無二敢食一我也。天帝使二我長一百獸一。今子食ノ我、是逆二天帝命一也。子以ノ我爲二不信一、吾爲ノ子先行。子隨二我後一觀。百獸之見ノ我而敢不ノ走乎。虎以爲ノ然。故遂與ノ之行。獸見ノ之皆走。虎不ノ知二百獸畏ノ己而走一也。以爲ノ畏ノ狐也」とあり。

とらのををふむおそれ 虎の尾を踏む恐【句】尙書に「若ノ踏二虎尾一涉ノ春氷一」とあり。心に危懼を抱くをいふ。戰々兢々たるなり。

とりかけて 取り掛けて【副】取りて先方に掛くる。よせかくる。

とりかひのみまき 鳥養御牧【名】地名。攝津國三島郡にあり。

とりかへばやのたいしやう 取換ばやの大將【名】とりかへばや物語中に見えたる大將にて、女子なれど男らしく見ゆるより、兄なる人とその性質を取りかへて、朝に仕へしめたりといふ意より、此の名あり。ばやは願望の意なり。此の人、女子ながら大將とまでなり、後に入內せる趣につくりなせり。

とりのこ 鳥子【名】鳥の卵をいひ、また、紙の名にいふ。この紙は雁皮と楮とを合せて漉きたるものにて、厚く滑かにして質堅し。越前丹生郡および敦賀產を最上とす。

とりの、まさにしなむとするとき、そのなくこゑやかなし 鳥の將に死なんとする時その鳴くこゑや哀し【文】論語に「曾子言曰、鳥之將ノ死、其鳴也哀。人之將ノ死、其言也善。君子所ノ貴二乎道一者三」とあり。

とりべ 鳥部野【名】地名。鳥部山ともいふ。山城國愛宕郡にあり。昔の墓地。多くこゝにて火葬せり。

とりゐ きよのぶ 鳥居清信【名】畫人。通稱彥兵衛。菱川風の浮世繪を學びて一家をなす。鳥居派の開祖とす。江戶歌舞伎の繪看板を描き、爾來今日まで、劇場の繪は鳥居風を用ひて變ることなし。享保十四年七月歿す。二世清信、三世清滿、また後に、清信と稱せり。

とりゐたうげ 鳥居峠【名】地名。信濃國下伊那郡に在り。中仙道の藪原と奈良井との間に橫はれる峻嶺なり。もと岐蘇の御坂と稱せしを、後に、御嶽神社の華表を其の頂に立てて、遙拜所としより、此の名あり。

とりゐもとただ 鳥居元忠【名】彥左衛門と稱す。德川家康の臣。慶長五年、家康、上杉景勝を會津に征するに當りて、元忠をして伏見城に留守せしむ。大坂の兵攻め來りて、元忠遂に戰死せり。年六十二。

とる 弗【名】英語の Dollar なり。銀貨なり。一弗は我が二圓ほどに當る。

とれい 徒隷【名】人の下に附き從ふ所の屬隷をいふ。戰國策に「郭隗曰、若恣睢奮擊、咄嗟叱咄、則徒隷之人至矣」。

とる 都尉【名】支那の武官の名。秦の制度なり。

どる どしかつ 土井利勝【名】本姓は、水野氏。土井利昌

の養子となる。天正七年召されて、德川秀忠に侍す。後、寛永十年下總佐倉より古河城に移る。舊封を合せて十六万二千石を食み、大老となりて家光を輔く。正保元年七月卒せり。年七十二。

どゐ みちはる 土居通治 【名】二郎と稱す。伊豫の人。河野氏の族にて備後守たり。勤王の士。後醍醐天皇船上山に幸し給ふに當りて、義兵を起し、鎭賊軍と戰ひ、互に勝敗ありき。後に皇太子を奉じ、金崎城に居り、城陷りて遂に割腹して死にき。

とをんせうせつ 兎園小說 【名】瀧澤馬琴、屋代弘賢、山崎美成等、兎園會といふ會を起し、其の人々の文稿を集めたる書なり。

な

ないえん 内宴 【名】いにしへ禁中にて、正月二十一日に行はれし公事。仁壽殿にて文人に題を賜はり、詩を作らしめ、御前にて披講し、終りて宴を賜はる、内々の節會なり。

ないがしろ 蔑 【名】侮ること。輕蔑すること。

ないぐう 内宮 【名】伊勢皇大神宮の稱なり。豐受大神を祭れるを外宮といふに對していふ。

ないこう 乃公 【代】だいこうとも訓む。此方（コノハウ）といふに同じ。即ち、自尊していふ詞なり。また、廼公ともかく。史記の高帝紀に「幾敗二廼公事一」。

ないこう 内訌 【名】内輪同士の間に鬪着して、互に鬪爭を起すこと。詩經「蟊賊内訌」とあり。鄭箋云、「内爭相殘賊」とあり。

ないし 乃至 【接】佛典の語。數の上下をあげ、中間を略するにいふ。「五乃至七」。或は、又は、などの意に用ふ。般若心經「無二無明一、亦無二無明盡一、乃至無二老死一云々」。その略疏に、「此擧二初支一、中間十支一、皆應レ準レ此、故云二乃至一」とあり。

ないしつかさ 内侍司 【名】大寶の制、後宮十二司の一にして、宮中に奉仕する女官なり。長官を尚侍（ないしのかみ）といひて二人あり。次官は典侍（ないしのすけ）四人、次は掌侍（ないしのじょう）四人ありて、其の下に女孺一百人あり。又、音にて、尚侍（シャウジテンジ）、典侍などとも呼ぶ。

ないしどころ 内侍所 【名】故實拾要に、「東西三間半、南北五間半、後に局あり、神鏡奉安の殿なり」とあり。されば、又、直に神鏡をさして、内侍所と申すことにもなれり。内侍、之を守護す。

ないしやうでん 内昇殿 （名）昇殿に同じ。禁中の殿上に昇ることを得るなり。内昇殿は、公ならざる意。

ないしよう 内證 【名】うちわ。表面にあらはれぬこと。おもて立たぬこと。

ないちんげえる Nightingale 【名】英國婦人の名。看護の事に意を致し、クリミヤ戰爭には、英國陸相の懇請によりて戰地に赴き、死傷の兵を救護して、殊功ありき。世に赤十字の主勤者といふ。今八十餘年の高齡を以て倫敦にあり。

ないでん 内典 【名】佛家にて、己が奉ずる佛書を内典（ゲテン）といひ、佛教以外、即ち漢籍を外典といふ。

ないふ 内府 【名】内大臣の唐名。

ないべん 内辨 【名】中古、諸節會の時、承明門内に於て、庶事を辨備する人をいふ。門外にて諸事を執る人を、外辨（ゲベン）といふに對していふなり。ゲベン參照。

なうさ　嚢沙【名】昔、韓信、漢の將として齊を討つ。楚國、龍且を將として齊を助けしむ。龍且、信と、水を夾みて陣す。信即ち、一夜、人をして萬餘の嚢を爲り、沙を滿盛して、水上の流を擁せしめ、軍を率ゐて、半渡りて龍且を擊ち、佯りて負けたるまねして還り走る。且、果して喜びて曰く、我固より信の怯を知れりといひて、遂に逐て水を渡る。信すなはち、人をして先の嚢を決せしむれば、水大に至り、龍且の軍、大半渡る能はず。信、急擊して龍且を殺す。且が軍、潰散し、齊王廣、又亡びぬ。信遂に追ひて、北の方城陽に至り、楚の軍を虜にす。委しくは、史記の淮陰侯傳を見よ。

なうし　直衣【名】衣の一種。形は袍に同じ、平常の服なれども、身分高き人の、許されては、禁中にても着るなり。又小直衣と云ふあり、此は神に露あり。直衣をきる時は、大方差貫をはきて烏帽子をかく。之を烏帽子直衣といひ、冠を戴くを冠直衣といふ。

なうちゆうのきり　嚢中の錐【句】勝れたる人は、世の中を避けて居ても、人に知らるゝをいふ。史記平原君傳に「平原君曰、夫賢士之處ル世也、譬若錐之處ル嚢中ニ、其末立見、云々」とあり。

なうり　腦裏【名】腦のうち。頭の中。精神界。

ながい　長寢【名】長く寢ること。

ながうた　長歌、長唄【名】長歌は、歌の一體。五七の句を重ねたるもの、長短定まらず。其の末は七音を二句重ぬ。又、末に、反歌と稱し、三十一文字の歌一首以上を添ふることあり。又、俗謠の一種なる長唄は、寛永の頃、杵屋勘五郎といふもの唄ひはじめ、これに三絃、腰鼓、笛などを合せて、おもしろきふしをつけて謠ふものなり。

ながうたのざす　長歌の座主【名】よしめづそうじやうを見よ。

ながえとうじゆ　中江藤樹【名】名は原、字は惟命、與右衛門と稱す。近江國高島郡小川村の人、祖父は加藤泰興に仕へ、父は小川村にありて農となり、早く死す。藤樹祖父に從ひ伊豫の大洲に居り、幼より學を好む。會々、京師の僧來りて論語を講ず。藤樹從ひて學び、益、學に志す。母の鄕里にあるを以て、暇を乞ひしが許されず、乃ち逃れて近江に歸れり。藤樹初は程朱の學を修め、後には王陽明の說を信じ、實踐躬行す。人其の德に服し、呼んで近江聖人と稱せり。大洲侯、備前侯等、禮を厚くして召せども應せず、慶安元年歿せり。年四十有一。

なががはじゆんあん　中川淳庵【名】幕府の醫官なり。名は謙。蘭學を好み、醫術を善くす。また、海外の事情に通ぜしかば、外人も其の姓名を知るもの多かりきとぞ。嘗て平賀鳩

溪と謀り、武州秩父産の石綿を以て、火浣布を作り、世人をして驚嘆せしめき。

ながくて　長久手、長湫【名】地名。尾張國愛知郡長湫村天正十二年、小牧山の役に、豊臣秀吉兵二萬を率ゐて、德川氏の岡崎の虛を衝かむとす。家康追擊して此の地に戰ひ、秀吉の將、森長可、池田信輝を殪す。

ながくぼせきするる　長久保赤水【名】地理學者なり。名は玄珠、通稱源五兵衛、水戸赤濱の人。性質坦易洒落。日本地理志、日本地理考、清槎唱和、長崎行後日記、清廣輿地大全圖、朝鮮全圖、赤水文章等の著あり。

なかぐろのはた　中黑の旗【名】輪の中に、太く、黑き横一文字をひきたる紋の旗なり。新田氏の旗印。

ながさかてうかん　長坂調閑【名】人名。武田氏の臣なり。勝賴に至りて寵殊に渥し。頗る姦才あり。武田氏の滅亡は、一に調閑の罪にありともいふべし。

なかざし　中差【名】弓の矢の、箙の中に差したるをいふ。

ながさはともを　長澤伴雄【名】柿園と號す、紀州の人。本居大平の門人なり。

ながしの　長篠【名】三河國南設樂郡長篠村。永祿四年、城主菅沼眞景、今川氏に叛きて德川氏に降り、元龜三年、武田氏に屬す。天正元年、德川氏之を陷れて、奥平信昌をして守らしむ、三年、武田勝賴來攻す。德川織田兩氏來援して、武田氏の兵、此に大敗す。

ながじまひろたり　中島廣足【名】檜園と號す。肥後の人。本居大平門下の國學者なり。後に長崎に住して子弟に教授し、大に聲望あり。元治元年歿す。年七十三。

なかぞら　中空、半空、半天【名】空のある高さの處をいふ。空の中間の意。轉じては、有頂天といふに同じく、心の空なるにいひ、また、中途、半途などの意にもいふ。なかぞらにして止むなどは副詞なり。

なかぞらにつき　中空日記【名】書名。香川景樹の旅行日記なり。和歌おほし。

ながた、さた　長田、狹田【名】長田は周圍の廣き田。狹田はせまき田なり。日本書紀神代卷に、「天狹田及長田」とあり。

ながたぜんきち　永田善吉【名】銅版畫の祖と稱す。文政五年五月七日歿す。年七十二。

ながたとくほん　永田德本【名】號を知足齋といふ。傳詳ならず。甲斐の人ともいふ。三河の人ともいふ。醫を業とす。寛永七年二月十四日歿せり。年百十七歲。姓を長田とも記せり。

ながつき　長月【名】陰曆九月の異稱。夜長月の義。

ながつはん　中津藩【名】豊前中津。德川氏のとき、藩主は奥平氏なりき。

なかとみ 中臣【名】氏の名。天照大御神、天の石窟に籠り給ひし時、天兒屋根命は祝詞を宣り、天太玉命は和幣を作り、天鈿女命は神樂を奏せり。其ののち、天孫降臨の時、天兒屋根命は、中臣の部族を率ゐ、太玉命は忌部の部族を率て、從ひ奉り、爾來兒根屋命の子孫は、中臣連と稱して中臣の長となり、太玉命の子孫は忌部首と稱して忌部の長となりて共に宮中の祭祀を掌れり。

なかとのかみしげなり 長門守重成【名】木村重成なり。豐臣秀頼に仕へて、大阪夏の役に戰死す。

なかとみのよごと 中臣壽詞【名】天皇御踐祚の日に神祇伯中臣氏の奏聞して、大御代を祝ぎ奉る詞なり。天孫降臨以後中臣氏、神祇奉仕の職として奏し來れる詞なるによりて、中臣の壽詞といふ。又、天神の壽詞ともいへり。文は台記（藤原賴長の日記）に載せたるもの一篇あり。長ければ略す。

なかなか 中々【副】古くは、却りての意に用ひられしも、轉じては、すこぶる、相應に、容易に、などの意に用ふ。また、諾にては、たゞ返答の語として用ふ。

なかのいみきおきまろ 長忌寸奥麿【名】萬葉集の歌人。傳詳ならず。同集に「くろしくも、降り來る雨か、三輪が崎、佐野のわたりに、家もあらなくに」の詠歌あり。この佐野は、紀州牟婁郡の地名なりといふ。

なかのおほえのわうじ 中大兄皇子【名】天智天皇の未だ皇子にて在せし時の御名なり。

ながのくわく 長野確【名】字は孟確、豐山と號す。伊豫の人。天保八年江戸に歿す。年五十五。松陰快談、嘉賽軒文約等の著あり。

なかのくわんぱく 中關白【名】藤原道隆のこと。父兼家、弟道長、前後關白たりしを以て、道隆を中關白と稱せり。

ながはま 長濱【名】地名。近江國阪田郡にあり。郡内第一の港市にして、物産には濱縮緬あり。羽柴秀吉の居城たりし地なり。

なかみかど 中御門【名】平安城の待賢門をいふ。また、其の表の通路を中御門大路といふ。

なかみちたか 那珂通高【名】梧樓と號す。陸中盛岡の藩士。博學多識を以て稱せらる。文部省に仕へ、榊原芳野等と、古事類苑の編修に從事せり。明治十二年五月歿せり。年五十二。今の文學博士通世氏の父。

なかむらあきか 中村秋香【名】舊靜岡藩士。國學者にして現に御歌所寄人たり。

なかむらけいう 中村敬宇【名】幕府の儒官。名は正直。幼名釧太郎。明治二年小石川に塾を開き、同人社と稱す。後、正四位文學博士となる。明治二十四年六月歿せり歳六十。

なかむらてきさい 中村惕齋【名】名は之欽、字は敬甫。京都の儒者なり。博學洽聞にして當時伊藤仁齋と名を齊くす。元祿十五年七月歿す。年七十四。著書は姬鏡、四書五經の註書など、數十種あり。

なかむららんりん 中村蘭林【名】名は子遠。字は子晦。德川幕府の儒官なり。寶曆十一年九月歿す。年六十五。

なかむらりつそん 中村栗園【名】名は和、字は子藏。豐前中津の人。水口藩の儒員たり。明治十四年十二月歿す。年七十六。

なかやまあしやう 山中亞相【名】中山大納言愛親卿なり。文化十一年八月薨ぜり。年七十四。

なかやまびぜんのかみのぶよし 中山備前守信吉【名】姓は丹治。父を家範といひて、北條氏に仕へて八王子城に戰歿す。信吉は其の次子。小字は新太郎。後に雅樂助と稱す。德川氏に事へ、命を受けて水戸侯賴房の傅となり、二萬餘石の采地を賜はる。寬永十九年病死す。年六十七。

ながら、かみじま 長柄、神島【名】共に地名。大坂市天滿の北。中津川に沿へる所。今の長柄村邊なり。

ながれに、みづもとむるねずみ 流に水求むる鼠【句】はやしにやどるささきを見よ。

ながれをみだす 流れを亂す【句】爾雅釋水に、「水正絶曰レ亂」とあり。注に、「流れを横切りて渡るなり」とあり。

なかゐしうあん 中井甃庵【名】大坂の儒者なり。名は誠之。字は叔貴。享保十一年、官に請ひて、懷德書院を尼崎に設け、己の師石菴を請ひて祭主とす。後代つて教授を領す。寶曆八年六月十七日歿す。六十六。

なかゐなほまさ 永井尚政【名】永井直勝の子。年十四、家康に關が原に從ひ、後、秀忠に仕ふ。常州具塚を領す。元和八年老職に列し、書院番頭を兼ね、寬永十年山城淀城に轉封せられ、邑十萬石を食む。万治元年仕を辭して信齋と號す。寬文八年九月卒す。年八十二。

なかゐなほみち 永井直道【名】舊櫛羅藩の當主永井直哉子より五代前の祖を直遐といひ、直道は其の弟なり。直次郎と稱し、他に養子となる。其の歌文を集めたるものに、空行く雁あり。

なかゐりけん 中井履軒【名】名は積德。竹山の弟。大坂の人。五井蘭州に宋學をうけ、文章をよくせり。文化十三年歿す。年八十五。

ながをかのみや 長岡宮【名】桓武天皇延曆三年、奈良より山城國乙訓郡に遷都ありて、長岡宮と稱し、同十三年、また平安に都を遷さる。

なぎ 水葱【名】水草の名、水葵の類なり。

なさきのゐん 渚院、波瀲院 【名】河内國北河内郡渚村にありし、文徳帝の皇子惟喬親王の別業なり。

なさなみ、ふたばしら 諸冊二柱 【句】伊弉諾尊、伊弉冉尊を申す。神を數へ奉るに、一柱二柱と云ふは、敬語なり。

なぐはし 名細 【形】【枕】名の美しき義にて、世に聞えたる名所などをいふ。また、枕詞として、其の名所の名高きところにかけていへり。「名ぐはしき吉野の山」など、

なげし 長押 【名】ながおしの約にて、鴨居の上、又は、敷居の下に横に長く亘す材。後世、主に、上のをいひ、下のをシタナゲシといふ。枕草紙「長押の下に、火近くとりよせて」。

なごしのはらへ 夏越の祓、名越の祓、六月祓 【名】六月晦日の大祓をいふ。ミナヅキバラヘともいふ。川の瀬におりたちて、年中の罪穢(ツミケガレ)を祓ふなり。

なごむ 和 【動マ四、下二】和(ナゴ)くなる。やはらぐ。

なごや 名古屋 【名】尾張の國名古屋市。徳川氏の時、家康の子義直より代々、其居城のある所たり。即ち彼の有名なる金城のある所なり。現今第三師團のある地。又、肥前東松浦郡にも同地名ありて、名護屋、又那古耶に作る。豊臣秀吉の征韓の時、本營を設けたる處なり。

なごやかに 和 【副】落ちつきて。靜かに。

なごり 名殘 【名】餘波(ナゴリ)の轉なり。すべて、過ぎ去りし後に、猶、其の氣の殘れるをいふ。別れて後に心の殘るなどにもいへり。

なさかのうみ 浪逆の海 【名】常陸國稻敷郡霞の浦の下流を浪逆浦といふ。萬葉集「常陸なる、なさかの海の、玉藻こそ、ひけばたえすれ、あごか絶えせむ」。

なしつぼ 梨壺 【名】昭陽舍をいふ。内裡の一舍にして、温明殿の北に隣れり。東宮のおはします所。つぼ參照。

なしのかたえ 難四之可他延、梨の片枝 【名】書名。三條實美公の歌を、高崎正風男の編輯せるものなり。三條公の號を梨堂といへる故に名づけたりと。

なしりとはく 詰問 【副】詰り問ふの延びて副詞となれる語。「問ひ究めていふには」などの意。先方の詞を皆めて問ひつむるなり。

なしもとしふ 梨本集 【名】書名。一卷あり。梨本茂睡の歌集なり。

なすむねたか 那須宗高 【名】與市といふ。下野國の人にして藤原氏なり。弓術に通達したりしこと、源平盛衰記などに見えたり。

なせり 成 【動ラ變】成してさあり、と、熟合して、一の動詞となれるもの。時においては、全く現在をいひあらはす。

なぞ 謎 【名】玉篇に「隱言也」といへり。和訓は、何々と問をかけて、其の事をあかす故、なぞ〳〵といふとぞ。

なだらかに 平穩 【副】ゆるやかに。平かに。おだやかに。すらすらと。流暢に。

なだれ 雪頽 【名】なだれ落つる雪。積雪のくづれ落つるをいふ。

なつかし 可懷 【形】ゆかしくしたはし。よりつきたくおもふ。木々の下風のなつかしきになど。

なづき 名附 【名】名簿なり。今の、名刺ともいふべきもの。「名づき逐る」などいひて、入門の意などにも云へり。

なづさふ 【動ハ四】水に着く、水に浮ぶ、水をわたる、などの意。轉じては、馴れ親しむ、なじむ、などの意にも用ふ。

なつじま 夏島 【名】島名。相摸國三浦郡に屬す。

なつやまのしげき 夏山繁樹 【名】大鏡の作者が假設せる人物の名なり。おほかがみを見るべし。

なでしこ 撫子 【名】草の名。高さ一尺許り、葉は茅に似て厚く柔く、また少し筐にも似たり。花は莖の末にさきて、花瓣の先、櫛の齒の如く裂けたるもの。大和撫子、唐撫子あり。

なでふ 何條 【句】何といふの約言なり。條の音デウなれば假名違へども、古くより何條と宛字したり。なんでふともいへり。「何のこともない」といふを、「何でふことかあらむ」などいふ。

なとまとは、ひとにかさず 名と器とは人に假さず 【文】左傳「惟名與器、不可假人」。名は官位をいひ、器は尊卑を分つ服飾をいふ。

ななくさ 七種、七草 【名】芹、薺、御行、蘩蔞、佛座、菘、蘿蔔の七種の菜をいふ。正月七日に之を羹として食ふ。後には七種粥とて、粥に炊きて食ふ。されば正月七日を、ななくさともいへり。また、春の七草ともいふ。歌に「せり、なづな、御行、はこべら、佛の座、すずな、すずしろ、是や七草」とあり。秋の七草は、萬葉集の旋頭歌に「萩の花、尾花、葛花(フヂバカマ)、撫子の花、女郎花、また藤袴、あさがほの花」と見えたり。

ななこ 魚子 【名】織物の名。絹布の織目の斜に打ち違ひて見ゆるもの。武藏の川越などより出づ。

ななづみそ 勿拘泥 【句】なづむなかれの意。なそは禁止の詞。なとそとの中間に動詞の連用を挿入するを例とす。なづむは、澁滯す、抱泥す、などの意にいふ。

ななのあゆみにうたよむ 七の歩に歌詠む 【文】しちほのしを見よ。

ななのはなのとき、にしきのとばりのもと 何の花の時錦の帷の下 【句】らんしやうのはなのときんちやうのもとを見よ。

なにはづ 難波、浪速、浪華 【名】攝津淀川の末流なる沿岸

の地、西成東成兩郡邊の汎稱なり。また大坂の別稱としても用ふ。

なにはづのうた　難波津の歌【句】王仁のよみし「なにはづに、咲くやこの花、冬ごもり、今は春べと、咲くやこの花」の歌なり。昔手習の始めにならひしもののよし、古今集の序にいへり。

なにはのあしは、いせのはまをぎ　難波の葦は伊勢の濱荻【文】古き連歌に「物の名も、所によりて、代るなり、難波のあしは、伊せのはまをぎ」といふあり。濱荻は葦の一種にして、片葉なるものとぞ。

なにはのこと　何事、難波の事【名】何等の事。よしあし。玉葉集「よしあしは、分かぬ身なれど、世に住めば、なにはのことも、見てぞ久しき」。

なにものぞうそだい　何者窮措大【句】何物は何等に同じ。窮措大は書生なり。書生は大事を學措して窶行伴はざるによる。きうそだい參照。

なぬかくわんぱく　七日關白【名】藤原道兼をいふ。道兼は粟田と稱し、二條といひ、又町尻といへり。關白の職にあること僅に七日、世に七日關白といひき。

なはめ　縄目【名】繩縛といふに同じ。繩にて縛せらるるをいふ。されば法律の罪人となるを繩目にかかる、繩目の恥なほびと　直人、常人【名】ただびとといふに同じ。普通どいふ。

なふげん　納言【名】支那の官名。周の內史。漢の尚書。魏晉以來の中書門下なり。命令政教を審査して、下に達する官なり。書經「命レ汝作二納言一」。我が國にては、大（中少）納言といふ。

なふさい　納采【名】俗に「ゆひなふ」といふ。男女婚を結ぶ時、物を納れて、采擇の禮を爲すをいふ。

なべて　並べて【副】おしなべて。概して。おほかた。

なほ　猶、尚、仍【副】俗にいふやはりの意に用ふ。それでもまだ。又、此の上、一層、などの意にも用ふ。

なほえつ　直江津【名】越後國中頸城郡直江津町。荒川の河口にありて、北陸の要津たり。東京上野發の滊車は、大宮驛を西北に、高崎より碓井峠を經て、信濃の北部を過ぎ、此に達す。新潟を距ること三十二里。

なほじま　直島【名】讃岐國の海上小豆島附近にあり。香川郡に屬し、直島村といふ。崇德上皇の遷され給ひし地。

なほしもえあらで　猶しも得有らで【句】萬葉集に默然をなほにとも、ただにとも訓ぜり。すなはち、其のまま何事もせず、默して居る事を得ずしての意。「ただ捨ても置かれねば」、「其の儘でも居られすて」、などの意。

の人。

なほびのみたま　直日靈【名】書名なり。本居宣長が皇國の大道を論述したるもの。一卷あり。

なぽれおん　Napoleon【名】ナポレヲン一世は、伊太利國領コルシカ島の人。もと一士官なりしが、佛國王ルイ失政の機に乘じて、代議士の不德を責め、執政官の失政を彈劾し、兵力を以て議會を解散せしめ、新に憲法を制定して、自身執政長官となり、遂に一八〇五年五月、帝位に即く。然れども、後に再度の窮亡に遇ひ、各國聯合軍と戰ふに及びて、擒となりてセントヘレナ島に流され、在島六年にして一八二一年五月歿せり。年五十二。古今無比の英雄と稱せらる。その甥ナポレヲン三世、また叔父の偉業を繼ぎて帝位に即き、再、佛國の威名を輝せしも、これまた普軍に破られたりき。

なま　生【名】【接】名詞なるは、動植物などの煮ず燒かず乾さぬものをいふ。生の魚、生の玉子など。接詞なるは、名詞、動詞の頭にそはりて、成り調はず熟せずあるをいひ、また、假初にして深からぬなどにいふ。生物識り、生兵法、生乾、生覺え、生賢し、生片腹いたし、生をかし、生白し、など。

なまふがう　生不學【名】未熟なる學者。なまは未熟の義。ふがうは、不學の音便なり。

なまめかし　婀娜、嬌冶、窈窕【形】艷に美し、色めかし、あでやかなり、などの意。

なみはやのくに　浪速國【名】攝津の古名。難波の崎に、神武天皇の御舟着き給ひし時、海潮急なりしかば、浪速の國と名づけしなり。今ナニハといふは轉じたるなり。

なむ　南無【名】梵語なり。歸命と譯す、佛に歸依する義。

なんかのゆめ　南柯の夢【句】異聞集に曰く、「淳于棼家居廣陵、宅南有二古槐樹一、棼醉臥二其下一、夢、二使者曰、槐安國王奉レ邀、棼隨レ使入二穴中一、見レ楹、曰、大槐安國、其王曰、吾南柯郡政事不レ理、屈レ卿爲レ守理レ之。棼至レ郡凡三十載、使二送歸一、遂覺。因尋二古槐下穴一、洞然明朗、可レ容二一榻一。有二大蟻一。乃王也。又尋二一穴一、直上二南柯一。即棼所レ守郡也」とある故事に本づく。

なむきみやうちやうらい　南無歸命頂禮【句】南無は梵語、那謨（ナウマク）の轉にて、歸命の義。心身を佛に歸依するなり。されば、佛の名をいふとき、また佛にいのる時に、發語の如くに用ふ。頂禮は、頭を地につけて敬禮する義。

なんぐうのやしろ　南宮社【名】美濃國不破郡。國幣中社。祭神は金山彦命なり。

なんくわのへん　南華篇【名】莊周の著たる莊子のことをいふ。莊周を南華老人ともいふ。

なんざんにたけあり　南山有レ竹、不レ糅自直、斬而用

之、達二于犀革一、以レ此言之、何學有レ之【文】孔子家語に出づ。犀革は鎧なり。南山の竹ためずとも、自然と眞直にて、切つて槍にすれば、鎧をも突通す、之によりて考ふれば、何の學問か必要あらん。學問せずともよきものなり。いかほど學ぶとも、精神堅からずしては、何事も爲すに足らずとの意なり。

なんざんのかげをひたさねども、あをくして、くわうやうたり　南山の影を浸さねど青くして洸瀁たり【文】源平盛衰記、東關紀行などに出でたる句なり。くわうやうを見よ。

なんぜんじ　南禪寺【名】京都上京區南禪寺町にあり。永仁元年龜山上皇別莊を寺とし給ひしもの。明治廿八年一月殿堂燒失せり。

なんせんぼくば　南船北馬【句】南の船、北の馬といふ義にて、諸方を旅行し歩くことをいふ。

なんぞ　庸何【副】ようかと音讀してもよし。庸は、虛字にて義なし。唯、何の意なり。

なんそんてつかうろく　南村輟耕錄【名】書名なり。支那元代の法制、及び兵亂等を記したるもの。明の陶宗儀の撰。

なんたうじゆんかうき　南島巡航記【名】書名なり。一卷あり。井上彦三郎、鈴木經勳の編にして、明治二十六年七月の出版に關る。

なんと　南都【名】京都に對して奈良をいふ。

なんぴ　南鄙【名】南方の田舍。鄙は邊鄙なり。

なんぶ　南部【名】陸中盛岡の四隣の地の汎稱なり。

なんぷうきそはず　南風不競【文】南方の勢振はざるにいふ。南方の國詩を南風といふ。之を歌ふに、その聲調盛ならず。よりて、南方の國の衰微不振に喩ふ。左傳襄公十八年「晉人聞レ有二楚師一。師曠曰、不レ害、吾驟、歌二北風一又歌二南風一。南風不レ競、多二死聲一。楚必無レ功」。これを我が國に移して、南北朝の時代の南朝の振はざるをいふにも用ひたり。

なんぶのめくらごよみ　南部盲曆【名】めくらごよみを見よ。

なんぼう　何程【副】どれほど、いくら、どんなにか、などいふ意。「なんぼう無念の事候ふぞ」など。

なんぼくてう　南北朝【名】建武三年、後醍醐天皇、吉野に幸し給ふに及びて、足利尊氏は、其擁立せる光明天皇を京都に擁し奉れり。よりて吉野を南朝とし、京都を北朝と稱せり。かくて後龜山天皇の元中九年（北朝の後小松天皇の明德三年）南北朝合一に至るまで、五十四年間を南北朝時代といふ。

なんやうけんのきくまる　南陽縣の菊水【句】支那の風俗通といふ書に、「南陽酈縣有二甘谷一、谷中水甘味。上有二大菊一、落レ水從レ山流下。得二其流波一、谷中人家飲二此水一、上壽百二三十其中百餘歲、六七十則爲レ夭」とあり。

なんやうのきうそうろ　南陽の舊草廬【句】諸葛孔明、南陽にあり。蜀の劉備その草廬を訪ひて、孔明を擧用す。即ち、備の崩後に、後主禪に奉れる孔明が前出師表に、「臣本布衣躬耕二南陽一、苟全二性命於亂世一、不レ求聞達於諸侯一。先帝不レ以二臣卑鄙一、猥自枉屈、三顧二臣於草廬之中一云々」とあり。

なんろうのつき　南樓の月【句】晉の庾亮、字は元規。武昌の鎭たりし時、月に乘じて南樓に登り、人と談詠せしよし、晉書庾亮傳に見えたる故事により、此の句あり。我が和漢朗詠集に菅原文時の句に、「金谷酔花之地、花毎レ春句而主不レ歸。南樓翫月之人、月與レ秋期而身何去」と見えたり。

なんわんだう　南圓堂【名】ふうふくじを見よ。

なんれい　無禮【形】無禮なり。亂りがはし。

なんよしのかしら　鯰の頭、名吉の頭【句】鯰は、古語に口女といひ、普通にイナといひ、方言にミヤウキチともいふ魚なり。其の頭なり。

なよびかに【副】しなやかに。たをやかに。婀娜として。

なら　楢【名】木の名。櫪の一種。ならがしともいふ。

なら　平城、乃樂、諾樂、寧樂、奈良、南都【名】地名

ならく　奈落【名】梵語なり。地獄をいふ。那洛伽。奈利。

ならてう　平城朝、奈良朝、寧樂朝【名】元明帝より光仁帝まで、七代七十四年間を奈良朝時代といふ。

ならのみやこ　奈良の都、平城京【名】大和國。元明天皇以來七代の帝都たりしなり。今の奈良市は、其の一部分に過ぎず。桓武天皇に至りて、平安京に遷都し給ひき。

ならあきらしんわう　成明親王【名】村上帝の、皇子にておはせしをりの御名。

ならどころ　生産所、業處、別業【名】生産の出づるところの義にて、田宅をいひ、轉じては、所領せる土地にある別邸をもいふ。

ならは、しほじり　形は鹽尻【句】伊勢物語に「富士山は云々、なりはしほじりのやうになむありける」とあり。鹽尻は、鹽竈にて、鹽を取るとき砂を積み上げて、圓く高く塚の如くしたるもの。

ならはずのおと　鳴弦の音【句】弓の音。戰のさわざ。弦とは弓の兩端の弦を懸くるところをいふ。

ならいた　鳴板【名】けんざんのいたを見よ。

なるかみ 鳴神 雷【名】かみなり。いかづち。

なるしまし ちよく 成島司直【名】徳川幕府の奥儒者となりて、三百俵を食む。邦之助と稱し、後、圖書頭と改む。字は邦之。翠巒、または東岳と號す。幕命を以て徳川實記を編す。文久二年閏八月歿す。年八十五。

なるしまりうほく 成島柳北【名】名は弘。幕府の奥儒者たりしが、維新の後は、新聞記者となりて、文名江湖に嘖々たりき。明治十七年十一月歿す。年四十七。

なるたき 鳴瀧【名】地名なり。山城國葛野郡にあり。

なるとのせと 鳴戸の瀬戸【名】阿波國と淡路國との間の海峽をいふ。

なるべし 奈留別志【名】書名。荻生徂徠の隨筆なり。各章の結びに「なるべし」といへるより、取りて書名としたるなり。

なるみがた 鳴海潟【名】尾張國愛知、知多二郡の西方の内海をいふ。古は今の鳴海町の邊まで、海水の汐さしたりしが、今は一里許の隔をなせり。宵月の濱とも稱して、古來の名所なり。新古今集に季能、「小夜千鳥、聲こそ近く、なるみがた、更けゆく月に、潮やみつらむ」。

なれしばかりのひとびと 馴れし許の人々【句】見馴れしほどの人々。さほど親しくはなく、唯顔を見知りたる位の人々。

なわながさし 名和長年【名】初名長高。又太郎と稱す。長年は、後醍醐天皇の下し賜へる名なり。元弘三年天皇の隱岐より出でませるを奉じて、船上山に據りしを、奉公の手初として、毎に王事に勤め、延元元年足利尊氏を京師に防ぎて、遂に戰死せり。當時楠正成、結城宗廣、伯耆長年、千種忠顯と三木一草の稱ありきといふ。

なをつる 釣名【文】虚名を博せんとするなり。管子「釣名之人、無賢士焉」。

に

にいう 二酉【名】多く書を藏すること。類書纂要、小酉大酉二山名。在古辰州府城西。石穴中有二書千卷。相傳秦人于此而學。因留焉。故梁東王云、訪二酉之逸興」。

にうしう 乳臭【名】幼稚の者をいふことにて、其の口邊に母の乳の香のつき居る意なり。漢書高祖紀「是口尚乳臭」とあり。轉じて、學問藝術の初歩のものをもいふ。

にえぶ 呻吟【名】によぶに同じ。うなること。聲を出して苦しむこと。

にがむにがむ【副】苦みながら。苦々しく思ひながら。顔をしかめながら。いやに思ふ、困却げに見ゆる、意。

にぎしね 和稻【名】精米。つきしらげたる米。白米。

にぎたへ 和栲【名】白き布。栲は穀（カヂ）の皮にて織りたる布なり。

にぎて 幣【名】和栲にて作りし幣をいふ。轉じて、すべての幣をいふ。

にぎはやひのみこと 饒速日命【名】天忍穗耳尊の御子。神武天皇東征前早く大和に降りませる神にして、可美眞手命の父なり。

にぎみたま 和御魂【名】にぎびたまふ御魂なり。にぎぶは、動詞のは行上二段に活用し、和ぐ義。此の外に、荒御魂、幸御魂などいふは、皆靈魂の活用につきていふなり。

にぐうのだいきやう 二宮の大饗【句】公事根源正月二日の條、「二宮とは、東宮、中宮を申すなり、王卿以下本宮に參じて、拜禮の事あり。次に玄輝門の東西の廊にして饗につく。まづ、中宮の饗につく。次に東宮の饗につく。三獻の義あり。云々」。だいきやう參照。

にくけい 肉刑【名】肢體を毀ふ刑罰なり。漢書刑法志に、「至二于戰國一、韓任二申子一、秦用二商鞅一、連二相坐之法一、造二參夷之誅一、增二加肉刑一、大辟有二鑿顚、抽脇、鑊烹之刑一」と見えたり。

にくさんぼうりん 肉山脯林【句】脯は乾肉なり。生肉や乾肉を山の如く積み重ぬとの義にて、飽食するをいふ。

にくしよく 肉食【名】常に肉を食物とすること。又美食して貧苦を知らぬものをいふ。左傳「肉食者謀之、又何間焉」。

にくたん 肉袒【名】肩をぬぎて、肌を露すこと。左傳「鄭伯肉袒、牽羊以逆」。

にしききてひるゆく 錦着て晝行く【文】光榮あるをいふ。魏志「張既爲雍州刺史、太祖謂既曰、遲君本州、可謂衣錦晝行矣」。「錦をきて故郷にかへる」といふも、此の事なり。

にしおん 西陣 【名】地名。京都市上京區の西北部（堀川以西一條以北）を汎稱す。應仁の亂に、西軍山名宗全の陣營ありしより、此の名あり。後には織物を以て名高くなれり。

にしでらのおいねづみ 西寺の老鼠 【句】催馬樂の歌に、「西寺の、西寺の老鼠、御裳つんつ、裳裳つんつ、裳裳つんつ、法師に申さむ、師に申せ、法師に申さむ、師に申せ」とあり。西寺は、昔延曆十五年に、桓武天皇が朱雀門の東西に兩寺を造營し給へる、其の西寺なるべし。東寺は今もあり。つんつんは噛みたりとの意。

にしのだい 西の對 【名】たいのやを見よ。

にしのみづうみ 西の湖 【名】せいこを見よ。

にしのみや 西宮 【名】攝津國武庫郡にあり。郡中第一の都會なり。

にじふいちだいしふ 二十一代集 【名】本邦の敕撰歌集にして、古今、後撰、拾遺、後拾遺、金葉、詞華、千載、新古今の八代集に、新勅撰、續後撰、續古今、續拾遺、新後撰、玉葉、續千載、續後拾遺、風雅、新千載、新拾遺、新後拾遺、新續古今の十三敕撰を加へたるもの是なり。

にじふいつし 二十一史 【名】支那歷代の史籍なり。史記、前漢書、後漢書、三國志、晉書、宋書、南齊書、梁書、陳書、北魏書、北齊書、周書、南史、北史、隋書、唐書、五代史、宋史、遼史、金史、元史是なり、これに明史を加へて二十二史ともいふ。

にじふしかう 二十四孝 【名】支那歷代中の孝子二十四人なり。大舜、漢文帝、曾子、閔損、仲由、董永、剡子、江革、陸績、唐夫人、吳猛、王祥、郭巨、楊香、朱壽昌、度黙雲、老萊子、蔡順、黃香、姜詩、王褒、丁蘭、孟宗、山谷、なり。

にじふはつしやう 二十八將 【名】支那後漢の鄧禹、馬成、吳漢、王梁、賈復、陳俊、耿弇、杜茂、寇恂、傅俊、岑彭、堅鐔、馮異、王覇、朱祐、任光、祭遵、李忠、景丹、萬脩、蓋延、邳彤、銚期、劉植、耿純、臧宮、馬武、劉隆の二十八人をいふ。皆、光武皇帝を佐けて天下を定めたる功臣なり。

にしん 鯡、青魚 【名】一名を鰊（カド）といふ。東北の海に多き魚なり。二つに身を割きて、干して遠きに致す。かすのごといふものは、この鯡の卵子なり。

にしむら しげき 西村茂樹 【名】舊佐倉藩士、曾て宮中顧問官たりしが、致仕して日本弘道會長となり、專ら力を用ひぬ。明治三十四年文學博士となり、三十五年八月歿せり。年七十五。

にしむら ときひこ 西村時彦 【名】天四居士と號す。鹿兒島縣人にして、現に大阪朝日新聞記者たり。

にしやま せつさい 西山拙齋 【名】名は正、字は士雅と稱す。拙齋は其の號、一の號を至樂居といふ。備中鴨方の人なり。寛政十年歿す。年六十四。

にしやま そういん 西山宗因 【名】名は豐一、梅翁、梅花翁、西翁、向栄庵などの號あり。もとは、肥後の加藤侯の臣にして、後に難波の天滿に卜居す。江戸時代俳諧に於て、談林派の宗たり。天和（五代綱吉）二年三月歿す。年七十三。其の吟、「新春の御慶は古き詞かな」、「世の中や蝶々とまれかくもあれ」。

にせんせき 二千石 【名】漢書百官表に、「郡守秦官、掌レ治二其郡一。秩二千石一」とあり。今の縣知事なり。

にちれんしゆう 日蓮宗 【名】法華宗ともいふ。僧日蓮の開きたる宗派なり。日蓮、姓は三國、父を貫名左衛門重忠といひ、母は清原氏、房州長狹郡敢川村に生る。年十八、剃髮受戒して眞言を學び、後專ら法華經を修め、建長五年四月廿八日、旭日に對して七字の題目を唱へ、始めて法華一派の宗門を立て、弘安五年十月十三日武州池上宗仲寺に寂せり。

につかく 日角 【名】相貌をいふ語。額中骨起し、其の狀日の如きをいふ。後漢書光武紀「隆準日角」。

につき よりあき 仁木賴章 【名】二郎三郎と稱す。足利尊氏に仕へて遂に執事となる、正平十三年、入道して道環と號し、明年歿す。年六十一。

につくわう 日光 【名】下野國上都賀郡日光町。日光山は一に二荒山ともいふ。男體女體の二峯に分れたり。山中には中禪寺湖、および華嚴、裏見、霧降等の瀑布あり。二荒山神社及び東照宮あり。東照宮は、元和三年德川家康の遺骸を駿河の久能山より改葬し、神殿を造營したるものなり。其の壯嚴全國に比類なし。

につくわうごんげん 日光權現 【名】下野國日光の二荒神社をいふ。今、國幣中社たり。また、東照宮をもいへり。

につくわうのけつかう 日光の結構 【句】「日光見るまで結構といふな」といへる俚言あり。日光の堂宇は壯麗無比なる上、日光と結構と、その音相似たる故にいふ。

につくわもん 日華門 【名】內裏のうちの一門にして、春興殿と宣耀殿との中間にあり。

につしん 日新 【名】日々舊染の汚れを洗濯して、新にするをいふ。書經「日新日々新又日新」。

につしゆつさんかん 日出三竿 【句】日の、三竿の高さに上るなり。朝暾高く懸るをいふ。南齊書天文志「日出三竿、黃色赤暈」。

につしよく 日蝕 【名】月球が太陽と地球との間にありて、日光を遮蔽するによつて生ずるものにして、其の蝕甚だしければ月球の陰翳なり。

につたさちゆうじやう 新田左中將 【名】新田義貞なり。

につた よしあき 新田義顯【名】小太郎と稱す。義貞の子。毎に父に從つて征戰の間にあり、金ヶ崎城を居守して、賊兵に圍まれ、遂に尊良親王と共に自殺す。

につた よしなり 新田義成【名】はじめ平氏に屬して京にあり。賴朝兵を擧ぐるに及びて鎌倉に來歸し、伊賀守從五位下に任叙せらる。續きて將軍四世に歷仕して寵遇あり。文曆元年卒せり。

にでうのみゆき 二條の行幸【句】くわんえいのみゆきを見よ。

ににぎのみこと 瓊々杵尊【名】天照皇大神の御孫、正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊（マサカアカツカチハヤヒアメノオシホミミノミコト）の御子なり。

には 庭【名】庭園。地上の平なる所。または、海上の廣遠なる所をもいふ。

にはたづみ 行潦【名】雨ふりて、俄に地上に水の溜りて流るゝもの。詩經「洞酌（トホクム）彼行潦（ヲ）」。

にはとりをさくに、なんぞ、ぎうたうをもちひん 雞を割くに焉ぞ牛刀を用ひん【文】小事を處するには大器を用ふる要なきをいふ。論語「子之武城、聞二絃歌之聲一。夫子莞爾而笑曰、割二雞焉用一牛刀一」。

にひじまもり 新島守【名】新に島守となれる人。島守は島の番人なり。

にひなめ 新嘗【名】新穀を、神にも奉り、天皇御自らもきこしめす神事なり。陰曆にては、十一月中の卯の日なるを、今は、十一月廿三日の神事と定まれり。たいじやう參照。

にひばり 新墾、新治【名】新にひらきたる地をいふ。さて、常陸國に新治もいま地名あり。また、同國に筑波といふ地名もあれば、枕詞として、新ばり筑波など續けたり。さてまた、つくばとつくると音の通ひたるより新ばりの造るなどもいひつづけたり。

にひや 新谷【名】伊豫國喜多郡の地名。大洲町の北一里半にあり。延寶二年、大洲城主加藤泰興、墾田一萬石を、弟織部正直泰に分與して新谷に封ぜり。

にひむろほぎのよごと 新築室祝壽詞【句】上古の新築落成式の祝文なり。弘計王の、播磨にて作り給ひきといふもの、今にのこれり。

にふこん 入魂【名】じゆつこんとよむべし。殊に親しく交るをいふ。

にふしよくき 入蜀記【名】書名なり。六卷あり。宋の陸游の著。游が蜀に入りし時の紀行なり。

にへかは 贄川【名】地名。信濃國西筑摩郡に在り。舊中仙道の一驛なり。

にへをとる 執贄【句】束修の禮を修めて、弟子となるを

いふ。

にほんかい 日本海【名】日本の西北岸より、朝鮮の東岸、滿州、樺太の沿岸に至る海をいふ。

にほんきりやく 日本紀略【名】書名。舊本十一卷。作者未詳。群書一覽に「平維章曰く、日本記畧は、光孝天皇より起り、後一條天皇まで記せり。然るに世に行はるゝ本は、宇多天皇以前を除きて、延喜帝より用ふ。それを日本九代實錄とも號す。云々」といへり。國史大系に收めたるは、神代より宇多天皇までを前篇、醍醐天皇より後一條天皇にいたるまでを後篇として、すべて三十四卷あり。漢文なり。

にほんこうき 日本後紀【名】書名。二十卷。桓武天皇の延曆十一年より、淳和天皇の天長十年まで、四十二年間の事を記せり。漢文なり。

にほんしよき 日本書紀【名】書名。三十卷あり。神代以降持統天皇までの漢文の歷史なり。元正天皇の養老七年、舍人親王の、勅を奉じて撰し給へるものなり。

にほんしよきつうしよう 日本書紀通證【名】書名。三十五卷あり。谷川士清の著。古今諸家の說を漢文にうつして之を釋し、書紀中の熟字を解釋し、又出典を擧げたり。

にほんだうさくろん 日本道德論【名】書名。西村茂樹の著すところなり。にしむらしげき參照。

にほんちなう 日本智囊【名】書名。中村栗園の著にて、わが國古來の賢君名臣の事蹟の、才智に關するものをあげたり。

にまのぎんざん 邇麻の銀山【名】石見國邇麻郡大森村、大字銀山に銀鑛あり。室町時代大永年中の開始以來、年々多額の銀を採掘し來り、德川時代には、代官所を置きて監督せしめたりき。

にんなじ 仁和寺【名】京都葛野郡花園村にあり。光孝天皇の仁和四年の創建なれば、仁和寺といふ。また、宇多帝落飾の後、宮殿を營して住ませ給ひしによりて、御室ともいへり。

にもにめごと 似も似ぬ事【句】似ても似つかぬ事。甚しく違ふ事。

にゆうじいらんど New Zealand【名】地名なり。南太平洋中の一島にして、英國の殖民地なり。濠太利亞の東方に位し、南北二島に分れたり。許多の小島これに所屬せり。

にゆうすぺいん 新西班牙【名】今の墨西其なり。北亞米利加の南部に位す。もと歐洲の西班牙領なりしが、千八百十年佛國にナポレオンの內亂ありて、西班牙本國もこれに蹂躙せられしを機とし、其の二十一年、墨西其は、遂に獨立を

謀りて、共和國を形成せり。

にゆうちやん 牛莊 【名】支那の地名。奉天省の遼河の左岸にあり。營口といふ、是なり。

にゆうとん Insal Newton 【名】人名。重力の法則發見、また光學上の創見者たり。ケンブリッヂ大學の數學教授となり、千七百廿七年歿す。

にゆうふあうんどらんど New Foundland 【名】地名。北亞米利加の東に位し、北大西洋に面し、セントロウレンスの灣頭にあり。

にゆうよるく New York 紐育 【名】地名。北米合衆國の極東部にあり。人口、商工業の諸點に於て、合衆國中第一位にあり。合衆國の首府華盛頓は、其西南にあり。

によいりんだう 如意輪堂 【名】大和國吉野郡にある寺の堂なり。楠正行の四條畷の出陣に際して、「かへらじと、かれて思へば、あづさ弓、なき數にいる、名をぞ留むる」の歌を堂扉に彫りつけたるを以て名あり。扉は今に殘れり。後醍醐天皇の塔の尾の御陵は、此の堂のうしろにあり。

にようばう 女房 【名】古くは宮仕する女官をいひ、また貴族の侍女をもいひしが、後には、唯、婦人の稱となり、また、妻をもいふに至れり。

にようご 女御 【名】ニョゴとも訓ず。後宮に侍りて陛下に侍する女官なり。位は中宮に次き、重に大臣の女を任ず。

によぶ 呻吟 【動ハ四】うめく、うなる、などいふ意。

によほふ 如法 【名】佛語なり。かたの如くといふ意。もとより、云ふまでもなく、などの副詞の意にも用ふ。

によゐん 女院 【名】天皇の母后にして、門院號を奉り給へる御方をいふ。ニョウヰンと音便にも呼べり。

にれ 楡 【名】木の名。やにれともいふ。大木となる木にて、春夏の候に、淺紅の花を開く。說苑なる、螳螂の故事中に、この木、見えたり。たうらう參照。

にわうさま 二王樣 【名】仁王とも書く。また、金剛力士とも稱す。佛法守護の二神にして、一を左輔、すなはち密迹金剛（ミツシヤクコンゴウ）といひ、一を右弼すなはち那羅延金剛（ナラエン）といふ。多く寺門の左右に安置せり。

にゐどの 二位殿 【名】二位の尼とも稱す。平清盛の妻、時子をいふ。また源賴朝の妻政子をいふ。

にゐのあま 二位の尼 【名】源賴朝の妻政子をいふ。

ぬ 野 【名】野の古言。

ぬえ 鵺 【名】ぬえどり。ぬえこどり。鳥の名。梟の類。世に怪鳥として、其の鳴くを凶兆とす。深山に棲み、大さ鳩の如く、黃赤にして黑斑あり、近衞天皇の時に、源賴政が射たりといふ怪獸は、其の鳴く聲ぬえの如しといへるによりて、世に誤りて其の名としたるなり。

ぬえどりの 鵺鳥の 【枕】ぬえこどりともいふ。鳴く聲のものがなしきより、鳴くのどよぶなどにかけていふ。鵺といふ鳥は、梟の類にて晝は隱れ居て、夜に出でて鳴くといへり。

ぬか 額 【名】ひたひをいふ。額をつきて拜するを、ぬかづくなどいふ。

ぬかご 零餘子 【名】ムカゴともいふ。山の芋の實なり。葛の葉の間に生ず。

ぬきがき 抜書 【名】他の書物より抜き出だして書きとるをいふ。抄錄ともいふ。

ぬく 抜、挺、擢、抽、揀、扔、擢、扎、抄、貫、氈【動ヵ四】草を引き抜く。列を挺く。矢を抽く。刀を扔く。人才を擢く。抄き書きす。齒を氈く。城をぬく。染をぬく。手間をぬく。

ぬさ 幣 【名】みてぐら。すべて神に祈るに奉るもの、又、祓に出だすものをもいふ。

ぬための かぶらや 鈀目の鏑矢、塗目の鏑矢 【句】鹿の角にて作れる鏑矢をいふ。鹿の角の鏃の如き紋あるところをぬたといふ。鏑矢といふは、鏃に穴をあけて、射る時、鳴り響くやうにしたるもの。戰の初めなどに發つなり。

ぬでしわけの みこと 鐸石別命 【名】垂仁天皇の皇子。和氣氏の祖なり。

ぬのかたぎぬ 布肩衣 【名】布にてつくれる肩衣なり。

ぬのびきの たき 布引の瀧 【名】瀧の名。攝津國神戸市の東方にあり。

ぬばたま 射干玉、野羽玉、烏羽玉 【句】射干は烏扇（カラスアフギ）とも檜扇（ヒノキアフギ）ともいふ草にて、其の實を、ぬばたまといふ。圓くして極めて黑し。されば、ぬばたまのは、黑の枕詞として、「ぬばたまの黑き御衣（みけし）」などいへり。轉じては、月、夜、夢、暗き、などの枕詞にも用ふ。

ぬぼこ 瓊矛 【名】玉にて飾れる矛をいふ。

ぬまづ 沼津 【名】駿河國駿東郡沼津町。德川氏の初に、大久保忠佐、此の地に封ぜられしが、安永六年より明治まで

は、水野忠友以來子孫世領す。東海道五十三次の一なり。

ぬりごめ 塗籠【名】周圍を壁に塗り籠めて、妻戸より出入するやうにせるところ。今いふ、納戸の類なり。唐櫃、調度など、納れ置く所なり。

ぬりごめどうのゆみ 塗籠籐の弓【名】籐を上より下まで隙間（スキマ）なく巻きつめて、籐の上を漆にてぬりこめたる弓をいふ。

ぬりづる 塗弦【名】漆にて黒く塗りたる弓弦をいふ。

ぬりゆみ 塗弓【名】漆にて塗りたる弓なり。

ぬれてや、しかの、ひとりなくらむ 濡れてや鹿の獨り鳴くらむ【文】新古今集家隆の歌、「下紅葉、かつちる山の夕時雨、ぬれてやひとり、鹿のなくらむ」。

ね 峯【名】みねに同じ。筑波峯（ネ）、高根、など。

ね 音【名】おと。こゑ。「泣く音（ネ）」など。

ね 子【名】十二支の第一番目。

ね 寐【名】れむり。

ねいけいじ 寧馨兒【名】斯の樣なる男子の義。支那の俗語。世說「何物老嫗、生二此寧馨兒一」。

ねいろ 音色【名】樂器によりて、各異なる聲音あり。これを、其の物の音色といふ。韻のあぢはひ。

ねいわう 寧王【名】天下を安んずる王の義。書經、寧王遺二我大寶龜一」。寧人とあるは、天下を安んずる臣の意なり。

ねうぜつ 饒舌【名】多辯なるをいふ。俗に、おしやべり。

ねえぷるす Naples【名】伊太利の地名。國の南部西岸の大都府にして、カンパニア州にあり。風光絶佳、世界の美景府と稱せらる。

ねがはくは、しやばいけいきう、ほういうふともにして、これをやぶるとも、うらみなからむを 願車馬衣輕裘與二朋友一共敝レ之而無レ憾【文】車馬衣輕裘、總て有する所のものに、朋友と共にして、之を破るも互に憾むことなく、財を通じ交を篤くすることを欲すとの意。論語に出でたり。

ねぎ 禰宜【名】神主、または、神官などいふにおなじ。今また、宮國幣社にて、宮司（グウジ）の次位にある神職。

ねくび 寐首【名】睡れる人の首を斬るをねくびをかくといふ。

ねこまた 猫股【名】猫の年老いて、妖怪をなすもの。年老ゆれば、尾二岐に分るるによりて、猫股とはいふぞ。

ねごめに 根込に、根籠に【副】根のままに。根ながらに。

ねごろ 根來【名】紀伊國那賀郡根來村。此の地に根來寺あり、大傳法院といふ。大治五年、高野山の僧覺鍐が、鳥羽上皇の勅を得て開基せるところ。戰國の時には、大に僧兵を蓄へ、四隣の敵と難を構へ、終に豐太閤の大打撃を蒙りて屏息す。寺地に櫻樹多し。根來塗といふ漆器は、もと、此の寺の僧の塗り出だせるものなり。

ねざめぐさ 寢覺草【名】荻の異名。

ねざめづき 寢覺月【名】陰曆九月の異名。

ねずみざん 鼠算【名】塵劫記、「鼠算の事、正月に、鼠、父母二疋出でゝ、子を十二疋生む。親子共に十四疋になる。此の鼠、二月には、子もまた子を生む。故に、親ともに九十八疋になる。月に一度づゝ、親も子も孫も彦も、月々に十二疋づゝ

生む。十二月目には、其の數何ほどといふに合せて、二百七十六億八千二百八十七萬四千四百一疋になるなりとあり。塵劫記は、昔の算術書にして、吉田光由の著なり。

ねづみだに、かはあり 鼠だに皮あり【文】詩經の相鼠の章に、「相レ鼠有レ皮。人而無レ儀（カンヤ）、人而無レ儀（クンバ）、不レ死何爲」。また「相レ鼠有レ體。人而無レ禮、人而無レ禮、胡不二遄死一」とあり。其の意は、鼠の如き見る甲斐なき小獸すら、皮ありて體を包み裝へり。然るを況んや、人たるものが威儀禮容なくして可ならんやとなり。

ねずみとるねこは、つめをかくす 鼠捕る猫は爪を隱す【文】「能ある鷹は爪をかくす」と同儀なり。淮南子に、「猛獸之擾也陰二其爪一」。また說苑に「君子愛レ口、虎豹愛レ皮、古諺曰、將飛者翼伏、將レ噬者爪縮」とあり。

ねたば 寢刃【名】刀の刃の鈍りたるをいふ。されば、寢刃をあはすなどいふは、研石にあはせて研ぐをいふ。轉じては、單に刃といふ意にも用ひて、刃を付くるを、寢刃を付くなどもいふ。

ねぢく 拗【動カ下二】心のひがむ。曲りくれる。

ねつくわん 熱官【名】要劇の官をいふ。北齊書「惟實疎緩不レ堪二時務一。非レ不レ愛二熱官一。但思レ之爛熟爾」。

ねつちう 熱中【名】性質躁急にして、心煩するなり。物事に熱心するをいふ。孟子「仕則募レ君、不レ得二於君一則熱中」。

ねつばう 熱望【名】一心になりて望むこと。熱心に希望すること。

ねつざう 涅造【名】でつざうを見よ。

ねのね ゆきちか 根井行親【名】行親、一に幸親に作る。小彌太と稱す。幼より源義仲に屬して事を謀り、義仲粟津に亡びしとき、行親、また六條河原に戰死せり。

ねはん 涅槃【名】梵語。涅は不生。槃は不滅の義。おもに、釋迦の入滅にいへり。

ねびれしぼむ 萎凋【動マ四】俗にひからぶなどいふに同じ。ねびるは、人にていへば、年の老いたるにて、ひれこびたるをいふ。

ねぶのき 合歡木【名】生長して二三丈に至る樹なり。枝繁く、葉は夕に至れば萎む、半白淡紅色なる花を開く。其の實は、米粒に似たり。ねむのき、ねぶりのき、ねむ、ねぶた、などいふ。

ねぶる 舐【動ラ四】嘗む。舌の先にて味ふ。

ねまちのつき 寐待の月【名】また、臥待の月ともいふ。陰曆十九日の夜の月をいふ。

ねんぐ、うんじやう 年貢運上【名】每年上納する租稅をいふ。

ねんず 念ず【動サ變】祈る。拜む。禱ふ。こらふ。たへ忍ぶ。

ねんねんさいさい、はなあひにたり 年々歲々花相似、歲々年々人不レ同、寄レ言全盛紅顏子、應レ憐半死白頭翁【文】唐詩選の、劉廷芝が律詩中にある句なり。其の意は、花は、年々歲々同じやうにさけども、人は、紅顏の少年も、忽ちにして、白頭の老翁となるとなり。

ねむりぐさ 知羞草【名】草の名。手を觸るれば、直に互生の葉を閉づる草なり。

ねやど 寢屋處【名】閨。れど。。

ねよつ 子四つ【名】時の名。子は、今の夜の十二時にして、午前二時を丑となす。而して、昔は、漏刻のきざみを、十二時四十八刻に分ち、一時を四刻に分ちて、子一つ子二つなどいへり。されば、子四つは、今の午前一時三十分なり。たゞし、一時（トキ）は、今の二時間に當る。

ねりいろ 練色【名】うすき黃色をいふ。

ねりつば 練鐔、練鍔、煉鍔【名】練革の鍔の畧。いため革の上にねり物をつけて塗り堅めたる鍔なり。

ねりぬき 練緯、練貫【名】緯を練糸にて、經を生絲（スヾシ）（タテ）にて織りたる絹をいふ。生糸は練らぬ絲なり。

ねりべい 練塀【名】瓦と土とを積み重ねて築きたる塀。土塀ともいふ。

ねわけ 根分【名】草木の根を分ちて、別々に移し植うるをいふ。

ねをなく 音を泣く【句】聲を立てて泣くこと。

の箆 【名】矢の竹(ヤガラ)をいふ。矢幹。

のう能 【名】一種の舞樂の名。散樂(サルガク)の餘流にて、應永の頃、觀世世阿彌の始めしものなり。後に流派別れて、觀世、寶生、今春、金剛の四家に分れ、其の後、喜多などの別派起れり。

のういんはふし 能因法師 【名】俗名橘永愷(ナガヤス)。忠望の子。剃髪して能因と號し、攝津古曾部に居る。故に、古曾部入道と稱す。「都をば、霞と共に、立ちしかど、秋風ぞふく、白川の關」の詠は、後拾遺集に見えて、人口に膾炙せり。

のうは、こくかのたいほんなり 農は國家の大本なり 【文】史記の文帝紀に、「上曰、農天下之本。其開二籍田一朕親率耕以給二宗廟粢盛一」。

のかづき 箆被 【名】樅(ヤジリ)の矢竹に接したる所をいふ。箆は矢幹(ヤガラ)なり。

のきのたまみづ 軒の玉水 【句】軒よりおつる雨垂(アマダレ)を云。

のさき 荷先、荷前 【名】諸國より奉れる貢物の初穗を抽きて、神宮をはじめて、重なる神社山陵および外戚の墓などに奉る幣物をいふ。また、其の勅使を荷先の使といふ。

のさきのはこのにのを 荷前の箱の荷の緒 【句】荷前の箱を入れたる箱を結びたる緒なり。萬葉集、東人の、荷前(アヅマド)の箱の荷の緒にも、妹が心に、のりにけるかな。のさき參照。

のしめ 熨斗目 【名】織物の名。經(タテ)は練糸(チリイト)にて、緯(ヌキ)は生糸を用ふ。無地にして腰の邊にのみ縞を織り出す。ノシアハビの形したればいふとぞ。むかし上下(カミシモ)などの賀服に用ひし絹布なり。

のじろ 箆代 【名】箆は、矢幹(ヤガラ)なり。箆代は、樅の矢竹の中に入る部分をいふ。

のだのたまがは 野田玉川 【名】陸前宮城郡多賀城村の城碑を去ること、東十町ばかりにあり。歌の名所なり。

のぢ 野路 【名】地名。近江國栗太郡にあり。東國街道なり。今は矢橋村と合して、老上村といへり。老のはら參照。

のちのさらぎ 後の如月 【名】閏二月をいふ。如月は、二月の異名なり。

のちのさんぼう 後の三房 【名】大江匡房、藤原伊房、同爲房を三房といふに對して、萬里小路宣房、同藤房、吉田定房の三人をいふ。

のちのちゆうしよわう 後中書王 【名】具平(トモヒラ)親王をいふ。兼明親王を前中書王といふに對していふ。中書は、中務の唐名なり。兼明具平、共に中務卿になり給ひしを以てなり。

のちのつきのわのみささぎ 後月輪陵 【名】つきのわのみささぎを見よ。

のつと Knot **節** 【名】英の尺度の名なり。一節は、五メートル四三に當る。およそ我が八間二尺九寸二分なり。船の走行には、三十秒間に對する十五節と、一時間に對する十五浬と同じ割合になるを以て、艦の速度をいふ場合に限りて、節と浬とを混用するも妨げなし。

のづみちつら 野津道貫 【名】舊薩摩藩士。現今陸軍大將正三位勳一等功二級伯爵なり。日清戰爭には第一軍に司令長官として渡清したり。

のとどの 能登殿 【名】能登守平教經なり。

のどよぶ 長閑呼 【動ハ四】長閑(ノドカ)に呼ぶ。聲ゆるやかに悲しく呼ぶなり。

ののぐち たかまさ 野々口隆正 【名】後に改姓して大國と稱す。通稱は仲藏、佐紀の屋、天住山人と號す、石州津和野の藩士、皇學を學び、熱心なる王政復古論者なりき。明治四年八月歿す。年八十。

のぶかに 箆深に 【副】箆とは矢幹をいふ。矢の樅を沒して竹の部分まで、深く射込みたる狀にいふ。

ささぎを見よ。

のぶし 野伏、野武士 【名】山伏に同じく、山野を宿として旅するもの。また、主將なく山野にさまよふ浪士。

のりくらがたけ 乘鞍嶽 【名】飛彈國大野郡の東方に聳ゆる山なり。國中第一の高山。

のりと 祝詞 【名】のりとごとの略。告說言(ノリトキゴト)の義かといへり。神祭の詞なり。古き祝詞文は延喜式にあり。

のりのたきぎ 法の薪 【名】せつざんのたきぎを見よ。

のれんし 暖簾師 【名】よき物とみせて、あしきものを賣る商人をいふ。

のろし 烽火 【名】昔、戰爭の時に、用ひたるものにて、遠方の味方へ合圖する爲めの烟火なり。

のろのろし 遲鈍、呪々 【形】おろかめきたるをいふ。また、人を呪ふやうに、にくにくしきさまにもいふ。

のわき 野分 【名】野分の風、のわけ、などもいへり。秋のころ吹く大風をいふ。

は

はい 牌【名】榜示のふだ。かけふだ。しるしのふだ。「賞牌」「金牌」など。

はい 旆【名】大將の立つる大旗。

はい 沛【名】水と草と相半したる地。濕地に草の生じたる所。「沛澤」と熟用す。

ばいう 梅雨【名】つゆ。毎年中夏の候、即ち陰暦五月頃に降りつゞく霖雨。轉じては、梅雨の降る時節をいふ。梅雨の初めの日を、入梅といふ。

はいかい 俳諧【名】もと、和歌の一種にて、戯れたる體に詠むものを俳諧歌といへり。後世、もつぱら、連歌の發句なる、五七五の三句にて一首に成みなすものの稱とす。之を發句ともいふ。史記の滑稽傳に「滑稽は俳諧の如し」と見えたり。俳諧と書くは誤りなり。はいかいうた參照。

ばいかい 媒介【名】媒妁といふに同じ。彼是の間に立ちて調和するものをいふ。なかだち。

はいかいうた 俳諧歌【名】戯れてをかしくよみなす歌。古今集に「梅の花、見にこそきつれ、鶯の、人來（トドク）〳〵と、いとひしも居る」で。「山吹の、花いろ衣、ぬしや誰れ、問へど答へず、くちなしにして」などを、俳諧歌としてあげたり。

ばいかく 陪客【名】相伴すること。客の對手となりもてなすこと。

はいかん 肺肝【名】肺臟と肝臟との義より、心の底といふ意に用ふ。

はいぐんのしやうは、ゆうをいふべからず 敗軍將不レ可レ言レ勇【文】敗軍せる將は、再び軍の事を說くべからずとなり。已に失敗したればなり。史記「敗軍之將、不レ可レ以言レ勇。亡國之大夫、不レ可レ以圖レ存」。

はいくわい 徘徊【名】さまよひあるく。あるきまはる。ぶらぶらあるく。

はいこ 廢錮【名】修身仕ふることを得ざらしむるをいふ。漢書「皆免廢錮」。

ばいこく 賣國【名】くにをうるを見よ。

はいし 稗史【名】稗は小なり。小說をいふ。即ち稗官の作れる書。漢書藝文志「小說家者流、蓋出二於稗官一、街談巷說、道聽塗說者之所レ造也」とあり。古の王者は、閭巷の風俗を知らんが爲に、稗官を置き、街談巷說を取りて、これを稱說せしなり。

ばいし 陪涖【名】陪は二倍、涖は五倍なり。其の數の多く積ることをいふ。孟子に「或相陪涖、或相什伯、或相十萬」とあり。

ばいしん 陪臣【名】臣の臣なり。またげらい。諸侯の家臣を、朝廷よりいふ語。禮記の曲禮「列國之大夫、入二天子之國一曰二某士一。自稱曰二陪臣某一」。

はいしよのつき 配所の月【句】配所は、罪人の流されたるところ。配流の地なり。徒然草に「顯基中納言のいひけむ配所の月、罪なくて見むことさも、覺えぬべし」とあり。配所はいづれにしても、離れ小島か、人里遠き所なれば、其の月は、靜かにしていかに面白からむ。されど、それも、罪ありては、心に雲のかかりて、見る心地もせざるべければ、罪なくて見たしとの意なり。

はいすゐのぢん 背水の陣【名】陣法の名。水を背にして陣するをいふ。必死を示すなり。

ばいせいゆ 梅聖俞【名】宋の宣州宣城の人。名は堯臣。國子監直講となり、尚書員外郎に遷る。唐書撰修に與れり。嘉祐五年書成りしが、未だ奏せざるに卒せり。年五十九。

はいせき 敗績【名】軍の大に敗るるをいふ。大敗すれば、其の功績を失ふ故に、績を賤ちといふ。左傳に「大崩曰二敗績一」とあり。

はいぜん 沛然【副、形】盛大の貌。盛に流るるをいふ。孟子「沛然德教溢二於四海一」。

はいたい 胚胎【名】爾雅の註に「胚胎未成、亦物之始也」とありて、物の成り出でむとする始めをいふ。

はいち 背馳【名】反對する義。曹植の詩「我唯困蒙、群士所二背馳一」。

はいぢく 敗衂【名】敵に破られて、血まみれになるをいふ。五代史符存審傳「大小百餘戰、未嘗敗衂」。

はいちゆうのだえい 杯中蛇影【句】疑ひ惑ふにいふ譬。晉書「樂有二親客一。久濶不二復來一。賓問二其故一。答曰、前在二坐蒙賜酒一。方欲レ飲見二盃中有一レ蛇、意甚惡レ之。既飲而疾。於時河南廳事壁間有レ角。漆畫作レ蛇。賓意、杯中蛇、即角影也。復置二酒前處一。謂レ客曰、酒中有レ所レ見不。答曰、所見如レ初。賓乃告二其所以一。客豁然意解。沈痾頓愈」とあるよりいふ。

ばいでんもんしや 買田問舍【句】田を求め、家を問ふにて、安逸を求むるをいふ。書言故事に「陳登、字元龍、許范與二劉備一、在二劉表座上一。備與レ表論二天下人物一。范曰、陳元龍、湖海之士、豪氣未レ除。昔見二元龍一、無二客主禮一。久不二相與語一。自上二大床一臥、使二客臥下床一。備曰、君求二田問舍一。言無二可采一、元龍、何緣與レ君語」とあり。

はいばんらうぜき 杯盤狼藉【句】狼藉は散亂すること。酒席の亂るるをいふ。史記「履二交錯一、杯盤狼藉」。蘇鶚演義に「狼藉草而臥、去則滅亂。故凡物之縱橫散亂者、曰二狼藉一」

といふ。

はいぼく 敗北 【名】北は、にぐるなり。故に、敗れて走るをいふ。史記「所當者破、所擊者服、未嘗敗北」。

はいんあつぷる 梨鳳 Pine-apple 【名】印度語にアナチスAnanasといふ。熱帯地方に産する植物にして、其の實は、形狀、松の實に似て大に、味甚だ美なり。

ばいりこう じやうざん 梅里公常山 【名】人名。德川光圀の號なり。

ばう 坊 【名】眷宮坊をいひ、また、東宮を申し奉る。又、僧侶の居所をいひ、また、直ちに僧をもいふ。

はう 磅 【名】大砲。石火矢。普通には礮とかきて、バクとよめども、礮を正しとす。

はうあい 芳埃 【名】香しき塵埃。花の下の埃をいふなり。孟東野「一日踏春一百廻、朝朝沒脚走芳埃」。

はうえい 泡影 【名】あわとかげとにて、果敢なきことにいふ。金剛經「如夢幻泡影」。

ばうえい 甍楹 【名】甍は屋の棟、楹は柱なり。

ばうかい 茅海 【名】大阪灣の事なり。和泉の海を、いにしへ茅渟の海といひしによりて、其れを唐風に、茅海とはいへるなり。

はうかうじゆ 方孝孺 【名】明の寧海の人。字は希直、また希古。洪武十五年召されて漢中の教授に叙せらる。蜀の獻王其の賢を聞き、聘して世子の師とす。惠帝位につくに及びて翰林學士と爲し、侍講にうつす。建文四年燕王入るに及び。獄に下さる。成祖、即ち召して詔を草せしめしが、節を屈せずして筆を地に投じ、且罵り、且罵りて遂に市に磔せらる。年四十六。

はうぎし 庖犧氏 【名】支那の太古に、三皇の初めに出でし王。

ばうきやうのき 望鄉の鬼 【句】魂魄の、故鄉を望む意。鬼は幽魂の義。故鄉を思ひ死にに死ぬるを、「望鄉の鬼となる」といへり。

ばうきやうのねん 望鄉の念 【句】故鄉を思ひ慕ふ心。

はうぎよ 鮑魚 【句】鮑は、說文には鱣魚と見え、玉篇には濱魚と見え、爾雅釋名には腐なりとあり。今の、ヒモノ：ホシカの類なり。

はうぎよしうあり 鮑魚臭あり 【文】支那、秦の始皇帝三十七年、出遊して沙丘平臺に至りて崩ず。群臣秘して喪を發せず、遺骸を車中に載せ、一石の鮑魚を以て其の臭を混ぜしめ、咸陽に至りて喪を發せりといへり。

はうぐわい 方外 【名】方は法にて、方外に、法度の外なり、一說に、「方は、なほ道の如し。常道によらざるものをいふ」と。莊子「孔子曰、彼遊方之外者、而丘遊方之內者也」。

はうくわう 彷徨 【名】一に、方皇にも作り、或は彷徨にも作れり。徘徊に同じ。史記「彷徨不能去」。莊子「世然彷徨乎塵垢之外」。

はうくわうじ 方廣寺 【名】京都西大谷の南正面通にありて、豐國神社に隣れり。豐臣秀賴の國家安康の銘の鐘のありしも、この寺にての事なり。

はうくわくてい 放鶴亭 【名】支那の地名。宋の處士林逋（和靖）の故廬にして、孤山にあり。孤山は西湖の中に在り。山形平坦にして湖中に孤立して、あへて他山に聯屬せざる故に、孤山とも、孤嶼ともいへり。山に梅樹多し。林處士、鶴を放ちしより、其の所を、斯く名づけたりとぞ。

はうげん 邦彥 【名】彥は士の美稱にて、國の秀士と言ふが如し。詩經に「彼其之子、邦之彥兮」。

はうげん 方言 【名】一地方のみに限りて用ひらるる語。王維の詩に「因人見風俗、入境聞言方」。

ばうこくのおん 亡國の音 【句】音樂の音の、淫靡にして風教に害をなすものをいふ。

ばうこてい 望湖亭 【名】支那の地名。淸の世祖、嘗て平湖秋月の四字を書し、西湖十景の一とせり。孤山路の口にあり。今は平湖秋月亭といふ。

ばうこひようか 暴虎憑河 【句】虎を手打ちにし、大河を徒渡りするをいふ。論語に「子曰、暴虎憑河、死而無悔者、吾不與也」とあるよりいでて、無謀なる勇氣をいふ。

はうさい 報賽 【名】神佛に對しての、お禮まゐりをいふ。

ばうざい 防材 【名】鐵鎖にて、巨穴なる材木を繫ぎ合せ、海港の入口に沈めて、他の船艦の侵入を防ぐべくしたるものをいふ。

はうさう 瘡瘡 【名】病名。もがさ、いも、なごいふ。

はうさく 方冊 【名】書籍なり。陸倕の石闕銘に「布在方冊、無彰器用」。

はうざんのいつこう、いちじゆのせんだうしや 芳山の一口、一樹の先導者 【句】飛鳥井大納言雅章の歌に、「みよしのや、櫻ひと樹に、まづ見せて、箆知らるる、春の山風」とある歌によりていふとぞ。

はうざん、らんけふ 芳山嵐峽 【名】芳山は吉野山、嵐峽は嵐山なり。

はうじ 寶寺 【名】たからでら。補陀落山寶積寺といふ。乙訓郡大山崎庄天王山の半腹にあり。

はうしぎ 柏子木 【名】ひやうしぎに同じ。角の材二箇を

合せうちて、音を出ださしむるもの。

ほうしや 報謝 【名】禮物を送ること。又、佛云に、陽なたのみて供養し、其の禮に、布施を贈ること。それより、順禮、行脚僧などに、物を施すをいふ。

ぼうしや 亡謝 【名】死亡することをいふ。

ぼうじやくぶじん 旁若無人 【句】「傍に人なきが如し」の意にて、人を人とも憚らず、亡狀なる振舞をするをいふ。世說に「桓溫入ㇾ關、王猛被ㇾ縕袍ㇾ而詣ㇾ之。面談當世之事、捫ㇾ蝨而言、旁若ㇾ無ㇾ人。溫察而異ㇾ之」。

ほうしよ 苞苴 【名】贈物なり。苞は、魚肉類を包むもの。苴は草を以て器にしき、物を貯ふるもの、即ち、つと。轉じて、賄賂の義に用ふ。荀子「苞苴行與、讒夫興與、何以不ㇾ爾」。

ほうすん 方寸 【名】心をいふ。列子「吾見二子之心一矣。方寸之地虛矣。幾聖人也」。

ぼうぜん 惘然 【副、形】志を失へるにいふ。ぼんやりとして。きぬけして。

ぼうぜん 茫然 【副、形】惘然に同じ。呆れて取りつき所もなき狀にいふ。

ほうそ 寶祚 【名】天つ日嗣に同じ。天皇の御位をいふ。

ぼうだ 滂沱 【副、形】液體の流るる貌。詩經「月離二于畢一」傳「滂沱」。淚の流るゝなどにもいふ。

ほうだん 飽暖 【名】飽食暖衣の略にて、安樂にして居ること。孟子に「飽食暖衣逸居、而無ㇾ教則近二禽獸一」。

ぼうたん 妄誕 【名】いつはり。無根の談をいふ。

ぼうちやう 坊長 【名】坊は邑里なり。故に、坊長は村長などいふに當る。また、大屋、家主の義にも用ふ。

ほうぢやう 方丈 【名】寺の住持の居室をいふ。釋氏要覽に「方丈、蓋寺院之正寢也」。維摩居士が宅一丈四方なりしより、方丈と號せしに起る」と。又、直に、住持を呼ぶ稱呼。

ほうぢやうき 方丈記 【名】書名。鴨長明の著。順德帝の建曆二年に成れり。書中の事實は、年頃見聞したる世の變遷榮枯を叙論し、併せて一身の經歷より、其の草庵たる、日野山の方丈のさまをも記したり。

ほうてき 放擲 【名】なげうつ、うちすつる、などの意。

ほうでんぎよくさい 寶鈿玉釵 【句】鈿も、釵も、共に婦人の髪の飾、即ち、かんざし。寶、玉は、その美しきを形容していへる語。

ぼうのつ 坊津 【名】薩摩國川邊郡の地名。いにしへ、外國船の出入多かりし所なり。

ほうふつ 彷彿、仿佛、髣髴 【副、形】ぼんやりとして、はつきり見えぬをいふ。楊雄の甘泉賦に「仿佛其若ㇾ夢」とあり。また轉じて、類似の意にも用ふ。

ほうぶつ 方物 【名】方土に生ずるもの。土地の産物。書經「無ㇾ有二遠邇一、畢獻二方物一」。

ほうべん 方便 【名】佛語。「隨ㇾ方便入」の義にして、假に言を設けて、道に導く手段とすること。それより轉じて、ただて、方法などの意にもいふ。

ほうぼう 魴鮊、篷魚 【名】魚の名。色赤みを帶び、腹部は白し。肉白く厚くして味美なり。

ぼうめい 亡命 【名】逃亡すること。命は名なり。名籍を脱して走ること。漢書「亡ㇾ命於外黃一」。

ぼうもん きよただ 坊門清忠 【名】藤原俊輔の子。後醍醐帝に仕へて、左大辨參議從二位に至る。天皇に吉野に從ひて、延元三年薨ぜり。

ぼうやう 眺洋 【名】仰ぎ見ること。また、遠く望む貌。莊子「河伯始旋二其面目一眺洋向ㇾ若而歎」。若は、海若とて、海の神をいふ。又、望羊とかけるも、意同じ。

ぼうやうとして、げんかんをきはむ 茫洋として玄閒を窮む 【句】遙に天空に飛揚するをいふ。茫洋は廣大の貌。玄は天色なり。玄閒は大空をいふ。韓愈雜說に「龍噓氣成ㇾ雲。雲固弗ㇾ靈。于龍也然。龍乘二是氣一茫洋窮二乎玄閒一」と。

ぼうやうのたん 亡羊の歎 【句】學問の道の多方にして、眞理を得ることの困難なるを歎くこと。列子「楊子之隣人亡ㇾ羊。既率二其黨一、又請二楊子之豎一追ㇾ之。楊子曰、嘻亡二一羊一、何追者之衆。隣人曰、多二岐路一。既反。問獲ㇾ羊乎。曰亡ㇾ之矣。曰、奚亡ㇾ之。曰入二岐路之中一、又有ㇾ岐焉。吾不ㇾ知ㇾ所ㇾ之。所ㇾ以反也」とあるよりいふ。

ほうらくのけい 炮烙の刑 【名】殷の紂王に始まる。銅柱に油を塗り、之を烈火の上に架し、罪人をして渡らしめ、其の滑り墮ちて燒死するを樂みとせしなりと。史記殷紀「紂重二辟刑一、有二炮烙之法一」。

ぼうれい 暴戾 【名】凶暴な惡にし、惡戾を行ふをいふ。史記伯夷傳「暴戾恣睢、聚ㇾ黨數千人、橫二行天下一」。

ぼうろう 培塿 【名】部婁とも、防婁ともかく。小阜をいふ。

はえ 鮠 【名】魚の名。鰷ともかく。はやともいふ。形、柳の葉の如く細長くして、鮎に似たり。

はえ 映、光榮 【名】光り輝きて見ゆるをいふ。また、みえ、みば、花やか、にぎやか、綺羅、名譽などの意にもいふ。源氏物語「院へまゐり給はんことは、此の君達ぞ、なほ物のはえなき心地こそすべけれ」。

はえばえし 映映 【形】甚だ映えて見ゆるをいふ。正統記「天の下擧り集りて、都の中、はえばえしくこそありしか」。繁昌、光榮などの意。

はが 鵹莢 【名】はごともいふ。竹、木などに、鵹(モチ)をつけて鳥

を捕ふるもの。それをするを「はがをかく」などいふ。

はかいむざん 破戒無慙【句】佛教の戒を破りて恥ざる意。

はがため 齒固【名】齒を固むる意にて、年の初めの三日間、餅、鹿肉、猪肉などを食ふをいふ。後には、專ら、餅、押鮎を用ひ、又、後には、餅のみいへり。

はかなきわざ 果敢なき業【句】苟且（カリソメ）なること。つまらぬ仕事。

はかなげに 果敢な氣に、儚氣に【副】あぶなさうに、便なさうに、脆き樣に、などの意。

はかのいし 墓の碣【名】墓石といふにおなじ。碣は音ケツ。字書に「碑碣、方者爲レ碑、圓者爲レ碣」とあり。

はかまぎ 袴着【名】男兒五歳になれば、袴を着けさせて、祝をするをいふ。おびときを見よ。

はかまだれ やすすけ 袴垂保輔【名】或は、袴垂と保輔とは別人なりともいひ、或は、藤原保昌の弟なりともいへり。又、寛和元年源賴光に斬らるともいひ、官兵に圍まれて屠腹せりともいへり。古今著聞集、古事談、今昔物語などに、其の話見えたり。

はがん 破顔【名】笑ふこと。白居易の詩「一放狂歌一破顔」。

はかりごとを 貽レ謀【文】貽は詒に通ず。詩經大雅「詒二厥孫謀一以燕二翼子一」の注に「詒は遺なり。燕は安なり。翼は敬なり」とあり。

はかりごとを、ねあくのうちにめぐらす 策を帷幄の中に運らす【文】ちうさくを、ねあくのうちにめぐらすを見よ。

はかる 忖【動ラ四】人の心を計るなり。忖度（ソンタク）とつづけて用ふ。

はかるに 料【副】思ひ見るに。料は計なり。史記「不四深料二秦之無一レ奈レ齊何一」。

はぎ 萩【名】地名。長門國阿武郡萩町。毛利氏累代の城市たりし地。

はぎその 芳宜園【名】加藤千蔭の家號なり。これは、その父枝直の號を襲へるなり。

はぎのと 萩の戸【名】清涼殿の一室の名。上の御局（ウヘノミツボネ）の西隣にありて、圭上の常の御座所の一なり。

はぎはら ひろみち 萩原廣道【名】蓮沼、出石居、柿園、鹿鳴草舍、蒜園などの號あり。備前岡山の人にして、大坂に寄寓せり。和學者なり。文久三年二月歿す。年五十一。著書、源氏物語評釋、其の他數種あり。

はきふ 波及【名】餘波の沾ひ及ぼすをいふ。或る事の、自然に他にまで影響すること。左傳「其波及晉國一者、君之餘也」。

はぎをあきといふ 萩を秋といふ【文】萬葉集「人皆は、萩を秋といふ、よしわれは、尾花がうれを、秋とはいはん」。

はく 亳【名】支那の地名。括地志に曰く、「宋州穀熟縣西南三十五里南、亳故城即湯都也」とあり

はくあく 白堊【名】白壁なり。白く塗り飾れる牆を堊といふ。

はくい 白衣【名】官衙に給仕する賤しき小吏をいふ。史記「公孫弘以二春秋一白衣爲（ヨリ）二天子三公一」。

はくいでん 伯夷傳【名】史記の列傳に伯夷の傳あり。伯夷、名は元、字は公信。弟を叔齊といひ、名は致、字を公達といふ。孤竹君の二子にして、殷時の諸侯なり。父叔齊を後繼に立てむとす。而して、父卒するに及びて、叔齊は、之を伯夷に讓る。伯夷もまた父命なりと稱して受けず。遂に逃れ去る。叔齊また立つを肯ぜずして逃る。國人すなはち其の中子を立つ。周の武王、殷の紂王を伐つ。夷、齊、すなはち、馬を叩いて武王を諫む。武王既に殷が亂を平げて、天下、周を宗とするに及びて、夷、齊は、義に於いて、周の粟を食ふことを恥ぢて、首陽山に隱れて遂に餓死せり。

はくう 白雨【名】ゆふだち。

はくえん 邈焉【副、形】遠く遙なる狀にいふ。邈は遠なり。渺なり。また、輕視して、頓着せざる貌にもいふ。

はくおく 白屋【名】茅屋なり。賤が屋などいふ意。成語考に「白屋是布衣之家」。註に「白屋は、白き茅を以て、屋を葺ふゆゑに名づく」とあり。

はくが 白河【名】ペイポウと呼ぶ。清國北京の南を流れ、東して渤海に注ぐ。天津、太沽共に、その南岸にあり。

はくが のさんみ 博雅三位【名】兵部卿克明親王の子。醍醐天皇の孫、源姓を賜はる。世に王孫博雅と稱せらる。琵琶の名手なり。

はくがん 白眼【名】睥睨して冷遇すること。晉書阮籍傳に「籍不レ拘二禮教一、能爲二青白眼一。見二禮俗之士一、以二白眼一對レ之。及二嵇喜來一、籍爲二白眼一。喜不レ懌而退。喜弟康聞レ之、乃齎レ酒挾レ琴造焉。籍大悅、乃見二青眼一。由レ是禮法之士、疾レ之若レ讎」とあり。

はくきよい 白居易【名】支那唐朝の名詩人。字は樂天、太原の人。大曆七年七月展書に生る。九歳にして聲律を知り、穎悟、人に絕せり。貞元十四年進士に擢んでられ、翰林學士となり、會昌の初め、刑部尚書にて致仕して卒す。年七十五。其の集、白氏文集が、日本文學に與へし影響は、實に多大な

るものなり。

はくぎよくろう　白玉樓【句】唐の李賀の詩に、一夜或る人の、版（名簿）を携へ來りて、告ぐるに、「天上の白玉樓既に成れり。然して、天帝、君に命じて記を爲さしむ」と語るを夢みて、李賀、とみに死せり。よりて人の死ぬるを、白玉樓上の人となる」などいふ。

はくくのひま　白駒の隙【句】ハククはハツクとよぶ。光陰といふに同じ。歳月の過ぎ易きをいふ。莊子「人生二天地之間一、若二白駒之郤一、忽然而已」。漢書の張良傳「劉澤謂二張良一曰、人生二世間一、如二白駒過一レ隙耳」。

はぐくみおほす　育生【動サ四】はぐくむとおほすとの熟語なり。養ひそだつるをいふ。はぐくむは養育の義、おほすは生長せしむる義。

ばくげき　莫逆【名】バクギヤクともよむ。心に逆ふことなきなり。莊子「四人相視而笑。莫レ逆二於心一。遂與爲レ友」。

ばくげきのとも　莫逆の友【名】バクギヤクノトモともよむ。心の相合ふ友。北史「一時名流與二刑才子一王晏等一爲二莫逆之友一」。

はくげんがく　博言學【名】言語の、起原、發達、變遷、およびその比較研究をする學問。即ち言語學。

はくじつのゆめ　白日夢【句】白晝の夢なり。人の眠らぬ時、夢みる道理なければ、無きことの譬へにいふ。

はくしぶんじふ　白氏文集【名】書名。白樂天の詩文集なり。

はくじやう　白狀【名】白は申（マウス）なり。自らの罪を申立てたる書狀なり。漢書丙吉傳「遷二歸レ府見一吉白狀」。又轉じては、罪を申立つることをいふ。「殘らず白狀して伏罪せり」など。

はくしよくふどうくわう　白色不動光【名】燈臺の火光の種類にいふ稱なり。白色にして變動せざる燈光をいふ。

はくせき　白皙【名】潔白なり。容貌の白きにいふ。左傳「白皙鬚髯」。

はくせつ　白竊【名】白きと淺黑きとなり。竊は藍の淺青をいふ。

ばくぜん　幕然【副、形】（ツシクラ）蕭地の意にて、急に烈しく進みかかる貌にいふ。

ばくぜん　漠然【副、形】ぼんやりしたる樣にいふ。方向の定まざる樣なり。

ばくだい　莫大【名】これより大なるはなしの意にて、最大のこと。漢書「況莫大諸侯權力且十此者乎」。

はくていじやう　白帝城【名】支那の地名。巴都夔州に在り。公孫述、蜀に據り、自ら白帝と稱して、此に城を築きしより起れる名。白は西方の色なり。

はくち　白痴【名】俗にからばかといふに同じ。甚しき愚者をいふ。

はくちゆうのあひだ　伯仲の間【句】優劣なきをいふ。伯は長子、仲は次子なり。其の間にて階段なきなり。魏文帝の典論「傳毅於二班固一、伯仲之間耳」。

ばくは　白波【名】盜賊の異名。後漢書「張角反、皇甫嵩討レ之。角餘賊在二西河白波谷一。時俗號二白波賊一」とあるに本づく。國文には、訓讀してしらなみといふ。

はくはつさんぜんぢやう　白髮三千丈【句】唐詩選「白髮三千丈。緣レ愁似レ個長。不レ知明鏡裏。何處得二秋霜一」。

はくび　白眉【名】兄弟中の卓越したるものをいふ。蜀志「馬良、字季常、宣城人。兄弟五人、並有二才名一。鄉里爲レ之諺曰、馬氏五常、白眉最良。良眉中有二白毛一。故以稱レ之」とあるに本づく。轉じて、同類中の卓出したるものをいふに用ふ。

はくぶつくわん　博物館【名】動、植、鑛物、其の他、天然、人造、すべての物を、衆人の縱覽に供する所。帝國博物館は、東京上野公園にあり。

はくぶつしんぺん　博物新編【名】書名。三集あり。英の醫士合信（ハンシン）氏の編。支那にて刊行せる漢文の博物書なり。

はくぶつへうほん　博物標本【名】博物とは動、植、鑛物などの總ての名にして、標本は、猶、見本といふが如し。

ばくらう　麥牢【名】蓼蒻なり。

はくらうさ　博浪沙【名】大なる沙原の名。支那の韓の相たりし張良、其の國、秦に亡されたるを以て仇を報ぜむとし、始皇帝東遊して博浪沙中に至るに及びて、力士をして鐵椎を以て之を擊たしめむとして成らざりしことあり。

ばくらうがふち　博勞淵【名】地名。今の大坂府廳の前あたりをいふ。

はくらくてん　白樂天【名】樂天は、白居易の字なり。

ばくろ　暴露【名】暴は日にさらすこと。露は夜つゆにさらすこと。隱れたるものごとのあらはるゝをいふ。

はぐろめ　齒黑、鐵漿【名】かね、おはぐろ、齒を黑く染むるもの。鐵を酒に浸して作れる液なり。

ばくわんかいけふ　馬關海峽【名】赤間關海峽の別名。また、門司ともいふ。長門國と豐前國との瀨戸。

はくおう　白鷗【名】鷗は、かもめなり。江にすむ鳥。毛色白ければ、白の字を冠せり。また、棲む處を以て、「江鷗」「海鷗」など、分ちても云へり。

はげふ　覇業【名】王業、幕府の政治。覇とは、帝王に代りて、政權を執るをいふ。されば、諸侯の主たるものを覇王などもいへり。

はこやのやま　藐姑射山【名】莊子に「藐姑射之山有二神

人ノ居ラズ。肌膚若シ氷雪ノ如ク約若シ處女ノ」などありて、仙人の住所なるより、轉じて、仙洞御所ともいへり、即ち、太上天皇の宮殿なり。

はこわう 箱王 【名】曾我時致の小字なり。

はさ 爬沙 【名】手足の凪りて延びざるにいふ語。韓愈の月餘の詩に「爬沙脚手鈍」の句あり。

はざくらにつき 葉櫻日記 【句】山縣有朋侯が、慶應三年五月、赤間關をたちて、京都に上り、やがて其の年の六月、國元に歸りし時の日記なり。時、葉櫻の頃なりければ、かく名づけたるなり。

ばさ 婆娑 【副、形】舞ふ貌、行く貌、衣の揚がる貌、などにいふ語。また、總べて、物の散亂したる體の形容にもいふ。「木楠婆娑の間」などは、名詞として用ひられたるもの。

はじ 櫨、黄櫨 【名】木名。漆に似たる木にて、秋季黄葉す。其の色黄赤色なり。いにしへ、黄櫨染（ワウロゼン）とて染料に用ひたり。

はしたなきふるまひ 【句】不都合なる振舞。あさましき行。身分不相應なる振舞。

はしたなし 【形】何れとも附かずして、物の中間にあるをいふ語。不都合、無情、不愛相、などの意に用ふ。はしたなくは、副詞。

ばじとうふう 馬耳東風 【句】「馬の耳に風」、「馬の耳に念佛」など、世俗によくいふ語なり。人のいふ物事を、心に留めぬ意。李白の詩「世人聞ク此皆掉ク頭。有レ如ニ東風射ニ馬耳ニ」。又、蘇軾の詩「說向ニ市朝公子ニ何殊ニ馬耳東風ニ」とあり。

はじのき 櫨樹 【名】ハゼ、ハゼウルシ、ラクの木などいへり。實より蠟を取る。漆の木の一種にして、葉も實も、それより大なり。

はじのにほひのよろひ 櫨の匂の鎧 【句】鎧の威毛の名なり。黄赤色の綴糸を、上方より下方に次第に薄くして威したる鎧。はじ參照。匂とは、正色より次第に薄き色にておどし、果は白にも至るをいふ。但し、ニホヒといふ詞の古意は、たゞ色をいへるを、軍記などの用ひ方は、うつれるなり。

はしばみ 榛 【名】樹の名。栗に似て、實は柹（トチ）に似たり。

はじめはしよぢよのごとく、をはりはだつをのごとし 始は處女の如く、終は脱兎の如し 【文】始めはやさしくして油斷をさせ、終りには勢よく敵の拒ぐこと能はざるやうするをいふ。孫子に「始如ニ處女ニ敵人開レ戸、終如ニ脱兎ニ敵不レ及レ拒」とあり。

はじやう 坡狀 【名】坡は阪なり。「地形坡狀をなす」など。

はじゆみ 櫨弓、黄櫨弓、波士弓 【名】黄櫨の樹にて作れる弓。黄櫨の樹は、漆の一種にて、はにし、はぜ、山うるしともいふ。木心黄にして染料とす。黄櫨染（クワウロゼン）、これなり。

はしらににかはす 柱に膠す 【句】ことちににかはすとよむべし。かうちうを見よ。

はしりみづ 走水 【名】地名。相摸國三浦郡横須賀町大字走水。砲臺あり。

はしる 趁 【動ラ四】追ひかくること。說文の注に「自レ後及之也」とあり。廣韻には、逐也とあり。

はしる 端居 【名】はし近く、廊下、緣などに出で居ること。

はせを 芭蕉 【名】有名なる俳人なり。姓は松尾、名は宗房、桃青、風臺などの號あり。正風の一派を爲せり。元祿七年十月大阪に歿す。年五十一。遺言により粟津原に葬る。

はせくら つねなが 支倉常長 【名】六右衛門と稱す。仙臺侯伊達政宗の臣。政宗異教を惡み、また、南蠻を征服せむ大志あり。すなはち、其の國情を探らしめむとして、常長および横澤監物を外國に遣す。當時將軍秀忠も之を嘉して賞賜ありきといふ。常長、すなはち慶長十八年牡鹿郡日浦に艤して、羅馬および西班牙に使し、彼に留ること八年、元和六年歸朝す。同八年歿せり。年五十二。子常頼は、耶蘇教を信ずとの故を以て、寛永十七年刑に處せらる。

はた 坡陀 【名】凹凸せる土地をいふ。爾雅釋地に「坡陀不レ平」とあり。玉篇に「險阻也」とあり。

はたう 波蕩 【名】心の、波の如く動くをいふ、劉琨の表「齊人波蕩無所繫心」。

はだう 覇道 【名】功利を主として、富國強兵を目的とする道。支那の春秋時代に行はれし道なり。

ばたう 馬槽 【名】馬の腹帶なり。

はたけやま しげただ 畠山忠重 【名】莊司二郎と稱す。武藏畠山の莊に居る。初め平氏に屬し、後に頼朝に歸して、屢戰功あり。頼朝の薨後、遺言により頼家を保護す。勇猛智略にして敦厚の人。然れども、元久二年子重保の事により、北條氏の室と叶はず、遂に搭闘して死す。年四十二。

はたそで 端袖、鰭袖 【名】袖のはしなきいふ。直垂の袖に、二幅なるあり、一幅半なるあり。二幅ならば、其の袖口の方の一幅。一幅半ならば、其の袖口の方の半幅をいふなり。「赤地の錦もて、端袖彩りたる直垂」などいへるは、褐などの直垂の、端袖だけを、赤地の錦にて彩り飾れるなり。

はたてのなびき 旗手の靡 【句】軍旅の、風に靡くこと。

はたと 礮と、礮と 【副】物事のつき當りたる狀にいふ。「はたと手を拍つ」、「はたと當惑す」など。

はたのせみもと 旗の蟬本 【句】蟬本とは、旗竿の旗を結びつくる所。帆柱の帆を繋ぐ所をもいへり。義經記に「帆を下さむとすれども、雨にぬれて蟬本つまりてさがらず」。

はだばかま 膚袴 【名】褌の字も用ふ。さるまた。ふんどし。

はたばりひろさにしき 機張廣き錦【句】拾遺集「みづうみに、秋の山邊をうつしては、はたばり廣き、錦とぞ見る」。はたばりは、布帛の幅なり。水一面にくれなゐになりて、巾廣き錦と見ゆるなり。

はだれ 斑【名】まだら。「はだれ雪」、「はだら雪」、「はだれ霜」などは、多く古歌によめり。又、「はだれにふる」などのはだれには、もとより副詞なり。

はぢあるひとや 恥ある一矢【句】恥を知る矢。即ち、軍功を立てむといふべきを、謙りて、「恥ある一矢を射む」などいへり。源平盛衰記宇治川陣の條にも「腰の刀にて指し違ひ、恥ある武士二人失ひて、鎌倉殿に大損とらせむ。云々」と見えたる、恥あるも、同じき意なり。

はちくのいきほひ 破竹の勢【句】勢の急劇なるをいふ語。事類全書に「杜預曰、今兵威已振、譬如破竹。數節之後、皆迎刃而解」とあり。

はちすのにごりにしまめこころ 蓮葉の濁に染まぬ心【句】蓮は泥中にありても、其の濁には移らずして、清かなりとの意。古今集僧正遍昭「蓮葉の、濁にしまぬ、心もて、何かは露を、玉とあざむく」。

はちたいしやうぐん 八代將軍【名】徳川八代の將軍吉宗なり。紀伊大納言賴宣の孫にして、光貞の子。享保元年入つて、宗家を繼ぎ、將軍となれり。寛暦元年薨ず。年六十八。諡は有徳院。徳川幕府中興の明君と稱せらる。

はちたう 八道【名】こきしちだうを見よ。

はちぢやうじま 八丈島【名】伊豆七島の南にあり。八丈絹の産、世に名高し。東京より横濱をへて百六十九浬あり。

はちのき 鉢の木【名】謡曲の名。最明寺入道時賴が、天下を行脚して。地方の狀態を視察せるときの一事を記せるものなり。また、植木鉢に植ゑたる樹をもいふ。

はぢの、ひとにおけるだいなり 恥之於人大矣【文】孟子に出でたり。恥は、吾が羞惡の心あるところなり。されば、恥を知れば聖賢にも進むべく、之を知らざれば禽獸の境にも入るべし。故に、其の繫るところ、甚だ大なりとなす。

はちべゑ 八兵衛【名】人名。京都の魚商。後光明天皇崩御の時、火葬の内議定りぬと聞き、道に戻れりとなして、大に歎き、日夜、仙洞および女院の御所に出入して、號泣して火葬の非儀を說きて、遂に之を止めきとなり。

はちまんざん 八幡山【名】京都の東寺をいふ。東寺、或は左寺といふは俗稱にして、本號を八幡山教王護國寺と稱す。今の八條通西八條村にあるもの是なり。

はちまんだいぼさつ 八幡大菩薩【名】菩薩は、梵語の菩提薩埵（ボダイサッタ）を約せるにて、大心ありて、佛道に入る義なり。すなはち、佛の次に位する號なり。神佛混合の世に、長くも、應神天皇を八幡大菩薩に配し奉りて、之を武神として、武士の尊崇せしものなり。

はちまんどののなには、ゐんのごなうもをさまる 八幡殿の名には、院の御惱も治る【文】八幡殿は源義家。古事談に「白川院御寢の後、ものにおそはれおはしけるころ、然るべき武具を、御枕上に置くべしと沙汰ありて、義家朝臣にめされければ、眞弓の黑塗なりけるを一張進めたりけるを、御枕上に立てらる。其の後おそはれさせ給はせざりければ、御感ありて、此の弓は十二年合戰のときや持ちたりしと御尋ありしところ、覺悟せざる由、申しければ、上皇頻に御感ありけり」とあり。

はちまんぶね 八幡船【名】足利氏の中世以後に於て、我が邊民の、支那沿岸を犯す者甚だ多く、其の船の旗には、八幡大菩薩の字を記せり。されば、外人、之を八幡船と稱して、恐怖したりきといへり。

はちゆう 把住【名】一度得たる觀念を、永く心中に保持すること。

はちりゆう 八龍【名】源家重代の鎧に、月數、日數、源太が產衣、八龍、澤瀉、滑鐵、悟無、膝丸の八領あり。其の一なり。而して八龍の鎧に就きては、諸說ありて、其の製詳ならず。要するに、龍の金物、八つを、鎧に附けたるものなり。

はちろん 八論【名】國歌八論といふ書名なり。荷田在滿が國歌に就きて論じたる歌源論、髣歌論、擇詞論、避詞論、正過論、官字論、古學論、準則論の八を一篇としたるもの、其の論に就きては、世の批難多く、國歌八論非斥、國歌八論評、八論餘言など、批評の書多く出でたり。

はちろん 八音【名】又はつちん。音樂上に云ふ八箇の聲音にて金、石、絲、竹、匏、土、革、木これなり。尙書に「遏二密八音一」とあり。

ばつえふ 末葉【名】末孫。後裔。

はづかし 羽束師【名】地名。山城國乙訓郡に在り。「羽束師の杜」など、歌にも多く詠めり。

はくき 白旗【名】ハツキとよむ。白き旗。戰敗れて降を乞ふとき、白旗を掲ぐ。

はつくに 肇國、初國【名】國の成立の初なり。風土記「初國小くつくらせり」。

はつくにしらすすめらみこと 始馭國天皇、御肇國天皇【名】他國を征して始めて其處を治め給へる天皇。神武、崇神の兩天皇を申せり。

はつくわう 八紘【名】八は八表なり。紘は綱なり。八方といふに同じ。淮南子に「八殥之外有二八紘一。註云、紘維也。維二

落天地二而爲二之表一故曰二紘一」とあり。

はつくわう 八荒 【名】八方なり。四方四隅をいふ。天下といふ意にも用ふ。文選の注に「八荒、八方也」。杜詩「八荒開二壽域一」。

はつけんでん 八犬傳 【名】書名。瀧澤馬琴の著したる有名なる長篇小說。

はつこ 跋扈 【名】自ら恣にすること。また、上を犯すにいふ。後漢書「目」冀曰、此跋扈將軍也」。

はつこう 八江 【名】長門國阿武郡萩町近傍の海岸に八江あり。元祿の頃に、藩主毛利氏が、儒臣等に命じて選ましめし八景あり。

倉江の歸帆、王江の秋月、櫻江の暮雪、小松江の晩鐘、上津江の晴嵐、中津江の夜雨、下津江の落雁、鶴江の夕照、

はつさいのみやのおんうた 八歳の宮の御歌 【句】太平記に、八歳の宮の、父帝後醍醐天皇の隱岐に流されませるを戀ひ慕ひ給ひて「つくづくと、思ひ暮らして、入相の、鐘を聞くにも、君ぞ戀しき」と詠ませ給へる歌を、京中の僧俗、あはれに賞で傳へけるよし記せり。此の宮は恒良親王なりと。

はつざう 末造 【名】又、まつざう。造は作なり。爲なり。仕業のこと。世の末、即ち、末世をいふ。

はつしと 發石と 【副】矢の飛び來て突き立つ音、又、刃との打ち合ふ音などの形容にいふ。「胸にはつしと立つ」、「打ち込む大刀をはつしと受けとも」など。

はつじま 初島 【名】伊豆國賀茂郡熱海より海路南へ三里にあり。源實朝の「箱根路を、我が越えくれば、伊豆の海や、沖の小島に、波のよる見ゆ」とある、沖の小島は、是れなり。

はつしやうゐん 八省院 【名】だいごくでんを見よ。

はつしやうゐんのじふにだう 八省院の十二堂 【名】昌福、含章、承光、明禮、暉章、康樂、延休、含嘉、顯章、延祿、修式、永寧の十二堂をいふ。太極殿の前面に並列せる御殿也。

はつしやうゐんのしろう 八省院の四樓 【名】蒼龍、白虎、栖鳳、翔鸞の四樓をいふ。八省院の屋上の四隅に、高く造り設けたる樓なり。蒼龍樓は、左樓または東樓と稱し、大極殿の東の屋上にあり。白虎樓は、右樓、また西樓と稱し、大極殿の西屋にあり。栖鳳樓は應天門の東樓と稱す。翔鸞樓は、應天門の西樓と稱す。

はつすゐ 拔萃 【名】群より抽でたること。また、或る書中の用ある部分を撰りぬきて書くこと。萃は聚なり。聚中より拔出する義なり、孟子「出二於其類一拔二乎其萃一」。

はつせふ 跋涉 【名】野を行くを跋といひ、水を行くを涉といふ。されば旅行するを、「山野を跋涉す」などいふ。

はつた ともの り 八田知紀 【名】八田は、又はちた、通稱

善右衛門。鹿兒島藩士なり。香川景樹に就き和歌を學び、遂に一家を成せり。明治六年九月歿す。年七十五。

はつてき 拔擢 【名】物の多くの中より拔き出すこと。

はつと 法度 【名】法律。禁制。おきて。幕府時代の語。

はつとり なんくわく 服部南郭 【名】名は元喬、字は子遷、京都の人。江戸に出で、徂徠の門に學びて高足たり。詩をよくす。寶曆九年歿す。年七十七。

はつとり らんせつ 服部嵐雪 【名】玄峯堂、雪中庵、不白軒、黃落庵などの號あり。芭蕉門の俳人にして、雪中庵の祖なり。もと淡路の人、江戸に住す。寶永(德川五代綱吉)四年十月歿す。年五十四。

はつぷん 八分 【名】漢字の書體の名。今の隷書と稱するもの、すなはち八分にて、今日の楷書は、此の八分より變じたるものなり。

はつぽくたうたう 伐木丁丁 【句】詩經中の句。丁々は、木を伐る音の相應じて反響するをいふ。

はつらつ 潑溂 【名、副、形】魚の跳るさまをいふ。李白の詩に「双鯉呀呷鱗鬣振、潑剌銀盤欲二飛去一」とあり。

はつらん 撥亂 【名】亂を治むること。撥は、治なり、除なり。公羊傳「撥二亂世一反二諸正一、莫二近二春秋一」。「撥亂反正」。

はつてうたう 八疊島 【名】澎湖列島中の一島なり。

はてに 果 【副】最後に。をはりに。遂に。とう〳〵。

はでひ 巴提便 【名】人名なり。膳臣巴提便(カシハデノオミハデト)といふ。欽明天皇の頃の人。百濟にある時、雪の降りける夜、わが子を虎に執り去られければ、大に怒りて其蹤を追ひ、遂に虎穴に至り虎の舌をつかみ、刀を拔きて之を殺しきといへり。又、巴提便の便の字使ともありて、ハデとも傳へたり。

はてんくわう 破天荒 【名】物の端を開くことなり。唐摭言に「崔魏公作二鎭、以一破二天荒一錢七十萬貫」。

はと 覇圖 【名】覇業をなす謀略なり。

ばとう 碼頭 【名】波止場のこと。支那語。

はなごけ 花苔 【名】山中に生ずる苔にして、高さ二三寸、色白くして華圓く、中空虛なり。しらごけ、石蓝、とも云ふ。

はなさだめのはかせ 花定の博士 【名】花の品評にたける人の意。源氏物語蓬木の卷に「馬の頭、ものさだめの博士になりて、ひぴらぎ居たり」とあるより、作成したる語なり。

はなじろむ 鼻白 【動マ四】臆したる顏するをいふ。心おくれす。臆す。

はなしおらずば 花し散らずば 【句】古今集「いつまでか、野邊に心の、あくがれむ、花し散らずば、千代も經ぬべし」。あくがるとは、心のわが身に添はぬこと、即ち、他の物にうばはるるをいふ。

はなだ 縹、花田 【名】色の名。淺黄に近き色。

はなたちばな 花橘 【名】橘を、其の花を賞するよりいふ。また、夏蜜柑をもいふ。夏蜜柑は、其の實夏まで存せり。たちばな參照。

はなちで 放出 【名】離座敷といふに同じ。本家より引さはなして造り出したる處。

ばなな Banana 【名】甘蕉といふ植物。芭蕉の類。熱帶地の植物なり。

ばなま うんが Panama 運河 【名】パナマは、南北亞米利加を連れたる地峽なり。近時レセップ氏設計して、太平洋岸のパナマ港より、太西洋岸のアスピンワチウル港に達せむとする運河の工事中なり。然るにまた、別にニカラが運河の設計も起りて、これと功を爭へり。

はなもかへり、ぬれなどしたるきぬ 花もかへり濡れなどしたる衣 【句】花田色(淺黄)の色もさめて殊に雨などに濡れたる衣。

はなよりあくるみよしの 花より明くる三芳野 【句】賴三陽の今樣に「花よりあくる、三吉野の、春の曙、見わたせば、もろこし人も、大和心になりぬべし」といふ歌あり。花は白きものなれば、「花より明くる」といへるなり。

雪にも「雪より明くる」などいへり。

はなわけごろも 花分衣 【名】花の間を分け行く衣。すなはち、花見のときに着る衣をいふなり。萬代集「秋の野の、花わけ衣、都まで、色はやつさじ、見む人のため」。また、衣といふより、衣を裁つ緣にて、出で立つにかけてなど云へり。

はなをみすてて、かへるかりがね 花を見捨てて歸る雁が音 【句】雁は、秋に來りて、春になれば、歸雁とて北方へ歸るもの故にかくいふなり。かりがねを見よ。古今集「春霞、たつを見すてゝ、ゆくかりは、花なき里に、すみやならへる」。

はにふのこや 埴生の小屋 【句】賤が屋の狀にいふ語。土にて、粗々しく壁など塗りたる家。

はにやすのいけ 埴安池 【名】大和國高市郡香具山村、大字南浦(ミナミウラ)に、繞に其の一部分殘れりといふ。

はにわ 埴輪 【名】埴土(ハニ)にて造れる人馬、または、甕の類。古代に人を生ながら埋むるに代用して、陵墓の周圍に、之れを半ば地に埋めて、車輪の如く立て列れしものなり。

ぱのらま Panolama 【名】全景など譯す。

ははき 脚巾、脛巾、脛衣、行纏 【名】脛(ハギ)にまとふ衣。今の脚絆(キャハン)なり。

ははしま 母島 【名】小笠原群島中の一にして、父島に次ぐ

もの。

ははそはの 柞葉 【枕】柞といふ木の葉。其の音の似たるより、母にかけていふ枕詞とす。柞は櫪(カシハ)の古名。いま、ははそといふ。ちちのみの參照。

ははとじ 母刀自 【名】母上といふに同じ。刀自は老女をいふ敬稱。とじを見よ。

ばば のぶふさ 馬場信房 【名】初名兵勝、武田氏の勇將なり。晴信の偏諱を賜はりて信房と更め、又信勝と稱す。勝賴立つに及びて、長坂調閑、跡部勝資等、權を專にして、信勝漸く疎んぜらる。天正三年、長篠の戰に憤闘して死す。年六十二。

ははむ 阻、沮、難 【動マ四、下二】支ふる、止むる、妨ぐるなどの意。

はふ 破風 【名】屋根の切妻を側面より見る時は、屋根の兩方に、山形をなしたる所あり。そこをいふ。

はふ 飯匙倩 【名】琉球語なりといふ。一種の蛇。頭、飯匕の如し。

ばふいん 法印 【名】そうゐ、そうくわんを見よ。

はふげん 法眼 【名】そうゐ、そうくわんを見よ。

はふそうじ 法興寺 【名】大和高市郡飛鳥の豊浦寺をいふ。また元興寺ともいふ。元正天皇靈龜三年奈良に移し、飛鳥なるを、本元興寺といひしが、後亡びにたり。

はふさう 法曹 【名】いにしへ大學寮の內に、紀傳道、明經道、明法道、算道の四道ありて、その明法道、すなはち法律の事を傳ふる家を法曹といへりき。後には、單に法律家といふ意に用ひらる。またホツサウと訓す。

はふしやうじ 法性寺 【名】京都の九條河原にありし寺なり。藤原忠通、別業を、寺の傍に造れるを以て、世に法性寺關白といふ。

はふしやうじ 法成寺 【名】藤原道長の住みし古跡。五條河原にあり。されば、道長を、法成寺の關白といふ。

はふぢゆうじ 法住寺 【名】寺なり。一條帝の頃に、藤原爲光の創建せし寺にて、後に鳥羽、後白河の二帝、これを離宮としたまへり。壽永二年、義仲、後白河上皇を、此の殿に圍みて火を放ちき。

ばふのわざはひ 馬舞の災 【句】火災のことなり。晉書の藝術傳に「黃平間ニ索紞ニ曰、我昨夜、夢ニ舍中馬舞、數十人、向レ馬拍レ手。此何祥也。紞曰、馬者火也。舞爲ニ火起ニ。向レ馬拍レ手救レ火人也。手未レ歸而火起」とあり。

はふのち 覇府の地 【句】武家將軍の府のある地。

はふらかす 放 【動サ四】はふらすともいふ。放ち遣る、打ち捨つる、廢れものにする、などの意。身をはふらかすなど。

又、艮行四段に放ると活く語も、意はこれに同じくして、他動。艮行下二段に活く放るは、放れ散る、散り乱るなどの意にして自動なり。

はふらす 放【動サ四】乱れ散らしむる意。打捨つる。落魄す。六帖「身は捨てつ、心をだにも、はふらさじ」など。

はふりうじ 法隆寺【名】斑鳩寺ともいふ。大和國生駒郡法隆寺村にあり。推古帝十五年の創建。天智帝の時焼失し、元明帝の和銅年間に再興す。其の金堂に安置せる薬師佛の背後の銘は、用明天皇の病氣平癒によりて、此の寺佛を建立するよしを記せるものにて、實に推古天皇十五年の作なり。

はまなのはし 濱名橋【名】遠江國敷知郡の濱名湖に架けたりし橋なり。

はまゆふ 濱木綿【名】草の名。莖は芭蕉の如く、皮幾重にも重り、葉は萬年青に似て長し。されば「濱芭蕉」とも「濱おもと」ともいふ。花は木綿四手を切りかけたるがごとし。紀州の海濱に多しと。

はんえふ 范曄【名】支那の人名。字は蔚宗、劉宋の順陽の人。後漢書の著者なり。元嘉二十二年事を以て誅せらる。年四十八。

はんえん 繁衍【名】衍は延に同じ。しげり榮ゆること。盛に茂ること。

ばんかうけい 伴高蹊【名】名は資芳、其の居を閑田廬といへり。國學者なり。近江の人。京に出でて有賀長伯に學び、遂に一家を成す。當時、蘆庵、澄月、慈延と、平安に於て四天王と稱せらる。文化三年七月歿す。年七十四。閑田文草、閑田耕筆、閑田次筆、近世畸人傳等の著あり。

ばんかん 反間【名】敵の間者を利用して我が間者として以て敵をはかることをいふ。孫子に「反間者、因二其敵一而用レ之」。史記の燕の世家に「說レ王使レ齊、爲二反間一以乱レ齊」とあり。

はんかんのさいしや 墦間の祭者【名】孟子に出づ。墦は冢なり。墳墓の祭をするもの。

はんかんぷ 藩翰譜【名】書名。三十卷あり。新井白石が、甲府に仕へし時、將軍徳川家宣の命を奉じて撰述せし書。諸侯の家譜にして、慶長五年より延寶八年に至るまで八十一年間、三百三十七家の傳記を詳にしたるものなり。

ばんき 番記【名】書名。一卷あり。保元三年八九十二月の朝儀に關せる日記なり。記者詳ならず。

ばんきのまつりごと 萬機の政【句】書經に「王者一日、有二萬機之政一」とあり。帝王の萬の政務なり。

ばんきん 輓近【名】もとは、季世の義にいひしが、今は近年といふ意に用ふ。

ばんきよ 板魚【名】比目魚科に屬する魚は、平目、鰈、牛舌魚など、總べていふ。

ばんくわい 樊噲【名】人の名。漢の高祖の臣。無双の勇士にして、沛公に從ひて、鴻門の會に、項羽を叱咤したる人。

ばんくわい 挽回【名】恢復に同じ。もとに引き返すをいふ。

ばんくわん 盤桓【名】たちもとほること。爾雅に「不レ進也」とあり。易經「雖二盤桓一、志行レ正也」。

はんぐわんだい 判官代【名】院廳の官名。院中の政を記錄する職。

ばんこのよ 盤古の世【名】太古のこと。述異記に「盤古氏夫婦陰陽之始也。天地萬物之祖也」とあり。

ばんこく 蠻國【名】徳川時代に、南洋より西洋までをさしていへり。

ばんこころ 萬戸侯【名】萬戸の土地を支配する君。大きなる大名の意。史記「如令二子當一高帝時一、萬戸侯豈足レ道哉」。また、千戸侯の稱もあり。

ばんこんさくせつ 盤根錯節【句】わだかまれる根。いりまじりたる節。それより、世の中の事の難きにいふ。

はんざうもん 半藏門【名】江戸城、すなはち、今の皇居の西にありて、東京市、麹町に通ずる門をいふ。

ばんさん 晩餐【名】夕飯といふに同じ。

ばんじならずば、すべからく、わがこころざしをせむべし 萬事不レ成須レ責二吾志一【文】朱子の語。事の成否は、爲す者の勉否にあり。其の成らざるは、薄志弱行なるがためなり。敢て他を攻むべきにあらずとの意。

ばんじんのせいへき 萬仞の青壁【句】山の崖などの幾丈となく高きをいふ。仮は八尺なり。青壁は、和漢朗詠集に、大江澄明の句に「山復山、何工、削成青巖之形。水復水、誰家染出碧潭之色」とある青巖に同じ。

ばんしやう 萬象【名】萬の物。萬のかたち。「森羅萬象」など。

はんしゆのうんてい 斑輸の雲梯【句】戰國策に「公輸般、爲レ楚設レ機、將二以攻一レ宋。墨子曰、聞公爲二雲梯一將二以攻一レ宋、宋何罪之有」とあり。また列子に「斑輸之雲梯、墨翟之飛鳶、自謂二能之極一也」とも見えたり。公輸般は、すなはち斑輸にして、魯の巧人なり。

ばんしよ 蕃薯【名】さつまいもなり。はじめ、蕃國より渡りしよりいふ。

ばんじようのきみ 萬乘の君【名】唐の段秀實の傳に「古者天子曰二萬乘一」。孟子の註に「兵車萬乘謂二天子一」とあり。而して諸侯を千乘の君といへり。千乘參照。

ばんせいさうふ 萬姓統譜【名】書名。明の吳興の人、凌迪知の著。上、帝王より、下庶民まで、略傳を附し、韻字により索むるやうせし人名辭書なり。

ばんせき 版籍【名】版圖と、戸籍となり。すなはち、土地と人民とをいふ。

はんせつ 反切【名】カヘシ。音の相摩して一音を成す法。例へば、天の字の音を、他前反、又、他前切とすれば、其の、他の發聲と、前のゼの韻のエと相約まりて、テとなり、さてテンとなるが如し。其の上なる字を、父字(字頭)といひ、下なるを母字(字母、母韻字)といふ。我が國の詞にていへば、タタキアヒの約りて、タタカヒ(戰)となる類なり。

ばんせつ 晩節【名】晩年の節操をいふ。

ばんせつ 伴接【名】相伴に同じ。

ばんせん 盤旋【名】めぐること。回轉すること。

はんそう 范祖禹【名】支那の人の名。宋の人。進士に擧げられ、司馬光と、資治通鑑を編修す。後に右諫議大夫を拜し、哲宗に上疏して、邪正を辨ずること甚だ懇切なり。翰林學士に進む。

はんぞう 范增【名】項羽の謀臣、居巢の人。奇計を好み、項羽に仕へしが、羽つひに用ふること能はず。增憤りて、疽を發して死せり。

はんだ 吐田【名】地名。大和國東葛城郡にあり。

はんちゆうあん 范仲淹【名】字は希文、宋の吳縣の人。宋朝の名臣。卒して文正と諡す。

はんてん 反坫【名】坫は兩楹の間に在る棚の如きものにて、賓主獻酬して飲み畢ふれば、爵を其の上にかへし置く所なり。論語に「邦君爲二兩君之好一有二反坫一」と見ゆ。

はんど 版圖【名】名籍、および地圖。人民および土地。周禮の鄭玄の註に「版は戸籍、圖は土地の形象、田地の廣狹」のよし見えたり。

ばんどうたらう 坂東太郎【名】川の名。利根川をいふ。關東第一の大河なれば、此の稱あり。源を上野國利根郡に發し、下總の銚子港に注ぐ。

はんにやじ 般若寺【名】大和國奈良市にあり。元弘の變に、護良親王こゝに匿れ給ひき。

ばんば 番場、馬場【名】近江國阪田郡南筑浦村大字番場、磨針嶺の山上の一村なり。元弘の亂に、北條仲時、時益、京都を脫し、東走して此に自殺せり。德川氏のとき、中山道の一驛たりき。

はんぱく 班白【名】頭髮の半白半黑の老人をいふ。

はんぱく 頒白【名】班白に同じ。孟子「頒白者可レ著レ帛」。

ばんぱく 蠻貊【名】中庸に「聲名洋二溢乎中國一、施及二蠻

貊一」とあり。外國を卑めていふ語。

ばんぷく 翻覆【名】飜りて反對になるをいふ。背くなり。唐書「瀛鎭飽則去矣。我懼其翻覆」。

はんぺい 藩屛【名】字書に「蕃衛也屛障也」とあり。周圍にありて、內部を守る義なり。

ばんべつ 蕃別【名】しんべつを見よ。

はままつちゆうなごんものがたり 濱松中納言物語【名】書名。八卷あり。菜中納言が、唐土に渡りて、其の國の皇后に談らひて一子をあげたる事より、歸りて後の始末までを綴りなせる物語なり。作者は菅原孝標の女。

はんめい 反命【名】復命と同じ義にて、返事することなり。孟子に「然友反命」とあり。

はんもく 反目【名】目をむきだして相見るをいふ、仲の惡しきこと。易經「夫妻反目、不レ能正室也」。

はんものぐさ 半物草【名】足の先の、半分ばかりの草履をいふ。

ばんらい 萬籟【名】類書纂要に「萬籟とは、風吹きて、萬物聲あるをいふ」といへり。

はんらん 氾濫【名】大水の橫さまに流れ溢ること。孟子に「洪水橫流、氾濫於天下」とあり。

はんらんばうやう 汎瀾望洋【句】汎瀾は渺漫と同じく、ひろきなり。漠然として、一定せることのなきにいふ。ばうやうのたん參照。

ばんり 蕃籬【名】草の生ひ茂れる垣。蕃は草の茂るにて、籬はマガキなり。

ばんれい 凡例【名】著書の初に掲げて、其の著書の大要を示せる文。書中の大凡を例すとの義なり。

はんれい 范蠡【名】支那の人名。越王勾踐の臣。勾踐、吳王夫差と戰つて敗れ、會稽山に降る。後に、范蠡の輔を得て、遂に吳を亡し、會稽山の恥を雪ぎたり。こうせんのはち參照。

はんれいがはかりごと 范蠡が謀【句】こうせんのはちを見よ。

はんろう 樊籠【名】樊も籠なり。罪ありて牢に入れらるること。

はやうち 早打【名】急ぎの飛脚。大急ぎの使なり。武家時代の語。

はやおひ 早追【名】早打に同じ。

はやさめ 早雨【名】遽に降る雨をいふ。

はやしかう 林衡【名】はやしこうつさいを見よ。

はやしくわくりやう 林鶴梁【名】名は長孺、通稱は仲太郎、鶴梁は其の號なり。武藏江戸の人。年二十四にして、始めて學に志し、文名大に鳴るに至れり。明治十一年歿す。文集

正續あり。

はやし しへい　林子平【名】名は友直、其の姉仙臺侯の側室たる故を以て兄友諒と共に仙臺に居る。夙に大志あり。時事を慷慨して、海國兵談、三國通覽を著す。而して、幕府の忌諱に觸れて絶版せられ、仙臺に禁錮せらる。すなはち「親も無し、妻なし、子なし、板木なし、金もなければ、死にたくもなし」と詠じて、みづから、六無齋と號せり。寛政五年六月歿す。年六十二。

はやし じゆつさい　林述齋【名】名は衡、字は叔沈、又、公鑑といへり。述齋、天軒、天瀑、蕉軒老人等の號あり。「幼字を熊藏と稱せり。大學頭に任ぜられ、晩に大内記に轉ず。天保十二年卒す。年七十四。

はやし ともゆき　林友幸【名】舊山口藩士。現に樞密顧問官正三位勳一等子爵たり。

はやしにやどるさぎ　林に宿る鷺鷀【句】莊子に「鵷鶵(エンスウ)巢於深林、不過二枝。偃鼠飲河、不過滿腹」とあり。鵷鶵(エンスウ)は、またミソサザイともいひて、至つて小鳥なり。偃鼠(エンソ)は二十日鼠(ハツカネズミ)と稱する小鼠にして、土中に穴居す。この莊子の語は、すなはち、知足(ルコトヲシル)の教にして、不用なるものは、多くありて詮なしとの意。

はやし らざん　林羅山【名】名は信勝、また羅浮山、瓢庵、梅花村などの號あり。藤原惺窩に儒を學び、慶長中、德川家康に聘せられて顧問となる。雍髮して道春と號し、民部卿法印に叙せらる。明暦三年正月歿す。年七十五。文敏と諡す。

はやすひのと　逐吸の門【名】伊豫と豐後との間の瀬戸をいふ。朝流急なればこの名あり。

はやて　疾風【名】はやちの轉。急に烈しく吹き起る風。暴風。ちは風の古言なり。

はらかのにへ　腹赤贄【名】マス(鱒)なりといふ。年の始めの贄(ニヘ)に、筑紫より獻ずるもの。公事根源に「元日節會云々、腹赤の贄とて、魚を筑紫よりたてまつるなり」とあり。

はらから　同胞【名】兄弟、姉妹を云ふ。

はらつづみ　腹鼓、脹鼓【名】腹を鼓に代へて鳴らす義なり。食に滿足して樂むをいふ。鼓腹(コフク)、腹大鼓(ハラタイコ)、などいふに同じ。

はら ねんさい　原念齋【名】名は善、字は公道、幕府の士。山本北山の門に學び、先哲遺談を著す。文化三年三月四十歳にて歿す。

はらふ　拂【動ハ四】除き捨つるをいふ。

はらふ　被【動ハ四、下二】四段はわがハラフこと。下二段は、人にハラハシムルこと。神に祈りて罪穢を拂ふをいふ。

はらまき　腹巻【名】鎧の下に着重ぬるもの。鎧より簡略にして、袖も脇立もなく、背後にて引き合す。また、鎧を着すして、腹卷に鎧の袖を着用することもあり。

ばらもん　婆羅門【名】天竺(今の印度)の四姓の一。貴族の姓にて、國民四階級の最上なり。また宗門の名にて、佛教よりも古し。

ばり　玻璃【名】梵語にて、水晶の義。今は轉じてガラス、ビイドロなどと同義に用ふ。

ばりい　巴里【名】地名。佛國の首府 Paris なり。

ばりき　馬力【名】蒸氣の力を計る語。一馬力は、およそ馬一匹の力の程度にして、即ち一分時に二萬四千磅ばかりの重力を、地上一尺ほどに擧ぐる力をいふ。

はりごし　張輿【名】貞丈雜記に「疊の表を張りて包み、おしぶちを打ちたる物なり。略儀なる輿なり」とあり。

はりまなだ　播磨灘【名】播磨國に面せる海をいふ。

はるく　晴【動カ下二】はれやかにするをいふ。

はるたちしより、としのくれゆくまでいるがごとし　春立ちしより年の暮れ行くまで射るが如し【文】古今集躬恒の歌「梓弓、春たちしより、年月の、いるがごとくも、思ほゆるかな」。

はるのいそぎ　春の急【句】春の用意、春の支度などいふ意。いそぎ參照。

はるのみや　春宮【名】とうぐうを見よ。

はるのゆくへもしらぬまに　春の行方も知らぬ間に【句】今古集、藤原よるかの朝臣の歌「たれこめて、春の行方も、しらぬまに、待ちし櫻も、移ろひにけり」。「春のゆくへ」は春の日數の立ちゆくをいふ。

はるはあけぼの　春は曙【句】枕草紙に「春は曙、やう〳〵しろくなりゆく山ぎは、すこしあかりて、むらさきだちたる雲の、ほそくたなびきたる」とあり。春は曙がよしとの意。

はるみち つらき　春道列樹【名】人名。古今集の歌人なり。延喜二十年に、壹岐守に任ぜらるといへり。

ばれいしよ　馬鈴薯【名】じやがたらいもといふ。南洋島の Jagatara 島を名とせるなり。形丸き薯なり。

はわう　覇王【名】諸侯中の主位にありて、帝王に代りて、政權を執るもの。轉じては、同盟者中の長をさしていふ。俗に旗頭といふほどの意。覇業參照。

ひ

ひ 檜 【名】木の名。ひのきともいふ。幹高く聳ゆ、材緻密にして、水氣に堪ふる故に、多く、家屋、船舶などの建築材に用ふ。材と材と相摩擦すれば火を發す。故に此の名あり。

ひ 氷 【名】こほりの古名。「氷室（ヒムロ）」など。

ひ 貔 【名】爾雅に曰く、豹の屬、又、虎の屬なりと。貔貅と熟用する時は、兵士をいふ。

ひ 妣 【名】亡母を稱する語。「先妣」「考妣」など。

ひあふぎ 檜扇 【名】檜の薄き板を骨とせる扇。いにしへ、女官などの用ひしもの。

ひあぶり 火炙 【名】古の刑の名。火を以て、炙りころす刑。放火犯のものに行へり。

ひい 梭、杼 【名】機の具。緯糸を經糸の間に通すに用ふるもの。ただ、ひともいふ。

ひいき 贔負 【名】力をそふること。引立つること。文選（ヒイキ）西京賦「巨靈贔負、高掌遠蹠」。

ひいたあ Peter 【名】魯國の皇帝の名。ピイタア大帝は、密に歐洲大陸を漫遊して、其の制度、文物を視察し、また、瑞典、土耳古などと戰ひて、國威を揚げ、首都を聖彼得斯堡に定むるなど、實に、魯國の富強に、此の大帝に基礎を固めたるものといふべし。一七二五年に崩ぜり。

ひいと 呎 【名】ふうとを見よ。

ひいん 庇蔭 【名】隱しかばふこと。庇護に同じ。

びう 眉宇 【名】眉間なり。眉の間に於けるは、猶、屋に宇のあるが如くなればいふ。また、顏、姿容などの意にもいふ。

びうきよ 謬擧 【名】其の器量なき人を、濫に擧げて用ふるをいふ。

びうん 微運 【名】不仕合（フシアハセ）。薄命。

びえき 裨益 【名】助けとなり、利益となること。

びえつ 披閱 【名】開きて改め見ること。

びえどり 鵯 【名】ひよどりに同じ。

びえびんじや 日吉神社 【名】近江國なるは、滋賀郡比叡山麓にあり。古は山王權現といへり。延曆寺（四徒、この神輿をかつぎて、京師に訴訴せしこと屢なりき。織田信長、比叡山を焚くに及び、餘炎、本社に及べり。後、豐臣秀吉再興す。

びをく 比屋 【名】門なみ。軒並み。漢書「堯舜之世、比屋可封也」。

びおほひ 日覆 【名】日光の當るを覆ふもの。ひよけ。

びおもて 日面 【名】日に向ひたるところをいふ。

びかう 披講 【名】詩歌の會の席にて、そのつくれる詩歌を、讀み上ぐること。十訓抄「心うき、年にもあるかな、二十日あまり、九日といふに、春の暮れぬる。大納言、うちきゝて、思ひもあへず、春は卅日やはあると、いはれたりけるを、長秋、披講をも、きき果てず、出でにけり」。

びかう 鼻高 【名】はなたか。僧家などに用ふる履（クツ）の名。

びかう 微行 【名】小徑をゆくこと。また、隱行なり。詩經に「道彼微行」。史記「始皇爲微行咸陽」とあり。今ば、專ら、忍び歩きの意に用ふ。

びかおぼえ 僻覺 【名】事實に違ひて記憶せること。よく覺え居らぬこと。

びがきのうば 檜垣の嫗 【名】筑紫白川の遊女にして、歌をよくす。後撰集に「筑紫の白川といふところに住みはべりけるに、大貳藤原興範朝臣のまかりわたるついで、水たべむとて打ちよりて請ひ侍りつれば、水を持ていでて詠み侍りける。檜垣嫗」「年ふれば、我が黒髮も、白川の、みづはぐむまで、老いにけるかな」とあり。これによりて、興範憐みて、後に衣服を送れるよしなり。其の外、此の嫗のこと詳ならず。ただし、檜垣嫗歌集一卷あり。興範は、菅公左遷中の延喜五年より、太宰大貳たれば推して知るべし。

びがきぶね 檜垣船 【名】檜垣の如く、檜の薄板を網代に編みて、苫をせし船なるべしといへり。

びかげ 僻見 【名】たいのやを見よ。

びがびがし 僻僻 【形】俗に根性（コンジヤウ）の曲りたるをいふ。また、無風流の意にも用ふ。

びかふ 緋甲 【名】緋縅（ヒヲドシ）のよろひをいふ。

びがむ 僻 【動マ四、下二】四段なるは、自動にて、ねぢけること、かたよること。下二段なるは、他動にて、ひがましめること、曲げること。

びがん 彼岸 【名】佛家にて、春分秋分の日を中日として、その前後三日、合せて七日の間をいふ。この時佛事あり。これやがて、彼岸會なり。この語は、佛經に、生死を此岸とし、涅槃を彼岸とし、煩惱を中流とし、菩薩、衆生を濟度して、此岸より彼岸に到らしむといふに起る。又、これより、肇業の日的を達するをも、「彼岸に到る」などいふ。

びがもの 僻者 【名】心の僻みたる人。變人（コンジキダウ）。

びかりだう 光堂 【名】陸中の中尊寺の金色堂をいふ。

びきいれぼし 引入烏帽子 【名】貞丈雜記「引入烏帽子といふは、烏帽子の名にはあらず。風折烏帽子にても、立烏帽子にても、懸緒を懸けずして、頭に引き入れたるままなるを

をいふなり。烏帽子薬かなる故なり。頭巾をかぶるが如し。今は、烏帽子堅くして引き入れられず」と見えたるにて、明かなり。

ひきう 貔貅 【名】一種の猛獣なり。豹の屬とも、虎の屬ともいふ。支那にて、昔は、之を兵戦に使用したり。史記「放熊羆貔貅貙虎、以與炎帝戦於阪泉之野」とあり。これよりして、武勇の士をいふこととなれり。又、旗印(シルシ)などに此の轉獣をかくも、其の兵の勇氣を示す意にて用ふるなり。

ひきおひ 引負 【名】商家に、番頭手代などの、主人に代りて、其の物を他に賣り込み、代金滞りて、主人に償ふ能はざること。請賣の上の借錢。

ひきおび 引帯 【名】袍、直衣、等に用ふる小さき帯。

ひきかへ 引替 【名】ひきかふること。交換。

ひきかへし 引返 【名】ひきかへすこと。もどすこと。

ひきて、しふとなる 施さて褶となる 【句】山に雪の棚引きて、半腹を蔽ふさま、人の褶(シビラ)を着けたる如きをいふ。しびらは、袴の如きもの。

ひきでもの 引出物 【名】こは、饗宴の終に、馬を引きいでて、來客に贈りしより起これる名にて、後には、人に贈る諸物品に通じていへり。

ひきやくや 飛脚屋 【名】維新前さで、人の書狀、その他をあづかりて、各地に往復して所用を辨ずることを、營業とせしもの。

ひきりやう 引兩 【名】紋所の名。輪の中に。横に二畳ある。もの、足利氏の章なり。又、ふたつびき、二つ引兩、ともいふ。其の三畳なるを三引といふ。

びく 比丘 【名】梵語。乞食の義。法師、僧をいふ。魏書釋老傳「桑門爲息心、比丘爲行乞」。また釋典に「比丘者、華言乞士。謂内乞法資心、外乞食資身也」。

ひくじま 引島 【名】赤間關と、豊前國小倉との間の海中にある島。維新の頃より彦島と稱せり。

ひくつ 卑屈 【名】氣力の挫けちぢみたること。意氣張なきこと。

ひくて 引手 【名】引く人。誘ふ人。

びくとるえまにえる 【名】人名なり。サルデニア國王アルバアトの子。賢明にして名相カヴウル、勇將ガルバルヂイを用ひ、又、佛帝ナポレオン三世の援助を得て、墺太利に勝ち、遂に四分五裂の伊大利諸州を一統して、西暦一八六一年、伊國を創建せり。

ひくまのしゆく 引馬宿 【名】地名。今の遠江國濱名郡曳馬村なり。

ひくらうど 非藏人 【名】殿上に候し、禁中の雜事に召し

つかはるる職。六位のうちより補し、藏人所の下に屬す。

ひぐらし 蜩 【名】夏より初秋にかけて、太陽の沒せんとする時刻になく虫なり。故に此の名あり。

ひぐれて、みちさほし 日暮れて道遠し 【文】我が事業未だ半途にして、年の將に老いんとするをいふ。白樂天の詩に「日暮而途遠、吾生已蹉跎」とあるよりいふ。

ひくわん 被管 【名】省の下につきて、其の省に統べらるるをいふ。たとへば、大舍人寮、圖書寮などは、中務省の被官といふが如し。

ひくわん 悲觀 【名】人世の悲哀なるものと感ずる觀念をいふ。また、觀て悲しと思ふ事にもいふ。

ひげき 悲劇 【名】悲哀なる演劇。轉じて悲哀なる事柄の意にもいふ。

ひけつ 秘訣 【名】奥の手。奥義に同じ。

ひげのちりをはらふ 鬚の塵を拂ふ 【文】諂ふことをいふ。佩文韻府に「冦萊公爲宰相(ルヤキ)、丁謂參知政事(タリ)。嘗會(スル)食堂、羹染(ムル)公鬚(チ)、謂起拂(フツフ)之(ノ)。公正色曰、身爲(リ)執政(ジ)、何自爲(ン)宰相(ヤ)拂(ノ)鬚耶。謂慙(ヂ)」と。

ひけんせつしよう 比肩接踵 【句】肩を並べて立ちつづきて至るをいふ。離隔せざる義なり。戰國策「千里而一士、是比肩而立。百世而一舉、若(ニ)隨踵而至(ル)也」。

ひこ 貔虎 【名】猛勇の士に喩ふ。貔は、虎の屬とも、豹の屬ともいへり。書經「尚桓々如(ク)虎如(ク)貔如(ク)熊如(ク)羆」とあり。ひきう參照。

ひご 飛語 【名】根なくして言ひふらす語。漢書「廼有(リ)飛語(ノ)聞(ユル)上(ニ)」。

ひご 蜚語 【名】蜚は飛と通ず。飛語なり。風説と同じ意。

ひご 庇護 【名】かばふこと。助け護るをいふ。おかげ。

ひこさん 彦山 【名】一名英彦山。豊前國に在り。其の山脈、豊後筑前に連亘す。山中に英彦山神社あり。

ひこづらふ 引合、挙 【動ハ四】ひこじろふともいふ。引く、引き合ふなどの意。古言なり。

ひさう 皮相 【名】うはべの考をいふ。轉じては、うはべの意となれり。

ひさうのし 皮相士 【句】外貌をのみ見て、内實を察することの能はざる人をいふ。韓詩外傳「季札遊於齊(ニ)、見(ニ)遺金(ヲ)、呼(ビ)牧者(ヲ)取(レ)之。牧者曰、子、居之高、視之下、貌之君子、而言之野也、吾有(リ)君不(レ)君、有(リ)友不(レ)友、當(ニ)暑衣(ヲ)裘。君疑(ヒ)取(レ)金者(ヲ)乎。延陵子知(リ)其爲(ニ)賢者(ト)、請問(フ)姓字(ヲ)、牧者曰、子乃皮相之士也。何足(ン)語(ル)姓字(ヲ)哉。遂去」。

ひさかたの 久方の 【枕】天(ソラ)、及び、天にあるものにかけていふ枕詞。「久方の月のかつらも折るばかり」など。

ひさげ 提子 【名】 酒を入るる器。銚子の類なり。

ひさご 杓 【名】 水を汲むに用ふるもの。ひしやく。

ひさし 庇、廂 【名】 古への殿づくりに、中央を、母屋とし、そのめぐりに、狭きところあり。これを庇といへり。後世は、家の軒下に、別に作りそへたる短き簷をいふ。

ひさしのくるま 廂の車 【名】 太上皇、または、親王などの乗り給ふ車なり。

ひざつき 膝突 【名】 膝の下に敷く薄縁(ウスベリ)にて、大さ、三尺四方ばかりなる物。

ひざまづく 跪 【動カ四】 地に膝を衝きて風より居る。

ひさんぎ 非参議 【名】 大中納言参議等に任じたる人にて現任に居らぬ者の泛稱。又、三位四位にて、終に参議に昇るべき人の泛稱ともす。

ひさめ 氷雨 【名】 雹。あられ。また、大雨をいふ。

ひし 又族 【名】 武器の名、両岐の鉄(カネ)に長き柄あるものなり。さすまたの類。

ひしかはもちのぶ 菱川師宣 【名】 房州の人。江戸に住して縫箔を業とし、其の上絵より始めて、遂に岩佐又兵衛に継ける浮世絵の妙手となる。正徳年間歿す。年七十。

ひじ 非時 【名】 僧家にて、午後の食事の稱。

びじ 美事 【名】 褒むべき事柄。

ひしき 引敷 【名】 敷物。しとね。今、ひしつきといふ。

ひしづめのまつり 鎮火祭 【名】 火災を被ふための祭。陰暦六月と十二月とに行ひたり。公事根源に「鎮火祭。卜部氏の人、火をうちて、京城の四隅にてまつることあり。火災を防がんの爲とかや」と見えたり。

びじんせう 美人蕉 【名】 植物の名。琉球の産、寒を畏れ、湿地を忌む。芭蕉に似て小く、葉も狭く短し。花は朱色にて、メウガの花の如く、瓣狭く三寸許、左右に五生すること四五寸なり。一に紅蕉ともいふ。伊藤圭介翁いはく、美人蕉、ヒメバセウと訓む、天和年中琉球より渡り、薩摩、日向に多く播殖すと。

ひじやう 非情 【名】 動物の如き、有情のものに對し、木石等の、心無きものをいふ。

ひじやう 非常 【名】 つねにかはりたること。思ひ設けぬこと。非常には副詞にて、甚だの意。

びしやう 美稱 【名】 ほめていふ稱。(トナヘ)

ひしやく 飛錫 【名】 僧の旅行。行脚。雲水。

びしやもん 毘沙門 【名】 梵語、吠室羅摩拏(ヘイシラマナ)の約轉。多聞と譯す。福徳の名、四方に聞ゆる義と云ふ。佛經に、四天王の一。北方を守護し、夜叉羅刹を主ると云ふ。一名、多聞天。

びしゆかつま 毘首羯磨 【名】 天竺の工匠。善く佛像を刻めりとぞ。今、佛として祭る。

ひしゆ 匕首 【名】 短劔なり。其の頭の、匕に類する故にいふ。史記「使下專諸置二匕首於炙魚之中一、以進上レ食

びじゆつ 美術 【名】 自然の妙を發揮して、人に神聖の快樂を與ふる藝術をいふ。

びじゆん 批准 【名】 よしあしを判決して許可を與ふること。

ひしよ 避暑 【名】 暑をさくること。夏のあつきとき、山間或は、海濱の涼しき地にゆくこと。

ひしよつめ 菱四目 【名】 紋所の名。四つ目を菱の形にかきたるもの。

ひじり 聖 【名】 聖人。又、日の如く知るといふ意にて、天子を申す。又すべて、凡人よりすぐれたるものをもいふ。さては、高徳の僧をもいふ事となれり。

ひぜんと 怫然 【副】 怒る體の形容にいふ語。心安からぬ意。「怫然として色を作す」など。

ひすでにたつをくはふ 日已加辰 【文】 今の、午前八時過なりといふに同じ。

ひせい 秕政 【名】 悪政なり、國語「軍無秕政」。

びせつ 鼻準 【名】 鼻頭をいふ。鼻ばしら。準ジユンの音の時は、標準などいひて、めあてなどの意なり。

びぜん 靡然 【副、形】 風になびくが如き樣にいふ。

びぜん ふさなり 備前房成 【名】 平四郎と稱す。源義經に從ひて、一の谷、屋島等に戰功ありき。後、義經と共に奥州に下向すといへり。

びそ 鼻祖 【名】 始めの祖をいふ。人の始めて胎を受くるに鼻、まづ、形をなすによりて、始めの義とす。楊雄の反離騒、「或鼻祖於汾陽」。

びそくをあふぐ 鼻息を仰ぐ 【文】 人の喜怒を伺ふこと。顔色を窺ふこと。後漢書「孤客窮軍、仰二我鼻息一。譬二嬰兒在股掌之上一。絶二其哺乳一、立可二餓殺一」。

ひたおもてに 直面 【副】 臆面なく、うちつけに、ひたすらに、はばかりなく、などの意。

びだ 鐚 【名】 粗悪なる錢の稱。又、鐵錢をもいふ。

びだいふるはず 尾大掉はず 【文】 左傳に「末大必折、尾大不掉」とあり、尾、頭より大なれば、體自由ならずとの意なり。また、初よりも終の衰へたるをいふ。

ひだう 非道 【名】 道理ならぬこと。無理。

ひたひき 引板 【名】 ひきたともいふ。鳴子に同じ。伊勢集「ひたはへて、もる網をのみ引く時は云々」。

ひたかぶと 直兜 【名】 一同、甲冑を帶したること。

ひだかまさね 日高眞實 【名】 日向の人。文學士にして、

獨逸に遊學し、歸朝の後、山口高等學校に教授となる。明治二十四年に日本教育論の著あり。今は故人となれり。

ひたすら 只管 【副】一向に、一途に。ただ一すぢなるをいふ。

ひたたれ 直垂 【名】衣服の名。古は庶人の服なりしが、御(ヨロヒヒタタレ)には禮服となれり。上衣は腰までにて、其の上に袴を着く。また鎧直垂といへり。鎧の下に着るものにて、其の製、直垂に異ならず。袖にも裾にも括緒(ククリヲ)ありて、手首足首にて括る。

ひたちおび 常陸帶 【名】いにしへ正月十四日に、常陸の鹿島神宮に、男女より布の帶を奉ることありて、之を常陸帶といひきとぞ。新古今集「東路の道のはてなる、常陸帶、かごとばかりも、逢はむとぞ思ふ」。

ひたつち 直土 【名】つちべた、地びた、など俗にいふに同じ。土間なり。

ひたなだりになだる 直頽に頽る 【句】ひたくづれに頽(マイチモンジ)る。眞一文字に頽れ落つ。同語を重ねて、其の事の甚しきにいへるなり。なだるはくづれ落つるをいふ。ひたは、名詞動詞などの上に添へて、また、其の甚しきをいふ語。

ひたひがみ 額髪 【名】額の上の髪。ぬかがみ。まへがみ。

ひたひには、やはたつとも、そびらには、やはたてじ 額には箭は立つとも背には矢は立てじ 【文】神徳天皇の詔のうちに「東人は常に曰く、額には云々といひて、君を一つ心にもちて護るものぞ云云」とあり。敵に後を見せず、前面に弓矢を受くとも、後背には受けずとの意にて、進むのみにて退くことをせずとの意なり。

ひたぶる 頓。一向 【副】ひたすらに同じ。

ひたみちに 直路 【副】ひとすぢに。いちづに。ひたすらに。狹衣物語「ゆきかへり、ただひたみちにまとひつつ、身は中ぞらに、なりれとやさば」。

ひだりみぎりなそなふ 左右を備ふ 【文】文武の兩道を備へたるにいふ。「文を左にし武を右にす」などいふ。

ひぢ 泥、土 【名】泥土をいふ古言なり。

ひぢゆうだい 非重代 【名】譜代にあらぬ意。すなはち家柄のよからぬなり。

ひちりき 篳篥 【名】樂器の名なり。笛に似て、たてに吹くもの。

ひぢをひく 肱を掣く 【句】せいちうを見よ。

ひつい 筆意 【名】ふでづかひ。書きたる文字のおもむき。「筆意をまなぶ」など。

ひつか 筆架 【名】筆をもたせかくるもの、即ち、ふでかけ。

ひつかう 筆耕 【名】賃錢をとりて、かき物をすること。

ひつぎ 日嗣 【名】天皇の大御位の尊稱。天位。日嗣の皇子(ミコ)。

ひつぎ 柩、棺、棺槨 【名】古くはひときといへり。死人を納るるはこ。

ひつきやう 畢竟 【副】つまるところ、終には、などの意。また、「畢竟するに」などともいへり。詮じつむれば、の意。

ひつし 必死 【名】死を必するにて、死せんと覺悟するなり。死力を盡すなり。漢書「且喜且惧、對曰必死」。

ひつじさる 未申、坤 【名】方角の名。四方を十二支にあてて十二分せし一方の名。西と南との間をいふ。

ひつしや 筆者 【名】筆を執りたる人、すなはち、かきて。又、書記役。

ひつせい 筆勢 【名】文字の勢。筆力といふも同じ。

ひつせい 畢生 【名】一生涯。いきのかぎり。

ひつせき 筆跡 【名】ふでのあと。文字。十訓抄「五郎中將の後もたのまんとよめる文の詞もをかしく、周防内侍が、われさへのちのちとかきつけつる筆跡もゆかし」。

ひつそく 逼塞 【名】刑の名。徳川氏の時、士族以上に施したる閉刑。門扉を鎖し、白晝は出入することをゆるさず。罪の輕重により、日數に、多少あり。閉門より輕し。

ひつてき 匹敵 【名】相手となること。

ひつとう 筆頭 【名】ふでのさき。又、ふでがしら。

ひつとう 筆筒 【名】ふでたて。

ひつはく 逼迫 【名】せまること。さしつまること。又、極めて乏しくなること。

ひつぷ 匹夫 【名】庶民に同じ。左傳正義「庶人夫妻相匹、其名既定。雖單亦曰匹。故通謂匹夫匹婦」とあり。平人。ただのひと。其の女なるを、匹婦といふ。

ひつぷのいう 匹夫の勇 【名】血氣の勇にて、小勇をいふ。孟子に「撫劍疾視曰、彼惡敢當我哉。此匹夫之勇、敵一人者也」とあり。眞勇に對して、卑しむべき勇氣をいふ。

ひつりよくこうてい 筆力扛鼎 【句】文章の遒健なるを評する語。文勢力ありて、鼎をもあぐるほどなりとの意。韓愈の詩「龍文百斛鼎、筆力可扛鼎」。

ひてん 批點 【名】文章などの文句の、わろきを改めて、點をつくること。

ひでんなん 悲田院 【名】古へ、施藥院に屬し、その官人は、藥袋をたづさへて、京中を巡り、貧民旅人などの病に苦むものあれば、藥を與へ、この悲田院に集へて養へり。

ひとあじか 一籬 【名】籬は、藺または竹などにて、笆の如く造り、土をはこぶもの。今いふ、モッコなり。

ひとう じしう 尾藤二洲 【名】名は孝肇、字は志尹、通稱は良佐といふ。徳川幕府に仕へて、昌平黌の儒官となり、古

賀彌助、柴野彦輔と相並びて寛政の三助、また、三博士と稱せられき。文化十年十二月歿す。年六十九。

ひとがき 人垣 【名】人を、垣の如く、立ちならばしめたること。太神宮儀式帳に「人垣立豆（ヒトガキタテマメ）、衣垣曳豆（キヌガキヒキマメ）」などあり。

ひとがた 人形 【名】形代（カタシロ）とて、御禊の時、それにて、人の體をさすりて、それに、罪けがれをおほせて、流すもの。又、にんぎやう。

ひとかたに 一方 【副】一方（イッパウ）にの意。又、ひたすらに、ひとすぢに、などの意。

ひとかたならず 不一方 【副】さまざまに。一通りならず。かすかすに。

ひとこゑは、つきがないたか、ほとゝぎす 一聲は月が啼いたか時鳥 【文】纖俳家疇人傳の瓢水の傳「扨はあの月が啼いたか時鳥」の詠は、彼の左大臣殿の古歌、「時鳥、なきつる方を、眺むれば、唯有明の、月ぞ殘れる」より取り得て妙なり。或は、初句を一聲と直して、蕉翁とし、其角となすは、知らぬもののいつはりなり云云」。時鳥が啼き過ぎて、形なく、月のみ殘れる景色をいふ。

ひとしきり 一頻 【副】一時はげしく、一たび頻りて、ひとさかり、などの意。万代「ふかき夜に。まづ一しきり、聲たてて、ゆふつげ鳥は、また嘶してけり」。

ひとしほ 一入 【文】ひときは。

ひと、せいじんにあらず、たれか、あやまちなからむ 人非二聖人一誰無レ過、過能改、善莫レ大レ焉 【文】左傳に出でたり。

ひとにして、とりにしかざるべけんや 人にして鳥に如かざる可けんや 【文】大學に「詩云、緡蠻黃鳥、止于丘隅。子曰、於レ止知二其所一止。可レ以人而不レ如レ鳥乎」とあり。

ひとのがり 人の許 【副】人のもとに。徒然草「人のがりいふべきことありて」。

ひとのこゝろの、おなじからぬは、そのおもてのごとし 人心之不レ同如二其面一 【文】「子産曰、人心之不同如二其面一焉。吾豈敢謂二子面如一吾面一乎」。人心は各異なるものとの意なり。

ひとのほどにあはねば 人の程に合はねば 【句】土佐日記「此のことば、何とにはあられど、物いふやうにぞ聞えたる。人の程にあはねば、とがむるなり」とあり。即ち、舟人などの分限には似合ぬ詞なればの意。

ひとのめんよりおこる 人の面より起る 【句】李白の詩に「山從二人面一起、雲傍二馬頭一生」の句あり。山岳重疊のさまをいふ。

ひとばし 人橋 【名】人を橋となす意にて、使者の引き連きて繁きをいひ、又、人を依頼して、中間に媒介せしむるをいふ。人橋かけて、かけては橋の緣語なり。

ひとは、ばんもつのれいなり 人は萬物の靈なり 【文】尚書に「惟天地萬物父母、惟人萬物之靈」とあり。

ひとは、てんちのれいなり 人は天地の靈なり 【文】ひとはばんもつのれいなりを見よ。

ひと、ぼくせきにあらず 人木石に非ず 【文】文選の鮑昭が詩に「人非二木石一豈無レ感」とあり。人情あり涙ありて、感動するものとの意。

ひとみ いうげん 人見友元 【名】名は節、字は宣卿、友元は通稱、竹洞、また鶏山と號す。林道春の門人にて、幕府に仕ふ。元祿九年歿す。

ひとみなえあらで 人皆得有らで 【句】土佐日記「その歌よめる文字三十文字（ミソモジ）あまり七文字、人皆えあらでわらふ（コヲ）とあるは、多くの人が堪へ得ずして笑へるなり。

ひとや 人屋、獄、囚獄 【名】牢獄、獄屋などいふに同じ。罪人を押しこめおく家なり。

ひとやどり 人宿 【名】人の住みをるところ。人のやどするところ。

ひとやりならず 人遣りならず 【句】人のせさするにあらず、我が心より、さいふ意なり。千載集に「世に知らぬ、秋のわかれに、うちそへて、ひとやりならず、ものぞかなしき」とあり。

ひとゆるして 人許して 【副】人のゆるすに。

ひとよし 人吉 【名】熊本縣肥後國球磨郡人吉町。建久九年、相良長賴、此に封ぜられて以來、相良氏世々の領邑たり。代々より球磨川の水路十六里、三日の行程あり。然して人吉より八代までの下り船は、七八時間にて達す。

ひとり 火取 薰爐 【名】唐金にて造り、上に金の網をかけ、手提の鉉の附きたるもの。中に火を入る。香爐の類なり。

ひとわき 人別 【名】人によりて、愛憎の差別するをいふ。依怙に同じ。夫木集に「ゐる雲の、人わきもせぬ、ものならば、水と涙は、流れざらまし」。

ひとわろく 人惡く 【副】形容詞の副詞法なり。人聞わろく。外聞わろく。人の見えわろく。

ひな 鄙 【名】田舍なり。都はなれたる地をいふ。

ひながくして、ものうねんのごとし 日長くして少年の如し 【文】明の唐子西の詩に「山靜似二太古一、日長如二少年一」の句あり。

ひなび 鄙 【動ハ上二】鄙の振りをなす。田舍めく。

たる武士」など。

ひにく 脾肉 【名】股の肉。

ひにくのたん 脾肉の嘆 【句】武人たるものが、戦争に臨まず、爲に馬にものらざれば、股の肉生じ勃然として事あれかしと望み居るをいふ。

ひにけに 日に異に 【副】毎日、朝夕、日増に、などの意。

ひにもみづにもといさむ 火にも水にもと勇む 【句】火にも水にも入りて、身をいたして君に盡さむと勇むなり。萬葉集に、阿部郎女「吾がせこは、物な思ひそ、事しあらば、火にも水にも、吾れ無けなくに」。

ひねの ひろなり 日根野弘就 【名】備中守といふ。美濃の人。初め濃葉山城の齋藤家に仕へしが、後に織田信長に歸せり。天正元年、舊主龍興の戰死を悲みて剃髪し、治部卿法印と稱し、慶長七年卒せり。

ひねもす 終日、盡日 【副】ひめもすともいふ。日一日。夜もすがらに對す。「晝ひねもす、夜はよもすがら」など。

ひのいるくに 日の入る國 【句】西國の意なり。日の丸の紋章は、薩摩の島津齊彬の考案になり、嘉永七年、始めて船艦に掲出すべき布告ありしものとぞ。

ひのおまし 晝御座 【名】ひるのおましともいふ。清涼殿にありて、主上、晝のほど、おはしますところ。

ひのくるま 火車 【名】火の燃えたる車。地獄にて罪惡の人を載せて、苛責するためのものといへり。また俗に、極貧に苦むをも「火の車」などいふ。

ひのさうぞく 晝裝束 【名】又、晝裝束（ヒノショソク）。束帶すること。

ひのたて 日の經 【名】東より西に通りたる筋。東西の通路。これに反して、南北に通りたるを日の緯（ヨコ）といふ。萬葉集「大和の、青香具山は、日の經の、大御門に、春山と、しみさびたてり、畝火の、此の瑞山は、日の緯の、大御門に、みづやまと、山さびいます」。

ひのため 氷様 【名】いにしへ元日に、宮内省より、氷室の氷の厚薄を奏することあり。氷様奏といふ。石瓦にて其の雛形をつくるといふ。厚薄を以て豊凶を占ふなりとぞ。

ひのひかり、やぶしわかねば 日の光鈹し分かねば 【句】古今集「日の光、やぶしわかねば、石の上（イソノカミ）、ふりにし里に、花も咲きけり」。日光は、金殿玉樓も鈹の中も漏さぬことの意なり。

ひのまるのはた 日丸旗 【名】我が國の旗なり。日の丸の紋章は、薩摩の島津齊彬の考案になり、嘉永七年、始めて船艦に掲出すべき布告ありしものとぞ。

ひのよこ 日の緯 【名】日の經を見よ。

びは 琵琶 【名】もと、胡より出でし樂器。馬上にて鼓するもの。手を推すを批、手を引くを把といふ。木製にて、體を甲

といふ。楕圓形にして、長さ二尺餘あり。四弦四柱、抱きて撥にて彈する故、「ヨツノヲ」の名あり。わが國には、古くより傳はれる樂器なり。

ひはぎ 引剝 【名】又、ひきはぎ。おひはぎ。人通（ヒトドホリ）まれなる路に潜み居て、通行人の衣服財貨を剝ぎ取る盜人をいふ。

ひはく 飛白、帛飛 【名】漢字の古き一種の書體の名。

ひはく 韮簿 【名】いやしく輕々しきをいふ。また、輕少の意にも用ふ。

ひばのちりをのぞみて、ざんばいのつめたきにしたがふ 望肥馬之塵隨殘盃之冷 【文】杜子美集第一に「朝扣富兒門、暮隨肥馬塵、殘盃與冷炙、到處悲酸甚」とあるより出づ。富貴の人に諂び求むるをいふなり。

びはふし 琵琶法師 【名】琵琶に合せて、平家物語を語る賢者をいふ。

ひはん 批判 【名】非を批ちて判決すること。

ひばん 非番 【名】番に當たらぬこと。勤務のやすみ。

ひばり 雲雀、告天子、天鷚 【名】鳥の名。雀に似て、やや大きく、春日、大空高く飛翔して鳴く。故に「あがる雲雀」などいへり。芭蕉の句「永き日も轉りたらぬ雲雀かな」。

ひひ 披披 【副、形】倦まざる貌。それよりして、連續の意にもいふ。

ひひ 狒狒 【名】獸の名。猴（サル）の年を經たるものにて、猴よりも極めて大きく、また極めて猛く、深山に棲みて、ともすれば、人をも食ふといふ。

ひびき 響 【名】ひびくこと。また、韻をいひ、評判をもいふ。また、影響するにもいふ。

ひひご 曾孫 【名】今はひこといふ。孫の子なり。

ひびやもん 毘々谷門 【名】江戸城の一門なり。馬場先門より、堀をまはりて、櫻田に出づる所にあり。

ひひやう 批評 【名】惡しき點をあげて、論評すること。

ひひらぎ 柊、杜谷樹 【名】山中の樹。葉は厚く、周圍に刺あり。冬枯れず。秋冬の間に白花を開く。實は圓く熟して黒し。材は堅くして、算盤玉などに用ふ。

ひひらぐ 顫、疼 【動カ四】響く、痛む、などの意にいへり。もと、響き動く意。

ひふ 蚍蜉 【名】虫の名。大蟻なり。韓愈の詩に「蚍蜉撼大樹（ウゴカス）、可笑自不量」とあり。

ひふ 被風 【名】衣服の名。羽織に似て、丈（タケ）の短（マルエリ）かなるもの。老人または女の見なり、おもに着る。

ひふ 皮膚 【名】はだ。はだへ。

ひぶ 日歩 【名】金の利息を、日にて定むるもの。月何分、年何割などいふに對して、一日分の利子を、日歩何錢などいふなり。

ひぶ 日賦 【名】日濟（ヒナシ）といふに同じ。借りたる金を日々に何程づつか返却するをいふ。

ひぶせ 火防 【名】火災を防ぐ神佛の通力。火除。

びほう 彌縫 【名】補ひ合すること。つくろひぬふこと。左傳に「先編後伍、伍承彌縫」とあり。また、一時を間に合する意。「一時を彌縫す」「彌縫策を講ず」など。

ひほん 秘本 【名】秘藏の書籍。

ひぼん 非凡 【名】平凡ならぬ意。普通より超えたるをいふ

ひみづ 氷水 【名】氷をいれたる水。和名抄「氷漿、今按、以氷入漿也」。

ひん 嬪 【名】古の女官。支那にては、天子の妾をいふ。

ひん 殯 【名】死骸をいまだ葬らず、假に棺に藏め置くこと。說文に「死在棺、將遷葬地、賓遇之」とあり。

びんがてう 頻伽鳥 【名】伽陵頻伽といふ。逸音鳥、妙聲鳥など譯す。極樂に住める鳥にて、常に喈々たる美音を發して鳴くといふ。

ひんけい、あしたをつかさどる 牝鷄晨を司る 【文】婦人の事を司るをいふ。「書經」「古人有言、牝雞無晨。牝雞之晨、惟家之索」とあり。牝雞の晨を告ぐるは、陰陽相反する故、わざはひとせり。

ひんしゆく 顰蹙 【名】憂愁樂まざる貌。顏をしかむること。

ひんせき 擯斥 【名】しりぞくること。排斥に同じ。宋史に「屢見擯斥」。

びんせふ 敏捷 【名】所業のすばやきこと。すばしきこと。

びんせん 便船 【名】ついでの船。たよりの船。をりよく出帆する船。

びんぜんに 憫然に 【副】かはいさうに。あはれに。いとほしく。

ひんだう 貧道 【代】拙僧に同じ。僧の自稱代名詞卑稱。

びんちゆう 閩中 【名】今の福建省の地を、いにしへは閩中といへり。說文に「東南越種分爲七。故云七閩」とあり。

びんづら 鬢頰 【名】角高（ミヅラ）の轉訛せる語。頭髮を左右に分けて結びたるをいふ。總角といふも同じ。

びんづる 賓頭盧 【名】羅漢の名。白頭長眉の座像を作りて、寺に安置す。俗人これを摩でて病願を念ずといふ。

びんねえす Pinnace 【名】帆檣船、八梅船など譯す。端艇の一種。

ひんぴん 彬々 【副、形】誠しく調ひたる狀の形容にいふ。

論語「文質彬々而後君子」。

びんべん 黽勉 【名】非常の勉強をいふ。

びんらうじゆ 檳榔樹 【名】熱帶産の植物。其の實は藥用とす。

ひんりよ 賓旅 【名】賓客に同じ。おきやく。

ひんる 品彙 【名】品類。彙は類也と字典に見ゆ。

ひめ 姫 【名】史記の注に、衆妾之總稱也とあり。天子諸侯の妾には色々名あれど、姫を以て總稱とす。わが國にては、貴人の娘をいふ。むかしの物語文などには、公卿などの第一の娘を姫君、または、大君といひ、第二の娘を中の君といひ、それより、三の君、四の君など數へたり。

ひめおく 秘置 【動カ四】しまひおく。かくしおく。秘むは、ろ、千々の言葉を」。

ひもがたな 紐刀 【名】七首。紐のつきたる小さき刀。女などの、懷中に帶びし小刀なり。

びもくそのごとし 眉目畫の如し 【文】容姿の美しきにいふ。後漢書「爲人明二鬚髮一眉目如レ畫」。

ひもとく 紐解 【動カ四、下二】結ばれたる糸の、解くる意にて、花などの開き綻ぶるをいふ。古今集「百艸の、花の紐解く、秋の野に、おもひたはれむ、人なとがめそ」。

ひもろぎ 神籬 【名】榊などを立てて、假に、神の御座として、神を奉祭する所をいふ。

びやうあ 病痾 【名】病氣に同じ。

びやうきん 描金 【名】蒔絵のこと。

びやうしよく 廟食 【名】おたまやにて祀らるること。

ひやうそく 秉燭、柄燭 【名】油皿の一種なり。蜜やがろ皿の中央に、臍（ホゾ）の如きものありて、それに燈心をさして、火をともす。

ひやうぢやう 兵仗 【名】太刀、弓箭の類、すべて隨身などの持つ、儀衞の武器をいふ。

ひやうぢやう 評定 【名】評議して決定すること。

ひやうぢやうしゆう 評定衆 【名】鎌倉幕府の頃、政所に列りて、政事に參與せし役の名。

ひめみや 姫宮 【名】ひめみこ。皇女。

ひもかがみ 紐鏡 【名】書名。一卷あり。本居宣長の著。詞の係結を三轉に分ちて圖解したるもの。冒頭に左の歌をそへたり。「てらし見よ、本末むすぶ、ひもかがみ、三くさにうつ

ひやうぶやうしよ 評定所【名】徳川幕府の制に、寺社、町、勘定の三奉行集會して、政刑訟獄を議決せし所とす。留役、組頭、吹方、書物方などの役々あり。江戸城の和田倉門外にありき。

びやうどういん 平等院【名】山城國久世郡宇治町宇治小字蓮華にあり。宇治川の西南岸を去ること半町。初めは河原左大臣源融の別業なりしが、長徳年中、藤原道長の有となり、其の子賴通、これを寺となして平等院といへり。鳳凰堂は、其の時の造立にして、輪奐の美を以て聞ゆ。堂後に扇の芝あり。源賴政自盡の地といふ。

びやうぶいは 屏風岩【名】富士川の奇勝にして、甲斐國西八代郡共和村字宮木にあり。大窪詩佛の詩あり「屏風岩似二屏風一疊臨レ水千尋聳二半空一。元是雙流爭激處、驚波捲レ雪灑二舟中一」。

ひやくき 百揆【名】百官の義。また、庶政を揆る官。書經「納二于百揆一」。また、政事の意にも用ふ。「百揆の施設」などと。

びやくころう 白虎樓【名】はつしやうるゐのしろうを見よ。

びやくさん 白散【名】藥名。延喜典藥式に「白散、蔵豆以二溫酒一服五分。一家有レ藥、則一里無レ病。帶二此散一病氣皆消」とあり。屠蘇と共に、年始の祝儀に用ひしものなり。

びやくしん 柏心、栢槙【名】樹の名。幹は松の如く、葉は松の如く、杉の如く、檜の如きものありて一樣ならず。また別に、矮小、伊吹柏心など、種々あり。

ひやくしやくかんさう、いつぽをすすむ 百尺竿頭一歩をすすむ【文】書言故事に曰く、「百尺竿頭進レ歩、言增二添工夫一向レ上進二一歩一」とあり。百尺の至りしは、已に達し盡したるなり。それを、なほ工夫して進むること。

ひやくにんいつしゆかいくわんせう 百人一首改觀抄【名】書名。五卷あり。百人一首の解なり。契沖の著。其の没後、樋口宗氏、堀景山、校訂して、延享五年刊行せり。

ひやくはいふざ 百敗不挫【句】意志強固にして、幾度失敗せるも挫けざるをいふ。

ひやくぶんいつけんにしかず 百聞一見に如かず【文】物は百度も聞くより一度見るが增しなる意。淡書の趙光國が傳に出でたり。

ひやくまんたふ 百萬塔【名】奈良朝のころ、朝廷にて全國の佛寺に納め給ひし無量の小塔なり。各其の中に、活字にて印刷したる經文を入れたり。

ひやくまんべん 百萬遍【名】山城北白河の知恩寺にて修する佛事にて、多くの僧の、大なる數珠をくりて、念佛百萬遍するなり。俗間にても、男女うち集り、大數珠をくりて、

念佛を唱ふるをいふこともあり。

ひやくりけい 百里奚【名】支那の人名。秦の穆公に擧用せられて大夫となりし賢者なり。

ひやくれう 百僚【名】百官に同じ。書經「百僚師事」。多くの役人なり。

ひやくれんせう 百錬鈔【名】書名。建長より正元に至る間の事を記せり。著者詳ならず。

ひやくゑ 百會【名】頭の旋毛（アタマツムジ）のあるところをいふ。頂の中央なり。

ひやの 洋琴 Piano【名】西洋の樂器の名。大なる匣（ハコ）の中に、長短の鐵線を、多く張りわたし、別に機（シカケ）ありて、指にて押せば、さまざまの音を發するもの。

びやぼん 口琴【名】竹をうすく削りて、鐵線にて端を卷き、口に噛みて、呼吸の加減を以て、吹きならすもの。蝦夷人よりはじまれるものとぞ。

ひゆ 比喩【名】たとへ。或る事を以て、或る事にたとふるをいふ。「花は雪の如し」などの類。

ひようしん 氷人【名】媒妁人をいふ。事類全書に、晉索紞、字叔徹、世爲二通儒一。明二術數一。令狐策夢下立二氷上一與二氷下人一語上。紞曰、氷上爲レ陽、氷下爲レ陰、陰陽事也。士如歸レ妻迨二冰未一レ泮、婚姻事也。君在二氷上一與二氷下人一語、媒介事也。策曰老夫耄矣。不レ爲レ媒也。會太守田豹因レ策爲レ于、求二鄉人張公徹女一。仲春而成レ婚」とあるよりいふ。

ひようしやく 氷釋【名】氷の釋くるが如く、判然と物の明になれるをいふ。「疑問氷釋」。

ひようたんあひいれず 氷炭相容れず【文】二者の衝突矛盾にいふ。炭火と水とは、同器に容るべからざるに譬ふ。韓非子「强弱不レ敵（キウハ）力、氷炭不レ合レ形」などあるよりいふなり。

ひようてふ 憑弔【名】そのところに立ちよりて吊ふをいふ。

ひようと【副】萬一。斯くあらんかと推測する時に用ふる俗語。

ひよどりごえ 鵯越、鵯越【名】一谷の戰に、義經の逆落を以て名あり。其の跡といひ傳ふる處、いま、二箇所あり。

ひらい 比來【名】近來に同じ。

ひらいづみ 平泉【名】陸中國西磐井郡平泉村大字平泉に秀衡の平泉館あり。大字高館に、義經の衣川館あり。大字中尊寺には中尊寺あり。

びらうげのくるま 檳榔毛の車【名】眞丈雜記に「檳榔毛車とは、車の屋根の上を、檳榔といふ木の葉にて葺ひ飾りたる車なり。檳榔の葉は、おほきくして櫚棕の如し。檳榔の葉

なぎ時は、昔の葉を代りに用ゐるなり」とあり。

ひらがげんない 平賀源内【名】名は國倫、字は士彝、風來山人、鳩溪、天竺老人、紙鳶堂、松籟子、森羅萬象、福内鬼外などの號あり。讃岐の人。大坂より江戸に移り住めり。博學奇才にして、また戯文戯曲に妙を得たり。著者數十種。多くは諷刺的の書にして、爲に幕府の忌諱に觸れしこと屢なりき。また物産の學に長ぜり。安永八年(徳川十代家治)狂して人を殺し、十二月獄に死す。

ひらがな 平假名【名】既に片假名の發明ありといへども、是れは寫經文字にして、楷體なれば、これに對して、いつとなく優美なる略藷の草體を書き出だすに至れり。これを平假名とす。而して、今の四十七文字の今様は、弘法大師の作なりと傳へたり。

ひらがよしのぶ 平賀義信【名】大内四郎とも稱す。源義光の孫、父を盛義といひ、平賀冠者と稱せり。義朝、東に走れる時、義信よく敵を防ぎ、また長田忠政に依るを危しとす義朝聽かずして遂に忠致に殺さる。頼朝、天下を得るに及び義信を從五位上武藏守となす。任にありて大に政聲あり。

ひらく 呟【動力四】口を開くことなり。また衣服の縫の合せ目の開きたるにもいふ。

ひらくび 平頸【名】馬の頸。立髪の左右の平なる所をいふ。

ひらじろ 平城【名】山にある城に對して、平地にある城。

ひらたけ 平茸【名】菌の一種。松茸に似て、傘うすく遍く、色淡黑なるもの。

ひらでるひや 比府、費府【名】比は漢譯の頭字、府は府縣の府。北米合衆國有名の都會。

ひらのくにおみ 平野國臣【名】福岡の藩士。次郎と稱す。藩の銃隊教師たり。性讀書を好み、國學故實に通ぜり。憂國の士にして、大に尊王攘夷の説を主張したり。後京師の獄に繋がれ、元治元年七月廿二日途に斬らる。年四十三。或は三十九ともいふ。

ひらののやしろ 平野社【名】社名にして、山城國葛野郡にあり。官幣大社。祭神は今木神、久度神、古開神、比咩神の四座なり。

ひらもん 平文【名】漆塗の名。平一面に、金銀泥などを以て模様を散らしたるもの。美術圖譜に、正倉院御物の金銀平文の琴の圖を出だせり。

ぴらん 糜爛【名】ただるること。ただらかすこと。孟子「糜二爛其民一」。

ひりん 鄙吝【名】鄙は賤むべきこと、吝は貪ること。後漢書「鄙吝之萌、後存乎心」。

ひるげ 晝食、晝餉、午飯【名】中食といふに同じ。正午の食なり。

ひるこ 蛭子【名】神の名。伊弉諾尊の御子なり。然るに俗に、恵比須、又は、夷三郎と稱する神をもいへるは、何時の頃よりか誤り傳へたるなり。其の像は、釣竿を持ち鯛を脇にかかへたる様をかけり。

ひれきす 披瀝【動サ變】其の心中を披き出だして、腹藏なきをいふ。上官儀盧岐州、請二致仕一表に「披二瀝丹愚一誠非二矯飾一」とあり。

ひろを 廣尾【名】北海道十勝國廣尾郡にあり。

ひろうら 廣浦【名】常陸の霞浦の別稱。

ひろおど 天鵞絨【名】織物の名。西班牙語なりといへり。

びろく 美祿【名】酒をいふ。漢書の食貨志に「酒者天之美祿。帝王所下以頤二養天下一、享二祀福一、扶レ衰養レ疾、百禮之會非レ酒不レ行」。

ひろさは 廣澤【名】山城葛野郡の地名。今の嵯峨村の東なりといふ。觀月の勝地。

ひろめひめのみかど 廣野姫の御門【名】持統天皇を申す。

ひろまへ 廣前【名】大前に同じ。宮殿の御前なり。

ひをさぐる 秘を探ぐる【句】未だ知られざる奥ぶかきところを探ぐる。

ひをむ

ふ

ふ 賦【名】文章の一體。古詩の潰體に韻を踐みたるもの。「赤壁賦」、「惜二蒼蠅一賦」など。

ふ 譜【名】系譜ともいひ、系圖のこと。又、音樂の曲節の次第を符號にて記したるもの。又、同じたぐひの物事を、次第を立てて書きたるもの。「百蟲の譜」など。

ふ 缶【名】一瓦器。酒漿を盛るもの。素人は之を擊ちて樂に和せりといふ。ほとぎ。

ふ 傅【名】かしづき。もりやく。

ふ 符【名】しるしのふだ。神佛の守札。

ぶ 無【接頭】他語に被らせて、打消す語。「無沙汰」、「無遠慮」など。

ぶあひ 歩合【名】幾歩(ブ)と分つ割合。

ふい 布衣【名】白丁、すなはち、無位無官のものをいふ稱。史記などにも布衣之士の語見えたり。わが國にては、狩衣の無紋を布衣といふより、官位なきものを、直に、布衣といふ。

ふいう 蜉蝣【名】小蟲にて、朝に生れて夕に死すといふ。爾雅の注「似二蛾而一身狹而長、有レ角黑色、聚生二糞土中一、朝生暮死云々」とあり。かげらふ、いさごむし、渠略(クリムシ)、などいふ。

ふいうのみ 蜉蝣の身【句】かげらふの如く、朝夕も知れぬ身。人の身の果敢なきをたとへいふ。白樂天の詩に「長生無二得者一、擧レ世如二蜉蝣一」。

ふいく 覆育【名】天の萬物をおほひ育つるをいふ。禮記に「覆二育萬物一」とあり。覆は、反覆、顚覆などの場合には、フクの音なり。

ぶいさん 武夷山【名】支那の山の名。今の崇安の地にあり。

ふいのまじはり 布衣の交【句】貧賤の交りをいふ。史記蘭相如傳「布衣之交、尙不二相欺一、況大國乎」。

ぶいん 無音【名】音信をせぬこと。無沙汰に同じ。

ふう 風【名】ならはし。風俗。又、なりふり。かたち。すがた。おもむき。

ふうんのへん 風雲の變【句】乘ずべき事の起りたる機會をいふ。

ふうが 風雅【名】みやびなること。風流なること。

ふうがい 風概【名】風格節概なり。また、風光勝概の義にもいふ。

ふうかん 諷諫【名】遠まはしに物に譬へて異見するをいふ。直諫の反對なり。宣和書譜「白樂天最工レ詩、長二于諷

諫一」。

ふうかん 風鑑【名】人の容貌風采などを視て、其賢愚邪正を測り知る術。

ふうがん 風眼【名】眼病の名。風熱眼なり。眼に紅線をあらはし、熱して痛む病。

ふうき 富貴【名】財多く位高きこと。

ふうきのいへをみるに、ろくろくちようでうするは、さいじつのきの、そのね、かならずいたむがごとし 觀二富貴之家一、祿位重疊猶二再寶之木其根必傷一【文】富貴にほこりて、奢侈暴慢なれば、其の害必ず子孫に及ぶをいふ。此語は、後漢書卷十に見えたり。

ふうきん 風琴【名】西洋の樂器。オルガン。

ふうくわ 風化【名】敎育政治などにて、人々の風習の、善きに化すること。又直に、その敎育政治などをもいふ。「風化行はる」などに。風敎參照。

ふうくわせつきくわい 風化石灰【名】石灰石を燒きたるまなるは、なほ塊をなせり、之を苽灰(アラバヒ)といふ。日數三十日もふれば、おのづから解けて粉となる。之を風化石灰といふ。苽灰を溫めて水を注げば、即時に粉となる、之を水化石灰といふ。

ふうけい 風景【名】景色(ケシキ)。風光。

ふうけう 風敎【名】風は諷なり。諷誡敎化するをいふ。詩經の序「風風也敎也。風以動レ之、敎以化レ之」。

ふうげつ 風月【名】風に嘯き月を眺めて樂むこと。「風月を樂む」などに。

ふうこつ 風骨【名】すがた。人の容子。

ふうさい 風采【名】人柄、樣子、などの義。左思の魏都賦「極二風采三異觀一」。

ふうし 夫子【名】支那にて、大夫(タイフ)以上の稱に用ふ。又、長者、賢者、先生、等を呼ぶ尊稱。

ふうし 諷刺【名】ほのめかし、そしること。遠まはしにそしること。

ふうし 風姿【名】すがた。風采。「風姿嫻娜たり」などに。

ふうしふ 風習【名】風俗習慣なり。

ふうじらふ 封蠟【名】書狀の封に目に鎔し付くるに用ふるものにて、蠟を紙ばり強く製煉したるもの。

ふうせいくわくれい 風聲鶴唳【句】唳は鶴の鳴聲なり。秦の苻堅の故事により、たやすく物に驚き慌るる義にいふ。晉書謝玄傳に「苻堅衆號二百萬一、列レ陣臨二肥水一。幼度以二精銳八千一涉レ水。堅衆奔潰、棄レ甲曾逃、聞二風聲鶴唳一、皆以爲二王師一」とあり。幼度は謝玄の字なり。

ふうぞく 風俗【名】ならはし。正韻に「上所レ化曰レ風、下

所ㇾ習曰ㇾ俗」とあり。朱子の大學序に「教化陵夷、風俗頽廢云々」とあり。

ふうたい 風袋【名】秤にて物を量る時に、其の物の正味ならざる上包、箱などの稱。

ふうち 風致【名】おもむき。風光の雅致あること。

ふうちん 風鎮【名】玉石などを、紐に貫きて、掛物の軸の兩端に懸けておもりとして、風などに、動かぬやうするもの。

ふうぢん 風塵【名】塵りほこり。又、世上の雜事、又、濁世の意にいふ。度巽の書に「兄弟自不ㇾ能ㇾ抜二於風塵之外一」。世説に「自然是風塵外物」とあり。

ふうてう 風潮【名】風に隨ふ潮。又、轉じて、世事の成行、時勢、などの意に用ふ。

ふうてん 瘋癲【名】きちがひ。狂氣。

ふうと 呎【名】英語の Foot。複數の時はひいと Feet といふ。一いんちの十二倍にして、我が一尺〇〇五厘八二に當る。

ふうど 風土【名】其地の氣候地味等。

ふうばい 風靡【名】風の烈しくて土を飛ばすをいふ。轉じて、ひろくなびきなり。

ふうぼう 風丰【名】美しき容貌なり。風姿の美しきなり。

ふうはく 風伯【名】風の神なり。韓非子「風伯進掃、雨師灑ㇾ道」。

ふうはんせん 風帆船【名】ほまへせんともいふ。

ふうひやう 風評【名】世の評判。うはさ。

ふうび 風靡【名】風の草を吹き靡かすが如く、他の者を威壓するなり。「天下を風靡す」など。

ふうみ 風味【名】あぢ。あぢはひ。

ふうん 不運【名】ふしあはせなること。不幸なる運命。

ぶうん 武運【名】戰の勝負の運。又、武夫の運命。

ふうんのおもひ 浮雲の思【句】安堵せられぬ思。不安心の念。

ふうんのこころざし 浮雲の志【句】徒に富貴權勢を望むをいふ。論語に「不義而富且貴、於ㇾ我如二浮雲一」とあり。

ふうゆ 諷諭【名】正面より直接に論さずして、他の事を借りて、遠まはしに論すをいふ。

ふうよう 風擁【名】擁は從ふなり。群り從ふなり。風の如くに四方より群り從ふをいふ。

ふうりうかんが 風流閑雅【句】みやびにして、おちつきて、上品なること。みやび。風雅。

ふうりうぶんし 風流韵士【名】俗氣をはなれて、詩文を友とする人。

ふえ 吭【名】喉の氣管のある所をいふ。のどぶえともいふ。

ふえい 浮影【名】水に映したる影をいふなり。

ふえどうのゆみ 笛籐の弓【名】笛の如く、弓を黒く塗りて、籐をば赤く塗りたるをいふとぞ。

ふえまちおとし 笛待落【名】秋冬の頃は、獸は深山にひそむものなれば、笛にて呼び出だし、弊(ヤトシ)にかけて捕ふ。この獵法をいふ。

ふえん 敷衍【名】延べ廣ぐること。「文意を敷衍す」など。

ふえる 殖【動ヤ下一】ヤ行下二段活なる殖ゆの口語なり。

ふか 鱶【名】鮫の類。胎生なり。體の長さ二三丈のものありて、船を覆して人を呑む。

ふかく 不覺【名】不覺悟なり。覺悟のたしかならぬをいふ。又油斷などの意にもいふ。また、勝負にまくるを、不覺をとるといひ、男らしくもなく、涙を零すを、不覺の涙などもいふ。

ふかくさ 深草【名】山城國紀伊郡にある名勝の地なり。千載集後成「夕されば、野邊の秋風、身にしみて、鶉鳴くなり、深草の里」。

ふかくさげんせい 深草元政【名】げんせいを見よ。

ふかしぎ 不可思議【名】思ひはかるべからざることをいふ。また單に、不思議ともいふ。佛經より出でたる語なり。法苑珠林「佛變化無量三昧、力不ㇾ可二思議一」。

ぶがくしふする 武學拾粹【名】書名なり。八卷あり。士操、陳營のことより、武器の圖式をも論じたり。星野嘉山の著。

ふかで 深手【名】創にて受けたる重き疵。重傷。

ふかん 不堪【名】無骨。藝に堪能ならぬこと。

ふがふ 符合【名】割符の、相合へること。符契參照。

ふかみぐさ 深見草【名】牡丹の異名

ふかみどり 深緑【名】綠の濃きいろ。順集「ふかみどり、松にもあらぬ、あさあけの、衣さへにぞ、沈みそめけん」。

ふき 不羈【名】物にかかはらぬこと。禮儀などにかかはらぬにいふ。「倜儻不羈」など。

ふき 不軌【名】法によらざる者をいふ。不法、無法などの意。また、身に過ぎたる事を望むにいふ。「不軌を謀る」など。

ふきあげのはま 吹上の濱【名】紀州和歌の浦の名所なり。風の砂を吹き上げて、山をなすより名づくといふ。

ふきあらし 吹嵐、吹荒【名】馬の鼻づらの中ほどのところをいふ。

ふきう 不朽【名】朽ちざること。身死しても名の殘ること。左傳「太上有ㇾ立ㇾ德。其次有ㇾ立ㇾ功。其次有ㇾ立ㇾ言。雖

久不レ廢。此之謂二不朽一」。

ふきがへし 吹返 【名】兜のまびさしの左右に、そりかへりたる耳の如きものをいふ。紋、あるひは、文様を染め出だしたる革にて包めり。

ふきのひと 不起の人 【句】病氣に罹り平癒せずして、途に死亡する人をいふ。

ふきふ 普及 【名】あまねくおよぶこと。ゆきわたること。「教育の普及をはかる」など。

ふぎやう 奉行 【名】命令を奉じて行ふ意。武家にて種々なる職の長をいひき。勘定奉行、寺社奉行、町奉行など種々あり。町奉行は、江戸府内の訴訟を初め、總ての民政を理せり。

ふぎやうていくわい 俯仰低徊 【句】天を仰ぎ地に俯してさまよふこと。感慨に堪へざる時などにあるさまなり。

ふきよう 不興 【名】興の醒むること。又、機嫌を損じたること。

ふく 深 【動カ下二】深くなること。たけなはになること。夜にも、齢にもいふ。「小夜中と、夜はふけぬらし云々」、「ふくる我が世を思ひ知れとや」など。

ふぐ 不具 【名】物事の揃はぬにも、身體のかたはなるにもいふ。また、手紙の結文にも用ふ。

ふぐ 不虞 【名】思ひはからざること。不意。「不虞の災」など。

ふく 服 【名】裏服。又、轉じて、裏服を着て裏に籠り居る間(モフク)ないふ。後に、別に、忌といふ事、出來てより、服忌、忌服(フクキ キブク)など稱す。死者の親疎に因りて、忌と服との日數に長短あり。忌を見よ。

ふぐう 不遇、不耦 【名】不幸に同じ。俗に、まはりあはせのわろきこと。漢書「諸宿將常留落不耦。」

ふくえき 服役 【名】役(ヤク)に就くこと。懲役を勤むること。

ふくかう 腹稿 【名】心の中に構へたる、詩文の稿。

ふくがうのこと 復號の事 【名】新井白石の復號事件なり。慶長十二年、朝鮮より、例によりて、日本國王殿下の宛名を以て、徳川將軍に、來書あり。然るに、彼の國王への返書には、日本國源秀忠とのみありて、王の字なし。故に其の使節は、歸國の上、正當の返書を得ざりし罪にて罰せられたりされば、元和三年の使節は、對馬の藩主宗氏の家臣と謀りて、王の字を加へ、三代將軍の時、又、然せり。これらは、幕府にて、聊か知らざる所なれば、事あらはれて後、皆刑に處し、また、事情を朝鮮に通じ、先方よりは、日本國大君と書し、返書は、日本國源某と書すべきことに定めたり。然るに、正徳元年、朝鮮使來聘の時に、白石は、國王の號を復舊せんとし、建議して、古の如く、日本國王源家宣とせり。其の論旨は、天皇と國王とは、おのづから違へりといふにあり。然れども、當時に於ても、對馬の文學雨森芳洲の如きは、大に其の失當不敬を論じたりき。

ふくかぜも、えだをならさず 吹く風も枝を鳴らさず 【文】太平の世を稱する語。王充の論衡に「太平之世、五日(タビ)一風、十日一雨。風不レ鳴(フルヒ)レ枝、雨不レ破レ塊」。

ふくけいぜんしよ 福恵全書 【名】書名。三十二巻あり。清の黄六鴻(思湖)著。地方施政者の心得となるべきことを記せるもの。

ふくざはゆきち 福澤諭吉 【名】舊豊前中津藩士なり。長崎大阪等に遊學して、安政五年江戸に入れり。それより官命を以て洋行せしこと數回、慶應四年、芝區に家塾を開く。是れすなはち、慶應義塾の初なり。明治三十四年、其の教育の功を賞して、皇室より金五萬圓を下賜せらる。翌年春歿す。年六十七。

ふくしん 腹心 【名】心の底、腹の底などいふに同じ。詩經「趣々武夫公侯腹心」。また、「腹心の友」などは、心の奥底まで明し合ふ友なり。

ふくしやのいましめ 覆車の戒 【句】ぜんしやのてつを見よ。

ふくずみ まさえ 福住正兄 【名】相州箱根の温泉宿の主人。二宮尊徳翁の門人なり。また、和歌を嗜みて歌人と交る。明治廿五年五月歿せり。

ふくする、ぼんにかへらず 覆水盆にかへらず 【文】時機一度去れば、再び來らざるに譬ふ。類林に曰く「太公望少婿二馬氏一、老而見レ去。及レ封二于齊一、東就レ齊、遇二婦人泣一問レ之其前妻也。再拜求レ合。公取二盆水一傾レ地令レ收レ之、惟少泥。太公曰、若言二離而合一覆水定難レ收」とあり。之より出でたる諺なり。

ふくせき 復籍 【名】故の戸籍(モト)にかへること。

ふくそう 輻湊 【名】諸方より、物の一所に聚ることをいふ。漢書地理志の注に、湊は聚なり。車輻の轂に聚まるが如きをいふなりとあり。

ふぐたいてんのあだ 不倶戴天の仇 【句】父母の讐をいふ。禮記曲禮に「父之讐、弗二與共戴レ天。兄弟之讐不レ反レ兵。交遊之讐、不レ同レ國」とあり。倶に此の世に生きては居らぬの意なり。

ふくだむ、ふくだみ、髪鬘、蓬起 【動マ四】亂れくづる。そゝげ亂る。髪の毛などのくづれたるにいふ。此の詞、四段に活く時は自動にして、下二段に活くときは他動なり。

ふくてつ 覆轍 【名】車の覆りたる痕。轉じて、事の仕損じたる後の義に用ふ。猶、前車の轍參照。

ふくでん 福田【名】佛典に、三種の福田といふことあり。即ち、その一は、敬田にて、三寶の德を敬ふをいひ、その二は、恩田にて、君父の恩に報ゆるをいひ、その三は、悲田にて、貧者をあはれむをいふ。この無上の功德は、無上の福德を生ずといふ。

ふくのよるところ 福之所レ倚【句】わざはひはさいはひのふすところを見よ。

ふくはしやうぐん 伏波將軍【名】馬援をいふ。馬援は、東漢の光武の武臣なりき。

ふくはら 福原【名】地名なり。高倉天皇の治承四年六月、都を攝津の福原に移し給ひしかど、暫時にして、復、京都に還都し給ひき。其の地、今の神戸市のうちなれど、區劃判然せず。

ふくは、わざはひのふすところ 福兮禍之所レ伏【文】わざはひはさいはひのよるところを見よ。

ふくん 府君【名】支那にては、守の太守の尊稱にいふ。又、父の死後の尊稱にも用ふ。

ふくめい 復命【名】使者の、歸りて、先方の返答、若しくは自ら調査したることどもを告ぐること。

ふくやま 福山【名】地名。北海道渡島國松前郡にあり。松前氏居城のありし所。また、備前國深津郡に福山町あり。資

永以來、阿部氏の領邑たりき。

ふくよう 服膺【名】中庸の注に、服膺レ著也とあり。膺は胸なり。之を胸と心との間に著けておくこと。換言すれば、心にかけてよく守るをいふ。中庸「得二一善一則拳々服膺而弗レ失レ之」。

ふくらに 脹【副】ふくれたる貌。こにふとりたる貌。

ふくりう 伏流【名】地下に伏れたる水の流れをいふ。今の、水道の如し。

ふくりん 覆輪【名】きんぶくりんを見よ。

ぶくりやう 茯苓【名】黑松の舊き根のほとりの土中に生ず。拳の如き塊をなし、皮は黑くして皺あり。肉は白きも、赤きもあり。或は、外白く、內赤きあり。黑松には白多く、赤松には赤あり。藥用とす。古名、まつほごといへり。

ふぐるま 文車【名】書棚の類。下に車ありて牽くべくしたり。徒然草に「多くて見ぐるしからぬは、文車のふみ、塵塚のちり」など。

ふくろくじゆ 福祿壽【名】七福神の一にて、南天星と云星の化身なりといふ。頭長く、身長短く、多髯にして、經卷を結びつけたる杖を携へ、鶴を伴へる圖を畫くるは、是なり。

ふくわ 孵化【名】卵よりかへり、形體に變化する作用をいふ。

ふくわいのせつ 附會の說【句】牽強附會と熟用せり。こじつけの說。都合よきやうに、其の說に引き附けて言ひ曲ぐることなり。淡書爰益傳の贊に「爰益雖レ不レ好レ學、亦善傳會」とあり。傳は附に同じ。歐陽修の蘇君の墓誌銘に「易之道深矣。汨而不レ明者、諸儒以二附會之說一亂レ之也」とあり。

ふくをうざつわ 福翁雜話【名】書名。福澤諭吉の雜話を蒐めたるものなり。

ふくをか 福岡【名】筑前福岡市。天正十五年、豊臣氏西征して、筑前を小早川隆景に與ふ。治所は名島なり。關原役後、黑田長政、筑前を得て、福岡に城を築く。爾後子孫嗣ぎて筑前五十二萬石を領す。故に、福岡侯とあるは、黑田氏なり。

ふけい 符契【名】割符に同じ。木片に事を證する文を記す、これを符といふ。これを二つに分ち、左片を留め、右片を與へ、後日相合せて信據とするものなり。故に、事實のよく相合へるを「符契を合するが如し」などいふ。

ふけう 不孝【名】ふかうに同じ。また一說に、フキョウ不興の義にて、勘當の義なりといふ。保元物語「父ふけうして云々」。

ふけう 布敎【名】敎を布きひろむること。「海外布敎」「監獄布敎」など。

ふけどの 富家殿【名】藤原忠實をいふ。宇治左大臣頼長の父なり。殿は、山城國宇治の平等院の西に在り。藤原氏の別業なりき。

ふけふ 巫峽【名】又、ふかう。支那の名山。又、其の川は、急流を以て名あり。荊州記の漁者歌に「巴東三峽巫峽長、猿鳴三聲淚沾レ裳」。また郭熙の山水訓に「天臺、武夷、岷峨、巫峽、皆天下名山巨鎭、仙聖宅所隱」などあり。

ふげん 浮言【名】流言と同じく、いひふらさるる根なしごと。書經「胥動以二浮言一」。

ぶげん 分限【名】みのほど。分際。又、轉じて、かれもち、富豪、素封家、の意に用ふ。

ふけしゆう 普化宗【名】禪宗の一派にして、文明年中、風化道者則庵といふもの、創む。則庵、山城に住し、常に尺八を吹き、四方を遊行せり。其徒を虛無僧（コムソウ）又、暴露（ボロ）、などいひ、常に、尺八を吹きて行脚す。德川氏の頃、武士の罪を犯せるもの、身を此宗門の寺に寄すれば、逃るることを得る特許ありたり。ぼろんじ參照。

ふこ 不幸【名】無幸ともいふ。寃罪に同じ。むじつの罪なり。罪のなきなり。孟子「行二一不義一、殺二一不辜一、而得二天下一、皆不レ爲也」。

ふこ 府庫【名】くら。貨財寶器を貯ふる所。

ふご 封戸 【名】古、位又は官につきて、給せられし地方の戸口。太上天皇二千戸、三宮千五百戸、親王一品八百戸より、以下次第に減じて、無品は百五十戸に至る。又、正一位三百戸より從三位百戸に至り、太政大臣三千戸より左右大臣、内大臣、大中納言、次第に減じて參議六十戸に至る。

ふご 畚 【名】物を盛りて、持ち運ぶやうにしたる籠。竹にはあらで、繩をあみて造れるものをもいふ。俗に、もっこ。

ふこく 布告 【名】布達ともいふ。政府より國民一般への觸れをいふ。

ふこく 普國 【名】普魯亞(Prussia)にして、日耳曼帝國二十六聯邦中の大なるものなり。其の位置は、北日耳曼の略全長に沿ひて延亘せり。

ふこくさく 富國策 【名】書名。九篇あり。林子平著。學政、武備、制度、法令、賞罰、地理、儉約、卑服、及び雜篇に分ちて、富國の方法を論じたるものなり。

ふこくひき 誣告誹譏 【句】誣告は無きことを有るといひて、他人に告ぐること。誹譏は、他人の短所、或は、弱點を暴露して、公衆に示すこと。其の爲す所は異なれど、何れも人の名譽を毀損することなり。

ふこれあがる 武惟揚 【文】書經に「我武惟揚」とあり。國威の振ふをいふ。

ふさい 覆載 【名】天地といふに同じ。天の覆ふ所、地の載する所の意にて、天地の間をいふ。

ふさい 負債 【名】借金のこと。

ふさう 扶桑 【名】東海中に在る神木なりといふ。東方朔の十州三島記に、「扶桑在二碧海之中一、地多二林木一、葉皆如レ桑。又有二椹子一。樹長者數千丈、經三千圍、樹兩々同レ根偶生、更相依倚。是名二扶桑一」とあり。支那人の、わが國を斥して扶桑といふは、此に本づくといふ。

ふさう、あにかげなからむや、ふうんおほひて、たちまちくらし 扶桑豈無レ影乎、浮雲掩而忽昏、叢蘭豈不レ芳乎、秋風吹而先敗、 【文】前中書王源明親王が莵裘賦中の文なり。和漢朗詠集圖の條にも出づ。扶桑は、日をいふ。而して、日を天子の明にたとへ、浮雲を佞臣にたとふ。また、叢蘭は、之を忠臣にたとへ、秋風を佞臣にたとへたるなり。

ふさうこく 扶桑國 【名】日本國の異名。ふさうを見よ。

ふさうりやくき 扶桑略記 【名】書名。醍醐天皇より、後鳥羽帝までの事を記せる歷史なり。比叡の功德院の僧皇圓の著なりといふ。

ふさがり 塞 【名】陰陽家のいふ事なり。吉方(エハウ)に反對の方角に、大將軍といふ星ありて、此の星に向へば、三年の内に死ぬといふなり。されば、其の方角をふさがりとはいふ。年

によりて、其方角に相違あり。

ふさはし 相應 【形】相應したること。釣合ひたること。

ふさん 釜山 【名】朝鮮の地名なり。朝鮮の東南海岸に位し、我が對馬を去ること、北に卅里。古來邦人の通商せる地にして、長崎よりは百六十四浬。本邦領事館、郵船會社支店等あり。

ふざんのくも 巫山の雲 【句】楚の懷王が、高唐に遊びて、夢に巫山の一婦人に遇ふ。その女、旦には朝雲となり、暮には行雨となる。懷王すなはち、女の爲に廟を建てて、朝雲といへるよし、文選の宋玉の高唐觀賦に見えたり。

ふし 不次 【名】次第にはづるること。常例に據らぬこと。「不次の登庸」なと。

ふじかは 富士川 【名】甲斐の笛吹、釜無、鷹の三川合して一となり、南流して駿河に入り、富士、庵原二郡の界を流れ、蒲原郡を經て海に入る。羽前の最上川、肥後の玖磨川と、三急流の稱あり。慶長年中、德川家康、此の川の運漕不便なるを嘆じ、角倉了以に命じて、水路を修めしめしより、今は甲斐の鰍澤(カヂカザハ)より、駿河の岩淵停車場に至る迄、日々通船の便ありて、十八里の里程を、僅に六時間にして下るを得べし。若し之を綱曳して泝るときは、二晝夜ならでは鰍澤に達すべからず。以て、其の急流なるを知るべし。途に、屏風岩、藤

橋、俵石などの奇勝あり。

ふしきあん 不識庵 【名】上杉謙信輝虎の號なり。甲越軍記にある「霜滿二軍營一秋風清、數行過雁月三更、越山併得能州景、莫遮家鄉思二遠征一」の詩、人口にのれり。

ふじさん 富士山 【名】駿河甲斐の二國に跨れる名山なり。孝靈天皇五年、近江の琵琶湖の陷落と共に、一夜に成れりなど言ひ傳へたり。海面を抜くこと一萬二千三百七十尺。休火山にして絶頂は舊噴火坑をなし、其の周圍に、劍が峯、馬の背、雷岳、釋迦が嶽、藥師嶽、觀音嶽、經冢、駒が嶽の八峯あり。因りて蓮華の八葉に擬して、蓮岳、芙蓉峯などの名あり。麓より頂までを十分して、一合目、二合目とやうに唱ふ。

ふしだう 武士道 【名】士の行ふべき道。忠義、勇武、禮儀、信義、勤儉などの行を堅く守るを云ふ。

ふじたにせいしやう 富士谷成章 【名】本姓皆川、湛園の弟、號は屋城、また、北邊といへり。京都の國學者なり。柳川侯に遊事し、安永八年十月歿す。年四十二。

ふじたにみつあき 富士谷御杖 【名】成章の子。國學者なり。業を父に受けて、家聲を落さず。また、彈琴の技に通ぜり。文政六年十一月歿す。年五十六。

ふしつ 斧質 【名】質は鉞にて、鉞は人を斬る壺なり。其上